

エデン・クロニクル

旧説帝都エデン

秋月あきら

シザーハンス

月明かりも届かぬビルの合間で、巨鳥のような影が激しく動く。それは人影だった。ロングコートを纏った人物が地面を蹴り上げて空に舞ったのだ。

ロングコート纏った人物の手元が激しく閃光を上げた。それは輝く刃だった。

閃光を浴びて闇の中に美しい顔が浮かび上がる。人とは思えぬ中性的な妖艶な顔。この街に住む人々は、彼をこう呼んでいた。帝都の天使。

宙に舞い上がっている帝都の天使は妖刀を力強く握り、激しい閃光の粒を撒き散らしながら、地面にいる男を一刀両断しようとする。がしかし、男の腕がそれを受け止めた。いや、腕という表現は正しくない。腕に装着された物を挟み切る爪が帝都の天使の一刀を受け止めたのだ。

地面に足を付くこともなく、帝都の天使は後方に押し飛ばされて、片手を地面に付きながら着地した。そこに素早く両腕に爪鋭い爪を装着した。シザーマンが襲い掛かる。

帝都の天使の握る妖刀の煌きがシザーマンの腰に喰い込んだ。そして、そのままシザーマンの身体を二つに分けるはずだった。シザーマンの身体が突如霞と化して消えたのだ。

すぐに状況を理解した帝都の天使は妖刀を大きく後ろに振る

3 旧説帝都エデン

った、しかし、シザーマンの方が早かった。帝都の天使の真後ろに立つシザーマンは鋭い爪で、妖刀を持つ帝都の天使の腕を深く抉った。

静かな苦悶が帝都の天使の口から漏れる。しかし、彼は妖刀を手放すことなく、シザーマンの胸を割った。

シザーマンは消えた。再びシザーマンは霞みと化して消えたのだ。帝都の天使は敵に逃げられたことを悟った。

静寂が辺りを包み込む。

殺気が辺りから消えている。

その中に深いため息が響いた。

「はあ、また逃げられた」

帝都の天使は右腕をだらんと地面に垂れ下げている。その腕からは鮮血が流れ出し、紅い雫が地面の濡らしていた。

夜空の漆黒の闇に浮かぶ満月は蒼白い光で大地を照らし、星々はいつもより騒がしく煌いている。そして、輝く星よりも騒がしい輝きを放つ巨大都市。

魔導と科学の融合により生まれた魔導炉により、膨大なエネルギーが二十四時間、止まることなく都市にエネルギーが供給される。この都市は決して眠らない。

高層ビルは天を貫き、深夜だというのにメインロードは車や人の往来が激しい。

ビルの屋上には人影が立っていた。黒衣を風に靡かせながら、天を見上げている。

「はあ、今夜は満月か……。ついてないよね、この頃……」

澄んだ夜風と黒いロングコートを身に纏い、間延びした声の持ち主は少し眠たそうな表情、夜空に輝く満月を眺めていた。

この人物の姿は月光が反射して、輪郭がぼやけてよく見ることができないが、恐らく若い男性だと思われる。

闇の中から声がした。

「ついていないのはいつものことだろう。それはいいとして、なぜ私が君に呼ばれなければならんのだ？」

闇に浮かび上がる白い白衣に身を包み込んだ男。長髪の毛が風に弄ばれ闇に溶けている。

白衣の男に言葉を投げかけられた若者は空を見続けている。

そして、間延びした声で白衣の男に返事を返した。

「あれえ、言つてなかつたっけ？」

それを聞いた長髪の毛の男の顔は不快の表情を露わにした。

満月の晩は妖魔やキメラ生物たちの活動が活発になる時間帯のひとつだ。この街に住む人々は満月の晩が訪れると、夜が来る前に仕事から帰宅し、いつもよりも嚴重に戸締まりをする。

それがこの街を生きていくための掟だ。という人もいるが、多くの人々は満月を恐れない。

二十四時間眠らぬ街は、満月の晩だとしても輝いている。た

しかに、満月の晩に魍魎魍魎たちが活発になるというのは本当だ。しかし、裏路地やひと気のない場所に立ち入らない限りは普段の夜と変わらない。

白衣を着た男の長い髪の毛が、腰の辺りから風に揺られて、

辺りに芳しい匂いを撒き散らす。

「私を呼び出したからには、それなりのことがあるのだろうか？」

「切り裂き魔のニュースは知ってる？」

「帝都新聞で読んだが、それが私の呼ばれた理由と何の関係がある？」

先月から今月にかけて一七件の連続殺人事件のニュースが帝都の街を賑わした。その事件は目撃証言や使われた凶器の刃型が一致したことなどや、目撃証言から事件を起こした人物は、ほぼ同一人物とされている。

狙われた被害者は皆長い黒髪の女性であった。被害者たちの手足には何かで縛った後があり、衣服は脱がされ、身体は刃物で滅多刺しにされた状態で路上に放置されていた。

事件は帝都市民の関心を呼び、報道各社はこの事件を大々的に取り上げ特集番組も組まれるほどであった。

「若者は依然空を見上げていた。」

「えーと、その切り裂き魔なんだけど、証拠はいっぱい残ってるのに足取りが全く掴めないらしくってさあ、帝都警察本部長に直々に仕事の依頼を頼まれちゃって」

「仕事なら一人ですればよからう、私が呼ばれる理由はあるまい」

空を眺めていた若者が長髪の男の方へと顔を向けた。月明かりに照らされた若者の顔は以前眠そうな表情を見せていたが、その顔は中性的な美しさに満ち溢れており、彼が道を歩けば男

女問わず誰もが振り返り顔を赤らめうっとりとしてしまふほどだ。天使がこの世界にいるとしたら彼にちがいない。

「じつはさあ、その切り裂き魔は不思議な幻術を使うんだけど、ボクには全く太刀打ちできずに困っちゃってね、紅葉クシバになら何とかできるかなあとか思ってたさあ」

紅葉と呼ばれた男は顔をしかめながら目の前にいる若者と視線を合わせた。

「太刀打ちできずに困ったたと……どういうことだ、既にその切り裂き魔とやらに会ったのか？」

「ああ、もう二回も会っちゃったよ。ほら、この傷見てよ、ザツクリいつちゃってるだろ」

そう言つて若者は右手の服の袖を捲くり上げ腕の傷を見せた。傷は鋭利な刃物で付けられたような一五センチに達するほどの重症であったが、その傷の持ち主はのほほんとした表情でまるで他人事のようにであった。

「二回も会つていながら取り逃がし、そのつえ傷を負わされるなど“帝都の天使”も地に堕ちたものだな」

「ボクは元から地面の上を歩いてるよ。だから、何と言われようが構わないよ、でもその代わり仕事を手伝つてもらつよ」

「君の仕事の手伝いをして私に何の見返りがある？」

「僕が手傷を負わされたほどの幻術使いだよ、いい研究材料になると思っけどなあ、それじゃあダメ？」

ダメ？ といった若者の表情は子犬のような愛くるしさを持ち合わせており、その瞳に見つめられた者は誰もが彼のためだ

「つたら何でもしてあげたくなる。そんな表情だった。」

「駄目だ、私は研究が忙しい。それにだ、今日その切り裂き魔が現れるという確証はないだろう。」

「それがねえ、あるんだよね。」

「言ってみたまえ。」

「天使の顔は勝ち誇った表情をしていたがそれを見た紅葉は少し不服そうだった。」

「切り裂き魔が現れるのは決まって月・水・金の午前〇時から四時の間なんだよね。」

「そこまでわかっている、帝都警察も君も切り裂き魔を捕らえることができんとは、ワイドショーのいいネタになるな。」

「しかたないだろ、ほんとに手強い相手だったんだから。」

「今度は紅葉が勝ち誇ったような表情をし、天使は不服そうな表情をした。」

「私は研究の続きがあるので帰らせてもらおうぞ。」

「紅葉は白衣をなびかせながら足早にその場を立ち去ろうとしたが、それを天使が引き止めた。」

「ま、待ってよ、幻術の研究も“プロフェッサー”の大事な仕事だろ。」

「幻術ならば、あの凄腕の魔導士がいるだろう。」

「彼女なら、ヨーロッパで魔導書が発見されたとかで出かけて行っちゃったよ。」

「魔導書か……私もそちらの方が興味をそえられる。私も研究のために出向いてみるか。」

プロフェッサーの頭の中にはもう切り裂き魔のことなど微塵もなかった。今、彼の頭にあるのは魔導書のことだけだ。

帝都の天使は本当に困っているのだから疑わしい表情をしながら目を閉じ少し考えた後、その艶やかな唇を動かした。

「わかった、取引をしよう」

「取引？」

「その魔導書を紅葉にやる代わりに仕事手伝つてよ」

「よかるう、しかし、その魔導書はどうやって手に入れるつもりだ？」

「彼女のことだから、その魔導書をパクってくると思うし、彼女一回読んだらすぐに覚えちゃうから、そしたら、君にやるよ」

「契約成立だ。それでは時雨^{シツレ}、一緒に狩りを始めよう」

その言葉を聞いた時雨は不適な微笑み浮かべ空を見上げた。

白衣の裾をはためかせながら紅葉は横を歩く時雨に尋ねた。

「切り裂き魔の現れる場所の見当はついているのだろうな」

「ボクの半径一キロメートルに奴が入ればダウジングでわかると思うよ」

天使の右手には紐状の物が握られており、その先端にはひし形の寶石らしき物がぶら下がっていた。

「奴がボクの半径一キロメートルに入ると、こんな風に魔石がその方向を示してくれるんだけど……あっ反応」

「……気づくのが遅い」

紅葉が気づいた時には、天使は月光に照らされたビル街を魔鳥のごとく宙を舞っていた。

「紅葉、遅いよ、早くしないと逃げられちゃうよ」

黒い魔鳥は少し後ろを振り返ったが、すぐに前を向き、また空を舞った。それを見ていた白い魔鳥も空を舞い黒い魔鳥を追う。

そしてこの日、二羽の魔鳥が帝都の夜空を舞った。

今宵の帝都は静けさに満ち溢れていた。

月光に照らされたビル街はまるで氷でできた彫刻のようであったし、風もなく、獣の声すら聞こえない、まるで廃墟と化した街のようであった。

時計の針は深夜一二時を回っていた。夜の闇は深さを増し、路地を照らす光は街灯と月光のみであった。

時雨の辿り着いた場所は街の影である裏路地。満月の晩に人が足を踏み入れない場所。妖魔の巢食う世界だ。

ひもの先に付けられた魔石が獲物の方向を強く指し示している。

真剣な表情をして時雨は紅葉に顔を向けた。

「反応が強くなった……もう近いよ」

「後、どのくらいだ？」

「……目の前」

「!？」

天使の言葉に紅葉は少し度肝を抜かれた感じだった。

二人の魔鳥の前方には紫色の髪の若い男性が、何かを物色す

るように辺りを見回しながら歩いてた。

「あれが獲物か？」

「ああ、そうだよ、でもやっぱり、今夜は獲物がなかなか見つからないらしいね。ほら、あんなに辺りを見回して」

「満月の晩にこのような場所に好き好んで出かける奴はいないだろう」

「知能低いのかな」

とそんな会話を二人がしていると、切り裂き魔は二人に気づいたらしく全速力で突進して来た。

「ボクのことちゃんと覚えててくれたみたいだよ」

ほら、といった感じで時雨は切り裂き魔を指差し、紅葉の方を振り向き微笑みを浮かべた。

切り裂き魔の両手には鋭い爪のような武器が装着されている。

「シザーハンズか、肉弾戦は私より時雨、君の方が向いているだろ」

「OK！」

時雨はそう言うのとコートのポケットから何かを取り出し、それについているボタンらしきものを押した。すると時雨に握られたその先端から、閃光が飛び出しまばゆい光で辺りを照らした。ビームサーベルと呼ばれるようなものなのだろうか。

シザーマンは時雨目掛けて鋭い爪を振り下ろす。時雨はその攻撃を流れるように素早く躲かすと、シザーマンの頭上から地面にビームサーベルを叩きつけるように振り下ろした。

「捕らえた！」

時雨の手にはたしかに手ごたえがあった。しかし、その時、時雨に紅葉から罵声が飛ばされた。

「どこを斬っている！ 獲物はこっちだ」

「えっ!？」

時雨はシザーマンの幻術に惑わされたのだ。そして、彼が自分の置かれた状況について把握した時には、すでにシザーマンは紅葉にその刃を向けていた。

「肉弾戦は私の専門外なのだが……」

そう言いながら紅葉はどこからともなく二つのフラスコを取り出し、蓋をしてあるコルクを抜くと科学の実験をはじめた。

「これを実践で使うのは初めてなので、いいレポートが書けることを期待する」

そう言い終わると紅葉はフラスコの中にある不思議な液体を一つに混ぜ合わせた、すると、フラスコの中から大量の煙が発生し辺りを包み込んだ。

「ねえ紅葉、仲間のボクまで見えないよー」

「大丈夫だ、君が見えんということはシザーマンにも見えておらん」

「ああ、なるほど……ってダメじゃん」

「もうすぐ、霧は晴れる、お楽しみはその時だ」

「はあ？」

辺りをたちこめていた霧が徐々に晴れてきた。すると、そこには目を疑うような異様な光景が広がっていた。

「何これ！」

と大声を上げたのは時雨だった。彼が大声を上げるのは無理もない、なぜなら。

「実験は成功だな。私が調合したこの薬は人間に一種の幻覚作用を引き起こす。君に難しい話をしても分からんだろ、まあ薬の効能は見ての通りだ」

「見ての通りって、紅葉がたくさん居るよ」

時雨の目には何人もの紅葉が映っていた。その時雨の目に映る紅葉たちは個々に別々の動きをしている。

シザーマンは紅葉の幻影を次々に斬りつけていくのだが、傷も付かなければ、血も一滴も出ない。

それを見ていた紅葉たちがいつせいに不敵な笑みを浮かべた。「後は君の仕事だ時雨、奴が私の幻覚を相手にしているうちに仕留めろ」

時雨はビームサーベルを構えると、シザーマンにその刃を向けた。

彼の剣技は美しいという言葉が相応しい。まるで舞を踊るかのような剣さばきにシザーマンが気づいた時にはもう遅かった。

「ぎゃあああああ！！」

シザーマンは悲鳴を上げるとその場に倒れ込んだ。彼は幻術を使う暇もなく呆気なく縦に裂かれてしまった。

「呆気なかったね……なんか」

「そんな、相手にてこずっていたのはどこの誰だ？」

「!？」

「どうした？」

「爪が勝手に動いてる」

「何!？」

二人の目線の先には不気味な動きをするシザーハンズがその鋭い爪を時雨に向けていた。

「こちらが本体のようだな」

シザーハンズは装着者の手を離れ時雨目掛けて飛んで来た!

時雨は目にも止まらぬ速さでシザーハンズをビームサーベルで地面に叩きつけた。と思つた瞬間、またも紅葉から時雨に罵声飛ばされた。

「どこを斬っている、獲物が逃げるぞ!」

「えっ!？」

時雨が気づいた時には敵はその場から姿を消していた。またもや彼は幻術に惑わされてしまったのだ。

「はぁ、逃げられた」

ため息をついた時雨の身体はまるで周りの闇に溶け合うように深く深く沈んでいった。

この事件以降、シザーハンズが帝都の街に姿を現すことはなくなつた。

都民の関心も次第に薄れ、報道各社も今ではこの事件を取り上げることはなくなつた。

最近の都民が関心を寄せていることは帝都の地下で発見された、古代遺跡に集中している。

この遺跡が都民の暮らしをより良いものにしてけると科学

者たちは口々に言っている。現に遺跡ですでに多くのロストテクノロジーが発見されている。

「ロストテクノロジーねえ」

時雨はTVを見ながらおせんべいをツマミに熱い玉露を飲んでた。するとそこに一人の訪問者が訪れた。

コンコン、と戸を叩くと同時に男の声が出た。

「入るぞ」

「どうぞ」

時雨が返事をする、紅葉が部屋の中へと入って来た。

「報酬を受け取りに来た」

「報酬？」

「魔導書だ」

「ああ魔導書ねえ、でもさあ、逃げられちゃったから」

「逃げられたからなんだというのだ。私は君に仕事を手伝えと言われただけで、獲物に逃げられようが私の関知するところではない」

「はいはいわかったよ、苦労して手に入れたんだから大事にしてよ」

そう言うとき時雨は紅葉に向かって魔導書を投げた。

紅葉は魔導書をキャッチすると、足早に部屋を出て行った。

そして、紅葉が部屋を出て行ったのを確認すると時雨はため息をつき、お茶をすすりながら一言。

「がめつよいよ紅葉」

「何か言ったか？」

時雨の目の前には部屋を出て行つたはずの紅葉がいて、それに気づいた時雨は思わず口に含んだお茶を噴出してしまった。

「な、何でまだいるんだよ」

「言い忘れていたことがある」

「なにさ」

時雨は、噴出したお茶をティッシュで吹きながら、紅葉を上目使いで見上げた。

「帝都の地下で発見された遺跡のことは知っているな？」

「ああ、ニュースで毎日やってるからね」

「時間があつたら行ってみる」

そう言うとき紅葉は部屋の外へと出て行ってしまった。

「はあ、何だよ、どういうこと？」

時雨はこたつに潜るとそのまま目をゆっくりと閉じた。

「まあいいかあ」

そう呟くと同時に時雨はやさしい寝息をたてていた。

部屋の窓からはやさしい光が部屋中に差し込み、外からは子供たちの遊ぶ声が遠くから微かに聴こえていた。

シザーハンズ 完

S N O W

今日の帝都は昨晚から降り続けている大雪のため、都市機能の三〇パーセントが麻痺するという深刻な状況に陥っていた。

大雪による交通渋滞、事故、電波障害、そして、大雪に便乗して犯罪行為を犯す者。この大雪を純粋に喜んでいるのは小さな子供くらいなものだった。

午前七時四〇分。

「雪かぁ、ひさしぶりだなぁ、でもこんな大雪三年ぶりだったかな？」

時雨はこたつに入りながら、独りみかんをツマミにTVを見ていた。

《次のニュースです。今日未明、都役所前の交差点で生命科学研究所から逃げ出した実験サンプルと帝都警察との間で激しい攻防が繰り広げられました。実験サンプルは帝都警察の目を掻い潜って逃走、未だ発見されていません。なお、帝都警察の誤射により、周りのビルに被害を与え、都役所の半分が倒壊、死者、負傷者あわせて五〇名ほどの被害者が出たもようです。詳しい情報が入りしだいおつてお伝えします。》

液晶モニターの向こうの出来事は時雨に取っては、いくら近くで起きた事件であろうと夢の出来事とあまり変わらなかった。「朝からこの街は忙しいねえ」

「この街は二四時間寝らぬ」

「わあっ!!!」

自分しかいないはずの部屋で突然声がしたものだから、時雨は思わずあられもない声をあげてしまった。

驚いた顔のまま状態を後ろにえび反りに曲げるとそこには見覚えのある顔が時雨を見下ろしていた。

その人物と少しの間目が合い、沈黙を置いたあと、眠そうな目を擦りながら時雨はあいさつをした。

「やあ、紅葉、おはよう」

時雨の目の前にいたのは白衣の麗人紅葉だった。

「仕事の依頼に来た」

「えっ!？」

時雨に不思議そうな顔で見つめられた紅葉はもう一度用件を簡潔に述べた。

「君に仕事の依頼を頼みに来た。理解できたかね？」

「またあ、そんなご冗談を」

時雨が冗談だと思つのは当然だった。この男が人にものを頼むことなどそうあることではなかったし、しかも仕事の依頼を直々に頼みに来るなど初めてのことだったので時雨は彼の言葉を本気とは受け取れなかつたのだが、紅葉の表情は真剣そのものだった。そのため時雨は驚きを隠せず口をポカンと空けてしまった。

腕組みをしながら紅葉は眉毛を吊り上げたあと細い目をした。「冗談なのではない、重大な問題が発生したものでな、君にそ

の解決にあたってもらいたい」

真剣な紅葉とは象徴的に時雨の全身からはヤル気のないオーラがもうもうと出ていて、そのオーラは部屋中に充満していた。「はあ、仕事かあめんどくさいなあ、だって外は大雪、今日は日曜、そして、もうすぐクリスマスだよ、副業の方はお休みにするよ。ついでに本業も今日は休みでいいや」

「何を莫迦なことを言っている、大雪はともかく、日曜？ クリスマスが近い？ などという理由は君が仕事をしない理由にはならん」

「だってえー」

駄々をこねる時雨はとても愛くるしい表情をしていたが紅葉はそれに惑わされることはなく激怒した。

「仕事をするのか、しないのかはつきりしたまえ！」

彼が感情を表に出しながら、怒ることなど滅多にないのだが今は違った。

彼の依頼は大雪の中わざわざ時雨のもとへ来ただけのことであり、とても重大なことなのだろうか？

ちよつとキレ気味の紅葉を見て時雨はしかたなく仕事をすることを決意した。なぜなら、紅葉はキレたら何をするか分からないからだ。

彼は今までに数多くの大事件を起こしているらしいがそのほとんどは世に出ることはない。なぜなら、彼の起こした事件のほとんどが彼の手によって隠蔽され闇に葬られているからだ。

時雨の聞いた話によると、紅葉がビルを一つ倒壊させたとか、

街一つ消してしまつたとか、さらには実験で鳥を一つ消滅させたというとても信じがたい噂ではあるが時雨は紅葉ならやりかねないと思つている。現に時雨は紅葉がキレたところをたびたび目撃しているがそれは凄まじいものだったらしい。

上体を起こした時雨は急須を手に取りお茶を二人分入れ始めた。今日のお茶は玄米茶だ。

突然階段を駆け上がる音がしたと思つたら次の瞬間、部屋の中に雪だるまが飛び込んで来た。

「な、何!？」

時雨は雪だるまを見て慌てふためき炒れ途中のお茶を盛大にぶちまけた。

「あつーっ!!！」

熱さに悶える時雨をよそに雪だるまがぶるぶるっと身体を震わせると、その中から可愛らしいツイントールの眼鏡をかけた女の子が現れた。歳のころは一〇代後半から二〇代前半らしいのだから顔立ちのせいかもしれないと若く見える。

「テンチョ、あたしですよ、ハルナです。」

ぐぐつとハルナは時雨に顔を近づけて覗き込んだ。

ややあつて時雨は状況を理解したらしく、落ち着いた様子でお茶を入れなおし始めた。

「……な、なんだハルナちゃんか、つてこんな雪の中どこ行つたの!？」

ハルナは時雨の本業である雑貨店の店員兼なまけものでどうしようもない時雨の身の回りの世話役を住み込みでしている女

の子なのだが、どうしてこんな大雪の日に外に出かけていたの
だろうか？

ハルナの手にはコンビニの袋がぶら下がっていた。

「トイレの電球が切れちゃって」

「それだけ？」

「それだけって、なんてこと言うんですかあ！ 夜トイレに入
ったときに怖いじゃないですかあ」

ぶるぶるつとハルナは身震いをした。それを見ていた時雨もつ
られてぶるぶるつと身震いをした。

「ハルナちゃん、外寒かったでしょ。しかも服もびしょびしょ
みたいだからお風呂入ってきなよ」

「はい」

元気な返事をしたハルナは床を水浸しにしながらお風呂へ駆
け出して行った。

時雨がふと横を見ると紅葉はいつの間にかこたつに入り、い
つの間にか自分でお茶を入れて勝手に飲んでいた。

「ふむ、いいお茶だ。……ん、どうした？」

横で口をポカンと空けた時雨と目が合った。

「いつの間にかこたつ入ったの？」

「君らがコントをしている間にだ」

「別にコントじゃないけど」

紅葉がお茶を少し啜った。

「ところで仕事は引き受けるのだから？」

この言葉には妙な威圧感があり、断るといふ選択肢を決して

選ばせないようにしているようだった。

「仕事はするけどさあ、内容はどんなの？」

仕事をすると決めたものの時雨にはヤル気については未だになかった。

「私のペットが一匹逃げた」

「ペット？ 紅葉ペットなんか飼ってたの？ 初耳だなあ」

そう言いながら時雨は今入れたばかりのアツアツのお茶を紅葉に手渡した。

「ペットとは生命科学研究所で飼育していた私の実験サンプルのことだ」

「実験サンプルってもしかして、ニュースでやってるあれのこと？」

時雨は熱いお茶をすすりながらＴＶの画面に向かって指を指した。

《今入った情報によりますと、生命科学研究所から逃げ出した実験サンプルはイチョウ団地で目撃されたとのことです。目撃者の証言によりますと実験サンプルは東に向かって逃走中とのことです。以上帝都警察緊急対策本部からの中継でした。》

このニュースを見た紅葉は怪訝な表情を浮かべた。

「もうニュースになっているのか」

「あたりまえだよ、都役所前で帝都警察とお激しくやっちゃたらしいから」

「身支度を済ませる、すぐに出かける」

白衣をきびしながら紅葉は部屋を足早に後にした。

「はあ、まだ朝食摂ってないのに……」

そう言いながら、こたつから這い出てきた時雨は身体全身をポキポキと鳴らし、ハンガーにかけてあった黒いロングコートを羽織った。

外に出た時雨の眼前には白銀の世界が広がり、帝都は白い雪に飲み込まれていた。

時雨自身にも雪は容赦なく降り積もりの体温を奪っていく。

時雨は背中を曲げ自分の両手を口元にやり自分の温かい息を吹き付ける。

「はあ、寒いねやつぱり」

完全防備な厚着をした今にも凍え死にそうな時雨とは対照的に紅葉は薄い白衣を一枚羽織っているだけだったが、その表情には寒さという文字は刻まれていない。

「寒いのなら、もっと厚着をしてくればよかつたものを」

「これでもすぐく着込んで来たつもりだよ、なんだよこの寒さ異常としか言いようがないよ」

「今の気温はマイナス二六度だ」

帝都の冬の平均気温は六 前後、マイナス二六 というのは冷凍庫並の寒さであり、この街での最低気温を記録したと、天気予報でも伝えている。

「ボクは寒いのが苦手なんだけどなあ」

「私のペットを早急に見つけ出さんと、もっと気温が下がることになるぞ」

「はっ!? 今何て言った、気温が下がる? どういうことだよ」

紅葉の言葉を聞き驚いた時雨は思わず彼の言葉を聞き返してしまつた。

「ペットが逃げ出してから、一時間に五のペースで気温が下がっている、このまま行くと今日中に帝都の都市機能は全てストップし、植物枯れ、帝都に住むモノ達もこの街からでなければ皆死滅していくだろ、しかし、一般人がそのことに気づくころには交通手段は全て使えなくなっており、凍え死ぬのを待つのみとなる、帝都は氷の廃墟と化す」

紅葉の言葉を聞いた時雨は口をあんぐり開け呆然と立ち尽くしてしまつた。

帝都が氷の街と化す、そのようなことが本当に有り得るのだろうか、時雨には到底信じることのできない話ではあったが紅葉は嘘を付くような人物ではない。もし、紅葉の言うことが本当としたら、帝都が氷の廃墟と化すとはなんと恐ろしいことなのだろうか。

なにかを思つたかの寒いのか、時雨は首をぶるぶると振つた。

「そのこと、この街のお偉いさんたちは知ってるの?」

「知っている訳がなからう」

「だったら早く皆に伝えないと」

「そのようなことをしても街中がパニックに陥るだけだ」

時雨は紅葉の言葉に納得して小さくうなずいた。しかし、は

っと思いついたように話を切り出した。

「ちょっと待てよ……って何でそんな危険なモノを生命科学研究所で扱ってるんだよ、こういう事態になったときのこと考えてなかったの？　そもそも、気温が下がるってなんだよ、どうして気温が下がるんだよ」

「逃げ出したサンプルは私がとある国に頼まれて作り出した妖物で、大気中の空気を大量に身体全体から取り込み、身体の中で冷却し放出する」

「なんでそんなもん作つたの？」

「本来は温暖化を緩和するために作つたのだがまさか逃げ出すとは思っていなかった」

「逃げ出すと思わなかったじゃ済まないだろ」

「全く、君の言うとおりだ」

紅葉の言い方はまるで見ず知らずの他人の身に起きた不幸な出来事のように時雨の耳には聞こえた

「紅葉さあ、責任とか感じてないでしょ？」

時雨は少し呆れた表情を浮かべていた。

「責任？　なぜ私がそのようなことを感じる必要がある？」

やはり、紅葉は責任など微塵も感じてないようだった。

「だつてさあ〜」

「私は妖物の開発を頼まれただけで、その管理については私の関知するところではない」

きつぱりと言い放つた紅葉を一瞥すると時雨は下を向いて深くため息をついた。そして、ちょっと上目使いで、

「はあ……じゃあなんでそのサンプルを捕まえる気になったの？」

「私は寒いのは嫌いだ」

「それだけ……？」

「そうだ」

こいつ“どついたるか”と時雨は一瞬本気で思ったがその感情は心の奥底に封じ込めておいた。後がかなり恐いからである。

紅葉が白衣をきびした。

「私は研究があるので帰らせてもらうぞ」

「はっ、今なんて言った？」

時雨は思わず聞き返した。

「研究があるので帰らせてもらうと言ったのだがそれがどうしたか？」

「どうかしたかじゃないよ、なんで帰るんだよ」

「研究があるからだ」

そう言っただけで紅葉は白い雪の中に溶けていった。

時雨は紅葉に向けて雪球を作って投げつけてやったが雪で視界が遮られて、雪球が紅葉に当たったかどうかは定かではなかった。

その後時雨はものすごく後悔をした。……もし、雪球が紅葉に当たっていたらただではすまないなと思ったからだ。

時雨は仕事柄、帝都に仕事の協力をしてくれる知り合いが数多く存在していた。

それらの人々の中には情報屋と呼ばれる職種の者たちもあり、一流の情報屋ともなれば金さえ払えば国家機密から小さな商店の帳簿までどんな情報でも教えてくれる。

時雨はたびたび情報屋を利用する。そして、今回もそのお世話になることにしたのだが。

青白い顔をした時雨は携帯電話を片手に猛吹雪の中を歩いてた。

「生命科学研究所から逃げ出した、実験サンプルのことなんだけど」

『ZAZAZA……なに？ ……き……ない』

大雪のため電波の具合がよくないらしくよく聞き取ることができない。

「実験サンプルが今どこにいるか分かる？」

『サン……ル……ZAZAZA』

時雨は携帯電話が使い物にならないことを悟り後でかけなおすことにした。

「……後でかけなおす、じゃあね」

『えっ……』

ガチャ 時雨は電話を切ると辺りを見回した。

「公衆電話ってないのかなあ」

公衆電話なんてなかった、というより辺りは猛吹雪のため視界ゼロであった。公衆電話が近くにあったとしても今は見つめることはできないだろう。

時雨は公衆電話を置いてそうなお店を捜して電話をかけ直そう

と思ったがこんな大雪の日に営業している気合いの入った店は
一軒も存在しなかった。

「はあ、まいったなあ」

時雨が途方にくれながら歩いていると前方に駅が見えてきた。
駅になら公衆電話があると確信した時雨はまさにこれは天の助
けに違いないと思ひ込み駅に向かって全力で走って行ったのだ
が……。

「……閉まってる……なんでシャッターが閉まってるの！」

そう、帝都に吹き荒れる猛吹雪のため電車は全線不通となっ
ており、駅の入り口のシャッターは閉められていたのだった。

「……なんだよ、もう！」

ゴン！ 時雨は腹いせにシャッターに思いつきり蹴りをくら
わしたのだが。ざざーっ！！ シャッターを蹴った振動で雪が
時雨目掛けて大量に落ちてきた。

「わあっ！」

雪をかわそうとしたが足が滑ってその場に転倒してしまい、
雪の直撃を受け雪の中に埋もれてしまった。

「ぶはーっ！」

雪山の中から意気よいよく人の頭が飛び出してきた、それは
まさしく時雨の頭だった。

「死ぬかと思ったー」

死の淵から生還した男の顔は蒼白だった。時雨は雪山の中か
ら抜け出すとぶつぶつと文句ながら全身をはたいて雪を落とし
た。

「ツイてなさすぎる、このツイてない加減は異常だよ、呪いかなにかをかけたのかな？ ……でも、そんな呪いをかけられることし……てるよね毎日。はぁ、今度命ミコトのどこ行つて御被いしてもらおう」

そして彼は情報屋に直接会うためにある場所へと足を運ぶことにした。

午前九時一三分。

時雨の訪れた情報屋はツインタワーと呼ばれるビルの中にその店を構えていた。

ツインタワーとはその名に由来するとおり、同じ形をした地上一〇〇階建ての二つのビルが並んで立っていて、そのビルの中にはありとあらゆる店が軒を並べている。

通称ウエストビルと呼ばれるビルには一般人の利用する、デパートや映画館などの店が軒を並べているが、向かい側にそびえ立つ通称イーストビルはコアな帝都市民の巣窟と化していた。その理由はイーストビルの中にある店がどれも特殊極まりないからである。

イーストビルの中には怪しげな魔導具を取り扱う店や探偵事務所、軍事兵器を横流しする店から暴力団組織のオフィスまでありとあらゆる帝都の裏の顔がそこにはあった。

情報屋はイーストビルの四六階にそのオフィスを構えていた。この情報屋は帝都一の実績と高額料金で有名な店だった。

時雨がオフィスの中に入ると受付嬢が時雨に向けてニッコリ

と微笑み軽く会釈をした。

「おはようございます、時雨様。今日は何の御用でしょうか？」

受付嬢の歌うような声が静かなロビーに響き渡り、まるでここだけ春が来たような清々しさに包まれる。

「ええとー、真くんに会いたいんだけど」

間延びした声が静かなロビーに響き渡る。それはまるで少し寝ぼけた天使の歌声のようだった。

受付嬢の頬が少し赤らんだ。なぜなら、時雨が自分を仔犬のような瞳で見つめているからだ。時雨の表情は眠気に満ち溢れていたが、その顔は中性的な美しさに満ち溢れており、その瞳で見つめられた者は誰しもその若者に恋心を抱いてしまうほどである。

彼の美しさは帝都でも有名で人々の中には彼のことを『帝都の天使』と呼ぶ者もいた。そんな彼に見つめられてしまった受付嬢は言葉を忘れ時雨の顔をうつとりしながらただ見つめるだけだった。

時雨は軽く咳払いをして、

「あのお真くんに会いたいんだけど……」

天使の声を聞いて我に返った受付嬢は“はっ”とした表情をして照れ笑いを浮かべた。

「あつ、すいません、社長なら自室で妄想に耽っていると思いますけど……」

「ありがとうございます」

時雨は受付嬢に対して満面の笑みを浮かべた。それは彼女にとつての痛恨の一撃であり、それを受けた受付嬢はその場に失神してしまった。彼女が時雨の笑顔で失神したのはこれでちょうど一〇〇度目のことだった。

帝都の天使は機械だらけの部屋の中にいた。部屋の壁は金属でできており、部屋中を無数のプラグや何に使うのかまったく見当のつかない機械がゴロゴロとしていた。

部屋の真ん中にはプラグを全身に繋がれた男が座っている。その男は変な機械を頭から目元まですっぽりとかぶっている。そして、部屋の上空にはソフトボール位の金属製のボールが二つ、忙しなく動き回っていた。

時雨は床に張り巡らされるプラグを爪先立ちで軽やかに踏まないようにして、部屋の中央に座っている男に近づき声をかけた。

「真^{シン}くーん、おはよう」

少し大声で呼びかけをしたが返事はなかった。返事の変わりに返ってきたのは奇怪な言葉だった。

「ああ時間^{トキ}が見える。おあつと、そこで右フックだ、いやむしろかぼちやだろ……次回に続くのかああー!!!」

真くんと呼ばれた男は完全にトリップしている真つ最中だった。

「はあ、いつもこれだよなあ」

少し呆れた表情を浮かべている時雨にも気づかない様子の真

は頭をガクガクと揺らし、どこかに飛んでいる。

真と呼ばれた人物は頭から目元まですっぽりとかぶった装置によつて、帝都のありとあらゆる情報を瞬時に検索し映像として取り出すことができる。

真は深く呼吸をした。

「時雨か、今日は何の用だね」

こいつ切り替えが早い、と時雨はこの時思った。

「なんだ、気づいてたんだ」

「当たり前だ……ん？ 顔色が優れんようだがどうした？」

真は頭から目元まで変な機械をかぶっているが相手の姿が手にとるように見ることができると。それは、この部屋に浮かんでいる小型カメラのおかげである。このカメラは真専用のカメラなのだが、彼はこのカメラ以外のカメラが映し出す映像も瞬時にアクセスすることができる。

アクセスできるカメラはネットワークに接続されているカメラにかぎられているのだが、カメラ以外のものでもネットワークに繋がれていれさえいればどんなものにもアクセスすることが彼には可能だった。

時雨は真ではなく、上空に浮かぶカメラに話しかける。

「大雪が降っててさ、ここまで来るの大変だったんだよ」

真はネットワークに入り込み、帝都の現状について検索をした。

「ふむふむ、帝都は今までにないほどの大雪に見舞われているのか……すごい吹雪で前が見えん……気温がマイナス三三度！

「……こりゃ寒い」

真は完全にアッチの世界に逝ってしまった。そんな真を細い目で見る時雨。

「……あのさあ」

真は時雨の声に呼び戻されコッチの世界に無事生還して来た。

「すまん、すまん、所で今日は何の用だね」

「今、世間をお騒がせしてる、生命科学研究所から逃げ出した実験サンプルが何処にいるか調べてほしいんだけど」

「帝都公園のスケートリンク」

「はやっ!!」

真は時雨の質問を瞬時に答えて見せた。

「辺りまえだ、このニュースは帝都で今一番の話題の的だからな、つねに最新の情報にアクセスしている」

「ありがとう、情報料は勝手にボクの口座から引き落としして」
「て」

「もうお帰りか？」

時雨は真に手を振りながら部屋を後にした。

「おおっと、サバンナモンキーがあああっ!!」

時雨が部屋を出たとたん真はすぐにトリップしていた。

「帝都在住S子さん三八歳の証言によると……何い、家政婦は見ていただと!？」

真のトリップはどこまでも、どこまでも続いた……。

ツインタワーと帝都公園は目と鼻の先だ、歩いて五分とかか

らないハズ……だった。

「吹雪で前が見えないー、何処なのここは、もう一〇分も歩いてるのに何で着かないのー」

そして、結局時雨は帝都公園まで一五分の時間を要してしまった。

「どこだサンプルは……」

吹雪は激しさを増し、寒さも一段と厳しくなっていた。

「……何にも見えない」

そう、何も見えなかった。そして時雨の左半身も雪によって見えなかった。

「……気温が急激に下がった、しかも吹雪が激しさを増してる……近くにいろつてこと？」

敵の気配を感じ、体勢を整えようとするが身体は腰まで雪に埋もれ俊敏な動きができない！

ドゴツ！ 時雨は背中に激痛を覚えた。

「不意打ちなんてツイてないよ……ぐはっ」

白い雪が紅く染まっていく。

「姿なき暗殺者って感じだなあ」

そう言いながら時雨はコートのポケットから手に収まるぐらいの棒を取り出し、それに付いているボタンを押した。すると棒の先端から閃光が飛び出した。

閃光はまるで刀のような形をしていた、まるでそれはビームサ―ベルのようであった。

「……右かつ！」

そう言いながら時雨はビームサーベルを横に大きく振った！
ゲゲエツ！！

妖物の愚声が辺りに響いた。 白い雪が見る見るうちに蒼

く染まっていく、しかし、そこには妖物の姿はなかった。

「浅かったか……でも奴の血で居場所が分か……らないじゃん」

吹雪のせいで雪に零れた血はすぐにかき消されてしまっていた。

「ツイてなさすぎるよ、はあ」

時雨は肩を深く落としたり。

「帝都警察は来てくれないのかなあ？ ちゃんと都税分働いて欲しいよね……っ次は左か！」

時雨はビームサーベルを横に振ったが身体がかじかんで動きが鈍ってしまった。その一瞬を付いて妖物の攻撃が時雨の左腕を挟む。

「くっ！ ……ああボクの大切な血が……最近ちょっと貧血ぎみなのに……ああ眩暈が」

時雨は体勢を崩し、雪の中に身体が埋もれた。

「はぶっ！ このままだと、死んじゃうかも……寒さで」

雪を盛大に撒き散らしながら時雨は天高くジャンプした。すると、耳元で雑音交じりの機械音が聴こえてきた。

「寒さでかよ！ といちようツツコンでおいたぞ」

どこからともなく聴こえてきた声を瞬時に誰のものか時雨判

「断し、その人物の名を大声で叫んだ。」

「真くん!？」

「そのとおりだ、一部始終を真ちゃんカメラ一号二号でバッチリと観ていた」

時雨が横を見るとそこには二台のカメラが浮いていて、真の声はそのカメラに取り付けてあるスピーカーから発せられていた。

「だったら、早く声かけてよ」

「たまたま天高くジャンプしたから真のカメラに気づいたものの、それでもなければ一生気づかなかっただろう。」

雪に着地した時雨はすぐさまビームサーベルを華麗に舞うように一回転しながら振り回し、自分の周囲半径二メートルほどの雪を除雪した。

膝に手を突き肩で息をする時雨に真がそっけない感じでぼそつと呟いた。

「……後ろ」

「えっ!？」

後ろを振り返ったときはもうすでに遅かった。妖物の一撃が時雨の胸を切り裂いた。

「ぐはっ!!! ……言うのが遅いよ」

「出血大サービスだな」

「この状況でそれはシャレにならないよ……ぐはっ」

「だいぶ困っているようなので手を貸してあげよう、無論特別料金だがね」

「じゃあ。エンリヨしときます」

時雨は謹んで真の申し出を断った。

「死んじやうよこのままじゃ、キミいゝ」

真の言うとおりだった。時雨の身体から流れ出た血の量は常人であればもうとつくに意識を失っているほどの出血量であった。

「……必要経費で落とせば問題ないか」

「商談成立だな、それでは。標的は一時の方向一〇メートル先、時速二〇キロメートルで一〇時の方向に移動……左から来る気が……三〇メートル先……二〇メートル……一〇……五」

時雨は自分の左側に突き刺すように斬り込んだ！

ウゴオー……ッ！！

妖物の咆哮が辺りにこだまする……。

吹雪は治まり一瞬にして空は澄んだ青色に染まった。温かい光が時雨を包み込む。

「私が手を貸したら呆気なく終わってしまった」

真の声は少しつまらなそうな感じだった。

「終わったあ……はあ」

時雨の身体からは力が抜けそのまま前に倒れて雪の中に身を投じた。

「寒い。……あつたかい、お茶が飲みたいー！！」

「お茶ならば、前方にある自販機に売っているぞ」

「えっ、ほんと！」

その言葉に時雨は瞬時に起き上がり、前方に向かって走り出

した。

最初自販機は雪に埋もれていていたが時雨がやっとの思いで掘り出した。

「はあ、やっとお茶が飲めるよ……あれっ」

時雨はポケットの中に手をつ突っ込んで何かを一生懸命探している。

「どうした？」

真の声がスピーカーから時雨に問い掛ける。

「財布……財布がないー！」

「はっ？」

「財布、落としたみたい……ぐすん」

「確実に雪に埋もれてるな」

「ツイてなさすぎだよ」

「寒い、まだ身体があつたまんないよ、うーさむっ」

「なるほど、私と別れた後のことはわかった」

時雨は自室でこたつでお茶をしながら、紅葉と話していた。

そこにお茶菓子をおぼんに乗せたハルナがメイド服で現れた。

「紅葉さん、かりんとうお好きでしたよねえ」

「嫌いじゃない」

出されたかりんとうを口に放り込む紅葉を見ながら時雨は仔犬のような瞳をした。

「ボクのツイてなさ加減がわかってくれたなら、報酬上乘せしてくれませんか？」

時雨の仔犬の瞳攻撃は紅葉にはさして効果はなかった。

「考えてはおこう」

「ケチっ」

ふう〜と顔を膨らませた時雨を見たハルナはふとこんなことを言った。

「その表情をすると似てますよねえ〜、やっぱり」

「誰に？」

時雨が不思議そうな顔を見るとハルナはかりんとうを指差した。

「この人ですよ〜」

この言葉にお茶を飲もうとした時雨の手が止まった。

「かりん……ね」

明らかに遠い目をしている。時雨は明らかに遠い目をしていました。

そんな時雨を尻目に紅葉とハルカはかりんとうを口に運んでいる。

だが時雨はかりんとうを食べる気がしなかった。そこで時雨はかりんとうの入った入れ物を何気に人差し指でズズズッと押しつけて自分から遠ざけた。

それを見ていたハルカが不思議そうな顔をした。

「テンチョ、かりんとう嫌いなんですか？」

「今から“苦手”になった」

無言で紅葉がかりんとうの入った入れ物を時雨の前まで押し戻した。

それを見た時雨は身体をぶるぶると振るわせた。そんな様子を見た紅葉は口元を少し吊り上げた。

「なぜ、そんなに君の妹……ふっ、失礼、弟のことを嫌うのだ？」

「嫌ってなんかないよ、ただ苦手なだけ」

やはり遠い目、時雨は遙か遠い目をしていた。

「ええっつ、なんでですかあ、あんなに可愛いのにいっ」

「……それが問題」

紅葉が突然こたつから出て立ち上がった。

「私は研究のレポートを書かなくてはならないので帰らせてもらうぞ。ああそうだ、君の運は通常どおりに戻っているはずだからもう心配する必要はない」

「はあ？」

「雪玉のお返しだ」

「紅葉あーお前の仕業かあ！」

「いいレポートが書けそうだ」

時雨は紅葉を捕まえようとこたつから出たがそこにはもう紅葉の姿はなかった。

「……せめて、財布の中身ぐらいは上乘せして」

外からは子供たちが雪で元気に遊ぶ声が聞こえてきたしかし、時雨の気持ちはまだ吹雪の中にあった。

「寒い……こたつ入る」

「えっ、どうしたんですかあ？」

ぽかんと口を開けるハルナを他所に時雨はこたつの奥底に入

り、ぶるぶると何かに怯えるように身震いをしていた。

翌日、時雨が銀行の口座を調べると報酬とは別に落とした財布に入っていた金額がちゃんと振り込まれていたという。

SNOW
完

魔女ッ娘^こマナ

時雨 その名は帝都に広く知れ渡っている。

年齢不詳、出身地不明、経歴不明、彼の過去に関すること全て不明。しかし、この街ではよくあることなのでさして不思議なことでもないし気に留めることでもない。

見た目は中性的な美しさに満ち溢れていて、妖艶さを身に纏っている。帝都一の美しさを持つと言われる彼は人々から『帝都の天使』と呼ばれている。

今、彼はこの街で小さな雑貨店を経営している。客はたくさん来るが殆どが“時雨”目当てで売り上げはあまりいいとは言えない。時雨目当ての客がちゃんと買い物をしてくれるならば売り上げは上がるだろう、だが時雨を見に来る客が買い物をするととは限らない、つまり時雨の美しさと売り上げはあまり関係がないらしい。だが、店の売り上げが上がらないのは品揃えの奇妙さの為だと言う者も多くなるのだが、時雨自身はそれを断固否定している。

帝都の観光プログラムの中には『時雨を見に行こうツアー』というものもあり、普通ならば売り上げが上がると皆は想像するに違いない……がしかし、やはりこちらも時雨を“見る”ということがメインらしく、店の前にバスは止まるし、カメラのシャッターの嵐が起きるわけで、買い物客に取っては迷惑極まり

ないのが実状らしい。

だが、実は時雨はちゃっかり観光会社からお金をプールして貰っているらしい。しかし、それでも時雨の店は毎月赤字を記録してしまってる。店が赤字になるのは時雨の趣味で無意味に不必要で売れない物を大量仕入れをするからだという声があるが、時雨はそれも断固否定してる。

そこで彼は店の経営者として仕方なく店の赤字を補うため、ある副業をすることにしたのだった。

この街では毎日のように凶悪犯罪が数多く起こっていて、その件数は年々増加傾向にある。そのため帝都警察だけでは年々手に負えなくなっていた。

そこで帝都はある政策を打ち出した。その政策とは凶悪犯罪者に懸賞金を賭けることであつた。そしてこの街に“ハンター”が生まれた。

当初のハンターは帝都政府の依頼だけを受けていたが、今では一般の依頼も請け負うようになり、ハンターの仕事は日に日に広範囲に及ぶようになっていた。

凶悪犯罪者の処理から、遺跡調査、モノ探し、妖物退治まで報酬しだいどんな仕事もこなすスペシャリストとなつた彼らたちはハンターではなく問題処理屋トラブルシューターと徐々に呼ばれるようになっていった。

時雨の名はトラブルシューターになりその知名度を増すことをなつた。しかし、彼はトラブルシューターの仕事のことをあ

まり好きではないらしいのだが……雑貨店の運営をしていくためには仕方ないらしい。

たしかに一流のトラブルシューターは儲かる。事実、時雨は本業の雑貨店より副業のはずのトラブルシューターの方が数十倍お金になっているらしい。

「はあ……今月も赤字……でも総合的には超黒字……こんなことでいいのかなあ？」

時雨はこたつに入りながら店の帳簿とにらめっこをしていた。

「はあ、ボクは雑貨屋一本でいきたいのに……」

雑貨店“ジズシエスタ”日用品から非日用品まで豊富な品揃えを売りにしている店である。帝都のパンフレットにも『美男子の店長のいる店』として載っている有名店のだがジズシエスタに来店する客の殆どは時雨見たさで来ていて、買い物をしていく者は少ない。つまり売り上げの方はさっぱりであった。

「あ~~~~~っ！」

時雨の声が店の外まで響き渡る。ジズシエスタに訪れていた客が何事かと静まり返った。

ドドドドッ！ バンツ！ 時雨のいる部屋へ何者かが慌てたようすでふすまを開け駆け込んできた。

「テ、テンチョどうしたんですかあ〜!?」

部屋のふすまを開けたのはツインテールにメガネにメイド服……の可愛らしい女の子であった。歳は一〇代後半から二〇代前半らしいのだが、顔立ちのせいか、どう見ても中学生くらい

にしか見えなない。

入って来た女の子は、膝に手を突き肩で息を切らしている。

「ど、どうしたんですう、大声なんて出して？」

「ああ、ごめんごめん、今月も赤字でさあ、つい大声だしちゃった」

『えへっ』と時雨は小悪魔のような笑顔を見せた。

「犯罪ですよ、その笑顔は」

時雨の得意技の笑顔は誰をも魅了し、何でもいうことを聞かせてしまう反則技であった。だがこの娘にはさして効果が見られない。

「はあ、どうしたら黒字になるんだろうね」

帝都の天使はまるで自分のいた世界を見つめるかのように空を見上げた。

「テンチヨのグッズ販売するとか？」

「ヤダ！」

即答だった。

「どうしてですかあ〜」

「とにかく、それはイヤなの。ねえ、別の方法はないの？」

メイド服の店員は腕を組んで首を傾け『う〜ん』といった表情で少し考えた後、ポンと手を叩いた。

「そうだ！ 通信販売を始めたらどうですかあ」

「ああ、それはいいかも」

時雨もメイド服の店員の意見に対して好感触といった感じだ。

「でしょあー」

メイド服の女の子は誇らしげな表情を見せた。

「ありがとう、ハルナちゃん」

「エヘッ」

ハルナはかわいらしく微笑んだ。

「ところで、ハルナちゃんお店の方は？」

「えっ!？」

「今、ハルナちゃんしか店員いないでしょ？」

「あああああ~~~~っつ! ! ごめんなさい、すぐに戻りま
すう!」

ハルナは慌てて店に走って行った。

「……はあ、若いつてすばらしいなあ」

時雨はお茶をすすりながら深く息をついた。その姿からは若
いという言葉は微塵も感じられなかった。

ドン! ゴロゴロ! バタン! 階段の方から大きな音が聞

こえた。そして。

「いったい」

という声が聞こえてきた。

「……はあ、元氣だねえ」

時雨はお茶をすすりながら深く息をついた。やはりその姿か
らは若いという言葉は微塵も感じられなかった。

時雨は太陽が一番高い位置に昇ったころ、店の裏にある庭に
出て、剣術の特訓をしていた。時雨が剣を振るその姿はまるで
舞を舞っているかのように優雅さを極めていた。

庭は高い壁に囲まれ外からの一切の干渉を遮断している。はずだったのだが、時としてそうもいかない場合があるらしい。

時雨が剣術の特訓を始めて一〇分くらい経ったころ、時雨の目の前である異変が起きた。突如、空間が湾曲しはじめたのだ。

空間は時雨の目の前でその形を渦巻き状に歪め、徐々に渦の中心に吸い込まれていき、最終的には半径一メートルの穴がぼつかりと宙に浮かんだ。

「ただいまー！」

と、宙にぼつかりと口を開けた穴から女の声が聞えたと思ったら、その中から金髪の巻き髪を揺らしながら派手な格好をした女性が這い出て来た。この格好は一見法衣にも見えないこともないが、それにしても派手だった。

「時雨ちゃん、ただいまー！」

穴から出てきた女性は時雨を見ると『よお！』といった感じであいさつをした。

「やあ、突然のお帰りだねえ、マナ」

時雨はマナに微笑みかけた。しかし、マナは不機嫌な顔をしていた。

「いつも言ってるでしょ、マナじゃなくて、マナ様って呼びなさいって」

『ハイハイ』と時雨は思ったがここはおとなしく従がっておいた。そして時雨はちよつとわざとらしく言った。

「わかりました、マナ様。以後気をつけます」

「わかればよろしい」

“マナ様”は腰に手をやって、ふふーんという表情をしている。完全に時雨のことを見下しているといった感じだ。

「ところでマナ様、遺跡の調査の方はどうでしたか？」

「思ったよりたいした遺跡じゃなかったわね、でもまあ、おもしるい魔導書は拾ってきたけど」

「拾ったんじゃないくて、パクってきたんでしょ」

「パクったなんて人聞きが悪いわねえん。パクったんじゃないくてちゃんと考古学者の人にプレゼントされたの！」

拾ったからプレゼントされたに何時の間にか変わっていた。

「どうして、プレゼントなんてされたの？」

「そ、それは……」

マナは時雨の質問に対して目が泳ぎ言葉を詰まらした。

「どうせまたテンプテーションでもかけたんでしょ」

テンプテーションとは異性を魅了し、自分の意のままに操る術である。

「違うわよ、私の美貌で魅了して貰ったの！」

マナの否定の言葉には必要以上に力が入っており、そのことからマナがテンプテーションで考古学者を墮としたのは明白だった。

「まあ、そういうことにしておくよ。ところでその魔導書なんだけどさあ、読み終わったらボクにくない？」

時雨は必殺技のおねだり光線を出したがこの技は身内には効かないらしい。

「どうしようかなあ、そうねえ私とのゲームに勝ったらあげてもいいかな」

「どんなゲーム？」

「今日一日、時雨ちゃんがあたしに殺されちゃいけないゲーム」

「はあっ！ なにそれえ？」

時雨は思わず声を張り上げた。

「耳悪いんじゃないのあ、しょうがないわねえん、もう一度説明して、ア・ゲ・ル」

「ありがとうございます。マナ様」

「スタートの合図であたしは全力で時雨ちゃんを殺そうとするから、時雨ちゃんは逃げるなり、隠れるなりして明日の零時〇〇分〇〇秒まで死ななければ時雨ちゃんの勝ち、賞品ゲットみたいな感じ。OKわかった？」

「で、そのスタートの合図は？」

「三・二・一・スタート！」

「はあっ!？」

マナの当然のスタートの合図に時雨の動きが一瞬止まった。

その隙を突いてマナが攻撃をしかけてきた。

「あたしの手で永遠の眠りにつけてあげるわぁん」

マナの手から突如大きな鎌が現れ、マナは両手でそれを大きく振りかぶった！

時雨は間一髪でそれを避け、後退りをする。大鎌の空気を斬る音が辺りに鳴り響く。不意打ちだった。

「いきなりスタートするなんて、汚いよ！」

「あたしがルールブックなのよ！」

「なんだよそれ！」

身の危険を感じた時雨は全力で駆け出した。

「おほほほ、あたしから逃げられると思って」

時雨は目の前に立ちちはばかる高い壁を一飛びで飛び越えた。

その姿は空を舞う魔鳥のようであった。

「はあ、なんでこんなことになるんだろ……？」

時雨は走りながら自分の不幸を呪った。しかし、今はそんなことを考えている暇はない。なぜなら時雨の命を狙う女性は人々に世界一の魔導士とつたわれている、自称超美人天才魔導士なのだから。

時雨が悪寒を感じ後ろを振り返るとそこには、マナの姿があった。だが、時雨の視線は普通とは違う場所、空の上にあった。なんと、マナは空を飛んでいたのだ。

「はあ、彼女なんでもアリだなあ。ホントに殺されるかも……」

引きつった顔をする時雨の頬に冷たい汗が流れた。

「待ちなさい、何処に逃げようが隠れようがあたしにかかれば全て無意味よおん」

マナの背中からは漆黒の翼が生えており、それで空を飛んでいるようだ。漆黒の翼に大鎌、その姿はまるで死神のようだった。

その姿を見た帝都都民は死神が現れたと大騒ぎをして、くの

中継車までが出動する始末であつた。

その日の夕方のニュースでこのことは取り上げられ、時雨とマナのバカ騒ぎは瞬く間に帝都都民に知られることになつたのは言うまでも無い。

どうにかマナの追跡を一時的にまくことのできた時雨は神社の境内の石畳の上に立つていた。

この神社は由緒正しい神社で歴史も古く、太古の神術にも精通している。そのため神社には強力な結界が張られており、少しの間であればマナの目をくらすことができると思つた時雨はここに逃げ込んで来たのであつた。

辺りをきよろきよろと見回して時雨は何かを探しているようだつた。

「早く、命ミコトを探さなきゃ、ホントに殺されちゃうよ」

命とはこの神社の美人神主として有名な超一流の神術使いで、時雨はこの帝都でマナに対抗できる一人として彼女に会いに来たのだつた。

ぶるぶるっと身震いをした時雨が後ろを引きつった顔で振り向くとそこには、漆黒の翼を持つ悪魔　マナが大鎌を構えて空を飛んでこちらに向かつて来るではないか。

マナは本来翼無しでも空を飛ぶことができるのだが、この演出効果が時雨の恐怖をより一層煽っていた。

巫女装束姿でほうきを片手に命が境内を掃除していると恐怖

の形相を浮かべて全力疾走してくる時雨の姿が目に入った。

時雨は命の前で急ブレーキをかけると凄く慌てた様子で話し出した。

「た、助けて、マナに殺されるう〜」

「どうしたのじゃ、マナに滅せられるとは？」

命は少し目を細め時雨を見つめた。

「詳しい話はそのうち話すから、今はボクの命をマナから守って！」

時雨は『ねえお願い』といった感じで命の肩を掴んで思いっきり揺さぶった。

「や、止めぬか、落ち着け！」

命は力いっぱい時雨の手を振り払った。

「だ、だつてえ〜〜」

そう言つて時雨は自分の後ろを指差した。その先には宙に浮き大鎌を持ったマナが凄いスピードでこちらに向かつて来ていた。

「な、なんじゃ、あれは!？」

「時雨ちゃんあたしの目をくらまそうとしてもムダよぉん」

「だ、だずげで〜」

時雨は泣きながら、また命の肩を強く揺さぶった。

「ええい、止めぬか! 時雨ともあろう者が取り乱すでない」

マナは大鎌をブンブン振り回しながら、少しずつじりじりと時雨に接近してくる。そして、ついに時雨の真後ろまで来た。

「もう、逃がさないわよ、し・ぐ・れ・ちゃん」

「わ〜ん!〜!」

時雨は泣きながら命の肩をさつき以上に強く揺さぶった。

「だから、泣くでない、私が話をつけてやるので」

「あ〜ら、命ちゃん、あたしたちの問題に口出ししないだけでいいだけるう〜」

「仕方ないであろう、時雨にこんなにも泣き憑かれては」

時雨は命の巫女装束の裾を強く掴んですすり泣いていた。

「して、このような状況になっておるのはなんぞや?」

「今、あたしと時雨ちゃんはゲームの最中なの。ルールは簡単、時雨ちゃんが明日になるまであたしに殺されなければ、あたしの負け、勝った時雨ちゃんには豪華賞品が贈呈みたいな」

「しかし、殺すというのはあまりにも酷ではないのか?」

「あたしがルールだからいいの」

「おぞましき女よのお」

この言葉に反応した時雨はまた激しく泣き出した。帝都の天使がこれほどまでに泣く姿など誰が想像しただろうか?そして、この天使をこれほどまでに泣かせることのできるマナとはなんと恐ろしい女なのだろうか。

時雨は震える指先でマナを指差した。

「ま、まだボクがやるって言っていないのに勝手にはじめたんだよ」

「あらん、だって魔導書が欲しかったんでしょ?」

「そ、そうだけど……」

「仕方ないのお、マナ殿、時雨の助太刀をしてはいけぬという

掟はあるのかえ？」

「そんなルールは特に決めてないけど」

「ならば、今この時からわらわは時雨の助っ人じゃ」

「ええー、命ちゃんが時雨ちゃんのお助っ人しちゃうのあん、強敵現るって感じじゃない」

「そうと決まれば逃げるぞ、時雨！」

「えっ!？」

命は念の込めてあるお札を何処からともなく取り出すと、それをマナ目掛けて投げつけた。そして、お札は見事マナのおでこに命中した。

「な、なんなのこのお札は？」

「その札には身動きを封づる術がかけてある、まあお主のことじゃ、ほんの時間稼ぎ程度にしかならぬと思うがの」

そう言うと命は時雨を引きずりながらこの場をあとにしていた。

マナは二人を追いかけようとしたが身体が動かない！

「ああん、何なのこれ、ホントに身体が動かないじゃない」

境内に取り残されたマナはこのあと一〇分間、独り悶えていた。

「はあ、どうにか逃げられた」

「お主、いつもため息ばかりついておるが、ため息をつくると寿命が縮むという話を聞いた事がないのかえ？」

「はあ、だって仕方ないよ、毎日大変なことばかり起こるんだ

もん」

「お主も数多の事で苦勞しているのだのお」

帝都の天使と美人神主のツーショットは都民の格好の的であった。多くの人は彼らを見かけると足と止めたた呆然と二人を眺めていた。

時雨がふと足を止めた。

「どうしたのじゃ？」

「ほら、これ見てよ」

「なんじゃ？」

時雨が指を指した方向には電気屋のショーウィンドがあり、その中にはテレビが飾られていた。そのテレビの画面には夕方のニュースが映し出されていて、ちょうど時雨が見ているその時、あの時の時雨とマナの追いかけっこの姿が映し出されていた。

「あはは、帝都都民が死神と魔導士を間違えるだつてさあ」

「もし、わらわがお主だったら一生街を歩けぬ生き恥じゃ」

「そうかなあ？」

「まあ良い、はよう行くぞ」

二人はまた歩き出した。

「ところでさあ、命はボクの助っ人をもって出てくれた訳だけどさあ、勝算とかはあるの？」

「ある」

命は深くうなずいた。

「えっ、ホントに！」

「勝算が無くば、あんな奴とはやり合ったりはせぬ」

「どんな作戦があるの？」

「この勝負は明日になるまで持ちこたえれば良いとさっき言っ
とつたが。そうでもない、勝負はその前に決着する」

「どういうこと？」

「今夜は満月じゃ」

「ああ、そっか！」

時雨は何かひらめいた様子で目を見開いた。

「この街で一番高い建物の所に行くのじゃ」

「帝都タワーのビヤガーデンかな？」

「急ぐぞ」

二人は急いで帝都タワーに向かうことにした。

帝都タワービル 帝都の観光パンフレットにも載っている
帝都の観光名所の一つで、帝都一の高さを誇る三〇年前に建設
された建造物である。

そのタワーの屋上にはビヤガーデンがあり、夜になると仕事
帰りのサラリーマンやOLで賑わいを見せる。

店の位置する場所は、高度が非常に高いため強風が吹き荒れ、
店内を超強化ガラスで覆わなければ、とても営業などしてられ
なかつた。

そのためビヤガーデンと言っても一般的なビヤガーデンと違
い屋外にあるという訳ではなかつた。

しかし、壁や天井は全てガラス張りのため外からの光を店内

に取り込むことが出来る。それが命と時雨の狙いであった。

仕事帰りのサラリーマンやOLで活気に満ち溢れているこの場にどうみても不釣り合いな二人。

ひとりには巫女装束で格好がこの場と合っていない。もうひとりなぜか全身から恐怖を醸し出していて、この場の明るい雰囲気とは正反対の顔をしていた。

暗い面持ちの黒いロングコートを来た男　時雨はフロアの中央にある時計を見た。

「月が昇るまで後、四〇分くらいだね」

「まだ、陽が沈んでおらんというのに人が多いのお」

命は店内を一瞥した。

「日曜だからね、しかたないよ」

「しかしのお」

命は渋い表情をしてもう一度店内を一瞥した。

「どうしたの？」

「マナがここに現れたら、この者達に被害を及ぼすのではないかと思つてのお」

「……あ、っ、気づかなかつた」

「しかし、多少の犠牲は仕方ないであろう？」

「まあね、ボクが殺されるよりまし……だよな？」

時雨は複雑な表情をしながら店内にいる人たちのことを見回した。

時雨の視線がちょうど中央エレベーターホールに向けられた時、ちょうどエレベーターが来たらしく、そのドアが開かれた。

チン！ という音とともに出てきたのは。

「探したわよあん、お二人さーん！」

エレベーターが開かれたと同時に中から出てきたのはマナだった。

マナはエレベーターから降りると、腰に手をやりワザとくさいモデル歩きで二人の元へ近づいて来た。

「おほほほ、命ちゃん、やってくれたじゃない」

マナは少し怒りの表情を浮かべ、ゆっくりと二人の元へじりじりと歩いてその距離を狭めてくる。

命はマナの感情を逆なできるようにいかにもとぼけたようすで言葉を返した。

「なんの事じゃ？」

「おほほ、とぼけてもムダよーん」

「だいぶ苦労したようじゃのお」

命はマナを見下したような微笑を浮かべた。

「あたりまえじゃない。どんな術を使ったか知らないケド、どんな魔法を使ってもあなたたちの居場所が見つけれなくて苦労したんだから」

マナは時雨たちを探すのに地道に聞き込みをしたらしい。

「特殊な護符で結界を張ってあったのじゃよ」

命は護符をマナに見せ付けた。

「さすがは命ちゃんね、でもこのゲームはあたしの勝ちよおん！」

マナはそう言うと大鎌をどこからともなく取り出し、突然時

雨に襲い掛かった。

店内の客たちにとよめきが走る。逃げ出す者もいれば時雨たちの周りに群がる野次馬やよっぱらいもいた。

時雨はコートポケットからビームサーベルを取り出すとそれのスイッチを押した。すると閃光が飛び出し辺りを照らし、客たちの歓声上がる。シヨーと間違えて拍手をする者もいた。「シヨーじゃないんだけどなあ」

時雨が困った表情をして客たちを見回していると、マナが時雨目掛けて大鎌を振り下ろしてきた！

時雨はマナの攻撃を流れる水のように交わし、ビームサーベルで大鎌の枝の部分を斬り落した。

鎌の部分が金属音を立てて地面に落ちた。すると鎌はまばゆい光とともにどこかに消えて、いや、消滅してしまった。

マナはすかさず次の攻撃に入った。

「我は汝をクイック召喚する」

マナの足元からは光が進り彼女の髪は下からの霊気により逆立てられる。

「出でよ、アンドラス！！」

マナの声と共に地面が裂け中からはおぞましいうめき声が地響きと共に聞こえてきた。

そして、中からマナに召喚された悪魔が巨大な狼にまたがり閃光と共に地の底から現れた。

悪魔の姿は、体は天使の姿、背中には黄金に輝く翼、頭は鴉、そして、手には剣が握られていた。

「さあ、アンドラスちゃん、殺っちゃってえ〜ん」

悪魔は時雨を睨みつけ剣を構えた。

「我、全テヲ滅スル者ナリ」

時雨は命の方に顔を向け、

「やばいんじゃないの？」

と問い掛ける。

「客を外に出さねば」

命はそう言う指で空に印を描いた。

すると、印を描いた場所に丸い穴がぼっかりと開き、風を切る音を立てながら店内の物を穴の中へと吸い込んで行った。そして、人間までもすごい勢いで吸い込んでいく。

穴に吸い込まれないように必死で抵抗する者もいたが、あえなく皆穴の中へと吸い込まれた。まさにそれはブラックホールのさながらであった。

そんな、光景を目の当たりにしながら時雨は命に聞いた。

「ねえ、これって神隠しってやつ？」

「まあ、そんなところじゃ」

「あのさあ、吸い込まれた人たちはどこに行っちゃったの？」

「わからん」

「わからんじゃないでしょ」

『わからん』それはつまり、本当の神隠しとさして変わらないということなのだろうか？

「急いでおったので、そこまで手が回らんかった。まあここよりは安全じゃる」

「確かに……いや、そうなのか？」

平然と答える命の言葉に首を傾げる時雨であったが、今はそんなことを考えている暇などなかった。

悪魔を乗せた狼が咆哮を上げ、悪魔は手に持った剣を振りした。すると、もの凄い風が店内に吹き荒れた。竜巻だ、悪魔は剣を一振りしただけで竜巻を起こしたのだ。

竜巻は店内を滅茶苦茶にし、店を覆うガラスの壁は凄い音を立てて粉々に砕け、強風が店内を吹き荒れた。

時雨は身を屈め強風に耐えている。命とマナは法力により風の影響を全く受けていない。

「……ずるい」

ガン！ 時雨の後頭部に何かが当たった。

「いてえ」

「だいじょぶか、時雨？」

「ボクにもその術かけてくんない？」

命は右手の人差し指と中指で時雨のおでこを強く押した。

「渴！ これでだいじょぶじゃ」

「はあ、それじゃあ行きませうか」

そう言つて時雨は悪魔に斬り込んで行つた。

時雨のビームサーベルは地面を擦りながら半円を描き上へと斬り上げられた。その太刀を悪魔は剣で受け止める。

舞を踊るかのように軽くジャンプ回転しながら剣を横に振る時雨に対し、悪魔は剛剣でそれを軽く受け止めた。

「我、全テヲ滅スル者ナリ」

悪魔は時雨目掛けて剣を叩き落とす。

それはどうにか受け止められたものの時雨の顔には焦りの色が見える。そして、視線を命の方へとやった。

「見てないで助けてよ」

「わらわはこやつ相手て手がいつぱいじゃ」

そう言う命はマナと交戦中であつた。

お嬢様笑いを高らかに上げるマナの手には新しい大鎌がしっかりと握られている。

「おほほほ、なかなかやるわねえん」

「あたりまえじゃ、お主にわらわが負ける訳なかるう」

「言つてくれるじゃな〜い」

マナは大鎌をブンブン振り回しながら命に襲い掛かる。

命は手に握られた護身刀でそれに応戦する。

そんな光景を見ながらぼそりと呟く時雨。

「あつちはあつちで大変そうだなあ」

時雨が悪魔から視線を外した瞬間を突いて悪魔が攻撃をしかけてきた。

自分目掛けて振り下ろされた剣をビームサーベルで受け止めると、悪魔はさらに剣で時雨の身体を押ししてきた。

地面に足を取られ体勢を崩してしまつた時雨に悪魔の全力を込めたの大剣が襲いかかる。

危機一髪、時雨はそれを顔面すれすれのところで相手の剣をビームサーベルで弾き返した。

「危ない、あんなの喰らつたら肉片になつちゃうよ、ふう」

額の汗を拭く時雨は顔では笑顔を作っていたが、相手の渾身の一撃を防いだビームサーベルを持った右腕はだらんと地面に立て下がっていた。そう、相手の攻撃を防いだ右腕の骨は粉々に砕けてしまったのだ。

「ちよつと、タイムとかはないよね……？」

悪魔は時雨の都合などお構いなしといった感じで攻め込んできた。

「はあ、やっぱし。仕方ないから逃げちゃお」

そう言うと時雨は全力疾走でとんずらをしようとした。

それを見た命が叫ぶ。

「待たんか、わらわを残して逃げる気か！」

「そんなわけないじゃない、あはは」

時雨の顔には確実に動揺の色が出ていた。

「……まあそうじゃな、エレベーターが壊れていては逃げる事
もできんか」

「なんですとーっ！！」

時雨は絶句した。確かに部屋の中央にあるエレベーターはドアが閉まった開いたりそれを繰り返していた。

悪魔の影が時雨に忍び寄る。

「今年最初の大ピンチって感じだなあ」

時雨は今になって、あの時した紅葉との約束を後悔した。

それは先月中旬ごろの金曜日夜のことであった。

帝都の天使は本当に困っているのだから疑わしい表情をしなが

ら目を閉じ少し考えたあと、その艶やかな唇を動かした。

「わかった、取り引きをしよう」

「取り引き？」

「その魔導書を紅葉にやる代わりに仕事手伝つてよ」

「よかるう、しかし、その魔導書はどうやって手に入れるつもりだ？」

「彼女のことだから、その魔導書をパクってくると思うし、彼女一回読んだらすぐに覚えちゃうから、そしたら、君にやるよ」

「契約成立だ。それでは時雨、一緒に狩りを始めよう」

その言葉を聞いた時雨は不適な微笑み浮かべ空を見上げた。

過去の回想に浸った時雨は苦笑を漏らす。

「……あの仕事よりよっぽどこっちの方が大変だよ」

時雨はうつむき加減で愚痴をぶつぶつと呟いた。

「時雨い、前を見い！」

命の罵声が時雨に浴びせられた。

「えっ!？」

前を見るとそこには巨大な狼に乗った悪魔がすごい勢いでこちらに向かって来ているではないか。

「……もうヤダ」

これは時雨の心からの本音であったに違いない。とりあえず時雨は、悪魔から逃げながら作戦を練ることにした。

一方、命とマナの戦いは佳境に入りつつあり、その壮絶さを増していた。

命はマナの攻撃を反撃せずに全て避けていた。

「さつきから大鎌をぶんぶん振り回しおって、当たったらどうするのじゃ！」

「当たったら当たったでその時はその時じゃない」

「仕方ないのお」

命はそう言うのと紙の札を一枚出し、指で印を書きそれに込めた。

「動きを封じさせてもらうぞよ、悪く思うでない」

命は紙のお札をマナ目掛けて投げつけた。

札はマナ目掛けて一直線に飛んでいく。

「おほほほ、同じ手は二度もくらわないわよおん」

マナの身体は札に当たる寸前に左右に分身した。マナの使う魔術はなんでもアリのようだ。

札は二人のマナの間を風を切りながら通り抜けていく。

「おほほほ、そんなノ口い札なんてあたしには当たらないわよ

おん」

「ふむ、幻術の一種か。じゃがのお、その札は追尾ができるで逃げてても逃げてても追ってくるのじゃ」

「……!?」

マナが慌てて後ろを振り向くと札が目の先まで迫っていた。

「……気づくのが遅かった」

マナの肩がガクンと落ちた。おでこにはゆらゆらと札が揺ら

めいている。

「そこでじっとして居れ」

「してやられたわあん」

命が時雨の元へ駆け寄る。

「時雨だいじよぶか」

「だいじよぶそうに見える？」

「死んではないようじゃな」

「そーゆー問題じゃないでしょ。それよりあれなんとかしてよ」

二人の目線の先には巨大な狼にまたがった悪魔が時雨を追っかけて来ていた。

「仕方ないのお、式紙でも呼び出してみるとするか」

命が空クラウに印を描く。

「汝は全てを呑み込み無に還す者なり、”招”！」

命は右手の中指と人差し指で空クラウを突き刺した。すると、空間が裂け、中から式神があらわれた。

式神は命に抱えられると、そのスイッチを入れられた？

その光景を見ていた時雨は疑問にかられ、どうしても命に質問を試みたくなくなった。

「あのお、一つ聞いてもいいかなあ」

「なんじゃ、ゆうてみい」

「それって……」

「それって？」

「掃除機だよねえ？」

そう、たしかに命の腕に抱き抱えられていたのは紛れも無い掃除機だった。

「そうじゃがそれがどうかしたか？」

「いや、なんで掃除機なの？」

「こやつは元々九十九神じゃつたのだが、まあ色々あつてのお、わらわの式神にしてやつたのじゃ」

「そうなの……でも、これ役に立つの？」

掃除機が時雨の言葉に反発するように暴れた。

「なんだ、この人間俺様に対して失礼だぞ」

「まあまあ、そうゆうでない」

「なんだこれ、喋ったよ」

そう、時雨の言うとおり掃除機は人間の言葉をしゃべっていた。

「当たり前だろ、俺様は式神なんだから喋れるに決まってるんだろ、こいつバカか」

「よく見ると、目とか口とか付いてるねえ」

そう言いながら時雨は式神の目を突付こうとした。

「何すんだバカやろう、目なんか突付かれたら痛いだろ」

ガブツ！！ 式神はいきなり掃除機の吸い込み口で時雨に噛み付き、しかも離そうとしない。

ぶんぶんと手を振るが式神は一向に時雨の手を離そうとしなかった。

「こら、止めんかバサラ！」

命が式神を怒鳴りつけるとすんなりと手を離した。

「こんぐらいで許してやるか」

「バサラよー仕事じゃ、あ奴を吸い込め」

「おうよ、なかなかの大物みたいだが俺様にかかればどうってこつたない」

「時雨、わらわの後ろにマナを運んでやれ」

「ああ」

時雨は命に命じられマナを命の後ろに運こぼうとマナを抱きかかえた。

「時雨ちゃん、レディはやさしく扱いなさい」

「はいはい、言われなくても分かってるよ」

時雨はマナを丁重に命の後ろに運び、ゆっくり地面に下ろした。

「時雨、おぬしもわらわの後ろに居れ」

バサラは大口を開け大きく息を吸い込んだ。すると店内に散らばる物が見る見るうちに吸い込まれていった。その力は強大でついには悪魔までも吸い込もうとした。

悪魔は必死に抵抗する。しかし、悪魔の乗っていた狼があえ無く掃除機の中へ吸い込まれていった。

「反則技だよ……」

時雨が小さく呟いた。

掃除機は全てを吸い込んでしまいそうな勢いでどんどんいろんな物を吸い込んでいく。

悪魔は大剣を地面に刺し込み必死に抵抗しているが、身体が宙に浮き、悪魔は吸い込まれないように剣を強く握りしめる。

そして、そのまま三分の時間が過ぎた。

「粘るねえ、あの悪魔」

「仕方ないのお、バサラよ出力を上げよ」

吸い込む力が急に強くなった。

そして悪魔はついに剣ごと掃除機に吸い込まれてしまった。

呆気無い幕切れだった。

「ああん、アンドラスちゃんはやられるなんて信じられないわ

あん」

「観念せい、マナよ」

「観念？ あたしはまだ負けてないわよおん」

マナは自らの足で“立ち上がった”。

「あつ……」

時雨の表情が凍りつく。マナのおでこに張られていたハズの札が無いのだ。

「二度目は少しは早く解けたわおん」

マナの手にはすでに大鎌が握られ戦闘態勢を取っていた。

「本番はこれからよおん」

凍り付いていたハズの時雨の口元が少し緩んだ。そして、命も冷たい微笑を浮かべた。

「あらん、お二人とも笑ったりしてどうしたのおん？」

「気づかんのか？」

「ほら、自分のおしりのあたりを見てごらんよ」

「えっ、何？ ……!? ……いや〜ん」

マナのスカートの裾から、くにゅくにゅと動く何か黒く長い

モノが出ていた。

マナはそれに驚き後ろを振り返ると、そこには光が輝く満月が地面を照らすために顔を出していた。

「今夜は満月の晩だったの!？」

「君の負けだよマナ」

マナの身体には次々と異変が起きていく。

頭にはいつの間にか黒い猫のような耳が飛び出していて、身体は徐々に黒い毛に包まれていく。

「にゃ〜ん」

ついにはマナの身体は縮んでいき、そのまま黒猫の姿になってしまった。

「マナって、満月の光を浴びると、黒猫になっちゃうんだよね」

「にゃ〜ん」

「はあ、これで安心して家に帰れる」

「そうじゃな、帰路に着くとするか」

時雨はマナを抱きかかえ家に帰るために足を動かした。命もそれに続いた……のだが、二人の足が不意に止まった。そして、二人同時に同じ言葉を呟いた。

「あっ……」

二人の目線の先には元エレベーターがあった。その元エレベーターは扉を開けたり閉めたりを繰り返している。

時雨はロボットダンスのような動きで命の方を振り向いた。

「ねえ、ここってさあ、タワー登るとき途中までは階段でも来

れるけど最上階のここってエレベーターでしか来れないよね？」

最後の『よね？』には必要以上に力がこもっている。

「さようじゃ」

「非常階段とかはあるよね？」

「マナと殺りあつた時、壊してしもうた」

「さっきの”神隠し”は使えないの？」

「力はもう使い果たしてしもうた」

「あははははは……はあ」

時雨は無表情のまま心の無い笑いをして、ため息をついた。

一月中旬の帝都の夜はまだまだ冬の寒さが厳しかった……。

事件を聞きつけ駆けつけた帝都警察は、エレベーターが壊れている上に命が外に被害が及ばないようにいつの間にか張っておいた結界のせいでヘリコプターでも入れず、結局三人が地に足を付くことができたには次の日の朝方のことだった。

マナが人間の姿に戻るのを待ち、魔法で建物、その他諸々を元通りに復元をして下に降りることができたのだった。

なお、マナと命の力により関係者の記憶は改ざんされ、この事件は見事にもみ消され闇の中へ葬り去られたのだった。

しかし、時雨とマナの追いかけてただけはTVで中継されたために消せない事実として残ってしまったらしい。

邪神伝

今、テレビや新聞などのメディアで帝都都民の関心の的の一つに挙げられるものといえば、帝都の地下で発見された古代遺跡ではないだろうか。

発見から一ヶ月ほど経つこの遺跡のニュースは、一時は話題性を失い身を潜めていたが、ここ最近また世間を賑わすようになった。それはなぜか？

それは、遺跡の調査に向かった考古学者やトラブルシューターが相次いで行方不明になり、その人々を捜索するために派遣された人探しの専門家のマンサーチャーまでもが行方不明になつてしまつたからだ。

この事件を受けて報道各社はこぞつてこのニュースを取り上げ、遺跡での取材合戦が繰り広げられることになつたのだが、今度はその報道陣の中でも行方不明者が出るという最悪の事態になつてしまつた。

しかし、行方不明者が出れば出るほど帝都都民の関心は高まり、それに比例して報道各社の取材合戦は熱を帯びる結果となつていった。

時雨はこの日、こたつで“独り”お茶とみかんをしながらTVで古代遺跡関連のニュースを見ていた。

「ああ、このニューズまたやってるんだ。ふくん、今度は人がいなくなっちゃったのか」

「行方不明になっちゃった人の数はもう一〇〇人以上になるそうよおん」

「!？」

びっくりしたお茶を片手に時雨は凄いい勢いで後ろを振り返った。

「はあ、い時雨ちゃん、お元気してた？」

時雨の目の前には、スラリと伸びた美脚を見せ付けるかのようモデル立ちをした今日も派手な法衣を着たマナが立っていた。

派手な法衣といっても彼女曰く、魔導士の”正装”服らしいのだが、時雨は”盛装”服でしょ、といつも思っていた。しかし、それを口にしたことは一度も無い。もちろん理由はあとが恐いからで、その思いは一生時雨の口からは発せられることはないだろう。

「どっから入って来たの？」

時雨はもつともな質問をマナに投げかけてみた。

「レポートして来たのよおん」

「こういうのって不法侵入っていうんじゃないの？」

「堅いことはいいつこなしよおん」

時雨の視線がマナの足元に注目し、それから彼は茶を少し喉に通して言った。

「でさあ、何しに来たの”土足”で？」

「帝都地下の遺跡に今から行くわよおん」

「はっ!？」

マナの言葉に時雨は驚きと戸惑いを隠せなかった。

「ちゃんと聞こえてたでしょ、早く仕度して行くわよおん」

「訳不明、なに言ってるの？」

いきなり現れて遺跡に行くと言われても、時雨にはその訳も理由も全くわからない。

それにマナが土足で現れたのはそれほどまでの急ぎの用事なのかと時雨は少し考えたが、マナは平気で人の家に土足で上がるタイプの人間なのだと言論付けた。

腕組みをしたマナは時雨を促すようにこう言った。

「紅葉ちゃんにも行ってみろって言われてたでしょ」

「そういえばそんな事もあったような、なかったような……ってなんでそんな事知ってるの!？」

確かに時雨には紅葉に遺跡に行ってみると言われたような記憶がある。だが、そのなことよりもなぜマナがそのことを知っているのかということのほうが時雨にとって不思議でたまらなかつた。

お茶を飲みながら時雨が疑問に首を傾げていると、突然どこからか男の声が聞こえた。

「私が彼女に伝えたからだ」

「!？」

時雨がバツと前を振り向くとそこには紅葉の姿があつた。

「何で紅葉までいるの……いや、それよりもどこから入って来

たの？」

「それは、国家機密の研究に関わる事なので述べる事はできません」

「はあ、意味不明だよ」

頭を抱えて悩む時雨をマナは彼の襟首を掴んでこたつから引き出そうとする。

「時雨ちゃん、早くいくわよおん」

「ま、待つてよ、せめて剥きかけのみかんを食べてから」

時雨はこたつにしがみ付き必死に抵抗する。

「寒いから出たくないというのが本音であるっ」

紅葉の鋭い指摘が時雨の胸に突き刺さる。

「ドキツ……違うよ、起きたばかりでいきなり出かけるなんて言われたから」

その言葉にマナの鋭い指摘が直ぐに入る。

「起きたばかりって、今午後の三時よおん」

それに続いて紅葉が皮肉を少し込めていう。

「そうか、寒いという理由の他に低血圧というのもあるわけだな」

「それだけじゃないわ、めんどくさがりっていうのもだわおん」

「なんだよ二人していきなり人の家に押し掛けてきて出かけるとか言っついていきなりボクの事外に連れ出そうとしたりなんかしちゃってさあ人の都合なんて二人とも生まれてから今まで考えた事ないでしょいつもそうなんだボクのこと散々振り回したあ

げく……ああーっもういいよ!!」

時雨は今の言葉を息継ぎ無しで不満をたつぷり込めて言った。
が紅葉とマナにあっさりと返されてしまった。

「気が済んだが？」

「じゃあ早く出かけるわよあん」

「はあ、もういいよ」

時雨の全身の力が一気にガクンと抜けた。

時雨は結局二人に“強引”に連れられて古代遺跡の入り口まで来てしまった。

遺跡の入り口の前には学者や警察、そして報道陣でこったが
えしている。

「はあ……」

時雨の気分はかなりブルーだった。

「何でボクがここにこなくちゃいけないの？」

肩を落とし暗い顔をして時雨は紅葉を上目遣いで見た。そんな時雨を紅葉は冷ややかな目で見てこう言った。

「この遺跡で行方不明者が出たというニュースは知っている
な」

「ああ」

時雨は気の無い返事を返した。

「昨日付けで私がこの調査の総指揮をすることになった」

「それで、何でボクが呼ばれなきゃいけないのさ」

マナが突然二人の会話の間に割り込んできた。

「あたしと時雨ちゃんは紅葉ちゃんのサポート役として雇われたのよおん」

「雇われたって、紅葉がボクらを雇ったの？」

「推薦したのは私だが、雇い主は別にいる」

「誰？」

「帝都政府だ」

時雨の顔つきが険しくなる。

理由はわからないが時雨は帝都政府のことをあまり良く思っていないらしい。

「まあ、古代遺跡の調査となれば当然だろうね、ってそんな話ボク聞いてないよ」

「今、初めて言った」

今の紅葉の言い草は「それがどうかしたか？」という感じだった。やはり紅葉は自己中心的で他人の都合など考えていいないうのだ。

「はあ……」

ため息を吐き、いつものことだと時雨は諦めることにした。遺跡の入り口はビルとビルとの間にある空き地にある。

新たにここに建てられる筈であったビルは地下一〇階地上二階建てのビルであったため、工事の際地面を深く掘り進めなくてはならず、その際にこの地下遺跡を発見するという結果に繋がったのだった。この地下遺跡は外界との空間軸が異なっているように外層面積に比べ中は異常なまでに広いとの専門家たちの報告結果が出されている。

時雨たちは簡易巨大エレベーターに揺られていた。身体が小刻みに揺れ、下へと降って行く。

ガタンという音を立てエレベーターが地面に到着した。

「おおっと」

時雨があられない声を出しながらバランスを崩した。

「行くぞ」

紅葉は時雨のことなど構いもせず足早に歩いて行ってしまった。

「紅葉ちゃん、待ってえん」

マナは空を飛んで彼を追いかけた。

彼女は急いでいる時などは自らの足を使わず空を飛んで目的地に行く。彼女曰くそっちの方が早くて疲れないかららしいのだが、普通は空を飛ぶというのは魔力を多く消費するため大きな疲労を伴うものであり、普通の魔導士ならば足を使うと疲れからなどという理由でこの術は使わない。そのような理由で彼女がこの術を使えるのは彼女の持つ底を知らぬ魔力のおかげであって、彼女だからできる芸当と言える。

遺跡の中は迷路のように道が入り組んでいて、トラップも多く仕掛けられている。トラップが仕掛けられているということ、この場所に人を近づけない為と考えるのが必然的だろう。では、なぜ人を近づけないようにしているのか、遺跡には何かあるというのか？

遺跡の中はほのかな光で溢れている。それは遺跡自体が微か

な光を放っているためである。この遺跡にある壁や天上などはそれ自体が光っている、その理由は壁などに使われている岩に含まれる成分がこの遺跡全体に発せられている強い磁場と反応して輝いているのだと遺跡に入った専門家たちは言っている。

少し遺跡の奥へと進んだ所でマナはある物を見つけた。

「あらあん、こんなところにも押しても下さいつて感じのボタンが」

そう言いながらマナは壁に付いているボタンを押そうとする。

「ま、待って！」

時雨が急いで止めに入ろうとするが間に合わなかった。

「えいつ」

マナの人差し指がボタンを強く押した。辺りが静まり返る。

。

「あらん、なにも起こらないわ」

マナの言葉に対して紅葉は当たり前だというような顔をして、眉をぴくりと上げて言った。

「入り口付近のトラップの大半はすでに解除済みだ」

「はあ、よかった」

時雨は安堵のため息を吐いた。しかし、マナは少し不満そうだ。

「つまんないわねえん、あ〜んなことやこ〜んなことが起こるの期待してたのにい〜」

「期待しないでよそんな事……っあれ？」

時雨はある異変に気付いて辺りを見回す。

「どうしたのあん？」

マナはまだ異変に気付いていないらしい。

「紅葉がない」

「ウソあん!？」

紅葉の姿が忽然と消えてしまった。二人は辺りを見回すが紅葉の姿はどこにもない。紅葉は何処へ消えてしまったのだろうか？

「これが今ここで流行ってる神隠しってやつかしらあん」

マナの言い草は明らかに他人事ごとだった。紅葉のことなどどうでもいいのか、それともただ単に自己中心的なだけなのだろうか？

ため息を吐きながら時雨は困った表情をしてマナを見つめた。

「マナが変なボタン押すから」

「紅葉ちゃんが入り口付近のトラップは解除してあるって言うてたじゃない」

そう言うてマナは再びボタンを押しした。

「ほら、何も起こらないじゃない」

「だからって、そう何度もボタンをむやみに押すのやめてよ。もし何か起こって……」

話の途中で時雨の姿がマナの前から忽然と消えてしまった。

「あつ……時間差だったのねえん」

少し考えた後マナはボタンをもう一度押してみることにした。
「ぼちつと」

時間差でマナの姿がその場からパツと消えた。

マナは何も無い小部屋の中央に立っていた。

「どうやらあのトラップは人をあの場所とは別の場所にテレポーションさせてしまうものらしい。」

「あらあん、みんなないわねえん」

マナは辺りをぐるりと見回した。

部屋には何も無い、窓もなければドアもない、四方は壁で囲まれており、本当に何も無かった。

「出口がないわねえん、ということは、他のみんなは別の場所に飛ばされたって事かしらあん」

そう、あのトラップは一度に一人ずつ別々の場所にテレポーターさせることにより後から追おうとした者を全員はぐれさせるというじつに巧妙で手の込んだ意地の悪いトラップであったのだ。

少し考えたマナは壁を叩きながら移動して出口が無いか調べたが見つからなかった。そこで仕方なく彼女は魔法で壁に穴を開けることにした。

彼女は右手を壁に向けると手のひらから魔弾と呼ばれる魔力を結晶化したものを発射した。

放たれた光が壁に当たると同時に厚い岩でできた壁は音を立って崩れ落ち、直径三メートルの穴がぼっかりと口を開くと、彼女はそこから部屋の外へと移動した。

薄暗い廊下を歩く時雨の肩はぐったりとたれ、足取りはとて

も重く、それを反映するように表情は今にも自殺してしまいうなぐらい憂鬱な顔をしていた。

「はあ、だから押すなつて言つたのに」

歩いてても歩いてても何処までも何処までも続く直線の廊下を彼はただひたすらに歩いてた。

「みんなどこにいるんだろう」

彼の右手にはひも状の物が握られており、その先端にはひし形の宝石らしき物がぶら下がっている。これは彼の得意とするダウジングである。探しているモノに反応して宝石がその場所を指し示してくれるというものなのだ。

「どうも反応が鈍いな、この遺跡のせいかな」

この遺跡の調査記録によると方位磁石や連絡機器は特殊な電波が出ているため使えないとの報告がある。

「せめて、この真つ直ぐな道を出たいなあ」

彼は結局かれこれ二時間ほどこの真つ直ぐな道を歩いてた。

「はあ、どこまで続くんだろこの道、こつちの方もぜんぜん反応してくれないし」

前方の道は薄暗く、どこまで続いているのか見当もつかない。彼はひもにぶら下がった宝石を見た。

「!!!」

時雨の頭にある考えが浮かんだ。しかし、それは今までここまで歩いてきたという努力を全て水の泡にする恐ろしい考えであつた。だが彼はそれを実行に移した。

時雨は勢いよく後ろを振り向いた。

「あつ……やっぱり」

振り向いた先にはなんと、五メートル先くらいのところ鉄の扉があった。

時雨は二時間以上もの間、同じ道を永遠と歩かされてしまうループトラップとは知らずに歩かされていたのだった。

「はあ……早く後る振り返ればよかった」

時雨はため息を吐くとドアを開け中に入って行った。

静かな石畳の廊下に響き渡る足音。

「入り口付近にまだ解除していない、トラップがあったとはな」

紅葉の顔つきは普段と何ら変わらない表情をしていたが、心の奥底では怒りの念で憤怒していた。彼は常に冷静沈着で顔立ちも良く女性には比較的やさしいため、女生徒に大変人気のある帝都大学のプロフェッサーのだが、実は非常に気性の荒い人物であったありるのである。そんな彼を知っているのは極少数で、その中の一人の時雨は時折彼の無鉄砲な怒りの被害者であつたりしたのだった。

「……微かだが血の臭いがするな」

紅葉が辺りを見回すとあるものが彼の目に留まった。そこには、八つ裂きにされ内臓器の飛び出した死体が転がっていた。

「一つ、二つ……全部で五体か」

紅葉は死体に近づきしゃがみ込むと物色を始めた。

彼の手には常に白い手袋がはめられていて彼の手を直接汚す

ことはない。その手袋をはめた手が死体を隈なく調べつくす。
「歯形と爪痕、だいぶ喰われてしまっているな……獣の仕業か？」

移動し他の死体もくまなく調べる。

「やはり、同じ歯形と爪痕か……ん？」

紅葉は死体の手に握られている何かを発見した。

「鍵……？」

紅葉はその鍵を死体の手から取ると自分の白衣のポケットに入れた。

死体に用の無くなった彼は立ち上がると足早にこの場を後にした。

少し進んだ所で紅葉の足が不意に止まった。

「また、死体か……」

そこには三体の死体があった。その死体はまたも八つ裂きになれ内臓器が飛び出していた。

紅葉はしゃがみ込みまた死体の物色を始めた。

「同じ奴の仕業か、しかも今度は血がまだ温かい……獲物が近くに
いる可能性が高いな」

案の定その獲物はすぐに紅葉の前に姿を現した。

「ほほう、四つ足か」

紅葉の前に姿を現したのは全長三メートルを超える大狼で、その身体は血で全身が紅く染まっていた。

狼は紅葉を見るや否や血に染まった毛をなびかせながらいきなり襲ってきた。

無表情の紅葉は白衣の内側からフラスコを取り出すと狼目掛けて投げつけた。しかし、フラスコは狼に交わされ床に落ちてしまった。が、紅葉はそれも計算に入れていた。床に落ちたフラスコは大爆発を起こし床に大きな穴を開け、狼にもダメージを与えた。

また攻撃をしようとフラスコを取り出す紅葉を見た狼は尻尾を巻いて逃げて行ってしまった。

「逃げられたか」

その言い方はまるで最初から逃げられることを予知していたかのような言い方だった。

紅葉が床を見ると、そこには廊下の奥へと続く血痕が地面にへばり付いていた。さっきの狼の血痕だ。紅葉の目的は最初からこれだったに違いない。

「追つてみるか」

紅葉は血痕に注意を払いながら廊下の奥へと歩き始めた。

「あらん、また見つけちゃったわあん」

マナははしゃぎながら壁に埋め込まれた宝石を取ろうとしていた。

宝石は壁に描かれた魔方陣の中心に埋め込まれている。この宝石は魔石といって、石の中にいるいろいろな魔法や魔力を封じ込めたものである。

マナは軽快なステップで山済みにされた分厚い本の一冊を手にとった。

「あらん、こつちには魔導書が」

マナの取った本は魔導書であった。そして、彼女は本の表紙に付いた埃をふうーっと息を吹きかけ取ると、本をパラパラとめくった。

「見た事のない文字ね、まあいいわ家に帰ってゆっくり解読しましよ」

今彼女がいる場所はこの遺跡の宝物庫らしい。

「もう、全部いただいたかしら？」

マナはそう言うのと辺りを見回した。その目線の先には 部屋には何も無かった。そう、マナが全て回収してしまったのだ。しかし、マナは何も持っていない、手ぶらだ。回収した物は何処にいつてしまったのだろうか？ そうマナは手から突然大鎌を出したり出来るように物体を一時的に別空間に保管しておくことのできる術を心得ていたのだ。今回もそれを使った。

一息付いたマナは満足げな顔をしてこの部屋を後にした。

部屋の外に出ると道が三方向に分かれていた。どの道を進むべきか迷うところだ。

「さつきは右から来たから、今度は真っ直ぐ行ってみようかしらあん」

真っ直ぐの道を選び、彼女が歩き始めてから五分くらいたった頃、彼女の目にあるモノが飛び込んできた。

「あらん、これはお激しいこと」

マナの目に飛び込んできたものは死体の山であった。それも八つ裂きにされ内臓器が飛び出し辺りに散乱している。紅葉

の時と全く同じ死体だ。しかし、マナはそんなことなど知る余地もない。

死体のそばにはビデオカメラが落ちている。どうやらこの死体は報道人のものらしい。

「普通なら、『このカメラに何か事件に関する証拠が写ってるかもしれない』とか言って、調べるんだろうけど、あたし機械にはうといのよね」

マナはそう言うとは事も無かったように歩き出した。

「まあ何か出たら、その時はその時って感じよねえ」

彼女の神経は並みの人間とは根本的に違うのかもしれない。

この男は未だに道に迷っていた。迷っているという自覚の無い二人とはえらい違いだ。

「はあ、今ボクはどこら辺を歩いてるんだろ」

ダウジングがこの場所ではあまり役に立たないことを悟った時雨は作戦を替え、右手を壁につけながら歩くことにした。その甲斐があつたの無かつたのか、彼は人影を見つけることができた。

その人影に駆け寄つた時雨であつたのだが、その人影は彼ら全く知らない人物であつた。

その人物は白い薄布でできたワンピース型の民族衣装のようなものを着た若い女性で、悲痛な顔をして右足を抑え、床にうずくまっていた。

時雨はその女性に近づき声をかけた。

「どうしたんですか？」

時雨に声をかけられた女性は、そこで初めて時雨の存在に気づき、はっとした表情を浮かべた。

「どうしたんですか？」

時雨はもう一度女性に問い掛けた。

「足を怪我してしまつて……」

声には苦痛が混じっているが、澄んだ綺麗な声の持ち主だ。

時雨は女性が手で抑えている足を見た。

手の隙間から血が滲み出していて、赤い血が彼女の白い肌を紅く染めている。

「ちよつと、手を退けてもらえます」

時雨がそう言うと、女性は血で紅く染まってしまったていた細い手を退けた。そこには焼け焦げたような深い傷があった。

その傷を見た時雨は思わず顔をしかめる。

「ひどいなあ……」

そう言つて時雨はコートのポケットに手をつ突っ込むと、小さな小瓶を取り出した。

「これ、塗り薬なんですけど、すごく効く代わりにすごく染みるんで我慢してくださいね」

時雨は女性に微笑みかけた。その微笑みはまるで天使の笑顔のようであった。この顔で見つめられたら女性はイチコロだろう。

女性が小さく頷くと時雨は女性の足に薬をやさしく塗り始めた。女性の顔が苦痛で歪む。

「だいじょうぶですか？」

女性はまた小さく頷いた。

薬を塗り終えた時雨は次に、コートポケットから包帯を取り出すと女性の足に巻き、そしてきつく縛った。

「ありがとうございました」

女性は時雨に対してお礼を言った。

「ああそうだ、いろいろと聞きたいことがあるんだけど」

「なんででしょうか？」

「そうだなあ、まず名前。ボクの名前は時雨、君の名前は？」

「……………」

女性は急に無言になり黙り込んでしまった。

「どうしたの？」

「覚えていなくて」

「じゃあどうしてこの遺跡にいるのかは覚えてる？」

女性は首を横に振った。

「そう……じゃあ、その傷はどうしたの？」

「魔物に襲われて」

「どんな魔物だった？」

「白くて、火を噴く魔物でした」

「ふーん」

「あなたはこうしてこの遺跡に来たのですか？」

今度は女性が時雨の質問をしてきた。

「えっ、ボク？ ……ボクはね、この遺跡で行方不明になった

人たちを探しに来ただけだ」

「遺跡を荒らしに来たのではないのですね？」

「うん、そうだけど……？」

時雨はいぶし気な表情をしながらうなずいたあと、少し間を置いて納得したかのように呟いた。

「まあいいか……」

「どうしたのですか？」

「あ、うん、なんでもないよ、あのさあ、出口とか……わから
ないよね。ボクは取り合えず向こうから来たんだけど」

時雨は自分の来た方向を指差し、ふと女性の方を振り返ると
そこには女性の姿はなかった。

「あれ？」

時雨は女性を探そうと駆け出した。すると、前方に人影が
。

「あれ？」

連続して驚かされた時雨はそう一言呟くと足を止めてしまっ
た。

人影は時雨の存在に気づいたらしく時雨に向かって飛んでき
た。

「時雨ちゃん、逢いたかったわぁん」

派手な衣装着た人物　マナは時雨に抱きつきそのまま押し
倒してしまった。

「……重い」

バシッ！！　時雨はマナの強烈な平手打ちを喰らってしまっ
た。

「痛っ！」

類に手をやる時雨に対してマナが激怒した。

「レディに向かつて重いだなんて言うなんてデリカシーのかけらもないわよあんな、以後気をつけなさい！」

「だってホントに重……」

何かを言おうとした時雨の目の前には平手打ちの構えをしたマナが立っていた。それを見た時雨は蒼い顔をして思わず身動きを止めた。

「時雨ちゃん、今なんて言おうとしたの？」

「お、おも、思わず、マナに抱きつかれてビックリしちゃたなあ、あははは」

苦しい言い訳だった。

「まあ、いいわあんな、ゆるしてアゲル」

「あ、ありがとうございますマナ様」

時雨の顔は少し引きつっていた。そして、彼は直ぐに話題を変えようとした。

「と、ところで白い民族衣装みたいなもの着た若い女性見なかった？」

「見てないわよ」

「おかしいなあ」

「その女性がどうかしたのあんな」

「さつき、向こうで会ったんだけど、その人足に怪我してて、手当てしてあげたらいつの間にか居なくなっちゃって。そっちは何か変わったことあった？」

「向こう側で八つ裂きにされた死体を見たわぁん、それとビデオカメラが落ちてたわぁん」

「そのカメラに何か写ってるかも、見に行こう」

二人はその場所に移動することにした。

程なくして二人はあの場所に着いた。そして、無残な光景を目の当たりにした時雨はこう言った。

「すごい大惨事って感じだなあ」

間延びした時雨の言い方からはあまり大惨事という感じは受け取れない。やはり、時雨の神経は一般人の感覚からズレているのかもしれない。

マナが地面に落ちているカメラに向かって指を指した。

「そこに落ちてるのがそのカメラよぉん」

時雨はしゃがみ込んでそのカメラ手に取って見てみた。

「小型のハンディーカムか、テレビシヨッピングで見たことあるよ。たしかその場で撮った映像が見れるやつだったと思ったけど……壊れてないみたいだし見れそうだね」

「じゃ早く見てみましょ」

「うん、見たいのは山々なんだけど、ボク機械にはうとくて」

時雨はそう言いながら、乾いた笑いを発した。

マナはガクッと肩を落とし細い目をして遠くを見つめると、ある人物のことを思い出した。

「……はあ、こんな時に紅葉ちゃんがいてくれたら」

獣の血痕を頼りに歩いていた紅葉だが、その血痕もいつしか

消えてしまっていた。

「逃がしたが……まあ良い、その代わりにこんな所に出られたのだから」

紅葉は目の前にある石でできたシンプルな作りの宮殿を微笑みながら一望した。

石でできた階段を上り、宮殿に入ろうとした彼の目に、門番のように気高く立っている石の彫像が映し出された。

「あの狼に似ているな。ここの守り神か何かだったのか……」

紅葉の行く手に大きな門が立ちはだかった。

その門には鍵穴があり、もしやと思った紅葉はさつき回収した鍵を差し込んでみた。すると門は紅葉の手を借りずに自動的に左右に開いた。

紅葉は門を潜り宮殿の奥へと進んで行った。

宮殿の内部は大きな柱が何本か立っていて、奥には祭壇があり、そこには杯が祭られている。シンプルな造りで静かで荘厳な雰囲気を感じ取れるのだが、それとは別に何か殺伐とした空気が充満していた。

祭壇に近づいた紅葉は杯に興味を何故かそそられた。そして、それを手に取りまじまじと眺めた。

「聖杯か何かの類か……ん？」

紅葉が杯の底を眺めていると、底の方から紅い液体がふつつと湧き出してきた。

「血の香がする、血の湧き出る杯か。邪教崇拜の神殿か……な、

なんだ!？」

紅葉の左手が突如自分の意思とは関係なく勝手に動き始めた!
「くっ、なんだ、これは!？」

杯を持った左手は、紅く泡を吐く液体を無理やり紅葉に飲ませようとした。

紅葉は必死に抵抗するが、やがて彼の身体の自由は全てきかなくなり、ついには紅葉は杯の中身を全て飲み干してしまった。

「私とした事が……」

白い麗人が揺らめいた。

ボタン! 紅葉の意識は薄れていき、彼は身体は床に倒れ込んでしまった。

ハンディーカムを見下げながら腕組みをする時雨は少し考えた後、ある決断をした。

「見れないんじゃないから、場所を移動しよ」

「そうねえん、紅葉ちゃんを探しに行きましょう」

あっさり二人はカメラに写った映像を見ることを断念し、紅葉を探しに行くことにした。

紅葉を探し歩くこと数分、二人は石でできた宮殿を一望していた。

時雨は目だけを軽く動かし宮殿を見回すと深い息をついた。

「何か、この遺跡の最重要ポイントって感じだね」

「もしかしたら、この中に紅葉ちゃんがいるかもしれないわね

えん」

「だといいけど」

この時、時雨には何だかわからないが、もやもやした嫌な感じのモノが胸の中で増幅していた。

二人が石段を一步一步上がって行くと、そこには大きな門があり、その左脇には大鷲、右脇には大狼の石像があった。

時雨の足が扉の前で止まる。

「扉の向こうに人の気配がする」

「紅葉ちゃんかしらあん」

時雨は扉を開けようと力いっぱい押ししてみた。しかし、扉はびくりとも動かない。

「開かないよ、この扉」

「時雨ちゃんここ」

マナは扉に付いている鍵穴を指差した。

「鍵が必要なのかあ」

「時雨ちゃん、ちよつと退いて」

時雨が扉から離れると、マナは両手に魔力をいっばいに溜め扉に向けて撃ち放った。すると、扉に当たった魔弾はスポンジに垂らした水のように扉に吸収され消えてしまった。

扉に魔弾が吸収されてしまったのを見て、マナは一直線に扉に向かって行って、扉をコンコンと叩いてみた。

「……オリハルコンでできてるみたいねえん」

オリハルコンとは錬金術でのみ作り出すことのできる金属で、純粋な状態では金よりも軟らかく、合金にするとプラチナより

も硬くなり、ひんやりと冷たいのだが、金属全体からオーラの
ような揺らぎが立ち昇り、軽さはアルミよりも軽く、他にも色
々な性質を持ち合わせており魔道具としてよく持ち要られるの
だが、その性質の中に魔法を無効にしてしまうという性質があ
り、マナの魔法が扉に吸収されてしまったのはこのためであ
る。

時雨は石段に座り込んで、両頬に手を突いた。

「鍵見つけないかぁいけなないのかぁ」

時雨はコートのポケットに手を突っ込むと緑茶のペットボト
ルとパツケージングされた塩せんべえを取り出した。

それを見たマナはおなかに手を当てて、何かを思うように上
を見上げた。

「そろそろダイナーの時間ねえん」

マナはそう言うのとダイナーセットを魔法で異空間から取り出
した。

マナの出したダイナーセットのセット内容は、テーブル（こ
のテーブルには白いテーブルクロスがかけられている）、オー
トクチュールっぽい豪華な椅子、銀食器（皿は料理と一緒に出
すのでこの場ではまだ出ていない）。

マナは腰に手を当てて何かに対して頷くと、椅子に深く腰掛
けた。

「はぁ、立ちっぱなしで疲れたわぁん。まずは食前酒を頂こう
かしらぁん」

マナはテーブルの上にワイングラスと赤ワインを出した。

それを見ていた時雨は自分の持っているお茶とせんべえを見つめ、とてもひもじい気分なり、そして、マナの方を振り向きマナに夕食を食べさせてもらえないかとお願いをしてみた。

「あ、あのさあ、ボクも夕食まだなんで、ご一緒させてもらえないかな？」

マナは下民でも見るかのように見下した態度で時雨を見てこう言い放った。

「『マナ様、どうかディナーを食べさせてください、お願いします』は？」

この言葉を聞いた時雨は一瞬ムツとしたのだが、自分のお腹が“ぐぐ”と正直に鳴いたのを聞いてその感情を抑え、マナに願いをこうた。

「マナ様、どうかこのとてもひもじい思いをしているボクにディナーを食べさせてください、心からお願ひいたします」

最後に時雨は必死で満面の笑みを作りニコツとマナに微笑みかけた。

「まあ、いいわあん、そこにお座りになつてえん」

マナが魔法で“普通”の椅子を出すと時雨はそこに着席した。こうして、二人はディナーを摂ることにした。

二人がメインディッシュに口をつけようとしたとき、邪悪な殺気が辺りにたち込めた。

「敵かしらあん」

「まだ、ディナー食べてないのに」

二人の前に姿を現したのは白銀の毛を持つ大狼だった。

「あれがバラバラ殺人の犯人かしらぁん」

「食事は中断みたいだね。……ん？」

時雨は何かに気づき狼の首元を指差した。

「あれ、見てよ」

「なぁに？」

狼の首元には鍵がぶら下がっていた。

「あらん、あの“ネックレス”欲しいわぁん」

「鍵の方から歩いて来てくれたみたいだね」

「じゃあ、時雨ちゃん、食後のいい運動頑張ってきてねえん」

「マナは？」

「食後すぐの運動って身体に悪いのよぉん」

「何か言ってる事矛盾してるよ」

「あらん。そぉお？」

マナの言い方は明きかに惚けていた。

「ほらん、お相手がこちらに向かって来たわよぉん」

マナの言葉の通り、狼はその牙を時雨たちに向けて来ていた。

「はぁ、食後の運動か……」

ため息を吐きながらも、狼の相手をしようとしている。そんなところに、彼らしさが出ていると言ってもいいだろう。

時雨はコートポケットからビームサーベルを取り出し、そのスイッチを入れた。

すると、辺りは一瞬まばゆい光に包まれた。その光によって、狼が一瞬怯んだところに時雨の剣技が放たれる。

地面を蹴り上げ移動し、時雨の剣が刹那の瞬間に狼に突き刺

さる。

時雨が剣を一気に抜くと同時に狼の死の咆哮が辺りにこだまする。そして、狼はぴくりとも動かなくなった。

勝負は一瞬の呆気ないものであった。その為なのかどうか、狼を仕留めた時雨の顔はとても不服そうな顔をしていた。

「どうしたの時雨ちゃん？」

不思議に思ったマナが時雨に問い掛けてみたが、時雨が答えを返すまでには少しの間があった。

「この狼が足に巻いてる包帯、ボクのだ……」

「えっ………どうということ!？」

思わず紅茶を飲もうとするマナの手が途中で止まる。

「この遺跡であった女性には巻いてあげた覚えはあるけど、狼に巻いてあげてはない」

「その女性がその狼って事？」

「かも知れない……!？」

時雨が狼を見つめていると、その狼が突如空気に溶けてしまったかのごとく、跡形もなく姿を消してしまった。狼がいた場所に残っていたのは、包帯と鍵だけだった。

「消えた」

時雨はそう小さく呟くと、鍵が拾い上げポケットに突っ込んだ。

「この鍵で開くといいいけどなあ」

時雨は自分の席に戻ると深くため息をついた。

そして、マナと時雨はティータイムを済ますと鍵を試してみ

ることみるした。

しかし、この状況下でのん気にテイ・タイムをする二人の度胸の大きさといったら帝都でも三本の指に入るのではないだろうか。その三本指の中にはもちろんあの紅葉も含まれている。

時雨はオリハルコン製扉の前に立つと、コートポケットに手を探るように突っ込み鍵を取り出すと、鍵穴に挿し込み回してみた。すると、扉はカチャという音を立て、人の手を借りることなく左右にゆっくりと自動的に開いた。

宮殿の中は広く質素な作りになっており、静寂に包み込まれている。

二人は宮殿の奥へと進んで行き、そこで待ち構えていた男を見た時雨は思わず叫んだ。

「紅葉！」

紅葉と呼ばれた男はゆっくりと時雨たちのもとへ近づいてきて、不敵な笑みを浮かべながら自分の顔を指差しこう言った。

「やあ、君らはこの男の知り合いかね？」

この言葉に二人は戸惑いを覚えざる得なかった。

時雨が怪訝そうな顔をして呟く。

「気配が違う」

「外は紅葉ちゃんでも中が違うみたいねえん」

そう、二人が感じた通り、彼は紅葉であって、紅葉ではないモノだった。

「その通りだ、私は君らの知っている男ではもうない」

男の言葉で時雨の気配が一瞬にして冷たく鋭いものに転じた。普段の時雨からは決して想像できぬものだ。

「どういうことだ？」

「私の名はアポリオン、この宮殿の主だ」

「そのお前が何で紅葉の身体をしてるんだよ」

「私は実体を持たぬ、それゆえ器が必要なのだよ、おわかりになられたか？」

「わかった。じゃあその身体返してもらおうよ」

「ふははは……」

アポリオンは突然大声で笑い声を発して直ぐに言葉を続けた。

「それはできんな」

「何でなのおん」

「私は実体がなければ自由に動くことさえままならぬのでな、この身体はもう少し借りておこう」

「駄目だ」

時雨が間入れず返した。その言葉には鋭さと冷たさが混じっていた。しかし、相手はそれに動じる様子もない。

「だが、キサマらは私をこの身体から追い出す術知らぬであるう？」

「おまえを動けなくした後でゆっくり考える。という訳でマナまかせた」

時雨はマナの肩を軽く叩いた。

「何であたしなのおん」

「だって、ボクには何にもできないもん」

時雨の意見はもつともだった。時雨は肉弾戦はできても、相手の動きを封じる術やましてやアポリオンを紅葉の身体から追いつけず術などまったくもつて知るはずがない、ここはマナに任せるのが得策といえよう。

「しょうがないわねえん」

とマナが言った瞬間、彼女の手から魔弾がいきなりアポリオン目掛けて放たれた。不意打ちである。

魔弾の直撃を受けたアポリオンはよろけて床に膝を突き、マナを凄いい形相で睨み付けた。

「小娘の分際でよくも！！」

一瞬目の前で起きた光景に唖然とさせられてしまった時雨は気を取り戻し、マナに対して罵倒を浴びせた。

「何すんだよマナ、時雨が死んだらどうすんの！」

「だってしょうがないじゃない、相手を弱らせた方が術を掛けやすいんだもの」

それは正しい発言なのかどうか時雨は考えたが、今ここで頼れるのはマナしかいなかった。

ゆっくりと立ち上がったアポリオンの瞳は真つ赤に燃えているようであった。アポリオンの内では憎悪の念がふつふつと湧き上がって来ている。

「不意打ちとは下卑たやり方をしてくれたな、キサマには今すぐ地獄の苦しみを味わわせてやるう」

そう言うとアポリオンは仁王立ちのポーズを取り、全身から邪気を放出し始めた。その邪気は瞬く間に宮殿全体に広がり、

周りの空気を全て包み込んだ。邪気は目で見えるものではないが、常人であればすぐに吐き気を催したり、最悪の場合は発狂してそのまま死んでしまうだろう。しかし、ここにいる二人は顔色一つ変えず平然と立っている。そのことがこの二人と常人との格の違いを証明していた。

紅葉を救うにはまず、相手を弱らせる必要がある。それを聞いた時雨は仕方なく、紅葉と戦う道を選んだ。

「マナ、逆刃刀が何か出してくれない？」

マナは異空間の中から逆刃刀を出すと時雨に手渡した。

その光景を見ていたアポリオンは腕組みをすると渋い顔をした。

「二対一かフェアではないな」

そう言ったアポリオンが天に手を軽く掲げると、突如宙に直径二メートルほどの光の玉が出現し、その中から生まれ落ちるように女性が地面に落ち、ゆっくりと足を付けた。

女性を見た時雨の顔つきが一瞬にして変わった。

「君は……」

目の前に姿を現した女性は時雨が怪我の治療をしてあげた“あの女性”であった。

「男、君の相手は彼女にしてみらう」

女性はアポリオンに命じられると哀しげな表情を浮かべた。時雨は逆刃刀を構えた。そうビームサーベルを持っているのに関わらずあえて時雨は逆刃刀を構えたのだ。

一方マナとアポリオンの戦いはもうすでに始まり、凄まじい

ものだった。

「さあ早く地獄を見せてくれないかしらぁん」

マナの挑発でアポリオンの怒りは更にを増した。

「キサマの血を一滴残らず絞り採って殺してやるう」

アポリオンは地面から三〇センチメートルの所を宙に浮きながら、マナに襲い掛かった。その両手にはフラスコが握られている。

「紅葉ちゃんの技も自在に操れるってことかしらぁん」

マナの魔弾が連続して放たれる。魔弾は横に半円状に並び床一メートルの高さを凄いスピードでアポリオン目掛けて飛んで行った。

アポリオンがフラスコのコルクの蓋をびんと指で弾き飛ばすと、中から濃い霧が発生し、アポリオンの姿をすっぽりと隠してしまい、その霧に魔弾が直撃する。霧は引きちぎられたように拡散し消滅していく、しかしそこにはアポリオンの姿は無かった。

「後ろだ」

後ろで声がしたと思った刹那、マナの背中ではアポリオンの手刀によって切り裂かれ、血が服を紅く染めた。

マナは痛みをこらえ、瞬時に大鎌を取り出し後ろに大きく振りかぶった。

アポリオンは地面を強く蹴って、大きくジャンプしそれを交わすと、空中から下目掛けてフラスコを投げつけた。マナは瞬時に防護壁を張り巡らせる。彼女の身体は半円状の透明なカプ

セルみたいなのノに包まれ、フラスコがその防護壁に当たると大きな音を立て大爆発を起こした。立ち込める煙の中、マナは移動しアポリオンとの距離を取り、巨大な魔弾を発射した。

アポリオンはそれを避けられないと見てとって、マナと同じく魔弾を作り出し、それを飛ばして相殺を試みた。

魔弾と魔弾が互いにぶつかり合って、大爆発を起こした。その爆発は凄まじいもので、宮殿全体を大きく揺らすほどだった。

時雨と女性は対峙し互いに見詰め合った。

「あなたは、また私に剣を向けるのですね」

「また？」

時雨は彼女に聞き返した。しかし、時雨はその答えを知っていた。

「狼の姿の時、私はあなたに一度殺されました」

「やっぱりね。でも君は何者？」

「私はこの宮殿を守る者。それが私に与えられた絶対的使命感であり、破ることの出来ない絶対的な鉄の楔」

彼女の身体が少しずつ光を持ち始め白い服をゆらゆらと揺らめかせる。その光の中から直径二〇センチメートルほどの白く輝く光の玉がいくつもいくつも生まれ出るように飛び出し、彼女の身体の周りで停滞している。

その光の玉が三〇個ほど溜まった時、彼女はその玉を一気に解き放った。

光の玉は水の玉のように揺らめきながら、時雨目掛けて次々

と飛んで行く。

「最初会ったときは悪い人には見えなかったのになあ」

そう言い時雨は飛んでくる光の玉と玉の間を縫うように巧みに避けながら、女性に近づき一刀を喰らわせたのだが。

時雨の手にはものを切ったときの感触が伝わってこない。確かに時雨の一刀は女性を捕らえていた。しかし、その一刀は女性の身体をすり抜けてしまっていたのだ。

時雨は目を白黒させた。

そんな時雨に女性は風のように近づき、自分の顔を時雨の顔の目の前まで持つていきこう言った。

「今の私に物理攻撃は効きません」

時雨は瞬時に後ろに飛び退き間合いを取り、女性に質問をした。

「どういうこと？」

「肉体はあなたに殺され消滅してしまいました。ですが私の魂魂までは消滅しません」

「じゃあ、最初から肉体なんて必要ないような気がするけどなあ」

時雨の言う事は至極最もだ。しかし、女性は言った。

「それは違います。肉体の無い私はこの宮殿から出られないのですよ。ですが……」

彼女が突如右手を横に大きく振ったかと思うと、そこから三日月状の白く輝く刃ヤババが飛び出した。

「今の私は不死身です」

時雨は間一髪のところまで上体を後ろに仰け反らせて、刃を避けることができたのだが、時雨が上を見るとそこには光の玉が降り注いで来ていた。

時雨はそれは避けきれず、全てもろにくらってしまった。その数約二〇、破壊力は一つ一つの玉が二〇キログラムの鉄球の玉と同じだ。

鈍い音が辺りに鳴り響く。時雨全身の骨は砕けてしまったに違いない、もう彼は動くこともできず苦痛の中を死んでいくだろう。

女性は時雨の元へ歩みより、膝を突き時雨の唇と自分の唇を重ね合わせた。そして、唇をゆっくりと放しこう言った。

「あなたの事は嫌いじゃありませんでしたがこれが運命です」
彼女は自分を覆っている光からナイフを作り出し、時雨の心臓を一思いに突き刺そうと思つた瞬間地面が大きく揺れた。

彼女はバランスを崩し床に倒れ込んでしまい、その女性の耳元で誰かがこう囁いた。

「ボクも君のこと嫌いじゃなかったよ」

女性は声にならない悲鳴を上げると跡形も無く消えてしまった。今度は本当に消滅してしまったのだ。

時雨は“輝く剣”を持ち立ち尽くしていた。その姿からは神々しさすら感じられ、その姿をひと目見たものは皆失神してしまつたろう。しかし、帝都の天使の顔は何処か哀しげな表情をしているように見えた。

横目でちらつと時雨を見たマナは直ぐに視線を前方に向けた。
「あっちの方は決着が付いたみたいねえん」

こっちの戦いのも決着を付けるべくマナは目を閉じ魔力を徐々に解放し始めた。

マナの身体は光に包まれ、少しずつ上へと上昇していく。

彼女の身体が地面から約二メートルの所に到達した時、彼女の目がカツと開かれ音も無く敵に向かって接近しながら、その身体からは無数の光の線がまるでビームのようにアポリオン目掛けて発射された。

無数のビームから逃げる術などない。アポリオンがビームの直撃を受け、怯んだ隙にマナは相手の正面に回りこみ相手の動きを封じる呪文を唱えようとしたその瞬間。アポリオンの口元に不気味な笑みがこぼれ、それを見たマナは一瞬ためらいの表情を浮かべたがそのまま呪文を唱えよう試みた。が突然マナの身体に異変が起きた。

「私の方が速かったようだ」

身体が動かない。マナの身体はアポリオンの術にかかり動きを封じられ、魔力をも奪われてしまったのだった。

「くっ……」

マナの表情が険しいものになっていく。

さっきまで呆然と立ち尽くしていた時雨であったが、マナの異変に気づき我に返り剣を構え直しアポリオンに斬り込みかかった。

「そうかもう一人いたのだったな、キサマを殺すのはあいつを

倒した後にしてやる。」

アポリオンはそう言うとき時雨の攻撃を備え向かえ討とうと気を集中させそれを一気に解放した。すると、大きな風がアポリオンを中心に巻き起こり、近くにいたマナがまず吹き飛ばされ壁に叩きつけられ意識を失い、時雨までもが風圧によって壁に叩きつけられ、手に持っていたビームサーベルを地面に落とすてしまった。

アポリオンはすかさず凄まじいスピードで時雨の懐に入り込むと手刀で時雨の胸を下から斜めに切り裂いた。

血しぶきが紅葉の顔を真っ赤に染める。

時雨は相手の強烈な一撃により、身体を思うように動かなくなってしまうた。

アポリオンは口の周りにまで飛んで来た血と舌なめずりして見せた。

その姿は下品なものには見えない、それはそれをやっている顔が紅葉のものであるからだろう。長髪の麗人がする舌なめずりする姿からは甘美、そして妖艶な色気を醸し出してさえる。しかし、今紅葉の身体の中身に居るのはアポリオンだった。「なかなかの美酒だ、こんなにうまい血は初めて飲んだ。もっと、もっとくれ、キャハハハ」

そこに立っているアポリオンはさっきまでのアポリオンとは別人にどんだんなくなっていく。

顔はどんどん醜悪なものへと変貌していく、あの麗人の紅葉の顔にここまで醜悪な表情をとらせるとは、紅葉がこのことを

「後で知ったとしたらどんなに恐ろしいか。」

「キャキャキャ、血だ、血をもっとくれ」

この姿こそ本当のアポリオンなのだろうか？

アポリオンの手刀が再び時雨に襲い掛かる。

「血だ、血をくれ！」

うつむいて壁に寄りかかって座っていた時雨の口元が動いた。
「ボク、低血圧で貧血持ちなんだよね……」

時雨はそう言うのと近くに落ちていたビームサーベルを拾い上げ、紅葉の足目掛けて斬りかかった。そしてすぐさまバランスを崩したアポリオンの肩にビームサーベルを突き刺し、そのまま背中から相手を押し倒して床に串刺しにした。

時雨はアポリオンをビームサーベルと足で押さえながら動きを封じ立ち上がり、地面に這いつくばっているアポリオンを観ながら小さくこう呟いた。

「ごめん、紅葉の身体傷付けて」

一樣ここで紅葉に対して謝っておいたが、あとで紅葉に直接もう一度謝る気は時雨にはなかった。その後の反応が怖いからだ。時雨はこのことは黙ってようと心に固く誓った。

「許さぬ、許さぬぞ」

アポリオンは負傷をかえりみず、時雨のビームサーベルで自らの肩を切り裂き、蛇のように地面を這いつくばり、時雨の足を掴んだ。

「放せ、放せよ」

時雨は足をぶんぶん振って振り払おうとした。剣を使って相

手を斬ることも可能なのだが身体の持ち主の顔が時雨の頭に浮かびそれは諦めた。

アポリオンは時雨の身体を伝って蛇のように登くる。紅葉の顔が時雨の顔の前まで来たときアポリオンは不敵な笑みを浮かべこう言った。

「キサマの身体を」

そう言つてアポリオンは突然時雨の口に自分の口を重ね合わせた。

時雨は驚きのあまり身体の動かし方を忘れてしまった。

紅葉の舌が時雨の口の中に入り込んでくる。このことにより時雨の頭はパニック状態に陥り、そこに拍車をかけるようにある考えが時雨の頭を過ぎつた。その考えとは、このことを紅葉に知られたら殺されるどころでは済まないということだ。

時雨は口の中にドロドロしたものが大量に流れ込んでくるのを感じた。息苦しさを感じ、思いつきりむせ返つたが液体はどんどん時雨の身体に浸透していく。

液体が全て時雨の口の中に流れ込むと、紅葉の口は時雨の口から放され、紅葉の身体は全身の力が抜けていったように地面に倒れ込んでしまった。

呆然と立ちすくんでいた時雨の頭の中で誰かの声が響いた。

『キサマの身体は貰つた』そう時雨の頭の中で誰かが喋つたと思つた瞬間、時雨は意識を失つた。

「はははは、もうこの身体は私のものだ」

その言葉を喋っている身体は時雨のものであった。そう時雨は

アポリオンに身体を奪われてしまったのだ。

「おお、なんとという力だ、この身体はすばらしいぞ、力が漲ってくる」

なんとということであろうか、あの帝都の天使、帝都一のトラブルシューターがやられてしまうとは誰が信じようか。

しかし、突然アポリオンの身に異変が生じた。

「な、なんだ、身体の方がきかん……誰だ、まだ意識が残っているのか……いや違う……うっうっ……」

なんと、アポリオンが突然苦しみだしたのだ。

「誰だ……誰だ私の邪魔をしているのは……!?……キサマか!!」

アポリオンの声が宮殿中に響き渡り、アポリオンは膝を突き、そして倒れ込みもがき苦しみだした。

「なぜだ……なぜ……お前が!!」

アポリオンの顔は狂気の形相を浮かべ、そして口から何かを吐き出した。それは血塊のようであったが血ではない。

吐き出されたモノはまるで苦しむかのような動きをしている。スライムのようなゼリー状の物体　そう、これがアポリオンの本体なのだ。

一番初めに意識を取り戻したのは時雨だった。

時雨はゆっくりと立ち上がると、辺りを見回した。

特に変わったものは一つもなかった。だた、あったのは床にえぱり付いた”ただの”血の塊だけだった。

「……………」

時雨は自分の身に何が起こったのか考えてみたが全くわからない。

時雨は取りえず近くに倒れている紅葉に歩み寄り、丁寧に起こした。

「……時雨？」

紅葉の第一声はそれだった。

紅葉も自分の身に何が起こったのかわからなかった。

荒れ果てた宮殿を見て紅葉は時雨に聞いた。

「いったい何があった？」

「紅葉と戦った」

「それで？」

「途中で記憶が途切れた」

時雨は首を傾げそのまま黙ってしまった。

「私を操っていたものはどうした？」

「さあ？」

時雨は首を傾げる一方だった。

「ちよつと、二人とも手を貸してくれないかしらあん」

マナは壁にもたれながら二人を呼んでいる。

「ねえ、身体の骨が何本か逝っちゃったみたいで動けないから助けてくれなあい」

「ボクだって、胸のところざっくり斬られて重症だよ、魔法で治せないの？」

時雨の負わされた傷は重症のはずなのだが、時雨の口調はそれを感ぜさせないものだった。

「もう、魔力は全部奪われたわぁん、ねえだから手貸してえん」

「“なぜか”私は身体のおちこち、そして足が特にやられていて動けん」

二人の目が同時に時雨に向けられた。

結局時雨は二人も担いで出口までいくハメになってしまった。

帰りの道は紅葉の一流のプロフェッサーとしての超的確な“

勘”によって案内され出口に到着することができた。

時雨は出口に着くと全身の力が抜け上の二人に押しつぶされるように地面に倒れ込んだ。

それを見ていた、研究者や報道人がいつせいに周りを取り囲み騒ぎたてた。

それを聞きながら時雨の意識はどんと闇の中へと沈んでいった。

それから数日。時雨は自宅の茶の間で渋めのお茶をすすっていた。

時雨はここ数日の間、この家から一步も出ずに一日中この部屋でお茶を飲みながら何か物思いに耽りながら過ごしていた。

「どうしたんです、テンチヨ。テンチヨがこんなだからお店の方ももう三日も休んじゃったじゃないですか、また赤字街道爆進まつしぐらになっちゃいますよぉ」

「うん、そうだね」

時雨の返事には感情がこもっていなかった。あの遺跡での出

来事以来時雨はずっとこうなのだ。

「うーん、いくら考えてもわからないなあ……もういいや、考えるの辞めよ」

そう言つて時雨はここ数日間のことがるで嘘だったかのよ
うに元氣を取り戻した。

「そうだ！　ここ数日ハルナちゃんに迷惑かけたし、今日はボクが腕によりをかけておいしい夕食を作つてあげるよ」

「ホントですかあ、うれしいです。テンチョが料理食べさせてくれるなんてひさしぶりですう」

ハルナは本当に心の底からうれしそうな顔をしていた。

「じゃあ、一緒に買い物行こうか」

「はい！」

まだ季節は冬だというのにハルナの笑顔は部屋中を春の陽気でやさしく包み込んだ。

あの事件以降、遺跡での行方不明事件は一件も発生することはなかった。

行方不明になった人たちはあの事件の余日から一週間ほどをかけて全員遺体として発見され、遺跡からはだんだんと報道陣の数は減つていき、今ではもう都民の頭からは遺跡のことなどもうすっかり忘れさられてしまっていた。しかし、あの事件に関わった三人の、いや、二人の頭にはいつまでも疑問が付きまとうことになつてしまったのだった。

しかし、全ての謎は……この遺跡で……。

戦闘を終えて

帝都病院の院長室にある黒檀のデスクに足を乗つけ、蜿マシはふんずり返った格好で椅子に座っていた。

彼の姿は異様な容姿をしていたが、この帝都ではそんなことを気にする奴はいないだろう。街を歩けばこんな奴など腐るほどいる。

彼がどのような容姿をしているかというところ、まず、白い白衣を着ている。ここまではこの院長である彼にとって何ら不自然のない普通の格好と言えるだろう。だが、違うのは首からだ。彼の頭には白いフードが被られその顔には白い仮面がつけられている。手には白い手袋がはめられており肌を露出している部分は一箇所も見当たらない。彼の素顔を見たことのある者はこの病院にはいない。

電話が鳴った。

どうやら内線電話らしいのだが、蜿は受話器を一向に取ろうとしない。めんどくさいのだ。蜿はそういう人間だ。

しかも、今の時刻は朝の七時。朝の弱い蜿の機嫌を害するには申し分ない時刻だった。

しかし、電話の音はいつまで経っても鳴り止まない。もうかれこれ三分は鳴っている。さすがにうるさい。それほどの急を有する大事ということなのだろうか？

蜿は仕方なく受話器に手を伸ばした……のだが、蜿が受話器を取る寸前に電話は泣き止んでしまった。

「クソツ……」

思わずそんな言葉が口からこぼれ出した。

蜿は腕組みをして眉間に皺を寄せた。相当頭にきたらしい。

しかし、その表情は仮面の下で起きていることであり、見た目からはそれを感じとることはできない。

それから、一分ほど経ったころだろうか。一人のナースが院長室に飛び込んできた。ナースはノックもせずいきなりドアを開け、院長室に入り慌てた様子でこう言った。

「大変です院長！ 院長の患者が三人も同時に運ばれて来ました」

「ノックぐらいしろ、ボケツ！」

蜿は激怒した。しかし、そんなことにはお構いなくナースは話を続けようとした。それはこんなことはいつものことだったからだ。

「時雨さん、紅葉さん、マナ様が怪我で運ばれて来ました」

この三人の担当医は蜿だったのだ。ちなみにマナだけに「様」が付いているのは本人の「強い」脅迫じみた「お願い」のためである。

「ちつ、何だよ怪我なんてすんじゃねえよ。怪我するくらいだったら死んでもらった方が楽でいい」

この台詞はとても医者発言とは思えない。しかし、こいつは本当にここの院長なのだ。

「院長早くしてください！」

ナースの顔には少しさつきより皺が数本増えていた。

「はいはい、すぐ行きますよ」

蛇は重たい腰を上げ、立ち上がると手を上に上げ伸びをしてから、患者の元へと向かった。

三人は院長「専用」の手術室へと運ばれていた。

その部屋の壁には棚があり、そこにはいったい何に使うのかわからない異種異様な薬の入った瓶がずらりと並んでいた。それに金属でできたただの台。部屋にはそれしかなかった。こんな場所を手術室というのだろうか？

その部屋に白い医師が姿を現したのを見て患者が不満を垂らす。

「遅いわよおん、死んだらどうしてくれるのよおん」

「全くだ、医師としての自覚があるとは到底思えん」

二人の患者に言い草に蛇は少しムツとした。

「患者は黙ってる」

たしかに紅葉の言うとおり蛇には医師としての自覚はない。

彼がなぜ医者という職業をやっているのかは謎である。

蛇は時雨のことを横目でチラリと見てこう言った。

「時雨は意識がないが……。また、ただの貧血だな」

と蛇は言ったが、時雨の胸元からは大量の出血後があり、服が血で紅く染まり血ががびがびに固まっていた。これは「ただの貧血」と言っているのだろうか？

「血は止まってるみたいだから時雨は後でいいな、レディファーストということでもまずはマナ嬢からだ」

腕はマナに近づくことと寝かされているマナの足のつま先に左手をかざし、ゆっくりとその手を頭の先まで移動させた。

「右足が一本、背骨にひびが数箇所、打撲多数に擦り傷いっぱいか……」

そういうと今度は右手をマナの全身にゆっくりとかざしながら移動させていった。

すると手をかざされた箇所の打撲や擦り傷が一瞬にして消えてしまった。

「ありがとねえん、腕ちゃん」

マナはそう言うと言を上に伸ばし伸びをした。身体からボキボキという音がするとマナは寝かされていた台の上からぴょんとジャンプして地面に降りた。どうやら足の怪我も治ってしまったらしい。

腕は嫌そうな目で紅葉を見た。

「さて、次はこいつか。おい、兄貴どうした？ どこが痛い？ 言ってみろ」

腕は紅葉に向かってこの言葉を言った。そう紅葉は腕と兄弟なのだ。それにしても、この態度はマナに対してのそれとは全く違っていった。

「足のじん帯がやられた。後は自分でどうにかする、それだけ治せ」

「言われなくてもそれしか治してやんねえよ」

悪態を吐くと蛭は紅葉の足に手をかざした。

「ふっ、後は時雨か……」

時雨は病院のベッドで寝かされていた。

「う、ううん……」

時雨が目を覚ますと辺りは真っ白だった。それはなぜか？

時雨の顔には白い紙が張られていたからだ。

「なにこれ？」

時雨は顔に張られた紙を取ると、それには字が書かれてあつて、こう記してあつた。『目が覚めたらさっさと出てけ』と、この字は蛭によつて書かれたものだった。

「はいはい、わかりました」

時雨は独り言を呟くと紙をぐちゃぐちゃに丸めゴミ箱にポイして病室を後に行つた。

病院を出る途中時雨は蛭と出会つた。

「なんだ、まだ居たのか健康な奴はさっさと出てけ」

時雨に対してこんな悪態を吐く者などこの帝都には彼以外いないだろう。

「寝てただからしよーがないじゃん」

「言い訳は無用だ、今何時だと思つてる、外を見てみるもうこんな真暗だ」

「言い訳じゃないよ」

「おまえがここに担ぎ込まれてから一三時間は経つてるぞ」

「はいはい、わかりましたよ、出てけばいいんですよ」

「わかったなら、さっさと出てけ、今日はおまえらのおかげで三つも仕事をしちまった」

三つも？ 時雨、紅葉、マナ、これしか仕事をしていないのに三つもとは相当仕事が好きなのがこの発言から伺える。

「じゃあね、バイバイ」

時雨そう言っって病院を後にして家路についた。

戦闘を終えて 完

病気は気から

「くしゅん！」

時雨の可愛らしいくしゃみが部屋に木霊する。

鼻をすすり辛そうな顔をする時雨の顔をハルナがまじまじと覗き込んできた。

「だいじよぶですか、テンチヨ」

「完全に風邪だよコレ、くしゅん！」

二月もあと残すところ数日、四季は春に移ろいつつある。この時期注意しなくてはいけないことの一つに風邪の予防があげられるだろう。

『いつのボクはお茶飲んでから平気だよ』と自信満々に言っていた時雨だったのだが、ついに風邪の間の手が彼に襲い掛かった。しかも、時雨は季節の変わり目には必ずと言っていいほど風邪を引いているらしい。

時雨は顔を真っ赤にして虚ろな瞳をしている。

「あゝ頭がガンガンするよ」

「こたつに入りながらアイスなんて食べてるからいけないんですよ」

「だってえ、こたつに入りながらアイス食べのつておいしいんだよお」

寒い地方の中には冬にアイス屋さんがるでやきいもを売る

ようにアイスを売り歩いて地域もある。人々はそのアイスを買
い、暖房の効いた部屋でそれを食べながら至福の時を満喫する
らしい。

時雨の風邪は彼の中で限界を超えていた。こんなに酷い風邪
を引いたのは本人も数年ぶりだと言っていた。

「もうダメだ、死ぬ、くしゅん！」

「だったらそんな」とこ”いないで、ふとんで寝てくださいよ
お”

そんな”とこ”とは”こたつ”のことである。時雨は冬場大
抵家に居るときはこの中で一日を過ごしている。しかも、こた
つの周りには無駄な動きをしなくて済むようにありとあらゆる
生活雑貨が置かれている。

こたつに入りながらも時雨は身体をぶるぶると震わせている。

「寒いよあ、寒いよあ、くしゅん！」

「病院に行つて来たらどうですかあ」

「ここから、出たくない」

「ばかあ、もういいです！」

そう言つてハルナはほつぺたを膨らませ、ぷいっと後ろを向
いてちよつと怒つたようすでどこかに行つてしまった。

「あゝ待つてよあ、ハルナちゃん」

時雨はハルナに救いの手を伸ばしたが、あつさりとは無視され
バタンと力尽きた。

「ダメだ……死ぬ、くしゅん！」

帝都の天使とまで呼ばれる時雨が負けた。今、ここに時

雨に對する史上最強の強敵が現れた。風邪である。帝都の天使も風邪には勝てないらしい。

まあ、それも仕方ないことだった。今年の冬は外回りの仕事が多かった。外回りの仕事は副業のことなのだが、例えば帝都史上まれに見えない大雪の日に外にいたり、この街で一番高い帝都タワーの屋上で一夜を過ごしたり、冬の海を泳ぐハメになつたりといくら時雨といえど風邪ぐらいひいてしまふのが当然であると言える。

部屋に春の陽気を持った歌うような声が響いた。

「……お茶入れてきましたよ」

時雨が頭を上げるとそこにはなんと、湯気の立ち上るお茶を乗せたお盆を持った女神様が立っていらつしやるではありませんか。

「め、女神様、どうしてこんな所に？」

思わず時雨は女神に問いかけた。

「何いつてるんですか、テンチヨ？」

「……あつ」

時雨の前に立っているのは女神ではなくハルナであつた。時雨は高熱のため意識が朦朧として、幻覚が見えたに違いない。

「お茶入れてきましたから、冷めないうちにどーぞ」

ハルナは時雨にお茶を差し出した。

「あ、どうも」

恐縮しながら片手を頭の後ろに乗せ苦笑いを浮かべた時雨は、ハルナにお茶を手渡されると、ふーふーと何度も口で冷まして

から一口頂いた。お茶好きのくせして猫舌なのである。

「はあゝ生き返るっ」

ちなみにこのお茶は一〇〇グラム五〇〇〇円の高級玉露である。雑貨店の経営だけでは到底一日に何杯も飲めない代物である。

そんな高級茶を飲んでいた時雨に不幸が襲い掛かってきた。

「時雨ちゃん！」

どすっ！！ ぶはっ！！ どすっ！！（後ろからどつかれた

時雨、思わずお茶を吹き出す時雨、こたつに頭をぶつけた時雨）。

「……痛い」

時雨はゆっくりと頭を上げ、ぎこちない動きで後ろを振り向いた。

「マナ……かな？」

マナっぽい人物が時雨の前に立っているのだが、どうも違うような気もする？

「風邪引いちゃったのよ」

彼女は特大マスクを付けていて、顔を見ただけでは誰だか識別できない。時雨が彼女だと気づけたのは、彼女特有の服装のおかげだった。

時雨は溢したお茶をティッシュで拭きながら聞いた。

「どうしたのたかが風邪でそんな大きいマスク付けて？」

「そうね、時雨ちゃんは知らないのね。あたしの風邪がどんなものか……」

「普通の風邪じゃないの？」

「お話中申し訳ありません、お茶入れて来たんですけど」

ハルナ嬢がお茶をマナに差し出した。

「ありがとう、ハルナちゃん」

マナは差し出されたお茶を飲もうとマスクを外したとたん。

「くしゅん！！」

その瞬間、マナがくしゃみをしたとたん信じられないことが起こった。

どーん！ という音と共に家の屋根が天高く舞い上がったのだ。

「……………あつ」

時雨は上空を見上げ口をぽかんと空けそのまま硬直した。

「あらん、また、やちゃったわん」

時雨は首を元に位置に戻すと『……………？』という表情をした。

「また？」

「風邪を引いてると魔力のコントロールがうまくできなくなっちゃうのよ」

目を丸くしたままのハルナが聞いた。

「それで屋根が飛んじやっただんですかあ？」

「そうみたいねえん」

その言葉を聞いた時雨はあまりいい顔をしていない。

「そうみたいって、どういうこと？」

「くしゃみをするると魔力が一時的に開放されちゃうんだけど…

…」

「「「だけど……………？」」」

時雨とハルナが声を合わせて同時に聞いた。

「何が起こるか分からないのいねえん」

「まるでパル　ンテみたいだなあ」

「パル　ンテってなんですかあ？」

「パル　ンテはねえ、ドラ　エってゲームに出てくる魔法なんだけど、何が起こるか分からない魔法で、魔人が出てきたり、会心の一撃だけになったり、まあそんなところかな」

「テンチヨの説明よくわからないですう」

「まあいいよそんなこと」

「よくないですよ」

「あつ、それより新しいお茶入れてきてくれる？」

時雨は湯飲みをハルナに手渡すと満面の笑みを浮かべた。この笑顔は誰をも魅了する魔力を持つと言われる魔性の笑みなのだが、ハルナには効かなかった。この必殺技は身内には効いた試しがない。

「お茶なら自分で入れてください」

「しょうがないなあ」

時雨はしぶしぶ重い腰をゆっくりと上げると、『よいしょ』というじじくさいかけ声と同時に立ち上がり、手を上に伸ばしながら伸びをしてあくびをした。

こたつから出た時雨はぼつちりいつもの黒いロングコートを着込んでいた。そこまで寒がりなのか、このコートにはなにか重大な秘密があるのだろうか？

「時雨ちゃん、あたしにもお茶」

マナは時雨に湯のみを差し出し、時雨はそれを受け取ると重い足取りで台所に向かおうとしたのだが。

「くしゅん！！」

ゴン！ 時雨は部屋を出ようとした瞬間、見えない壁によってそれを遮られた。

「……何？」

頭を押さえ彼は何が起こったのかわからないまま、空を叩いてみた。すると、何か壁のような手ごたえがある。

「あらん、またやつちやつたみたいねえん」

「窓はだいじょぶみたいですよお」

ハルナは事態をすぐに把握して、窓から外に出られるかチエツクをしたらしい。

「マナさあ、病院行ったの？」

「まだ、だけどあ」

「早く行った方がいいよ、“帝都病院”に」

時雨は帝都病院というところを強調した。

なぜ、彼が帝都病院というところを強調したかというと、帝都病院では特別な患者の診療もしているからだ。特別な患者とは普通の病院では扱っていない、魔術などの類で受けた傷などの治療や亜人の治療から、その他普通の病院では治療不可能の患者を受けつけている。

ハルナが時雨の顔をまじまじと見つめる。

「テンチヨも人のこと言えないじゃないですかあ」

「くしゅん。忘れてた、ボクも風邪引いてたんだった」

「あらん、時雨ちゃんも風邪引いてるのおん？」

「まあね」

「ほら、早く二人とも病院に行ってください」

そう言つてハルナは窓の外指を指差した。ここから出るということであろう。ここは二階である。……しかし、そんなことはこの二人なら関係ないことだった。

「仕方ないなあ、マナ行こ」

軽やかに時雨が窓から飛び降りると、マナもそれに続いた。

時雨の自宅から帝都病院までは約二〇キロメートル、二人はマナの魔法で行くことにした。

「はい、時雨ちゃんあたしと手つないで」

時雨は差し出されたしなやかで細く透き通るような白い手を掴んだ。

マナの行うテレポートは自分以外のモノを自分と同時に移動させる場合、移動させる物体はマナの身体の一部に触れる必要があるらしい。

「それじゃあ、いくわ……くしゅん！」

またも、マナのくしゅんが。時雨は嫌な予感がして瞬時にマナから手を離そうとしたのだが。

その場からはマナと時雨の姿はどこにもなかった。つまり消えてしまった。くしゅんと同時にテレポートが発動してしまつたらしい。

二階窓から一部始終を見ていたハルナは嫌な予感がしてあるところに急いで電話をかけた。

「どこだここ？」

時雨が発した第一声はこれだった。

そこは見渡す限り芝、芝、芝、そしてたまに木。時雨とマナが飛んで来てしまったそこはいわゆるサバンナという場所だった。

辺りを見回したマナはまるで他人事のように言った。

「あらん、またみたいねえん」

「ここつて帝都からのくら離れてるんだろうねえ」

「さあ検討もつかないわあん」

「はあ……」

時雨は重い吐息と共に気分は地の底まで沈んで行った。

「なんでいつもボクは、不幸な目に遭うんだろ……はあ」

気分は最不調に沈んでいた彼にマナの一言が止めの一撃を刺した。

「時雨ちゃん、あれえ」

マナはある方向に指を指した。彼女の口調はのんびりとしたものだったのだが、指の先で起こっていることはそれとは正反対の出来事であった。

「ああ、すごいねえ」

時雨の返事ものんびりとした受け答えであったが、彼の目線の先で起きている出来事は信じられない光景であった。

「こつちに来るのかしらあん」

「たぶんねえ、来るんじゃないかなあ〜」

二人の口調はほのぼのとしてしまうほどのものであったが、もう一度念を押して言うがそこで起きている出来事は凄まじいものであった。

「逃げなきゃねえ」

時雨のこの言葉が合図だったかのように時間が突然早送りになった。

「走るよ、マナ！」

二人は全力疾走をした（マナは空を低空飛行していたのだが）。

「なんで、こんな目に遭うの!？」

時雨は走りながら、後ろを振り向いた。すると何とそこには、バッファローの群れが土煙を上げながら押し寄せて来ていた。

「あらん、もうあと一、一秒遅れてたら下敷きって感じねえん」

マナの言うとおり、バッファローの大群と二人の距離は八メートルほどしかなかった。

「マナ、テレポート!!」

そう言つて時雨はマナの足を掴んだ。

「それじゃ……くしゅん!!」

またもや二人の身に不幸が襲い掛かった。

青く澄んだ空を見上げながら、時雨は苦笑を浮かべていた。

「バファローに追いかけられるのもイヤだけど、これもイヤだね」

二人は海の上にぶかぶか浮かぶ孤島の上にいた。島の大きさは畳一〇畳ほどの大きさを島の真ん中には木が一本立っていた。「どこかしらねえん」

「さあ」

島の周りには何も無い、青く輝く海がどこまでも、どこまでも果てしなく続いている。見渡す限り海、鳥すらないのは陸地と距離が離れているからだろう。

「そろそろ、行こうか。ねえマナ？」

時雨がマナの方を振り向くとそこには今にもくしゃみをしそうな顔をしたマナが。時雨は慌ててマナの口を塞ごうとしたのだが……。

「マナあーっ!!」

「は、はくしゅん!!」

「……………」

島の上に立っているのは変なポーズのまま固まっている時雨だけだった。そう彼はこの海の上に浮かぶ絶海の孤島に独り取り残されたのだった。

「はあ……ウソでしょ」

彼はコートのポケットに手をつ込むと、パッケージングされた塩せんべえとペットボトルに入ったお茶を取り出した。

「ボク泳ぎは得意じゃないんだけどなあ」

この発言は、彼はいつ陸に着くとも知れず海を泳いで渡るつも

りなのだろうか？

「コート着たままじや、沈むよねえ〜でもボクこれしか持ってないんだよなあ」

時雨はペットボトルの蓋を開け、塩せんべえをつまみにお茶を一口飲んだ。

「……はあ、誰か助けに来ないかなあ」

しかし、時間は刻々と無情に過ぎ去っていく。そして、夜が来た。

「海風が冷たい……寒い、寒い、寒いーっ！！」

時雨の叫び声は呆気なく海の波にかき消された。彼の叫びは誰にも届かないのだろうか？

時雨は突然立ち上がり、何を思ったのか海の中に身を投じた。飛び込み方は超一流の水泳選手のようにであったが、その姿は黒いロングコートであった。

時雨は冷たい夜の海の中を泳ぐ、何処に向かうでもなく泳ぐ、そしてまた泳ぐ、しかもバタフライで泳ぐ。バタフライは実用的な泳ぎ方とは言えない、しかし、彼はこの泳ぎ方しか知らなかった。

そして、時雨は陸地に着いた。陸地に着いたといっても元居た場所なのだが……。やはりコートを着たまま泳ぐのは無謀だった。しかもバタフライで泳ぐのは……。

「あーっ死ぬかと思った。　っ寒い！！」

状況は悪化した。衣服が水を含み冷たい海風が時雨を襲う。

「くしゅん！！」

「どうやら風邪も悪化したようだ。」

「海に飛び込むから風邪何か引くんぞ」

「だってそれしか思いつかなかったんだから……ん？」

時雨の頭にふとある疑問が過ぎった、自分は誰と話しているのだろうか？

「やあ時雨、助けに来たぞ」

声の主はすぐに見つかった。声を出していたのは空中に浮かぶソフトボールくらいの大きさのカメラに取り付けられているスピーカーだった。

「真くん!? 何で真くんがいるの？」

そうこのカメラは情報屋真の監視用カメラであった。

真とは時雨の仕事で度々世話になってる情報屋の名前で、帝都で情報屋として一番に名前を挙げられるのは彼だった。そして、このカメラは世界各地に約時速一〇〇〇キロメートルで飛んで行くことができ、写し出した映像や音声を瞬時に真のもとへ伝えることのできる優れものだ。

「ハルナ嬢に頼まれてお前を探しに来たんだ」

「で、海に飛び込むとこ見てたわけ？」

「ああ、ばっちり録画しといたぞ」

「何で止めてくれなかつたんだよ」

カメラに向かって怒っている時雨の姿は側から見ると、いたとしたら滑稽なものであった。

「かなりマジな顔をしていたからな」

「はあ……どうやってボクは家に帰るの？」

「もうすぐ、ヘリの向かいが来るからしばし待て」

「もうすぐってどのくらい？」

「まあ一〇時間くらいじゃないか」

「それって、もうすぐっていつの？」

「この星の歴史からすれば微々たるものだ……ん？ シーモン
キー大量発生………家政婦は見えていなかっただどおー
っ！！」

真は会話の途中でトリップしてしまった。

「あのおゝ真くん？」

「あちょんぶりけゝもっちゃらびろびろゝん」

「はあ……」

この後、真は結局コッチの世界に帰還することができず、そして、時雨はスピーカーから聴こえて来る奇怪な声にうなされることとなり、彼がこの悪夢から解放されたのは一〇時間以上も先のことだったという。

病は気から 完

キリングドール

時雨　彼は帝都で一番美しい。そして、今は帝都で一番臭かった。

「……死ぬう」

帝都の駄天使だてんしは、帝都地下に棲む大海蛇リヴァイアサンと呼ばれる、全長は六〇メートルから大きいものでは一〇〇メートルにも達し、時には帝都に局地的な地震を起こすことで有名な怪物との死闘の末、下水に引きずり込まれてしまった。

下水に引きずり込まれた後、どうにか九死に一生を得た時雨は我が家に帰って来て、家の前で安堵感から立ち尽くしていた。

「……夏凜カリンなんか助けるんじゃないかった」

夏凜とは時雨の妹？　でその“彼”を助けたがために時雨は下水に落ちたのだ。

しばらく、ぼーっとしたあと時雨は家の脇にある階段で二階へと上がった。一階はお店となっていて自宅の玄関は二階にあるのだ。

コンコンと叩いてドアをノックする。ちなみにドアの脇にはインターフォンも付いている。

「ハルナちゃん開けてえ」

ややあつてドアは開けられ、チェーンロックの掛けられたドアの隙間から眼鏡をかけた女の子がこちらを覗いた。

「おかえりなさい、い、ふあ……!?」

いきなりドアが勢いよくボタンと閉められた。しかも、その後ガチャという鍵を閉める音もした。

理由は明白だった。ドア越しで声が聞こえた。

「テンチョ、クサイですよ!」

時雨は臭かった。それも今は帝都一臭い。

「臭いのは自覚あるから、開けて」

「イヤですよあ、鍵は開けておきますけど……あたし、寝室にこもりますから、少ししたら入ってくださいね。それから、シャワーとか浴びて綺麗になったら、部屋中にバケツで芳香剤まいといてくださいね」

ガチャと鍵が開けられた。しばらく待つ。 もう少し

待つ。そしてドアを開ける。

ゆっくりと開かれるドアと共に異臭が家中に流れ込む。

時雨急いでシャワールームに直行。そして、脱衣所で着ていたコートや服を脱ぎ、瞬間乾燥機付きの洗濯機に服を全部入れてスイッチオン。

いつもどおりの行動をした時雨はお風呂に入った。

数分後、もうもうと湯気を肌から上げる時雨がお風呂から上がってきた。次に彼は身体を拭き、そのまま裸のままドライヤーで髪の毛を乾かす。

髪の毛を乾かし終わると洗濯機に入れてあった衣服を取り出す。衣服はすでに瞬間乾燥機により乾いている。そして、着る。

帝都の天使と呼ばれる時雨はいつも同じ格好をしている。同じ服をいっぱい持っているのではなかった。いつも同じ服を着ていたのだ。……洗っているだけマシと言ったほうがいいのか？

三階に上って部屋に行こうとした時雨であったが、その足が不意に止まった。居間の電気が点いているということと誰かの会話が聴こえて来たのだ。だが、ハルナがテレビを見ているのだらうと思っただけのまま階段を上った。が……、

「どうぞ」

「うん、ありがとお」

ハルナの声とは別に聞き覚えのあるブリツ子した声が……聞こえた。

「ああ〜っ！！ どっ、どうしたんですか、こんな格好でしかも肩から血が出るじゃないですかあ〜！！」

「気付くの遅いよ姫」

時雨の頭にある名前が過ぎった　夏凜。その名前が頭に過ぎった瞬間、時雨は階段を急いで降りようとして階段から転げ落ちて腰を強く打ってしまった。

腰を打ちつけながら時雨はふらふら歩きで居間のふすまを勢いよく開けた。そして叫ぶ。

「なんで夏凜がいるの!？」

「兄さま、こんばんわ」

バスローブ姿の夏凜はティーカップを持ち上げながらにっこりと微笑んだ。その姿はまるでお風呂上りのここの住人のよう

だ。

この家の偽住人夏凜の顔をあからさまに嫌な顔で見る時雨の手は、まだ、ふすまを開けたままの斜め上三〇度の位置で止まっていた。

「だからなんで夏凜がいるの？」

あからさまに嫌な表情をしている時雨に至福の笑みを送り続ける夏凜。

「兄さま、だいじょぶだったあの後」

あの後とは、もちろん下水道に流された後のことである。

「だいじょぶなわけではないですよ」

そう言いながら時雨は夏凜の前の席に腰を下ろしてテーブルに腕を乗せた。時雨の表情は未だ硬い。そんな時雨をワザと無視するかのように夏凜はハルナに話し掛けた。

「ああ、そうだ！ 姫、メイド服貸してくれないかなあ」

「いいですよ」

そう言っただけでハルナはメイド服を取りに自分の部屋へ走って行った。

二人つきりになって、時雨の視線が痛いくらいに夏凜に注がれる。このまま兄弟戦争勃発になるのか！

「なんで夏凜がここにいるの？」

「やだあ、兄さま、そんなに見つめないで」

両手の平を頬に付け、顔を赤らめ叛ける夏凜。だが、それをやられた時雨はかなりキレていた。

「……怒るよ」

「ごめんなさい、言います。私がここに来た理由」

「よろしい」

「じつは……、暗殺タイプのA級キリングドールに追いかけて来て」

キリングドールとはマシンのことで、兵器としてのマシンは、暗殺用や殲滅用などがあり、それらをまとめてキリングドールと呼んでいる。そして、暗殺用はその用途から人型をしていることが多い。

「……で？」

時雨の表情は先程より余計に硬く曇っていた。キリングドールに追いかけられているということは、ここにそれが来るといふことではないのか？

そこへいつの間にか、さつきまぼさぼさ頭だったハルナが髪の毛をツインにまとめメイド服を着て、その両手にもメイド服を二つ持って現れた。早業だ。

「あのお、夏凜さん、どつちがいいですか？」

夏凜は迷わず自分から見て右のピンクの生地にフリルがひらひらしてるデザインの方を選んだ。

そのメイド服を受け取った夏凜は着替えのために家の奥へと姿を消してしまった。

「話が終わってない」

そう呟くと時雨は台所にお茶を入れに行った。

台所に立ち水道の蛇口から熱いお湯を出し急須に入れると、湯飲みを空いている手で持って居間へ戻った。

お茶を炒れて居間に戻って来ると、ハルナは深夜TVを観て楽しそうに笑っていた。

「テンチヨ、これおもしろいですね、あはは」

時雨はお茶をテーブルに置いて座ろうとしたのだが、彼の顔は突然何かを感じ取り、険しい表情へと変わった。

銃声と共に道路に面している窓ガラスが弾け飛び部屋中に破片が散乱する。敵襲以外のなんでもない。

「ハルナちゃん逃げるよ！」

そう言っただけの時雨は瞬時にハルナを抱きかかえて家の奥へと走り出した。

騒ぎを駆けつけた夏凜と時雨が鉢合わせになる。

「兄さま、どうしたの!？」

「夏凜は外で敵と時間稼ぎ、ボクは村雨を取って来る」

「OK」

夏凜の返事を聞くと時雨はハルナを抱えたまま三階へと駆け上がって行った。

ハルナの部屋の前で時雨はハルナを床に下ろすと、

「ハルナちゃん、あなたは自分の部屋にいて、ボクは村雨を……村雨?」

時雨はコートのポケットに両手を突っ込み蒼い顔をした。

「ボク……村雨どこに置いたっけ？」

回想に入る……。夏凜を助けた時、リヴァイアサンを斬るのに使った。その後下水に流され、家に着き、お風呂に入る時ポケットの中身を全部出して……。全部出して? 全部出した時に

無かった!?

「まさか下水で落とした!」

下水に落としたとなると見つかる確率は天文学的な数字になつてしまふ。

別の武器を取りに行くべく時雨は自室に駆け込んだ。

和室に掛けられた掛け軸の下に置いてある家宝の壺の中に手を突っ込み何かを取り出した時雨。その手には村雨に似た、柄だけしかない妖刀殺羅^{サツラ}が握られていた。

殺羅は村雨同様、柄に付けられたボタンのような物を押すことによつて、光り輝くライトサーベルのような刃が出る。

時雨が夏凜に元へ行こうとしたその時だった。一階の雑貨店から大きな破壊音が聞こえた。嫌な予感がした時雨は猛ダッシュで一階に駆け下りた。

時雨の目は大きく見開かれ、怒りの念が沸々と腹の底から湧き上がつて来ていた。

閉めていた店のシャッターが壊され店の中もメチャクチャに壊されていた。

夏凜に向かって歩いてくるキリングドールの後ろ　店の奥で何かが激しく閃光を煌かせた。

「ボクの店をどうしてくれるんだ!」

妖刀村雨の代用品、妖刀殺羅を構える時雨の目は怒りで満ち溢れていた。そして、時雨は黒いロングコートを風になびかせながらキリングドールへと斬りかかった。

真紅の光を放ち振り下ろされるソードからは光の粒が血の玉

のように飛び散り、それを片手で受け止めようと手を出したキリングドールであったが、その行為は虚しく。出された手は腕ごと切断された。

火花を飛ばしながら血の代わりに緑色の液体を出す腕には気にも止めず、キリングドールの蹴りが時雨のわき腹目掛けて繰り出される。

蹴りはわき腹に喰い込み、苦痛の色を浮かべる時雨であったが、ソードの柄を強く握り締め相手の首目掛けて振った。

マシンの首が宙を舞い、地面の落ちた。虚しい金属音が夜の澄んだ空気に響き渡る。

戦いを終え、わき腹を押さえ道路に片膝を付く時雨は辺りを見回し呟いた。

「……夏凜は？」

もう、この場には夏凜の姿はどこにもなかった。夏凜いつの間にかこの場から逃げてしまっていたのだ。

夜の闇にバイクの走る音が聴こえた。夏凜が戻って来たのかとその方向を見ると大型バイクに跨った女性がこちらに向かって来るではないか！

向かってくるといふのは、“近づいて来る”ではない。時雨をひき殺す勢いでこちらに向かって来ているのだ。

それに気付いた時雨は間一髪のところであスファルトの地面の上を転がり向かって来たバイクを避けた。

時雨をひき殺すことに失敗したバイクは激しい音を立てて急ブレーキで止まると、特殊部隊のような格好をした女性がバイ

クを降りて時雨に近づいて来た。

女性は明らかな殺気を放っている。だが、感情が無い静かな殺気だった。このような殺気は先ほどのキリングドールからも感じられた。つまり……。

「また、キリングドールか……はあ」

妖刀を構え立ち上がる時雨であったが、腹に痛みを覚え顔しかめる。だがキリングドールには相手の事情など構うわけも無い。

瞬時に抜かれた銃から九ミリの銃弾が秒速三〇〇キロメートルの早さで発射された。時雨との距離は一〇メートルを切っている。だが時雨はそれを防いだ。

まさに目にも止まらぬ速さで時雨は剣を振るい、銃弾を叩き斬り消滅させた。人間の業とは思えぬ神の成せる業であった。

銃弾を叩き斬った時雨の身体はわなわなと震えていた。

「この妖刀はボクの手には余るな……ボクの身体の限界以上の力を引き出してくれる……」

限界以上の力を引き出す。それは身体に過度の負担をかけることを意味していた。

再び銃弾を発射される前に時雨は相手の銃を構える手を腕ごと切断しようとした。だが、相手は並みの人間ではなかった、キリングドールだった。腕は瞬時に引かれて腕を切断することはできなかつた。だが銃は切断できた。

目的の根本を達成した時雨は敵に背を向けて走り出した。つまり逃げたのだ。

自分の店を構えている商店街を黒いロングコートをなびかせながら走り抜ける。時雨はこの商店街で騒ぎを起こしたら追い出され店の営業ができなくなると考えたのだ。

キリングドールは時雨の真後ろを走っている。もう少しで手が届いてしまう距離だ。そして手が伸ばされた。

それに気付いた時雨は回転しながら妖刀を振るった。キリングドールは後ろに飛び退き間一髪のところまでそれを避けた。

「惜しかった、もう少しで斬れたのに……でも、ここなら思う存分に戦えるかも？」

ここは商店街を抜けた先にある神威神社^{カミイ}。変わったしやべり方をする美人の巫女がいることで有名な神社だ。

「こここの境内広いから……少しくらい暴れても平気だよね？」
気兼ねをする時雨だが、キリングドールは命令以外のことに構いもしない。

襲い掛かってくるキリングドールを交わし、時雨は相手の股から頭上にかけて一刀両断を試みたが、キリングドールは状態をひねり腕でそれを受けた。もちろん一刀を受けた腕は斬り飛ばされた。

斬り飛ばされた腕は遠くまで飛び、しめ縄の架けられた御神木の横を掠めるようにして落ちた。

冷や汗を一滴流し顔を蒼くした時雨の身体は固まってしまっている。そこにすぐさま巫女装束を着た命^{ミコト}が現れた。

「神社で暴れるなど不届き千番。時雨、わらわの寝起きが悪いことはお主も知っておろう？ 説教はあとでしてやるのでな覚

悟せいよ。じゃが今は人の形をしたまがい物を滅するのが先じや」

固まり何も言えない時雨を無視して命は空に印を描く。

「汝らは全てを滅する力なり 招！」

命は右手の中指と人差し指で空を突き刺した。すると、空間が裂け、中から二人の鬼神があらわれた。

おぞましい怒りの形相をしている赤色の肌を持つ鬼神は手に持つていた鞘から同時に剛剣を抜き、キリングドールに襲い掛かった。

鬼神を敵と判断したキリングドールは鬼神を倒すべく挑むが力の差は明らかだった。キリングドールは三〇秒もしないうちに残骸と化してスクラップにされていた。

命の視線が時雨に向けられた。

「さて、時雨よ。言い訳は聞くがの、仕置きは覚悟せいよ」

「あのね……夏凜がキリングドールに追いかけてさ……それでボクにそいつを押し付けて……」

「だからとゆうて、この神社に逃げ込む理由はかるのかえ？」

「そ、それは商店街で暴れると商店街を追い出されて営業が……」

「ふむ、時雨の言うことはわかった。じゃがな、わらわの怒りを買うことになるとは考えなかったのかえ？」

「……………」

言葉が詰まり無言になった時雨を見たあと、命は二人の鬼神を見てこう言った。

「仕置きをしてやれ」

二人の鬼神は時雨の腕を掴み羽交い絞めにした。そして、命はもう用は済んだと帰ろうとした。

「ま、待ってよ命！！」

「わらわはもう寝る」

命は時雨の顔を見ずにさっさと帰ってしまった。

残された時雨は一人の鬼神に抱きかかえられ、もう一人の鬼神は鞘を握り締め構えた。時雨のお尻は鞘を構えた鬼神に向けていた。まさか……!?

この日の夜中、静かな境内から男の悲痛な叫びが声が聞こえたのは言うまでも無い。その声は商店街まで響き、何事かと家から飛び出してきた近隣住民は二人の鬼神を見て腰を抜かし大騒ぎをしたという。

鬼を見たものは皆すぐに逃げ出したためにお尻叩かれていたのが時雨だと気付かれずに済んだ。不幸中の幸いとはこのことを言うのだろう。

キリングドール 完

軀

「クソ、勝手に動くんじゃねえ！」

蜿エシは意思に反乱する自らの右腕を壁に強く叩きつけた。先ほどまで激しく震えて腕が静かになった。

「……治まったか」

安堵のため息が白い仮面の奥に響く。

帝都病院のどこかにある、蜿にのみ入室を許された謎の部屋。病院関係者はこの部屋のことを悪魔の実験室と呼んでいる。しかし、その部屋の中で何が行われているかを人々は知らない。ただ、噂だけが流れ、蜿がその部屋で悪魔の実験に耽っていると言われているが、所詮は噂。定かな情報ではない。

月に数回、蜿はこの部屋に入って一日中、それ以上の日数出てこない日がある。院長はこの部屋に入って何をしているのだろうか、と病院職員は疑問を抱くのだが、院長に聞いても『新薬の開発の為だ』としか答ええない。蜿がこの部屋で行っていることとは何なのか？

「発作の間隔が短くなってやがる、そろそろアレが来るのか？」

突然蜿の体が在り得ない方向に曲がった。骨があるとは思えない曲がり方だ。

「クソっまだか……」

体の次には腕が、足が、決して曲がるはずのない方向に曲がり始め、くねくねとまるで蛇のように動いている。いったい腕の身に何が起きたというのか？

腕の身体が床に倒れ、うつ伏せになった彼の白衣の下で何か蠢いているように見える。それも一つではなく無数の何かがある。

「うつ……うつ……」

時折腕の口元からは苦痛の声が零れ落ちる。仮面の下彼の顔はどのような表情をしているのだろうか？ きつと耐えがたい苦痛の表情を浮かべているに違いない。

帝都病院に白衣の男が現れた。白衣を着ているが医者ではない。
い。

「腕に呼ばれて来たのだが……」

帝都病院の受け付けロビーに美しく、そして冷たい声が響き渡る。

そこにいた彼以外の者が全員ゴクンと生唾を飲み込み一切の動きを止めた。

プロフェッサー紅葉　この街に住む麗しの大学教授の名。

この街で彼のことを知らぬ者はいないだろう。決して怒らせてはいけない人物、彼を愚弄することは死に直結するとまで言われている。そんな彼には弟がいた、それがこの病院の院長”腕”だった。

彼に言葉をかけられた受け付けの看護婦は頭が真っ白になっ

てしまった。それは彼の美しさの為である。彼の美しさはこの街で一、二を争うものだ。

看護婦は数秒間を置いてやっと我に返ることができ、新陳代謝も元通りになり顔を赤らめた。このしぐさは紅葉に見つめられているからなのか、紅葉に見とれ仕事を忘れてしまったことへの恥じらいからなのか？

看護婦は思った、『これで何回目だろうか』と、紅葉がここに来たのは初めてではない。しかし、彼が来るたび彼女の心は淡い初恋のような気持ちに身体を奪われてしまう。彼女は紅葉の虜なのだ。

「あ、あの院長室でお待ちになっておられます」

彼女はまるで最後の力を振り絞るかのように声を出した。だが、白衣の麗人には関係ない。

「ありがとう」

ただそれだけ言うと、白衣の麗人は音もなく院長室へと歩き去ってしまった。

その後ボタンという音を立て紅葉の応対をした看護婦は失神を起こして倒れてしまった。しかし、幸いにもここは病院だった。

院長室のドアがノックも無しにいきなり開けられた。

「ノックぐらいしろ！」

そうは言ったが彼にはわかっていた。紅葉がこの部屋に来る一〇メートル以上先から、彼の足音を聞き分けて。しかし、紅

葉は足音を立てずに歩く。それではなぜ彼が来たことがわかったのであろうか。

「何の用だ？」

蝮の言葉など、どうでもいいといった風に紅葉は自分がここに呼ばれた訳を簡潔に聞いた。

「あそこに行くから兄貴も来い」

紅葉の態度に合わせてこちらも簡潔に述べた。しかし、これだけで相手に伝わるのだろうか？

「仕方あるまいな……」

この発言は相手の言葉を理解したということなのか？

紅葉は言葉を続ける。

「どの程度の症状だ？」

「完全に自由を奪われちゃまった」

「それは“なった”ということか」

「そうとも言う。薬ではもう押さえられないみたいだ」

「門の開く明日の朝方だ」

状況を把握し用は済んだと紅葉は白衣を翻して院長室をすぐに出て行くこととした。その背中に蝮が声をかける。

「あの道を使うのか？」

「あそこに行く道はあれしかないだろう」

振り向きもせず紅葉は部屋を出て行った。

残された蝮の白い仮面の下から小さな声が零れた。

「短く、そして長い道か……」

ここで行われた会話は、二人の間だけに通じる会話だった。

他人が聞いても何のことを言っているのかさっぱりわからないだろう。

次の日の朝早く、路上で酔いつぶれていた中年の男性は、信じられない光景を目の当たりにして、すぐさま交番に駆け込んだ。

「お、おまわりさん、ひ、ひとが」

「あの、ボクはおまわりさんじゃないんだけど……」

中年の男性を出迎えたのは警察官ではなく、黒いロングコートを来た若者だった。もう春だというのにスプリングコートではなく、冬物の暑そつなコートだった。

酔っていた男性には最初、それ誰なのかわからなかったがすぐさま酔いを覚まし、

「あ、あんたは！」

「今、この人出払ってていないんです、代わりにボクが聞いて伝えましょうか？」

「ああ、あんただったら……」

「では、お話を」

と若者は言って男性を椅子に座らせた。

酔っ払いは既にただの中年男性に戻っており、口調もしっかりしていた。

「あれは、ほんの数分前のことだったんだが、人がいきなり消えちまったんだ」

「よくわからないです、もっと詳しくお願いします」

若者の言うことは至極最もだ。あまりにも簡潔過ぎる話の内容に頭を抱えている。

「俺が路上で倒れこんでたら、二人組の白衣を着た男が来て……」

若者の眉が少し上がった。そして若者が口を開いた。

「白衣の？ ……あのぉ、特徴をもっと詳しく言ってもらえませんか？」

「遠くからでよくはわからなかったが、ひとりには長い黒髪のもうひとりには不気味な仮面を顔につけてやがった」

「それでその二人がどうしたんですか？」

「それがよぉ、いきなり俺の目の前で消えちまったんだ、まるで空間に吸い込まれるようにスーっとよぉ、本当だぜ信じてくれよ」

先ほどまで酔っていた男の戯言かもしれない。しかし、若者にはこれが真実の話であると確信があった。

「信じます、たぶんその二人はボクの知り合いですから……」

「じゃあ、俺は家に帰んねえとカミさんに怒られんで帰るわ」

「しっかり、伝えときます」

中年の男は足早に交番を後にして行った。それをちゃんと見届けてから若者はこう呟いた。

「はぁ……この人が生きてればだけどね」

若者はため息とともに肩を落とした。

どこまでも続く白い空間、見渡す限り白に埋めつくされてい

る空間に溶けてしまったかのような二人の姿。白衣の二人はこの空間にいた。

「いつ来ても、この空間は気が狂いそうになる」

「私はそうは思わんが」

どこまでも白い世界、常人であればすぐに気を狂わせおかしくなってしまうだろう。しかし、この二人は長い時間ここにいる。長い時間といっても正確な時間はわからない。この空間では時計、方位磁石などありとあらゆるモノがおかしくなる、磁器が出ているわけではない、この白い空間がそうさせるのである。何も無い白い空間は物をも狂わせる。

「兄貴、もろどのくらい歩いた？」

「一秒かそれとも一年くらいか」

「俺は、三日は歩いたと思うぜ」

二人の時間の感覚は既に狂わされているようだ。

「さあな、この空間は時間すら狂わせる」

「そうだよな、こないだここ入って出たときなんて、一分しか経ってなかったもんな」

二人の時間を計る感覚が狂わされている以前の問題だった。

この世界は時間をも狂わせてしまうのだ。

「そういうことだ、今はただ歩けばいい」

「歩くってたって、見渡す限り白だけだな」

そう、この白い世界で二人はどこに向かって歩いているのだろうか？ 目印すらないこの白い世界で何を手がかりに歩いているのか？ 二人は己の感覚を信じて歩いている。だがその感

覚がどこまで信用できるものなのか……。

「この空間はおまえに似て気まぐれだ、いつ出られるかは空間次第だな」

「俺に似ては余計だ」

その時突然二人の身体を闇が包み込んだ。

何も無い白の空間から突如辺りは一変して、何も無い黒の世界に変わった。

黒の世界は全てが闇に包まれている。紅葉、蛇の身体すら闇に包まれ見て取れない。この点に関しては白の空間より性質が悪い。

二人は世界が闇に包まれても、全く動じることはなかった。

これは二人が持ち合わせている狂人的な精神力を意味している。或いはこの二人にとつては”そのようなこと”など、気にも留めるほどのことでもないのかもしれない。

蛇の口が動いた。何かを喋っているようだ。しかし、この空間は言葉すら奪う。自分の身体があるのかすら疑わしい。

暗闇の中で口が動いたところで、それすら相手に伝わる筈もない。だが、紅葉の口も動いている。それも、蛇の口の動きが止まると紅葉の口が動き、紅葉の口が動きが止まると蛇の口が動く、時折二人同時に動くこともあるが、これは二人が喋っているのではないかと思わせるものだった。

蛇が頷き、続いて紅葉が両手を前に伸ばした、というより隙間に指を押し込め何かをこじ開けるような格好をしている。そして、何かはこじ開けられた。

こじ開けられた空間の裂け目から光が溢れ出す。そして気付いた時には辺りは一面満開の花畑、咲いている花の名はシビトバナ。その花の中ででひなたぼっこをしている男がいる、見た目は二〇代半ばといった感じだろうか。

黒装束を着たその男は二人の訪問者に気付いたらしく、満面の笑顔を浮かべ二人に近づいて来た。二人もそれに合わせて男に近づいた。

「こんにちは、紅葉くん、蜿くん」

男の顔は以前笑みを浮かべている、その笑みからは神々しささえ感じられる。

「二人がここに来る理由は一つしかないね。今回はどの程度の症状なのかな？」

「身体は完全に乗っ取れちゃった」

そう言つて蜿は仮面を外し、フードを取った。

蜿の素顔を初めて見たものがこの場にいたとしたら、きっと驚くに違いない。中には失神してしまう者もいるかもしれない。

蜿の顔の皮膚は鱗のようなもので覆われていて、瞳はまるでそう『蛇』のようであつた。

紅葉は男に聞いた。

「雪兎ユキト、蜿の症状はどの程度のものだ？」

雪兎と呼ばれた人物は直ぐに言葉を返した。

「上も脱いでくれるかな？ そうしないとよくわからないね」

蜿は雪兎の言われるままに上半身の服を脱いだ。

蜿のあらわになつた上半身の肌にはやはり蛇の鱗のようなも

ので覆われていて、それよりも驚くべきことは、皮膚の下で何かが蠢いている、それも沢山の何かが蠢いているようであることだった。

雪兎は腕を組み、ゆっくりと目を閉じ、口を開いた。

「随分と激しく動き回っているね……何かの前触れかもしれない」

「前触れって何だよ？」

「恐らく、帝都に何かが起こるのだろう？」

冷やかに言い放った紅葉は雪兎に目を向けた。

「これは僕の推測だけど、蜿くんの中にいるのは帝都の一部だから、それが暴れるということは帝都に何か……いや、もう起きているのかもしれない。前にも酷い発作が起きたことがあったでしょ、その時のことは覚えている？」

「覚えているもなにもないだろ、あんたがここに閉じ込められた時だろ？」

「僕らはみんな帝都の為に存在しているようなもの……」

先ほどの会話はいつたい何なのか、蜿の身体の中にあるのは帝都の一部というのはどういうことなのか、何かの比喩がそれとも……。蜿の身体にはどのような秘密が隠されているのだろうか……？

紅葉は鼻で笑った。

「くだらない宿命だ」

「確かにそうかもしれない……。僕はここに閉じ込められ、蜿くんは帝都の呪いを身体の中に取り込み、そして君は……。他

のみんなもそう……みんなだ」

「口を慎むように雪兎」

紅葉はそのことに触れられたくないらしい、雪兎はそれをすくに察して口を閉じた。

その時、蛇の身体が激しく揺れた……いや蠢いた。蛇の身体の中で何かが激しく暴れ回っているようだ。それに合わせて蛇も地面に倒れ込みのた打ち回った。

雪兎と紅葉はそれに直ぐ反応して迅速に動いた。

紅葉は白衣の下から液体状の薬の入った子瓶を取り出し、蓋のコルクを親指で弾き開け中身を蛇の口の中に無理やり流し込んだ。

雪兎は蛇の上に身体を押さえ込むように乗り、蛇の胸に印を指で刻んだ。

「紅葉くん、薬をもっと飲ませてくれますか？」

紅葉は子瓶の蓋を開け、薬を蛇の口の中に無理やり流し込んだ

蛇の身体が激しく蠢く。この薬は本来ならば蛇の身体の中にいる”何か”を沈静させる薬なのだが、今の蛇には効果があまりみられない。余計に”何か”を暴れさせてしまっている。これでは逆効果だ。

「全然薬が効かないみたいだね……だからここに来たのか」

雪兎は自問自答して、次の手段に打って出ることにした。

「紅葉くん、このままでは埒があかないようなので直接弱めますがいいですか？」

「構わん」

紅葉は直ぐに返事をした。しかし、『直接弱める』とはどのような手段なのだろうか？

雪兎は拳に気を溜めると、その拳で蜿の腹を渾身の力で殴った。『直接弱める』とは蜿自体を弱めるということだったのか？

いや違う、蜿の身体は雪兎に殴られたと同時に今までに無いくらいに激しく蠢き、そして蜿の口から、口のサイズからは到底想像もできない巨大な”何か”が吐き出された。

「紅葉くん、蜿くんの魂はあれを吐き出した今、不安定な状態にあります。僕はあれと戦いますから、蜿くんのことをよろしく」

「了解した」

雪兎の見上げる先には巨大な大蛇の顔があり、大蛇は忙しく音を立てながら舌を出し入れしている。

「これが帝都の一部ですか……。凄まじい邪気を感じる、今にも苦しい叫び声が聞こえて来そうですね」

大蛇は一瞬たりとも休まず雪兎のことを睨み続けている。雪兎が少しでも気を抜けばその瞬間に襲って来るに違いない。

雪兎が地面を蹴って天に飛翔する。大蛇も一步遅れてその身体を大きくくねらせ雪兎に襲い掛かる。

大蛇の頭がまるで槍のように雪兎に狙いを定め一直線に攻撃を仕掛けてくる。空中にいる雪兎にはそれを避けることは物理的には不可能な筈なのだが、雪兎は間一髪のところまで空中でバ

ク転を決めて見せて、大蛇の攻撃を華麗に交わした。

しかし、大蛇もそれだけでは終わる筈もなく、すぐに次の攻撃を仕掛けようと身体をくねらせ、またも雪兔に襲い掛かろうとした。

だが大蛇の視界から雪兔の姿は消えていた……。いったいどこに行ったというのか？

雪兔は大蛇の頭の上にいた。そして、何かを呟き服の袖から取り出した御札を大蛇の頭に張り付けると、地面に降り立ちすぐに大蛇から走って離れた。

突如、一片の雲すらなかつた空に雷雲が立ち込め大蛇の頭に雷光が落ちた。

大蛇は地面に平伏し大きな身体を痙攣させている。

「紅葉くん、蛇が戻るから蜿くんから離れてくれるかな？」

紅葉は雪兔に言われるままに蜿から離れた。

それを見計らって雪兔が指で印を組むと大蛇はまるで吸い込まれるように蜿の口からまた体内に戻って行った。

蜿がゆっくりと身体を起こし、雪兔を睨みつけこう言った。

「てめえ、荒っぽいことすんじゃないやねえよ、俺が死んだらどうすんだよ！！」

雪兔の顔は笑っている。

「この方法が手っ取り早い方法だからね」

「だからって、直接呪いをぶつ叩くことねえだろーが」

「でも、だいじょうぶ、帝都に異変が起きない限りは、一年間くらいは発作も起きない筈ですよ」

蛭は雪兎に近づき彼の胸倉を掴んだ。

「呪いを直接、叩いたんだからだいじょぶじゃねえだ……ろ」
蛭の身体から力が一気に抜け彼は地面にへたり込んでしまっ
た。

「あらら、やっぱり蛭くんの生命の源である呪いが弱ってしま
ったから、発作が起きない代わりに身体能力が著しく低下して
しまったようだね。蛭くん、一年くらいは急激な運動は控える
ようにね」

「……ふざけんな」

蛭の意識は次第に薄れて行き、雪兎の笑顔だけが残像として
残り、そのまま意識を失った。

蛭が目を覚ますと彼は自分の病院、帝都病院の院長室のソ
ファアの上で横になっていた。

「……普通ソファアじゃなくて、ベッドの上に寝かせるだろ」
突然、院長室をノックする音が聞こえた。

「さつさと入って来い！！」

院長室のドアが開くとそこには慌てた様子の看護婦が立っ
ていた。

「院長先生、時雨さんが重症で自ら歩いていらっしやいまし
た」

「あっそ、直ぐ行くからちょっと待ってもらってろ」

「……わかりました」

看護婦は少し不満があるようだがあえて口答えもせず、ドア

を必要以上に強く締めてこの場を後にして行った。

蜿は窓辺に行き空を見た。まだ日は高い。

蜿は身体を少し伸ばしてみた。まだ少し身体が重く感じるが
気に留めるほどでもない。

そして、蜿は患者の元へと向かって行った。普段と変わらぬ
蜿の日常　あのがまるで白昼夢だったかのように何事も
無く時間が過ぎて行く……。

軀
完

魔剣士

早朝の帝都は気象調査を始めてから史上二番目に濃い霧に見舞われ、朝早くから交通整備が帝都警察によって行われていた。常葉商店街のその先にある、一〇〇〇年以上の古き歴史を持つ由緒正しい神威神社。帝都の重要文化財にも指定されている神社だ。

神威神社の境内も濃い霧に包まれ、その中に溶けるようにしてこの神社の美人神主の命ミコトが静かに佇んでいた。

しばらくして、白い世界に黒衣を纏った眠気眼の時雨が大きな欠伸をしながら現れた。帝都の天使と呼ばれる彼は朝に弱かった。

「ふあゝ、おはよう命。大事な話って何？」

「相も変わらず時雨は朝に弱いのかえ？ それはまあよいとして、時雨も気づいておるであろう、三日前からこの帝都に起きている不穏な空気には？」

命の言う不穏な空気とは何か？

この三日の間に帝都で起きた事件と言えば、連続した局地型地震の発生が上げられるだろう。この原因は帝都地下巨大下水道に棲む大海蛇リヴァイアサンが暴れたためであると推測されているが、それが原因とは考えられない地震も起きていた。

この神威神社も地震の直撃を受け御神木だけが倒れるという

異常事態が発生していた。神威神社地下には大下水道は通っておらず、リヴァイアサンが起こした地震ではない。調査団が昨日大勢押し寄せたが、地震の原因は結局わからなかった。

時雨は未だ夢うつつで、重いまぶたは今にも閉じてしまいうだった。

「今のボクは思考能力に欠けるから、話の結論だけ言ってくれ
るかな？」

「あそこにある御神木が倒れた元凶の駆除を頼む」

命ははつきりと『元凶の駆除』という言葉を使った。つまりそれは、御神木が倒れた地震は自然発生のもではなく、何者かの仕業であると命は確信しているのだ。

眠そうだった時雨のまぶたが少しだけ上げられた。

「つまり、それは“依頼”だよな」

「そうじゃ、料金は規定の二割増でどうかえ？」

「その話乗った。じゃ、ボクは帰る」

用件を済ませて時雨はそそくさと歩いていつてしまった。その後姿を見て命は、

「あ奴に頼んで良かったものかのお……」

朝に弱い帝都の天使だが、そのトラブルシューターとしての実力は帝都一と言われている。だが、普段の時雨はのほほんとしていて、さして喧嘩が強そうにも、運動神経が良さそうにも見えない。ただひとつ良く見えるのは“顔”くらいなものだった。

神威神社から出た時雨は家に帰るべく足早に歩いていた。

霧はより一層濃くなり、不気味さを増している。もうすでに、五メートル先などは全く見ることができない。だが、時雨はその霧の先に何者かの気配を感じた。

殺気に満ちた誰かががすぐそこにいる。時雨の身体に突き刺さるような殺気が押し寄せてくる。その殺気は確実に時雨に向けられたものだった。

人影が時雨のすぐ横を通り抜けた。横を通り抜ける男の顔は美しく中性的な顔。それは時雨の雰囲気と酷似していた。そして、そいつは時雨の耳元で何かを吹き霧の中に消えた。

謎の男が消えるまで全く動くことができなかった時雨。普段見せない恐ろしい表情をした時雨がそこに立っていた。そう、すれ違う寸前に耳元で囁かれた言葉。それが時雨の胸に突き刺さった。

喪失されていた時雨の過去の記憶の一部が蘇った。あいつの名は殺葵^{サツキ}。だが、そいつが誰なのか、時雨には思い出せないでいた。

霧に紛れて血の香が時雨の鼻に届いた。大量の血だ。

前の見えない霧の中を己の感覚を研ぎ澄まし、時雨は前に進んだ。血の香のする方角へ。

「警察官か……可哀想にね」

大量の血を地面に垂れ流しながら横たわる警官の死体。それも身体を二つに割られている死体だ。

しゃがみ込んだ時雨は傷口をまじまじと見つめる。普通のも

のなら吐き気を催してしまいそうな死体だが、時雨は無表情無感情で死体を見つめている。

滑らかな切断面は刃物によるものに違いない。時雨にはその凶器がなんであるか、誰がその犯人なのか、すでにわかっていた。

この警官は朝っぱらから刀を持ってうるついていた“あいつ”に職務質問をしようとして斬られたのだ。

時雨は少し考えた後に警察に連絡することにした。これは一般人の取るべき行動だが、時雨を一般人と言っていていいものか、それは疑問である。

商店街内にある交番に時雨は足を運んだ。あの警官はここに勤務している警官だということを時雨は知っている。

交番には人の気配はなかった。誰もいないのは明白だ。

「いつもは二人いるのになあ」

仕方なく時雨は交番の電話を借りて警察に電話をすることにした。が、そんな時雨の後方から誰かが慌てたようすで声をかけてきた。

「お、おまわりさん、ひ、ひとが」

「あの、ボクはおまわりさんじゃないんだけど……」

時雨の視線の先に立っているのは中年のサラリーマン風の男性少し酒の匂いがすることから、朝まで飲んでいたことが伺える。

最初はふらついて交番に駆け込んで来た男だが、そこにいたのが警官ではなく時雨だということに気がつき、目を大きく開

けて酔いを覚ました。

「あ、あんたは！」

「今、この人出払ってていないんです、代わりにボクが聞いて伝えましょうか？」

「ああ、あんただったら……」

「では、お話を」

近くにあつた椅子を指差し、時雨は男を座らせて落ち着かせることにした。

話し出した酔っ払いはすでにただの中年サラリーマンに戻っており、口調もしっかりしていた。

「あれは、ほんの数分前のことだったんだが、人がいきなり消えちまつたんだ」

「よくわからないです、もつと詳しくお願いします」

男の説明はあまりにも簡潔過ぎる内容のない話だったので時雨は頭を抱えてしまった。時雨は悩んだ表情も絵になる。

男は息を呑み、もう一度頭を落ち着かせて、ゆっくりと話しはじめた。

「俺が路上で倒れこんでたら、二人組の白衣を着た男が来て……」

時雨の眉が少し上がった。そして、時雨は話を理解し、それに関心を持った。

「白衣の？ ……あのお、特徴をもつと詳しく言ってもらえませんか？」

「遠くからでよくはわからなかったが、ひとりは長い黒髪の奴

でもうひとり是不気味な仮面を顔につけてやがった」

「それでその二人がどうしたんですか？」

「それがよお、いきなり俺の目の前で消えちまったんだ、まるで空間に吸い込まれるようにスーッとよお、本当だぜ信じてくれよ」

先ほどまで酔っていた男の戯言かも知れない。しかし、時雨にはこの話が真実の話であると確信があつた。時雨の脳裏に浮かんだ名　紅葉と婉

「信じます、たぶんその二人はボクの知り合いですから……」

「じゃあ、俺は家に帰んねえとカミさんに怒られんで帰るわ」

「しつかり、伝えときます」

中年男は足早に交番を後にしていった。それをちゃんと見届けてから時雨はこう呟いた。

「はあ……この人が生きてればだけどね」

時雨はため息とともに肩を落とした。そして、再び電話の受話器に手をかける。

「あのお、もしもし、常葉商店街で警官が死んでます」

ガチャッと時雨はすぐさま受話器を置いた。今ので警察には電話の発信場所もわかるだろうし、トラブルシューターとしての時雨の声は警察署のライブラリーに保存されていて、今の少しの声で身元が判明しているに違いないが、それでも時雨は余計なことを言うのが嫌で電話をすばやく切った。

仕事以外の事件には巻き込まれたくない。だが、時雨にはわかつていた。この事件が自分にかかわってくることを。

自宅に帰宅すると、ハルナが時雨を迎えてくれた。

「テンチヨ、朝食できてますよあ」

「うん、ありがと」

このハルナという女性の時雨が自宅の一階で経営している雑貨店で働く定員兼時雨の身の回りの世話役である。年のころは一〇代後半から二〇代前半らしいが、見た目はもつと若く見える。眼鏡とツインテール、そして、メイド服常時着用の可愛らしい女の子だ。

ダイニングからハムの焼けるいい匂いがしてくる。今朝の朝食はハムエッグとトーストだった。

ハルナはテーブルに乗せられたトーストを掴み、イチゴジャムをつけて時雨に手渡す。至れり尽くされだが、この二人は断じて付き合っていない。この二人には特別な事情があるのだ。「テンチヨ、そろそろ新しい店員を増やそうと思うんですけど、どうですかあ〜?」

「別にハルナちゃんの好きにすればいいのに」

「だって、テンチヨはテンチヨなんですからあ」

時雨は急に沈黙してお茶を飲み干した。トーストにお茶という取り合わせは少し変なように思われるかもしれないが、時雨はお茶好きで飲み物といったらお茶だった。

黙りこんでしまった時雨の顔をハルナは綺麗に澄んだ大きな瞳で覗き込んだ。

「テンチヨ、どうしたんですか?」

「……いや、あのさ、そろそろ、テンチヨ交代しない？」

「ダメですよお、交換条件なんですから」

「……はあ」

年老いた老人のように時雨は大きなため息をついた。時雨が雑貨店の店長をやっている理由には深い意味がありそうなのだが、この話はすぐに止められ他の話題に移ってしまった。

TVリモコンを手にとつて、時雨は電源ボタンを入れた。

高画質の液晶ディスプレイに女性キャスターの顔が映し出された。地上波の番組はこの時間、ニュース番組が多い。

TVをつけたが時雨は特に見たい番組があるわけでもない。

そこでハルナはTVリモコンを時雨の手から取り上げ、チャンネルを回す。ハルナが見たいのは子供向け番組だ。

朝放送されている子供向け番組でハルナが一番おもしろいと思つているのは、ローカルTV局である“TVT（テレビ帝都）”で放映中の昔のアニメの再放送である。

TVの画面には“うりゅっちゅ”と呼ばれる奇怪な容姿をしたキャラクターが描かれている。このうりゅっちゅの容姿は力バに白い天使の羽を生やしたような生物で、時雨はちつとも可愛いと思わないが、このうりゅっちゅは幼児に大変な人気がある。

うりゅっちゅは画面上で『うりゅっちゅ！』と鳴いているだけである。それ以外の行動はしない。だが、そんな映像をハルナは食い入るように見ている。

うりゅっちゅの人気の秘密は催眠効果によるものだという。

映像のBGMや『うりゅっちゅ！』という鳴き声のテンポから強弱、至るところに催眠術が使われている。そして、極めつけは、画面をコマ送りにするとわかるのだが、ある一定の間隔でうりゅっちゅの関連商品の広告が画面に混じっているのだ。人は知らない間に商品の情報を脳に焼き付けられているというわけだ。

うりゅっちゅの映像が突然消え、男性の顔が映し出された。それは臨時ニュースだった。

《臨時速報をお伝えします。今朝未明、一〇〇〇年以上もの歴史を誇り、帝都の重要文化財に指定されています神威神社が何者かによつて破壊されました。この事件による》 ニュースを聞いていた時雨の顔が蒼ざめた。

「さつき行つたばかりだよ」

「ニュースで命さんが重症だつて言ってますよ！ どうしましよう!？」

「あいつか……」

あいつ それは殺葵のことを指していた。これは時雨の大きな誤算であった。まさか、神威神社が襲われるとは思つても見なかった。

霧の中、殺葵が時雨の前に現れたこと その理由まではわからないが、だが、まさかあの後に神威神社が襲われようとは。殺葵 それは時雨の古い友人の名。ある日忽然と姿を消してしまった殺葵の名を時雨は今日まで忘却していた。

すれ違う寸前、時雨の耳元で殺葵が囁いた言葉、それは『私

は還つてみせる』の一言のみであつた。その言葉は時雨の心を戦慄させるに十分な内容だつた。だが、自分はなぜその言葉に強く反応してしまつたのか、重要な部分を時雨は思い出せずにいた。

今ここにいる時雨。その過去を知るものは誰もない。本人自身もだ。

時雨の記憶は帝都でハルナと出逢つたところからはじまつている。それ以前の記憶が時雨には全くないのだ。だから、殺葵があつた後、神威神社を襲うとは思ひもしなかつたのだ。だが、神威神社を破壊したのが殺葵だということを時雨は本能的に悟つた。

時雨の過去の記憶の鍵を握る人物に、自称時雨の妹と名乗る夏凜という人物がいるが、本当の妹なのかはわかつていない。その夏凜が言うには、長い間消息を絶つていた兄が突如帝都に帰つて来たのだと語る。

夏凜に昔話を散々聞かされた時雨であるが、それでも記憶は戻らなかつた。だが、時雨は殺葵と出逢い、何かを思い出そうとしていた。まるでそれは殺葵が時雨の記憶を解く唯一の鍵だつたように時雨の記憶を呼び覚ましつつある。

普段あまり見せない厳しい形相をした時雨は、朝食を摂り終らぬまま外に駆け出して行つた。向かう場所は神威神社だ。

すでに神威神社の前には人ごみができていた。報道陣や警察に騒ぎを駆けつけて来た野次馬が大勢いる。だが、神社は完全

封鎖され中には入ることができない。

遠くから神社のようすを見るが、それは酷い有様だった。全壊という言葉が相応しいように思える。本殿が瓦礫の山と化しているのだ。

時雨はどうしても命と話がしたかったのだが、どうにもこうにもいかない。人が多すぎて神社に近づけないうえに、完全封鎖されているので近づけたとしても入ることはできないだろう。困り果てている時雨のもとに銀色をしているソフトボール程の大きさの物体が飛んで来た。それは金属できておりスピーカーとカメラが取り付けてある。これは情報屋と呼ばれる職業の実力者である真^{マコト}の偵察用カメラだった。

宙に浮いたカメラは時雨の前で止まった。このカメラの動力は社会的にも認知されている“魔法”の力で動いている。

帝都にある有名な大学では魔導学と呼ばれる魔法を学ぶ学問を教える学部が存在するが、魔法は知識の上では誰もが学ぶことができるが、実践となると特別な天性の才能が必要らしく、魔法を使う職業である魔導士の数は少ない。

カメラのスピーカーから男の声が聞こえて来た。これが真の声だ。

《中に入れないで困っているようだな。料金を払ってもらえれば、あゝんなことやこゝんなことの極秘情報を教えてやるが？》

「自分で調べるからいい」

時雨はカメラを掴むと、遠くに投げ飛ばした。情報は欲しい

が、あの情報屋の料金は通常よりだいぶ高い。時雨は商人根性を持っており、金にはなかなかうるさいのだ。

人ごみをかき分け時雨は強引に最前列に向かった。そこには黄色いテープが張られており、怖い顔をした警察官も立っている。どうがんばっても中には入れてもらえそうもない。

ここで時雨は得意技を使うことにした。それは子犬のような潤んだ瞳で相手をお願いをすること。これがなかなか効果のあるのだ。

「あのおく、中に入れてくれないかなあ？」

子犬の瞳で警官を見つめる時雨。この帝都で一番美しいと言われる時雨に見つめられた警官は我を失いそうになった。この警官は男であったが、時雨の美しさは性別を超えるものなのだ。警官が時雨の誘惑に負けそうになったその時、警官の後ろから法衣を身に纏った女性が現れた。

「警官を誘惑してもらって困りますわ、帝都の天使さん」

鈴のような声の持ち主。この女性は帝都政府直属の魔導士軍団ワルキューレのひとりで、通称ファイアと呼ばれている。

帝都の重要文化財が破壊されただけでもただ事ではないというのに、そのうえ、帝都政府が直々に動いているとなると、この事件の陰には大きな何かがあると断言できる。

報道陣の前に姿を見せたファイアにカメラのフラッシュが大量に浴びせられる。そして、質問の嵐が巻き起こるが、ファイアは少し笑みを浮かべただけで、事件について何も語らずに姿を消してしまった。

時雨は黄色いテープを無理やり越えて中に入ろうとしたが、それが無理なことをすぐに悟って止めた。

この黄色いテープには魔法による特殊な加工が施されているために、内側からテープを外すまでは何人も入ることができないのだ。いわゆる、このテープは結界の役目をしているということだ。

しぶしぶ帰ろうとする時雨であったが、そんな彼に報道陣たちの視線が向けられた。もしかしたら、時雨がこの事件に関わっているのではないかと、報道陣は考えたのだ。

時雨の周りに群がる報道陣。

「ボクは事件と何の係わり合いもないですから」

そう言つて時雨は報道陣の間をかき分け逃げた。

走る時雨が向かう場所は自宅ではなかった。時雨が向かっている場所は駅だ。そこからある場所に行こうとしているのだ。

帝都を走る鉄道のほとんどは地下鉄であり、地上を走る鉄道も二年後には全て地下鉄になるという。

今時雨が向かっている駅を走る鉄道は地上を走っている。そのため、天災に弱く、去年の年末に大雪が降ったときは、駅は完全封鎖されてしまった。

駅で切符を購入する券売機のほとんどはキャッシュカード対応で、最近では硬貨を使って切符を買うものは少ない。その少ない中に時雨は入っている。

コートのポケットを探るように時雨は一枚の硬貨を取り出した。彼は財布というものを持ち歩いていないようだ。

帝都の鉄道は二〇〇円でほとんどの場所に行くことができる。だが、それは普通列車だ。特急や急行電車は別料金となっている。

電車に揺られ、時雨が到着した駅は『ツインタワービル前』。ツインタワーと呼ばれる二対のビルが近くにあることからその名前がつけられた駅だ。

この駅は多くの人々が利用するためにいくつかの路線が通っている。この駅からであれば乗り換えなしに帝都の主要な場所に行くことが可能だ。

駅から出るとすぐにバスターションがある。そこを横切つて横断歩道を渡った先には帝都公園と呼ばれる帝都一の公園があり、ツインタワーはその一角にある。そう、時雨の向かう先はそのツインタワービルだった。

高く聳え立つ二対のビルの階層数は共に一〇〇階。時雨の用があるのは二対のうちイーストビルと呼ばれるビルの四六階にオフィスを構える情報屋。そこは真と呼ばれる男のオフィスだった。

時雨がオフィスの中に入ると受付嬢がニッコリと微笑み軽く会釈をした。

「おはようございます、時雨様。今日は何の御用でしょうか？」

春爛漫の歌うような声がロビーを優しく包み込む。いつもならここで時雨は笑顔を返すところだが、今日は違った。

「真くんに用がある」

険しい表情をした時雨は受付嬢と顔も合わせずに部屋の奥に足早に向かって行こうとした。

「時雨様！ お待ちになつてください！」

受付嬢の静止に構うことなく時雨は真の部屋に入った。

ネズミ色の金属の壁に囲まれた部屋。部屋には無数のモニタ―と、床には無数のプラグ、そして何に使うのかまったく見当のつかない機械がゴロゴロとしていた。

身体と椅子を無数のプラグにより繋いでいる男　この男が真だ。

真は変な機械を頭から目元まですっぽりとかぶっている。そして、部屋の上空にはソフトボール位の金属製のボールが二つ、忙しなく動き回っている。これで真は外部の情報を見ているのだ。

「やはり来たか、時雨。何の情報か欲しいのかね？」

「ワルキューレが動いているみたいだけど、事件の背景は？」

「ぶりゆちゆ、ぴょんと、うりゆたりほー！」

真は突然奇怪な言葉を発した。彼は現実を逃避するために完全にトリップ状態に入ったのだ。

「真くん、今日のボクはマジだよ」

真剣な顔をしている時雨の顔が“見えて”いないのか、真は頭をガクガクと揺らし、どこかに飛んでいる。

揺れが止まり、真は深く息を吐いた。

「答えてもいいが、料金はいつもの二倍だ」

「いいよ」

「では、私にもわからん」

「……ふん」

殺意が湧いた。口は笑っているが時雨の腹は煮え繰り返っている。

「帝都の中枢コンピューターにも情報がないのだよ。つまり、この情報は完全に口伝や文書で動いている。用意周到なことだ」

真はこの帝都の情報を全て手に入れられると豪語している。その真に情報が掴めないということは、あの事件はトップシークレット中のトップシークレットとなる。

「真くんのわかる範囲でいいから」

「帝都にいるワルキューレは女帝の警護を除いて全員動いている。そして、エージェントも動いているな。それから、帝都タワーとメビウス時計台とイスラフィルの塔が異様なまでの警護下に置かれたようだ。シークレットにしては公な政府の動き、隠しきれないほどの大事ということだな。おっ、

新たな情報が今入った。特殊エージェントのひとりファウストとマナが一緒に動いているな。しまった、見つきりそうだ！」

突然停電が起きた。真の身体がぐったりとなる。そして、すぐに予備電源に切り替わった。

「にやばーん！……危なかった」

「情報はそれだけ？」

「途中で妨害にあった。誰の仕業かはわかっていないがな」

「じゃあ、料金は規定通りだね」

「一・五倍だ」

「一・二」

「仕方ない、一・三倍の料金だ」

「じゃあ、ボクは行くよ」

時雨は足早に部屋を後にして行った。その後、部屋からは奇怪な声が聴こえた。

帝都タワービル 帝都の観光パンフレットにも載っている帝都の観光名所の一つで、帝都一の高さを誇る三〇年前に建設された建造物である。

そのタワーの屋上にはビヤガーデンがあり、夜になると仕事帰りのサラリーマンやOLで賑わいを見せる。のだが、今日はビル内には人ひとりいない。その代わりビルの周りには警察などで埋め尽くされている。

封鎖されているのは帝都タワーだけではない。帝都タワーから半径一キロメートル全てが封鎖されている。こんなこと前代未聞だ。

地上、空中、地下、結界が張られておりどこからも侵入できない。もし、進入したとしてエージェントにすぐに発見されてしまうだろう。

時雨は警察の検問はこっそりと抜けることに成功した。問題はこの後の結界をどう抜けるかだ。

コートポケットを探り、時雨は筒状の物体を取り出した。これは時雨愛用の剣であった。しかし、この剣には柄しかない。

時雨の手から激しい光が弾け飛ぶように出た。剣に刃が出たのだ。その刃は光が集合してできているようだ。

妖刀村雨　古の名刀からその名を取ったこの剣は、魔導具と呼ばれる魔法で創られた剣なのだ。

華麗に舞い風を斬る。時雨の斬撃は空を切り裂いた。いや、そこにある見えない壁を切ったのだ。

結界が破られた。その隙間から時雨は中に進入する。

このままだとすぐにエーエージェントが時雨を捕らえに来るだろう。だが、どこに隠れようと結界の中に入れば意味がない。

時雨はふたりの人影に囲まれた。その二人は豪華絢爛な法衣で見を包んでいる。

「結界を抜けて忍び込むとは誰かと思えば、君か」

美麗な容姿を持った男は銀色の長い髪を風に揺らしながら時雨を見ていた。そして、時雨を取り囲んだもうひとりの人物はマナであった。

「あらん、時雨ちゃん。こんなところに何の用かしらあん？」

「ファウスト久しぶりだね。でも、マナが何でここにいるの？」

「質問を質問で返さないでくれるかしらん」

風が乱れる。ファウストは空間から蒼い魔玉の付いた杖を取り出した。

「残念だが、時雨君の質問を答える権利を私たちは与えられていない。だが、侵入者を駆除しろとは言われたが、見逃してはいけないとは言われていない。早々に出て行ってもらえると私

「たちは助かるのだが？」

「ヤダ」

はつきりとした口調で時雨の一言だけを述べた。それだけで十分だった。

蒼い魔玉が妖しい光を放った。

「おもしろい、このファウストと戦う気か？」

二人の間に殺伐とした空気が流れ、マナはその間に強引に割り込んだ。

「時雨ちゃん、ここであたしたちに掴まったらトラブルシューターのライセンスを取り消されちゃうわよおん」

「……それは困る」

あっさりとし時雨は剣を納め、ポケットの中にしまい込んだ。トラブルシューターのライセンスが取り消されると生活ができなくなる。時雨は経済的な人間だった。

ファウストが不敵な笑みを浮かべた。

「魔法通信が入ったぞ。敵が来たとのことだ」

魔法通信とは魔導士が連絡手段に使う方法の一つで、魔法にとつて通信を行い、機械などでは傍受が不可能とされている。

目には見えなかったがここにいた三人は感じる事ができた。結界が硝子のように弾け飛んだことを。

法衣を煌かせながらファウストは時雨に背を向けた。

「優先事項により、君の排除は保留だ。行くぞマナ」

空を飛び行ってしまったファウストを追うようにしてマナも飛んで行ってしまった。すぐに時雨はその後を追う。

空を飛ぶ二人のスピードは人間の足では到底追いつくことができず、姿を見失ってしまった。だが、どこに向かっているかはわかる。帝都タワーだ。

帝都タワー周辺にはエージェントとワルキューレが集結している。一般人はマナと時雨しかない。マナはファウストの弟子として、補佐役としてここにいるのだが、時雨は全くの部外者だ。

すぐに時雨は声をかけられてしまった。その声をかけた人物は時雨に今日二度目も声をかけている。

「あらあら、またあなたですの、帝都の天使さん」

「仲間に入れてもらえるところじゃないなあ」

惚けたようすの時雨に怒るでもなく、こちらも少し惚けたようすで言葉を返した。

「いいですわよ。でも、ライセンスは剥奪させていただきませうけど」

「……それは困る。でも、仲間外れも嫌だな」

「では、仲間に入りますの？」

「うん、入れて」

「では、魔法通信でみなさんに伝えておきますが、わたくしたちの邪魔だけはなさらずように気をつけてくださいね」

フィーアは妙にあっさりしていた。この裏には何かあるのかもしれない。

微笑を絶やさずに時雨の対応をしていたフィーアの眉がびくりと動いた。

「帝都の敵が来ましたわ」

全員の視線が一点に集中される。そこにいたのは殺葵だった。時雨の妖刀に似ている剣を持ち、殺葵は優美な足取りでこちらに近づいて来る。その足取りはゆったりとしているが、進んでいる距離は妙に早い。普通の人間に成しえる業ではない。

誰にも聞こえない声で殺葵は呟いた。

「私は還る　楽園に」

次の瞬間、ワルキューレたちによる猛攻が始まった。

現在ここにいるワルキューレの人数は三名、それに加えて帝都政府のエージェントが二名。女帝の護衛をしているひとりのワルキューレを除き、帝都にいるワルキューレ全員がここに集結している。

ワルキューレに加えて、ここには帝都政府のエージェントも召集されている。エージェントの数は全員で一三名、だがここにいるのは二名だけである。二名しか来られなかったのではなく、あえて二名しか呼ばなかったのであるその理由は相手と戦う気が帝都政府にはないからだ。

帝都政府は殺葵のしようとしていることを止めようとしていないのだ。むしろ、協力しようとしているようにも思える。その真意は何か？

魔人の如き禍々しい気を放ち散らしながら、殺葵は地面を踏みしめ帝都タワーに近づいて行く。その殺葵が通る道を作るようにして、ワルキューレたちやエージェントたちが左右に分か

れる。

時雨は激怒した。

「なんでみんな奴を止めないんだ!? あいつはこの帝都タワーを壊す気なんだろ!」

村雨を構え、時雨は殺葵にひとり果敢にも立ち向かって行った。彼を止める者は誰一人としていなかった。皆、傍観者に徹しているのだ。

光の粒子が村雨の切っ先からほとばしる。剣と剣が噛み合い光が弾け飛び、時雨と殺葵は互いを睨み合った。

殺葵は剣を片手で持ち、時雨の放った剣技を受け止めたのだ。それに対して時雨は両手で剣の柄を力強く握り締め、腕が震えている。力の差は傍目からも歴然としていた。

爆風が巻き起こり、時雨の身体が大きく後方に飛ばされた。殺葵が剣で時雨の身体を押し飛ばしながら舞ったのだ。

地面に膝を突く時雨にマナが駆け寄ろうとしたが、マナの身体はファウストの手によって静止させられた。

「私たちは手を貸してはならない。上の許可が下りるまで見ていることしかできない」

マナはファウストに反論しようと彼の顔を見上げた。すると、ファウストは歯を喰いしばりながら鋭い目で殺葵を見ていた。

「お師匠様……」

小さく呟きマナはその場に押し留まった。ファウストもまた自分と同じように助けたいのを我慢しているのだから。が、ファウストは堪え性ではなかった。

「……敵を目の前にして、この大魔導士ヨハン・ファウストが黙っていられるわけがないだろう！」

疾風の如く速さで低空飛行しファウストは殺葵に向かって行った。

「お師匠様！」

マナの静止もファウストの耳には入らないようだ。

光り輝く妖刀を構え直し時雨は殺葵に向かって行こうとしたのだが、その後ろから猛スピードでファウストが時雨を抜かしに行った。

「ナイト！」

大声を出したファウストの背中から白い蒸気が立ち上がり、それは甲冑を纏った半透明の騎士へと変わったファウストは体内に幾つもの精霊を封じ込めて置き、それをいつでも自由に操ることができるのだ。

輝き煌くナイトはレイピアの切っ先を殺葵に向けて猪突猛進して行く。

剣を振りかざし殺葵が舞うと同時に風の刃が巻き起こり、ナイトに向かってその刃を向ける。だが、風の刃は甲冑によって防御され、ナイトは臆することなく突き進む。

殺葵の唇が少し緩んだ。

「妖刀殺羅の糧となれ」

残像を残しながら殺葵が素早く動く。殺羅の切っ先は一直線にナイトに突きたてられた。

殺葵の放った剣技は甲冑をも貫いた。だが、ナイトのレイピ

アもまた、殺葵の肩を貫いていた。

レイピアを伝って紅い鮮血が地面に滴り落ちる。しかし、無表情な殺葵の口は嗤うらっている。

ナイトの身体が突然ぐしゃりと潰れるように縮み、妖刀に吸収されてしまった。殺葵の言葉通り、ナイトは妖刀殺羅の糧となり、そして殺葵の力となった。

レイピアによって空けられた肩の穴が見る見るうちに塞がっていく。傷口は完全に塞がってしまった。服が破れているくらいで傷痕は全くない。

背後からの気配。殺葵は妖刀を横に振りながら後ろからの攻撃を防いだ。

「甘いな時雨。剣の腕が落ちたのではないか？」

「さあ？ 記憶喪失で昔のことなんて知らないよ」

相手との間合いを取って再び攻撃を仕掛けようとした時雨を大声でファウストが静止させた。

「退け時雨！」

巨大な翼を持つ半透明の女性。新たなファウストの精霊だ。

伝説のセイレーンのような容姿を持ったその精霊は、声にならない咆哮を高らかにあげた。音の塊が空間を歪ませ波打たせ、殺葵に襲い掛かる。

音の壁は円筒形の筒のように殺葵の身体を封じ込め、その壁は殺葵の身体を押しつぶそうとする。だが、殺葵は余裕だ。

風が唸り声をあげ、妖刀殺羅の刃が音の壁を粉々に砕いた。その時に音はまるで硝子の壁が粉々に砕けるような音だった。

精霊の次の攻撃が殺葵に襲い掛かる。

翼をためかせた精霊の翼から、幾本もの羽根が剣のように発射された。

妖刀殺羅は唸り声をあげた。それはまるで妖刀が生きているかのような唸り声だった。そう、殺羅は自らの糧を欲しているのだ。

放たれた羽根は全て妖刀によって防がれて、殺羅の糧となつてしまった。

精霊は怒りの感情を露わにして殺葵に向かって行こうとしたのだが、それが不意に止まった。止めたのはファウストの意志ではない。妨害者が現れたからだ。

法衣を身に纏った女性　　ファーアが精霊の前に立ちほだかつたのだ。

「ファウスト、もう十分でしょう。お気がお済みになったのなら、これ以上相手に“力”を与えるようなまねはなさないでください」

精霊はファウストの身体に戻って行った。そのファウストの表情はとても悔しそうだ。だが、このまま戦っていても、あの妖刀をどうにかしない限りは、相手に力を与えるだけである。

フィーアの身体が霞んだと思つた刹那、フィーアはすでにファウストの横にいて、彼の耳元で小さく呟いた。

「エージェントのライセンスを一時的に剥奪いたします」

「……………」

いつものファウストならば、ここで皮肉の一つも相手に言う

のだが、今回はここで押し留まった。しかし、ファウストの頭の中ではある考えが浮かんでいた

再び戦いは一對一の戦いになった。時雨VS殺葵、それは村雨VS殺羅の戦いでもあった。

村雨が大きく殺葵の頭上に振り下ろされる。だが、殺葵の方が早かった。

腕を上げ隙のできた時雨の腹に殺羅が突き刺さる。切っ先は柔らかい肌を突き、背中を貫いた。

「ぐはっ……」

「儂いな、時雨よ。おまえは何故そんなにも衰えてしまったのだ……」

妖刀が抜かれ血が噴出し、時雨は地面に膝を突き倒れた。

友を斬り、その力を吸収した殺葵は再び帝都タワーに向かって歩き出した。その歩みを止まる者は誰もいない。誰もが傍観者に徹しているのだ。

殺葵の足が帝都タワーの目の前で止められた。帝都タワーを見上げ、そして、彼は殺羅を地面に突き刺した。すると、地面が大きく揺れ、コンクリートにひびが入り、帝都タワーが倒壊しだしたではないか!?

殺羅は鍵の役目をしていた。その鍵を差し込むことによって、地脈のエネルギーに影響を与え、帝都タワーを倒壊させたのだ。ワルキューレたちはタワー倒壊の被害を最小限に留めるために、帝都タワー全体を結界によって封じ込めた。これで破片や煙が外に出ることはない。

帝都タワーは瓦礫の山となり、殺葵はこの場から姿をくらませた。誰も殺葵を追うものはいない。だが、なぜ帝都政府は殺葵の横暴を見過ごすのか？

殺葵の目的とは？ 帝都政府の目的とは、いったい？

ワルキューレたちが撤収する中、マナは地面に倒れている時雨のもとへ駆け寄った。

「時雨ちゃん、大丈夫かしらぁん？」

声をかけても返事がない。揺さぶってみると、少し反応があった。

「ちよつと、キツイ……」

声が出せるようであれば、重症ではあるが、時雨にしてみれば今までの経験上、軽い怪我に属すると言える。時雨はそれほどまでに修羅場をいくつも掻い潜って来たのだ。

「時雨ちゃん、あたしは仕事が残ってるから行くわねえん」

「……薄情者」

「あらぁん、何か言ったかしら？」

「……いえ、別に」

時雨を残しマナは本当にこの場を去ってしまった。普通の間ならば取らない行動だが、マナは普通ではない。

残された時雨は青空を見上げた。

「あはは、青いな。……ちよつと、意識が朦朧としてきた」

腹を押さえながら時雨はよるめきながら立ち上がると、ふらふらと危ない足取りで歩き出した。そして、ぼやく。

「あいつら全員、薄情者だ」

あいつらの中には帝都政府の人間も入っている。

死の淵を彷徨いながらも時雨は自らタクシーを拾って、病院へと急いだ。車中での時雨の記憶はほとんどない。彼が覚えていたことといえば、川の向こうの綺麗な花畑で金髪の美女が自分を呼んでいたくらいだ。

タクシーは帝都一の異質な病院　帝都病院の前で止まった。時雨はタクシーの運転手に肩を借りながら病院の中に入り、ケチな時雨はチップを上乗せしてタクシー料金を払い、運転手と別れた。“肩を貸して”くれたタクシー運転手が、今の時雨には救いの神のように思えたのだ。ちょっとしたマナたちへの反発心である。

担架に乗せられ、時雨は手術室へとすぐさま運ばれた。その手術室は特別な手術室で、この病院の院長のみが使用する手術室だ。

手術台の上に乗せられた時雨にはひとりの看護婦が付き添っている。彼女は時雨に優しい態度で察してくれて、止血の処理を素早くやってくれた。今の時雨にはまさに白衣の天使に見える。ている。

が、肝心の院長が来ない。時雨が普通の人間であれば、とっくに出血多量で死んでいるほど待たされている。実際は輸血をされているので血は減らないが、それでも傷口はまだ開いたまままだ。

あまりにも遅い院長に対して、時雨を小さな声で吐き捨てる

ように呟いた。

「……ヤブ医者」

「何か言ったか時雨？」

ぎよつとした時雨の視線の先には院長が立っていた。

この病院の院長の名は蜿。白衣と白いフードに身を包み、顔には仮面を被っている。この院長は素顔や素肌を人に見えることが全くないのだ。

不気味な格好をした院長の仮面の奥からくぐもった声が聞こえる。

「少し体調が優れなくなって……」

蜿の息は少し荒いように思える。それは仮面をつけて息がしにくいわけではなく、ここに来る前にあることをして来たからだ。

「医者が体調悪くて、どうするのさ？」

「うるさい、患者は黙ってやがれ」

蜿の左手が時雨の腹にかざされた。この行為は通称“スキヤン”と呼ばれており、蜿は左手を何にかざすことにより、その内部を読み取ることができるのだ。

「綺麗な切り口だな」

そう呟くと蜿は次に右手を時雨の腹にかざした。すると傷口は一瞬にして塞がってしまった。蜿の右手には傷を癒やす力が宿っているのだ。

大きな息をついて蜿は床にあぐらをかいて座り込んでしまった。

「身体がだるい、クソツ、あの程度の治療で立てなくなっちゃまった」

“右手”による怪我の治療には体力を多く消費する。だが、普段の蜿ならば今と同じ治療を一〇〇回行ったとしても平気だ。今日はいつもと違うのだ。

「どうしたの、今日はだいぶ息が荒いけど？」

体調を回復した時雨は手術台から飛び降りると蜿の顔を覗き込んだ。

「おまえには関係ないことだ」

「……ケチ」

「うるさい、健康な奴はさつさと病院を出てけ。さもないとメスで切り刻むぞ！」

医者の発言としてはチグハグであるが、蜿とはこういう人間だ。

「はあ、じゃあね」

時雨は呆れた顔をして手術室を自らの足で出て行つた。

残された蜿は自らの足で立ち上がることもできなかった。

「おい、院長室まで肩を貸せ」

「はい？」

「肩を貸せと言ってるだろ、耳が悪いのかおまえは！」

院長が他人の力を借りるなどそうあることではなかった。立ち上がれなくて看護婦を借りるなど前代未聞名ことである。

あまりのことに看護婦は自分がなにを要求されているのか最初は呑み込めなかったが、すぐに慌てた表情をして蜿に肩を貸

した。

看護婦に肩を借りて歩く院長の姿を見て、この病院のスタッフは皆丸い目をして凝視してしまった。そして、誰もが思った、この帝都に何か大きな事件でも起こるのではないかと……。

帝都に起きている異変。そのことに気づいている者はまだ少ない。

神威神社と帝都タワーの全壊。このニュースは帝都民を震撼させるニュースではあるが、所詮は他人事であつた。

帝都では、生物兵器が逃げ出し帝都警察と大攻防戦をするこ
とや、犯罪者たちが銃を乱射するなどよくあることだ。ビルが
何者かの手によって破壊されることもある。それが今回は神威
神社と帝都タワーで起きたに過ぎない。

だが、これはまだ序章でしか過ぎない出来事であつた。帝都
は確実に闇に包まれようとしていた。

病院から出るとすぐに時雨はコートのポケット探つた。電話
がかかつてきたのだ。

ケータイのディスプレイに表示された名は“紅葉” 帝都

大学の教授の名である。

「もしもし、紅葉い？」

《至急来い》

「……他に言うことないの、久しぶりとかさあ？」

《久しぶりだ》

全く感情のこもってない機械的な挨拶だつた。

「ヤダよ〜んだ、ボク忙しいんだから」

《いいから来い。場所は帝都地下遺跡だ》

「地下遺跡って、あの地下遺跡？」

《そうだ、君と以前行つた遺跡だ。では、遺跡入り口で待つて
いる》

そこで電話は一方的に切られた。

待つていると言われたら行かなくてはならない。これは強制的で、もし行かなかつたらどんな目に遭わされるかわからない。紅葉の言つていた遺跡とは、今年の一月に帝都の地下で発見された古代遺跡のことだ。そこで時雨は行方不明者探しの依頼を受けたのだつた。

遺跡での事件は解決されたが、時雨はこの遺跡が何の遺跡なのか知らされていない。この遺跡の調査を帝都政府から依頼されていたのが紅葉で、彼は今日まで遺跡の調査を進めてきていたのだ。

地下遺跡の入り口はビル街にあり、新たなビルを建てるために地下を掘り返したところ、偶然地下遺跡が発見されたのだ

この遺跡は実際には帝都の地下にあるわけではなく、別の場所にあるのだと言われており。ここにある地上からの入り口は、空間のねじれによつて地下の遺跡と繋がつていなのだ

広い空き地に時雨が到着すると、そこで紅葉が迎えた。

白衣の麗人の長い黒髪が風に戯れて波を打つた。

「遅いぞ」

「これでも早く来たつもりだよ」

これは本当だった。タクシーの運転手に行つて、ムリして車を飛ばしてここまで来たのだ。

「では、行くぞ」

「はあ？」

有無も言わず紅葉はさつさと時雨に背を向け歩き出してしまった。

「はあ」

時雨はため息をつきながら紅葉の後を追つた。

この遺跡は帝都政府の嚴重な警備下に置かれ、二四時間体制で政府の人間が警護を行っている。

遺跡の中には簡易巨大エレベーターで下りる。

ガタガタと身体が小刻みに揺れ、最後にガタンと大きく揺れてエレベーターは止まつた。

「おおっと」

あられない声を出しながら時雨はバランスを崩しまつた。前回ここに来た時も同じことをして、紅葉にさつさと置かれて行かれてしまつた。今回もそうだ。

「行くぞ」

紅葉は時雨のことなど構いもせず足早に歩いて行つてしまつた。

遺跡の壁は魔法が施されているらしく、常にほのかな光を放っている。

この遺跡には数多くのトラップが仕掛けられており、そのほとんどは解除されているが、まだ解除されていないものがある

かもしれない。前回来た時は、解除されているということになっていたが、実際はいくつかのトラップが残っていた。だから今回もあるかもしれない。

一ヶ月以上もの調査により紅葉はこの遺跡の構造を熟知したらしく、迷うことなくある場所に向かって行く。そのある場所とは遺跡内に建てられている神殿である。

石段を一步一歩上がって行くと、そこには大きなオリハルコン製の門があり、その左脇には大鷲、右脇には大狼の石像があった。石像になっている大狼はこの神殿を守っていた者の彫像だ。

神殿の中に入った二人を出迎えたのは、鷲の翼を生やした男だった。茶色い布を身に纏うこの男の腰には剣が装備されている。

「お待ちしていました。そちらが時雨様ですね。わたくしはこの神殿を守る 名も無き守護者 です」

名も無き守護者 は妖艶な笑みを浮かべた。この男、いつか出逢った“大狼”に雰囲気が似ている。

警戒心を抱く時雨に対して、名も無き守護者 はゆっくりとした歩調で近づいて来る。

「恐い顔をしないでください、危害を加えるつもりはありませんから」

「あのさあ、なんでボクはここに呼ばれたのかな、ねえ紅葉？」

口調にも表情にも怒りはない。だが、時雨は少しご機嫌斜め

だった。言うまでもないが、怒りの矛先は紅葉だ。

「彼が君に用があるそうだ」

華麗に紅葉は責任転嫁をして、時雨の視線を名も無き守護者に向けさせた。

「申しわけありません。時雨様を紅葉様に呼んでいただいたのはわたくしです」

「だから、なんでさあ？」

「では、お話しいたしましょう」

名も無き守護者 は神妙な面持ちで話しはじめた。

「この神殿は本来、ある者を封じるためのものでした。ですが、ある時、神殿をアポリオンという悪魔に乗っ取られてしまったのです。守護者としてわたくしは失格です」

以前時雨がこの神殿を訪れた時、紅葉の身体を乗っ取ったアポリオンと戦っている。そして、強敵ではあったが、「何故か」倒すことができたのだ。

突然 名も無き守護者 の身体に異変が生じた。名も無き守護者 の身体が閃光に包まれ、その中から 大鷹 が現れた。そう、これが 名も無く守護者 の正体だ。

「これがわたくしの真の姿。そして、守護者はもうひとりいません」

「あの大狼でしょ？」

時雨の予想は当たり、大鷹 大きく頭を頷かせた。

「その通りです。ですが、もうひとりの守護者はアポリオンに操られ、わたくしは畏に落ちて封じ込められてしまいました。」

そして、ここに封じ込めていた者が外の世界に出て行ってしまいました。その名を殺葵」

この神殿はアポリオンの神殿ではなく、殺葵を封じ込めていた神殿だったのだ。

「わたくしは紅葉様によって封印を解かれ、どうにか外の世界に出て来れました。そして、これからわたくしのするべきことは殺葵の封印です。その手伝いを時雨様にはしてもらいたいです」

「なんでボクが？」

「時雨様の身体にはもうひとりの守護者が宿っています」

「ボクの身体に？」

「そうです。時雨様、少しの間じっとしててください」

「なんで？」

答えは行動で示された。突然 大鷹 がその大きな翼を広げたとおもうと、時雨の身体を翼で包み隠したのだ。

突然のことに時雨は抵抗しようとしたが、結局何もできなかった。翼には魔力がこもっており、時雨の意識を空にしてしまったのだ。

大鷹 の目が大きく見開かれ、時雨は翼から解放された。「困ったことになりました」

小さな声で呟いた大鷹の表情は曇りを浮かべている。これに對して紅葉はわかっていたように言う。

「やはりな。時雨の身体に溶けすぎていて、抽出できないのだから？」

「そのようです」

大鷹 のしようとしたこと それはもうひとりの守護者
大狼 の抽出。時雨の身体に入り込んでいる 大狼 を抽出
して復元するつもりだったのだ。しかし、大狼 はすでに時
雨に吸収されていて、抽出が不可能となっていた。

ふらふらしていた時雨の意識が戻ってきた。

「何したの今？」

「君の中に入っていた守護者を取り出そうとして失敗したの
だ」

「ふ〜ん」

理解したようで理解していない時雨。

大鷹 はまた人間の姿に戻った。

「時雨様の身体にもうひとりの守護者の力が宿っていることは
確かなようです。ですから、わたくしと共に時雨様には殺葵の
封印をしてもらいたのですが？」

「ええ〜っ、めんどくさいなあ。でも仕方ないか」

仕方ないというのは紅葉の顔色を窺つての発言だ。紅葉は時
雨を睨んでいたのだ。

「では、さっそく殺葵を封じに行きましよう、と言いたいところ
なのですが、殺葵を封じるための魔導書がこの遺跡から何者
かによって盗まれてしまったのです」

魔導書が盗まれた。この言葉に時雨と紅葉はある人物の名を
同時に思い浮かべた。その名はマナ。

「その件については私が引き受けよう。時雨はこの守護者と共

に殺葵のもとへ行け」

「紅葉様には何者が盗んだのか、心当たりがおありなのですか!?」

紅葉は時雨と顔を見合わせて苦笑した。この二人はマナが魔導書を持ち去ったのを見ていたわけではないが、マナが持ち去ったという確信はあった。

この後、三人は遺跡を出て、時雨と 大鷹 殺葵のもとへ、そして紅葉はマナを探しに行った。

ファウストがエージェントの資格を一時的に剥奪されたため、ファウストの補佐として今回の事件に関わっていたマナも事件から身を引くことになった。

帝都某所にある巨大な洋館がマナの住まいだ。ここでマナはメイドの機械仕掛けの人形とふたりで暮らしている。

「マスター、紅茶を御持ち致しました」

ゴシック調のドレスを着た金髪の少女が紅茶を持ってマナの前に現れた。この少女が機械仕掛けのメイド アリスだ。

「マスター、紅茶を御持ち致しました」

返事がなかった。

マナはテラスで椅子に座り、テーブルに突っ伏していた。そんなマナをアリスの魔力のこもった蒼い瞳がマナの顔を覗き込む。アリスの表情は普段は無表情なはずなのだが、この時は少し、不機嫌そうな顔をしているような気がする。

「紅茶をお持ち致しました」

「適当なところに置いておいてくれるかしらぁん」

テーブルに突っ伏しながら、マナはくぐもった声でやっと返事をした。

自分の方を見向きもしない主人に反抗心を抱いたのが、アリスは主人に言われたとおり「適当」なところに紅茶を置いて去って行った。

少し経ってマナは紅茶を飲もうと顔をあげた。だが、紅茶が見当たらない。適当な場所〓テーブルの上にあるはずの紅茶がないのだ。

紅茶は床の上に置いてあった。アリスは主人の言いつけどおりに「適当」な場所に置いたのだ。

「……後でいびつて差し上げるわぁん」

アリスはマナに対して反抗的であり、マナもアリスをねちねちと苛めるのを趣味としていた。この二人の仲は最悪だった。

紅茶を飲みながらマナが読書をしていると、再びアリスが現れた。

「マスター、御客様で御座います」

「誰かしらぁん？」

黒いドレスを着た少女の後ろには白衣の男がいた。そう、紅葉だ。

「君の所有している本に用があつて参上した」

「あらぁん、紅葉ちゃん久しぶり」

アリスはマナの前の席の椅子を引いて、

「紅葉様、どうぞ御座り下さいませ」

「ありがとう」

席についた紅葉にすぐさまマナは疑いの眼差しで凝視された。

「どうかしたのかしらあん？」

「盗んだ魔導書を返してもらおう」

「あらあん、あたし、紅葉ちゃんから何も盗んでいないわ。そんな言いばかりよしてくれないかしらあん」

「私の所有物ではない。現所有者は帝都政府ということになっているが、本来の持ち主がそれを火急的に必要としている。帝都地下遺跡で盗んだ魔導書を出したまえ」

「……記憶にないわねえ」

マナは完全にとぼけるつもりだった。何せ証拠がないのだから。だが、紅葉は確信で動いている。

「記憶になくとも、君が盗んだことは事実だ」

「だったら、家中探して見つけたらあん？」

不敵な笑みを浮かべるマナ。魔導書が絶対見つからないという自信があるのだ。魔導書は異空間に保存されおり、普通の方法ではマナ以外の人間には取り出せないようになっていているからだ。

「その表情から察するに、私には到底探せない場所にあるということだな？ つまり、君の異空間にその魔導書はあると考えるのが自然だろう」

「ギクツ……さあ、どうかしらあん？」

紅葉の鋭い指摘にマナは明らかに慌てた。マナは嘘をつくのが苦手なのだ。

魔導書がどこに保管されているのかはわかったが、紅葉には何の手立てもなしに魔導書を手に入れることは、現時点では不可能だった。

「私は君の異空間からものを取り出す手立てはない」

マナは紅葉の言葉に安堵の表情を浮かべた。

「だが、できないこともない」

これは紅葉の言葉ではなかった。第三者の言葉である。

第三者の顔を見たマナの表情を曇る。

「紅葉君、久しぶりだ」

そこに立っていたのはマナの師匠であるヨハン・ファウストだった。

「ここで二人の話は失礼だが立ち聞きさせてもらった。私ならば、マナの異空間からものを取り出すことが容易くできるが？」

「お師匠様、立ち聞きなんて下品なことなさらなくてくださいますか？」

マナの口調は師に対しては変わる。いつもより丁寧になるのだ。

「我が弟子として、私がここに立っていたことにも気づかない方が問題だ」

相手を見下すような笑いを浮かべるファウスト。これに対してマナは全く反論できなかった。

師が近くにいたことに気づかなかつたのは事実である。ファウストはマナよりも高位の魔導士であると共に、弟子であるマ

ナにも計り知れない魔力秘めていた。

飲みかけの紅茶を飲み干したマナは急に立ち上がった。

「そうだったわ、急用があつたんだったわ。ねえアリス？」

この場から逃げるべく、マナは片隅でじっと立っていたアリスに助けを求めた。だが、アリスは無表情な顔で冷たく言い放った。

「何も御予定は御座いません」

仲の悪さがこんな時に仇となった。

逃げようと走ったマナの前に紅葉が立ちはだかる。

「何も予定はないそうだが？」

「ちよつと、トイレに……」

素早く後ろを振り返り逃げようとしたマナだったが、そこにはファウストが立っていた。

「魔導書を出したまえ。さもないと、お仕置きだ」

観念したマナは両手を上げ、自分の周りに大量な魔導書を異空間から出した。

「あの遺跡から持ち出したのはこれだけよあんな」

おそらく三〇冊くらいだろう。この中に探している魔導書がある。

魔導書を一瞥したファウストは次に紅葉に視線を向けた。

「ところで紅葉君。なぜ魔導書が必要なのかな？」

「殺葵とやらを封じるために必要なのだ」

「ほほう、それはおもしろい」

不純な笑みを浮かべるファウスト。マナも殺葵という名前に

「反応して眉をひそめた。」

数ある魔導書の中から紅葉は一冊の魔導書を手に取った。その分厚い魔導書の表紙には狼と鷹が描かれていた。

「どうやらこれのようだ。ところでマナはこの中身を読んだのかな？」

紅葉の問われたマナは首を横に振った。

「読まなかったわ、表紙すら開けられなかったのよ」

遺跡から持ち出した魔導書で唯一マナが読むことができなかった魔導書。魔導書には封印が架けてあり、マナの力では開くことができなかったのだ。

目当ての魔導書は見つかった。後はこれを時雨たちのもとへ届けるだけだ。

帝都第二の大きさを誇るエデン公園。この公園は帝都の中心に位置し、その公園の東にはメビウス時計台という建物が建っている。

今、エデン公園は帝都政府による厳戒な警備が行われていた。

「また、あなたですか　帝都の天使さん」

フェアアはにっこりと笑った。彼女の目の前に現れたのは時雨と　大鷹　だった。

「仲間に入れてくれないかなあ？」

ふあふあした惚けたような口調の時雨にフェアアはうなずいて見せた。

「いいでしょう。ですが、今回はわたくしどもも戦います」

前回は殺葵の襲来を見ているだけであつた帝都政府だが、今回は殺葵と戦うというのだ。前回と今回、いったい何がそうさせたのか？

「ボクには連れがいるんだけど、この人も一緒に戦っていないかな？」

「殺葵を封印していた神殿の名も無き守護者です」

頭を深々と下げ挨拶をした 大鷹 だが、ファアアはこの人物が何者なのかすでに知っていた。

「存じておりますわ。殺葵の封印されし神殿の守護者ですね？」

「わたくしのことをご存知なのですか？」

「ええ、全て知っております」

不敵な笑みを浮かべたフィーア。その心の奥底には何か秘めていた。

「ですから、帝都政府は時雨さんとこの方のバックアップをいたします。がんばって殺葵を封じてくださいね」

封じる それは端から殺葵を抹殺する気が帝都政府にはないということ。世界最強と謳われるワルキューレたちでも殺葵を倒すことは難しいのか、それとも別に……？

フィーアに連れられ時雨たちは巨大な時計台の前まで来た。このメビウス時計台の前で殺葵を向かい撃つのだ。

メビウス時計台の警護をしているのはファアアを含めてワルキューレが三人だけであつた。時雨と 大鷹 を加えても全員で五名にしか満たない。相手は神威神社と帝都タワーを全壊さ

れた相手なのにだ。

「ヤル気ないでしょ？」

思わず時雨はフィアに聞いてしまった。だが、フィアは首をゆつくりと横に振った

「滅相ありませんわ。これで十分です」

ワルキューレが三人もいれば心配ないという自信の表れか、それとも別に策があるともいうのか。

一瞬にして辺りを凍りつかせる禍々しい殺気が立ち込めた。殺葵が近づいて来ているが、見なくとも誰にでもわかった。

封印を解かれた魔剣士殺葵。彼は妖刀を構え、風と共に現れた。

ワルキューレたちは時計台を守るように立ちはだかり、その前方には時雨と 大鷹 が立ちはだかった。

魔導書はまだ届いていない。どうする時雨よ？

剣を抜くのみであった。妖刀村雨が辺りを照らし、時雨は正眼の構えを取り、相手の目の高さに剣先を向けた。

二人が風を切り走る。光がほとばしり、閃光がぶつかり合う。妖刀同士の戦い。村雨が勝つか、殺羅が勝つか。時雨が勝つか、殺葵が勝つか？

帝都タワー前では殺葵に全く歯が立たなかった時雨だが、今度は違う。

二人の剣士は交じり合う互いの剣を同時に押し離し、後方に飛んだ。

村雨を横に振りながら時雨が宙を舞う。光の粒が辺りに飛び

散り殺葵を襲うが、殺羅がそれを力強く受け止める。剣は武器であり楯でもあるのだ。

大鷹 は翼を大きく羽ばたかせ風の刃を発生させた。その刃の先には時雨と向かい合殺葵がいる。

後ろから風の刃が迫り来るが、殺葵は時雨と対峙しており動くことができなかつた。だが、殺葵は動いた。

足が蹴り上げられ時雨の顔を掠めた。殺葵は相手の剣を自らの剣で防ぎながら、蹴りを相手に喰らわそうとしたのだ。

蹴りを避けた時雨に隙ができる。その間に殺葵は風の刃に向かって走つた。いや、違う風の刃の先にいる者に剣を向けるつもりなのだ。

風の刃が殺葵の肩を切り裂き血が流れるが、彼は何事もないように走り続ける。

妖刀が地面を擦りながら上に斬り上げられた。風が唸る。

大鷹 は間一髪のところを上空に舞が立ったが、殺葵は逃がさない。

上空一五メートルの距離を殺葵は地面を蹴り上げ軽々と飛翔した。

地面から襲い掛かってくる殺葵に 大鷹 は翼を大きく動かし爆風を浴びせる。それによつて殺葵に身体は急激に地面に吸い込まれるように落ちていった。

地面を砕き、膝を突き、手を突き、殺葵は見事地面に着地をした。

殺葵には休む暇などなかつた。膝を突いている殺葵に時雨の

剣技が炸裂する。

輝く光が殺葵の頭上に振り下ろされるが、これで仕留められるほど殺葵は弱くはない。殺葵は防御するでもなく、頭上に振り下ろされる剣よりも早く、自らの剣を横に振るった。

妖刀殺羅の切っ先が時雨の腹の辺りの布を切り裂いた。それだけで、妖刀に力を持っていかれてしまったような気がする。

飛来する 大鷹 の手には大剣が握られていた。このまま殺葵を串刺しにするつもりなのだ。だが、なんと殺葵は空いている手でそれを受け止めてしまったではないか！

「このようなナマクラでは、私は仕留められん」

大剣握る手からは鮮血が滲み出し、地面に滴り落ちていた。体勢を立て直すべく、剣を殺葵に向けていた時雨の後方から大声が浴びせられた。

「受け取れ時雨！」

分厚い魔導書が投げられた。それは見事時雨の後頭部に命中。「痛いっ！ 紅葉、ボクを殺す気！」

頭を押さえながら時雨が振り向いたその先には紅葉、そして、マナとファウストが立っていた。

「時雨ちゃん、助けに来てあげたわよおん」

腰に手を当てる仁王立ちするマナ。必要以上に彼女の態度はデカイ。

魔導書を手を取った時雨であったが、開けない。ページが開けなかった。

「これって、どうして？」

「時雨様、こちらに投げてください！」

大鷹 はそう言うが、彼は今殺葵と対峙していて、投げても受け取れるとは到底思えなかった。

殺葵の気をこちらに向けなくてはいけない、と考えた時雨は剣を構えて走り出そうとしたのだが、戦いがはじまってだいぶ経って、時雨はある重大なことに気がついた。帝都政府は誰ひとり動く気配がない。

時雨は村雨を構えながら後ろを振り向いて声をあげた。

「戦うって言ったの嘘だったわけ!？」

「いいえ、嘘ではありませんわ。メビウス時計台もしくは帝都政府に危害が及ぼされた場合は戦います」

ファアアの言葉を聞いてファウストは悪魔の笑みを浮かべた。「エージェントの資格を一時剥奪されたこと、それは帝都政府の狙いなのだとは私は解釈した」

凄まじい魔力がファウストの身体の周りで渦を巻き、爆風を巻き起こす。彼は全力で殺葵を叩きのめす気だ。

空間から取り出された杖に取り付けられた蒼い魔玉が妖しく輝く。

「ダークドラゴン！」

高らかに声をあげたファウストの背中から霧が立ち上がり、それは巨大なドラゴンと化した

怒号の咆哮をあげるドラゴンの牙は鋭く輝いていた。そのドラゴンが大きく羽ばたくと激しい風が巻き起こり、ここにある全てのものが大きく吹き飛ばされそうになった。

足を踏ん張りながら時雨はドラゴンが殺戮に襲い掛かるのを見た。それを確認した後、すぐさま 大鷹 のもとへと疾走した。

大鷹 の手に渡った魔導書はついにその表紙を開けた。開かれたページには何も書かれていなかった 否、人間の目には見えないだけだ。

「時雨様、わたくしと共に呪文の詠唱をお願いします」

「呪文ってどんな？」

「ここに書いてある呪文です」

「……どこに？」

時雨には白紙のページを指差しているようにしか見えなかった。

「よく目を凝らしてご覧下さい。時雨様にも見えてくるはずですよ」

言われたとおりに時雨はよく目を凝らして白紙のページを“視た”。すると、字が少しずつ浮き上がってくるのではないか？

だが、時雨には読めない言語であった。

「この字読めないんだけど？」

「……わたくしが暗唱しますので、真似してください。それでは NAREAK、NIOS、AHETEBUS……」

「ちよつと、待った。発音できない」

大鷹 の発した言語は人間には発音できないものであった。状況は完全に混迷を深めた。

時雨たちが悪戦苦闘する後ろでは、ファウストVS殺葵の戦いが激化していた。

煌くドラゴンが白銀の炎を吐く。それを避けて殺葵は飛翔するが、ドラゴンの尾が殺葵を地面に叩きつける。

地面に着地した殺葵にレイピアが襲い掛かり、その後ろからは煌く大蛇が口を空けて殺葵を喰らおうとしている。

四方八方から襲い掛かって来る精霊たちをなぎ払うべく、殺葵は身体を回転させながら剣を振り、そのまま回転しながら高く飛翔した。

上空にはドラゴンが待ち構えていたが、殺葵の剣戟がドラゴンの腹を裂いた。重傷を負ったドラゴンはそのまま霧と化し、妖刀殺羅の糧となった。

新たな精霊を呼び出そうとしたファウストの身体が光の楔によつて拘束され、現時点で外に出ている精霊が強制的にファウストの身体に戻された。

「私の邪魔をするのは誰だ？」

「ファウスト、もう十分でしょう。あちらの準備が整ったようですよ」

フィーアの手からは輝く鎖が伸びており、それがファウストの身体を拘束していた。

殺葵の前に時雨が立ちはだかった。だが、それは時雨であつて時雨でないものであつた。

《封印する》

時雨の口から時雨の声と 大鷹 の声が同時に発せられた。

封印の呪文はふたりの守護者が声を合わせて唱えなければならぬ。だから、大鷹は時雨の身体に入り、時雨を操ることにしたのだ。

《NAREAK、NIOS、AHETEBUS》

呪文の一節を唱えただけで殺葵は動きを拘束された。

《UBOY、OWEROS》

透明な柱が地面から地響きを立てながら突き出て、殺葵の身体を取り込んだ。

妖刀が唸り声をあげた。

爆発音と共に柱が壊され、殺葵が舞った。

柱の破片が割れた硝子のように輝く中、殺葵の剣が時雨の身体を貫いた。が、刺されたのは大鷹であった。

刺される瞬間に大鷹は時雨から分離して、時雨を守ったのだ。

唸る妖刀殺羅に身体力を吸い込まれていく大鷹はミイラのように干からびていき、やがては塵を化して殺羅の糧になった。

封印は失敗した。それは時雨の身体に残る大狼の力では不足だったのか。違う、殺葵は最初に封じ込まれた時よりも力を増幅させていたのだ。

今の殺葵には以前と同じ封印では封じることができない。

封印が失敗に終わり、ワルキューレたちの顔にも陰が差したと思いきや、これは計算内のことだった。

フィーアは全てを知っていたように言った。

「新たな封印が必要なようですネ」

この言葉に紅葉は何かに気がつき、小さく呟いた。

「メビウス時計台……」

メビウス時計台　ここは普段から一般人の立ち入りが規制されている。その理由は時計台の周辺に強力な魔力が発生しているからだと言われている。

傍観者に徹していたフィーアの腕が天高く上げられた。

「封印は完璧でなくてはいけません。あちらの準備が整ったようです」

フィーアの腕が下げられた。それは合図だった。

三人のワルキューレが同時に動き、時雨ともろとも殺葵を取り囲んだ。その陣形は正三角形になっている。

時雨の目の前で殺葵の表情が苦痛に歪んだ。殺葵の身に何が起ったのか、そのようなことを考える暇もなく、次の瞬間には殺葵が命に代えても手放すはずのない妖刀殺羅を手から滑り落としてしまった。

妖刀が地面に落ちたのと同時に見えない何かに殺葵は腕や足を拘束されて、空間に張り付けにされてしまった。

時雨の顔から表情が消えていた。そして、時雨は地面に落ちた妖刀殺羅を拾い上げ、両手で柄を強く握り締めた。

紅い花が散る。血を欲する妖刀は殺葵の腹を貫いた。時雨の手によって。

「ぐはっ……呪が自らの魂をも喰らうか……」

吐血する殺葵であったが、その表情には苦痛の色はない。彼

はやすらかな顔をしているのだ。

妖刀を掴む時雨の手と腕がわなわたと震える。それは妖刀の力か、それとも……？

震える身体を抑えながら時雨は吐き出すようにやっとの思いで口を開いた。

「なぜ殺葵はこの世界に出て来た、いや、なぜボクの前に現れた？」

「私は外に出る気などなかった、封印は破られたのだ。この都市は、いや、この世界全体は奴の手のひらの上で躍らされているのかもしれない……」

「ボクもそう思うよ、親愛なる友人 殺葵」

殺葵の後方の空間が地獄の唸り声をあげて裂けた。そして、空間の裂け目から二本の雪のように白く美しい手が突き出ると、そのまま殺葵の身体を抱きしめるようにして掴んだ。

《僕と共に永久を逝きよう》

次の瞬間、白い手に力が込められ殺葵の身体を闇の中へ引きずり込んでいってしまった。空間の裂け目に大量の風が流れ込み、そして、裂け目は消えた。何ごともなかったように立ち尽くす時雨の手には妖刀殺羅が残っていた。

魔剣士 完

時雨

秋が冬に代わってすぐのある日のこと、昼下がりに風が強まり、急にばらばらと雨が降った。

雨の中、スーパリーの袋を片手に持った可愛らしい女の子が、黄色い長靴に傘を差すという格好で歩いていった。

彼女の名前はハルナ。三年程前に両親を亡くし、今はその両親が残した雑貨店を経営している独り暮らしの女の子だ。

ハルナの歳は、見た目は中学生のように見え、時には背の低さから小学生にも間違われることもあるが、彼女の年齢は十代後半だ。

両親に死なれ、若い女の子が残された雑貨店を経営するのは難しいことだった。けれども、その雑貨店は両親の形見なので、どうしても手放すことができずにいた。だが、経営は最悪の状況だった。

生活を切り詰めて、本当にギリギリ生活を営むことしかできなかった。そこでハルナは悩んだ結果、苦渋の決断をした。店を売り払おうと。

だが、ハルナはまだ店を本当に売っていいものか、誰かの手に渡っていいものなのか、悩んでいた。

人を雇うお金がないため、自分が外出すると店を閉めなくては行けない。今も店のシャッターを閉めてしまっている。

ハルナがお店に戻ってくると、閉められたシャッターに寄りかかりながら座っている男の姿を発見した。男はうつむき顔はよく見えなかった。

きつと、雨宿りでもしているのだろうと、ハルナは思った。男はロングコートを着て、ぐったりとして身動き一つしていない。彼の身体は雨でびしょ濡れで、髪の毛から雫が零れ落ちていた。

もしかしたら浮浪者かもしれないし、危ない人なのかもしれない。でも、ハルナは声をかけずにいられたかった。

「あのお、どうしたんですか？」

相手の顔を覗き込んで聞くが、顔はよく見えないし、返事も返ってこない。

「だいじょうぶですか？ 具合でも悪いんですかあ？」

やはり返事はなかった。

もしかして死んでいるのかと思ったハルナは、慌てて男の身体を持ち上げ顔を見た。

「あの、だい……」

途中で言葉を切ってしまった。それは相手の男性の顔があまりにも美しかったために、言葉を失ってしまったからだ。だが、ハルナはすぐに気を取り直して、男の身体を揺さぶった。

「だいじょうぶですか、返事してください」

「うう……う……」

苦しそうな声だった。よく見れば男の顔はひどく真っ赤だった。

すぐにハルカが男のおでこに触れると、やはりすごい熱だ。もしかしたら四〇度を超えているかもしれない。

「どうしよあ〜」

慌てながらもハルナはスーパーの袋と傘を地面に投げ捨て、男の身体を持ち上げ急いで店の二階にある自宅に運ぶことにした。

鉄製の階段を上り二階の外にある玄関に急いだ。

ドアの鍵は最近の支流である、ドアノブに触れることにより人物の照合をして、鍵を開けてくれるというものだ。

ハルナはドアノブに触れたが、鍵が開かない。最近このドアの調子が悪いのだ。しかし、修理するお金はない。

急いでいたハルナは意を決して、ドアを思いつきり蹴っ飛ばした。ドアは頑丈にできているため開くはずがないのだが、蹴られた拍子に調子の悪かった電子ロックが余計に壊れて、ドアのロックが解除されるカチツという音が聴こえた。

家の中に駆け込んだハルナは男を適当な場所に下ろして、バスタオルを取りに行った。そして、戻ってくると、男の姿がない。

床に何かが這ったような水の後があり、ハルナは急いで玄関に向かった。するとそこには玄関を出ようとしている男の姿があった。

「ダメですよ、すぐに救急車呼びますからじつとしててください！」

男の腕を掴み部屋の中に連れ戻そうとした。それに対して、

男は抵抗する。だが、男の力は弱々しく、ハルナでも簡単に部屋に戻すことができた。

「ダメですよ外に出ちゃ。すぐに救急車呼びますから」
そう言いながらハルナは男の髪の毛を拭いてあげた。

「……………くれ」

微かな声が聞こえた。ハルナが男の口元に耳を近づけるとはつきりと聞くことができた。『駄目だ。救急車は呼ばないでくれ』と。

この街ではわけありな者が多くいる。この男の人もそうなのだろうかとハルナは思った。しかし、彼の熱はだいぶあるし、これからどうしていいのかハルナにはわからなかった。

頭を拭いてあげても服を着替えさせないと意味がない。だが、この家には男物の服などないし、あったとしてもこの人が自分で着替えるのも無理だろう。

ハルナは急いで毛布を持って来て、男に聞いた。

「自分で服脱げますか？ 脱いだらこれに包まっていますから」
服は瞬間乾燥機で一分くらいで乾きますから」

反応はなかった。男はぐったりして床に倒れている。

大きく息をしたハルナは男の服に手をかけた。

「ごめんない」

そう言ってハルナは男の服を脱がせ始めた。こんな経験をするのは初めて、恥ずかしかったが、ハルナはそれでも男の服を脱がせた。

まずはコートを脱がせて上着を全て脱がせた。そして、男の

白く美しい肌についたあるものを見てハルナの手が止まった。

何かで切られたような傷痕が五〇センチほど背中にあった。まだ新しい傷で血が止まったばかりのようだ。しかし、こんな大きな傷の血が止まるものなのだろうか？

特殊な手術や薬によつて身体を強化することができるが、この男の職業はそれが必要な職業なのだろうか？

ハルナは疑問を感じつつも男のベルトに手をかけた。だが、そこから先に進むことができない。彼女は雑貨店の経営が忙しくて男の人と付き合つたこともなかつたし、話す機会も皆無に等しかつた。

だが、ハルナは目をつぶつて下着ごと一気に全部脱がせた。そして、すぐに毛布で男の身体を隠した。

濡れた身体に毛布をかけたのでは意味がないが、濡れた服を着ているよりはましだつた。

ハルナは男の服を全部抱えて脱衣所に急いだ。

乾燥機に服を入れる前にポケットの中身などを確認する。財布もなく身分を証明するような物は何一つ入っていなかつた。ただ、ひとつ出てきたのは手に握れるくらいの筒状の何かだつた。

それにはスイッチらしき物がついているが、プライバシーに関わるので気にしないことにして、服を乾燥機の中に入れて早く乾かすことにした。

乾いた服を男のもとへ運んだハルナはすぐさま今度は台所に向かつた。

「温かい飲み物、飲み物……お茶しかないや」

戸棚からお茶っ葉を出したハルカは急須にポットからお湯を注ぎ、普通のコップにお茶を一度注ぎ、別の湯のみにもう一度注いで、それを男のもとへ運んだ。

「お茶入れてきたんですけど、飲みますう？」

毛布に包まった中から白い両手が伸び、湯飲みを受け取った。そして、男の口の中にお茶が流し込まれ、喉がごくんと動いた。

「……おいしいね」

小さな声であったが、この時はじめて男は言葉を発した。そして、笑顔を浮かべた。

なんだかやつと一段落がついた感じで、ハルカはほっと胸を撫で下ろした。そこであることに気がついた。

「あっ!？」

そうだ、傘と買い物物が外に置きっぱなしだった。そう思ったハルカは急いで外に出た。

雨は止んでいた。だが、雲行きは怪しい。また、少し降るかもしれない。

傘とスーパリーの袋はハルカが置いた時と同じ場所にあった。盗まれたりしてなくて安心したハルカは急いで男のもとへ向かう。まだ、熱もあるだろうから、心配なのだ。

男の姿は消えていた。毛布がたたんで置いてある。焦るハルカ。

家中を探そうとして最初に向かった居間に男はいた。

服を着替え、ちゃぶ台にひじを突きお茶をすすっていた。

「お帰り」

「あ、はい、ただいま」

男の具合はだいぶよくなっているようだ。

ハルナは男の前に腰を下ろした。

「あの、だいじょうぶですかあ？」

「うん、だいぶよくなった」

「あの、お名前は？」

「……さあ？」

「住所は？」

「さあ？」

「もしかして記憶喪失ですか？」

「さあ？」

単調な会話が進み、ハルナは首を傾げ、男はお茶を一口飲んで息を吐いた。

「はあ、もしかしたら記憶喪失なのかもね。でも、なにがわからないのかわからない」

「病院行きますか？」

「いや、いいよ。じゃあ、ボクは行くよ」

「行くつてどこに？」

「さあ？ どこに行くのかは決めてないけど、ここにいるとキミに迷惑かかるでしょ」

「いいですよ、ずっといても。あたしこの家でひとりで住んでるんで、部屋いっぱい余ってるし」

「女の子のひとり暮らしの家に世話になるのは問題あるよあ

」

「そんなこと気にするんですかあ、硬派なんですわねえ」

「でも、行くよ」

男は行こうとした。その腕をハルナが掴む。

「財布も持ってなかつたし、記憶喪失だし、行くところないじゃないですかあ、ダメですよ行っちゃ」

なぜ、ここまで強引に男のことを止めたのかハルナにもわからなかつた。けど、どうしても止めないといけないような気がした。止めなければ、どこか遠く、一生逢えない場所にいつてしまうような気がした。

男の瞳がハルナの瞳を見つめた。

「少しだけ、お世話になるよ」

男もなぜ自分がこんなことを言ったのかわからなかつた。けれど、ハルナの瞳の奥に映るものを見たら、そう言ってしまった。ていた。

「本当ですかあ〜！」

「うん、記憶が戻るまではお世話になるよ。ボクにできることなら、お世話になる代わりに何かするよ」

「じゃあ、あれ」

ハルナは瞬時にあることを思いついた。

「あなたには私の店の店長になってもらいます」

「はあ!？」

男は不思議な顔をした。

「店長ですよ、テンチヨ」

「はあ？」

「両親から受け継いだ雑貨店なんですけど、経営がうまくいなくて、止めてしまおうと思つてたんです。でも、これって運命ですよねえ、きつと、あなたは店長をやるためにここに来たんですよ」

「はあ？」

ハルナの解釈は強引な解釈であつたが、男は小さく頷いた。こうして男は雑貨店の店長となつた。

「え」と、あとお……」

ハルナはまだ何かあるのか腕首をして首を傾げた。

男は店長を押しつけられて、これ以上何があるのかと思つた。

「他にもあるの？」

「あなたの名前、名前ですう。名前なんて呼びましようか？」

「ああ、名前ね」

「そうだ、“時・雨”にしましょう。それがいいですよ、きつと」

「時雨？」

なぜ、時・雨なのだろうか？ ハルナが答える。

「今日のお天気です。あなたが私の店に現れ時のお天気。イヤだつたら『雨』とか『曇り』とか、そうだ『冬』にしますか？」

全部気象に関する名前であつた。少しネーミングセンスが外れている。

「時雨でいいよ、いい名前だと思う。いや、違う……そうだ、

そうだよ、ボクの名前を思い出したよ。ボクの名前は“時雨”だ！」

「えっ!? 本当ですかあゝ。勘で言ったのに当たったんですかあ!?’

「うん、ボクの名前は時雨」

「じゃあ、時雨さん。明日から店長がんばってくださいね」
「ええゝっ！」

そう言いながらも時雨はハルナの顔を見て微笑んでいた。そして、ハルナも微笑み、部屋は幸せな空気で包まれていった。

時雨 それは冬のはじめ、季節風が吹き始めた頃、急にはらばらと降っては止み、数時間で通り過ぎてゆく雨のこと。

時雨 完

ブラックキャット

帝都に聳え立つ古めかしい巨大な洋館。この洋館に住んでいるのは人々に帝都一の魔導士と謳われるマナと機械人形の娘であるアリスの二人だ。

「マスターおはよう御座います」

玲瓏たる声の響きが深い眠りからマナを呼び覚ました。

「今日は絶対この部屋から出ないわよあん」

目を覚ましたマナは何かを恐れるようにして、ベッドの中に潜りブルブルと身体を振るわせた。

恐れという言葉知らぬとまで人々に言われるマナが何かに怯えている。いったい何に怯えているのか？

機械仕掛けのアリスはそんなマナを無表情な顔で見つめ、一瞬だが少し小莫迦な表情をしたように見えた。

「マスター朝食はどうなさいますか？」

「ここに運んで来て頂戴」

「承りました」

静かにドアが閉まると、残されたマナはベッドから恐る恐る起きて、椅子に腰掛けテーブルに突っ伏した。マナの服は椅子に座った瞬間にネグリジェからいつもの豪華絢爛な法衣に変わっている。

「……いつかこの呪い解いてやるわあん」

そう、マナは己に架けられた忌々しい呪いに怯えているのだ。マナに架けられた呪い、それは 満月の晩になると黒猫に変化してしまうという呪いである。満月と言っても正確には月齢が一四・八から一五・二の月光を浴びると猫に変化してしまうのだ。そして、今日の満月は月齢一五 まさに真正正銘の真ん丸の満月が夜空に浮かぶ日であった。

ドアがノックされ朝食の乗った銀色トレイを持ったアリスが現れた。

「朝食をお持ちいたしました。そして、お客様をお連れいたしました」

小柄なアリスの後ろに立っている長身の男を見て、マナは血相を変えてすぐにベッドの中に潜った。

「な、なんでお師匠様が!」

「私が来ては不都合なことでもあるのかね?」

アリスの後ろに立っている、煌びやかな法衣を身に纏う男

この男こそマナの師匠であるファウストだった。

転生の魔導士ファウストは千年以上の月日を生き、今は帝都のエージェントをしている。

アリスはテーブルの上に朝食を並べ、口元を少し吊り上げた。

「では、失礼いたします」

立ち去ろうとするアリスの背中にマナが手を伸ばした。

「待って二人にしないで!」

悲痛な叫び声を背中に感じながらアリスは子莫迦にした笑いを浮かべてドアをゆっくりと閉めた。

ファウストは朝食のサラダに入っていたプチトマトを口の中に入れて、マナがぶるぶると震えるベッドの上に腰掛けた。

「そんなに私のことが恐いのかね？」

「そんなことはありませんわ、偉大なお師匠様」

大嘘をついたためか、マナの顔は引きつっていた。

恐いもの知らずと云われるマナが世界で一番恐いもの、それはこのファウストだった。

マナはファウストのもとで修行中、散々な目に遭わされ、魔導の実験台にされたり、ファウストのイジメに遭ったりといういろいろなことがあった。そして、マナに忌まわしき呪いを架けたのも、このファウストであった。

ファウストは天井を眺めてからマナに視線を落とす。

「ところでマナ、最終試験はクリアできたかね？」

「……まだです」

「では、まだ免許皆伝とはいかないな」

実はまだマナはファウストの修行を全て終えていなかった。つまり、正式な魔導士としてファウストに認められていないということだった。

マナはファウストの下で修行をした際に、いろいろな試験を受けて見事にクリアしていった。ただ、ひとつを除いては。

それがマナに架けられた黒猫に変化する呪いを解くことだった。満月の夜に黒猫に変化してしまうという呪いをマナが架けられたのは、まだ彼女が若かった一六、七の頃、ファウストの怒りを買ってしまい、呪いを架けられてしまったのだ。本来はこ

の呪いを解くことは試験科目には含まれていなかったのだが、この呪いを解かなければ免許皆伝はしないとファウストに断言された。

マナが呪いを架けられた原因をつくった時に一緒にいた共犯者である夏凜という人物にもファウストは罰を与えている。その罰というのは魔導手術による魔族と合成及び、その他いろいろである。そして、この夏凜という人物は満月の夜に本来の姿に戻るのだ。

「ところでマナ、私がかこへ何をしに来たかわかるかね？」

わかるはずがない。マナの知る限り、このファウストという人物は大層きまぐれな人物である。

「いいえ、何の御用でしょうか？」

「それがだ、この頃ニユースでも取り上げられている事件のトップは何だかわかるかね？」

「神力神社と帝都タワーが破壊されたあの一件でしょうか？」

「いいや、二日ほど前にシザーハンズが現れた」

「そうなのですか!？」

マナはここ数日海外に出かけていて帝都のニユースには疎かった。

「そのシザーハンズを退治及び、それを操っている魔導士を処理して欲しい」

「い……はい、わかりましたわ」

“嫌”とは言えなかった。そんな言葉を発したのならば、

どのような不幸がマナに降りかかることか……。

「では、今日からがんばってくれたまえ」

「はぁ!? 今日が私にとつてどんな日かお師匠様もご存知のハズ……」

「だから、どうしたと言うのかね? 昼間は動けるのだから問題なからう」

マナは口をきゅつと結んで言いたいこと腹の底に呑み込んだ。この人に何を言っても無駄だ。

ファウストは立ち上がると、テーブルに置いてあったマナの紅茶を飲み干して、部屋を出て行こうとした。

「では、私は旅に出るので後は任せたぞ」

「あ、ちよつと待ってえん! シザーハンズの情報はないのでしょうか?」

「そうか、まだ言っていないかったな」

このボケ老人! とマナは思ったが、そんなことは口が裂けても言えなかった。

ファウストはテーブルに置いてあったトーストを食べながら話をはじめた。

「シザーハンズは狂人でも何でもない。普通の人間がシザーハンズと呼ばれる魔導具に操られているに過ぎないのだよ」

「なるほどねえん、それでさつき魔導士を処理しろと」

「その通りだ、シザーハンズと呼ばれる殺人の正体は“爪”の形をした魔導具。その魔導具に魅入られた人間が殺人を起こしている」

「ですが、その魔導士というのは誰なのですか？」

「彼女を魔導士と呼ぶのは正しくない、他の者が彼女を魔導士と呼ぼうと私は絶対に認めない。なぜならば、彼女は修行を途中で投げ出した女だからだ」

「まさか、それは……!？」

マナの脳裏にある名前が浮かんだ。世間では夜魔の魔女と呼ばれる“セーフィエル”の名を。

ファウストが嗤った。

「我が不肖の弟子セーフィエル。姿を眩ませていた彼女がこの帝都で目撃された」

セーフィエルはマナの姉妹弟子である。

マナが天才であるならば、セーフィエルは秀才であった。努力せずとも才能だけで魔導を使いこなすマナに対して、セーフィエルは血の滲むような努力をして魔導を身に着けた。マナはセーフィエルの嫉妬を買い、いつも一方的にライバル視されていたのだ。

テーブルに置いてあった朝食を全て食べ終えたファウストは、近くに置いてあったナプキンで口を拭うと背中越しに手を振って部屋の外に出て行ってしまった。

残されたマナは外に出るべきか迷った。たしかに月が出ていない間は猫になることはない。が、今日は外に出たくない。

しばらくして部屋をノック音が聞こえた。

「どうぞお入りになってえん」

部屋に入って来たのはアリスだった。

「ファウスト様に紅茶をお持ちしたのですが、どうやらお帰りになられたようですね」

「その紅茶、私がもらうわぁん。それから、朝食を新しく持つて来て頂戴」

マナの言葉を受けてアリスは空になった朝食を見てため息をついた。

「ファウスト様がお食べになられたのでございますね」

一瞬何かを小莫迦にした笑みを浮かべたアリスは空になった食器を持って部屋を出て行った。

朝食を取り終えたマナはしぶしぶ外出した。

満月の日は黒猫になってしまふという呪いもあるのだが、どういうわけだがマナはそれ以外の不運に見舞われることが多い。マナは自宅の屋敷の正面門を潜り抜け道路に立つて腰に手を当てて仁王立ちした。シザーハンスが魔導具であり、それを創ったのがセーフィエルであることはわかった。が、何をしたいのかがわからない。そもそもシザーハンスが現れたのは全て夜であった。

「……何すればいいのよぁん！」

マナが声を荒げシーンとなったところに、何事もなかったようにバイクが通り過ぎていく。空しい。

シザーハンスを探すよりも元を探した方が効果的である。人探しと言ったら、この街では情報屋を頼るのが一般的である。

「……でも、真ちゃんの情報網にあの女が引っかかるとは思え

ないのよねえん」

それにマナはこうも考えていた。帝都でのセーフィエルの目撃談はわざと彼女が姿を現したと考えられる。自分の存在を知らせるため　それは誰に？

マナはこの場にじつとしていても意味がないと思い、シザーハンズが現れた場所に向かうことにした。

歩きながらマナはセーフィエルがどこで目撃されたのか、聞くのを忘れたことに気がついた。セーフィエルがわざと姿を現したとするのならば、その場所に何か手がかりがあるかもしれない。

冷たい風が吹いた。その風に運ばれて夜の匂いがした。

「まさか……!？」

夜色のロングドレス　いや、それは喪服のようにも見える。

黒髪に黒い瞳、東洋系にも見えるがラテン系にも見える。妖艶さを身体中から放つ彼女には種族など関係ないのかもしれない。

「こんばんは、お久しぶりね　マナ」

「あらん、セーフィエルちゃんお久しぶりねえん。でも、まだ朝よ」

「世界が陽に包まれようと、わたくしは常に夜に存在しているのよ」

この女性こそがファウストの不肖の弟子であり、マナの姉妹弟子であり、世界で最もマナのことを知る人物である。

セーフィエルは空を見上げて呟いた。

「そう言えば、今宵は満月ね」

「ワザとらしく言われなくてもわかってるわ。それよりも、用事があるんだったら早く言ってくれないかしらあん？」

マナはセーフィエルと偶然に出逢ったのではないことは百も承知だった。

「あら、せっかく久しぶりに出逢ったのだから、もう少しおしやべりを楽しみましようよ」

「イヤよ」

「相も変わらずワガママなのね」

笑みを浮かべるセーフィエル。その笑みは全て罪を許す、慈愛に満ち溢れた微笑みだった。だが、マナはその笑みを見るたびに相手の殺意をひしひしと感ずる。

「それで、用事は？」

「そうね、一言で言うると、この街で魔導ショップをすることにしたの」

「……あらん、それって私への宣戦布告かしらあん？」

「とんでもない、この街で魔導具のシェア二三パーセントを握っているマナに宣戦布告だなんて。わたくしはこぢんまりしたお店でお客様との触れ合いをしたいだけなのよ」

マナは自宅の洋館で魔導ショップを営み生計を立てている。

そして、企業ではなく個人でこの街の魔導具業界のシェア二三パーセントを握っているとは驚異的である。普通は個人では一パーセントにも満たない。

セーフィエルはわざとらしく手のひらを軽く叩き、思い出したフリをした。

「ああ、そういえばマナはわたくしに用があると思うのだけれど？」

「ないわよあん」

「それは残念ね、そんなにわたくしのことがお嫌いかしら？
仕方ないから勝手にシザーハンズのことをお話しするわ」

昔からおしゃべり好きのセーフィエルはマナが何も言わないのを見て勝手に話をはじめた。

「まずはわたくしがシザーハンズをつくった経由についてお話しいたしましょう。わたくしがこの街に来た理由は魔導シヨツプをはじめめるためではないの。本来は何者かに盗まれたシザーハンズを探すため。この街で魔導シヨツプをはじめめるのは、気まぐれよ」

「気まぐれで私に宣戦布告？」

「あら、だから宣戦布告だなんてとんでもないわ。ちょっと生活費を稼ぐためのはじめることよ」

マナはセーフィエルをしばらく不信の眼差しで見つめてから口を開いた。

「そうことなら、シザーハンズの処理がんばってねえん。私は全てをあなたに任せて家でゆっくりすることにするわあん」

「あら、そんなこと言ってもいいのかしら、ファウストの言いつけを守らないとお仕置きされるわよ」

慈愛に満ち溢れた微笑みを浮かべるセーフィエル。だが、なぜ知っているのか？

「わたしがシザーハンズを探してることも知っていたみたいだ

し、お師匠様との会話も知っているのかしらあん？」

「あら、気づかなかった？ わたくしの創ったあの“機械人形”を元に戻したことを」

「……そんなこと気づいていたに決まってるじゃない！」

マナは全く気がついていなかったのに嘘をついた。

セーフィエルのいう“機械人形”とはマナの家でメイドをしているアリスのことだ。

アリスは元々マナの命を狙うために創られた機械人形であり、それを創ったのがセーフィエルだった。

一時は敵であったアリスだが、マナに改造されることにより、マナの家で働くようになった。そのアリスをセーフィエルはまた改造して自分の味方としたのだった。

アリスが改造されたのは二日ほど前。その間マナは海外の遺跡調査に行っていた。そして、マナは昨晚遅く家に帰宅したのだ。

ここでマナにふとした疑問が浮かぶ。セーフィエルはシザーハンズを探しに来たと言った。シザーハンズがこの街に最初に現れたのは五ヶ月も前のこと、セーフィエルほどの者であればもつと早く見つけられた筈だ。

「セーフィエルちゃんにひとつ聞きたいことがあるんだけど？」

「いいわよ、どうぞ」

「シザーハンズがこの街に最初に姿を見せたのは五ヶ月前のこと、つまりシザーハンズが盗まれたのはそれよりも前ってこ

とになるわよね。あなたがそんなにシザーハンズを見つけるのに時間がかかるなんて私には思えないわぁん、そこんところどうなのぉん？」

月の光のような優しい笑みを浮かべるセーフィエル。だが、月というのは地上からでは一面しか見ることができず、月の裏側がどうなっているのかはわからない。

「あら、さすがはマナだわ。本当はシザーハンズを探しに来たのもついでなの。ここ半年わたくしはある研究をしていたのよ、だからシザーハンズを探す暇もなかった」

「その研究って何かしらぁん？」

「これよ！」

セーフィエルの手から月光を放つバレーボールほどの大きさの玉が投げられた

マナはセーフィエルの放った魔導を避けようとしたが、すでにマナの足は地面に張り付いて動けなかった。セーフィエルの話は時間稼ぎだったのだ。

月光を放つ魔導はマナの胸に直撃して、そのまま身体の中に吸い込まれていった。それを見て満足そうな笑みを浮かべるセーフィエル。

「今のは月の光そのものなのよ」

マナのスカートの裾から、黒くてくにゅくにゅと動く長いモノが出た。そして、マナの頭には猫の耳が生えた。

「まさか!？」

驚き慌てるマナの身体は徐々に黒い毛で覆われ縮んでいき、

やがては黒猫の姿となつてしまった。

「にゃ〜ん」

「可愛らしい声で、泣いても”駄目よ。あなたは一生そのまま

……ふふ」

微かに笑つたセーフィエルは風に揺らめき姿を消した。

猫にされたマナは歩道に立ち尽くしながら考える。

状況としては悪い。まず、ただの猫になつてしまつている。

それは即ち、人語をしゃべることができない。そして、なによりも重大なことは魔導が使えないということ。

ここでマナは最優先事項を考える。今までの最優先事項はフアウストの命令であつた。が、今は緊急事態だ。幸運なことに自宅もすぐそこだ。帰ろう。

自宅の正面門を潜つたマナはため息をつく。猫になると自宅の庭が広いことに腹が立つ。歩けど歩けど、玄関は遠い。

噴水広場を抜ければ玄関はすぐそこだ。

玄関のドアが内側から開かれた。姿を現したのは機械人形のアリス。

「マスターお早いお帰りでございますね」

「にゃ〜ん（よかつたわぁん）」

これでひとまず助かつた……助かつた？

マナはここで重大なミスをしたことに気がついてしまった。

「お命頂戴致します」

「にゃ〜っ！！（しまったぁ〜！！）」

焦るマナ。戦闘の構えをするアリス。漲る殺気。

機械人形アリスは殺人人形キリングドールであった。

疾風の如く翔けたアリスは足を大きく振り上げた。

マナの眼前に迫る足の裏。それは何かを踏み潰そうとしている体制。つまり、マナは踏み潰されようとしていた。

「にゃ〜っ！！（殺される！！）」

間一髪でアリスの攻撃を避けたマナの額に冷たい汗が流れた。アリスの右足が地面に埋まっている。あれを喰らっていたら即死どころの騒ぎではなかった。臓器などが……かなり悲惨な事になっていたのは間違いない。

マナ四足で全速力を出した。だが、たかが猫VS殺人人形。

マナの敗北は決まっていた。

今まで後ろにいたはずのアリスがマナの前に立ちはだかる。

「マナ様、もっと必死にお逃げになってくださいとしないと面白くありません。さあ！」

相手を小莫迦にした笑みを浮かべるアリス。狩りを楽しんでいるのか、日頃の恨みか……。マナは楽には逝かせてくれないと身震いをした。

マナは再び走り出した。

自宅の庭は広いので逃げ場ならいくらでもある。が、ここは外に助けを求めた方が懸命だ。しかし、今走っている方向は正面門とは逆方向。距離はあるが、このまま裏門まで行くしかない。

アリスは動かなかった。ハンデを与えているのである。

不審に思ったマナは足を止めて後ろを振り返ってしまった。後ろなど振り返らずに早く逃げるべきだったと瞬時に後悔する。

掌を天高く上げたアリスは声高らかに唱えた。

「コード000アクセス　三〇パーセント限定解除」

魔導を帯びた風がアリスを包み輝かせる。そして、まだ何を唱えている。

「コード003アクセス　コメット　召喚コール」

天ソラより召喚された巨大なロケットランチャーを小柄なアリスが肩に担いだ。

死の恐怖を感じたマナは全速力で逃げた。

「ターゲット確認　ショット！」

爆音と共に発射された魔導弾が光の尾を引きながらマナに襲い掛かる。

轟々と地面ギリギリに飛ぶ魔導弾は、大地を剥ぎ取り、風を巻き起こす。

「にやぎや〜っ！！（助けてえん！！）」

叫び声をあげるマナの横を魔導弾が抜ける。その反動でマナは巻き起こった風によって大きく飛ばされた。

魔導弾をギリギリで躲したマナは一息ついて前方を見た。魔導弾は　コメット　の名に相応しく彗星のように輝き飛んでいく。と思えたのもつかの間。魔導弾は軌道修正をしてマナに向かつて再び進路を変えた。

前からは魔導弾、後ろには　コメット　を構えたアリス。まさか!?

轟音を立てながら再び コメット が発射された。それは狭み撃ちだった。

避ける間もなく魔導弾の直撃を喰らう瞬間、マナの身体は抱きかかえられて上空に舞い上がっていた。

「にゃ？（何？）」

マナは地面から舞い上がって来る爆風を感じながら、自分を抱きかかえている人物の顔を見上げた。

「おはようお〜、マナちゃん！」

「にゃ〜ん！（ああ、夏凜ちゃん！）」

危機一髪のマナを救い出したのはゴスロリドレス姿がよく似合う夏凜であった。

容姿も声も女性のようなだが、夏凜は肉体的には男性だ。

軽やかに地面に着地した夏凜は息も付かず全速力で走った。

「マナちゃん、どうしてアリスちゃんに殺されかけてるの？」

「にゃ〜ん（説明すると長くなるのだけど）」

「やっぱり言葉がわからないからいいや」

最もだった。『にゃんにゃん』鳴かれても夏凜には猫語が理解できない。そもそも猫語というもの存在しているのか？

夏凜はマナの魔導シヨップに買い物に来たのだが、そこでちょうどマナが「何故」か猫になっていて、しかもアリスに襲われているのを発見した。

「マナちゃんこれからどうするう？ 後ろからはアリスちゃんが追って来てるみたいだけど、あんなに可愛いアリスちゃんと戦うのはよくないよね？」

「にゃん！（殺っちゃって！）」

「そうだよね、可哀想だもんね」

マナの言葉は全く夏凜に通じていなかった。

夏凜はマナを抱きかかえながら正面門を抜けて路上に出た。

その後をすぐにアリスが追う。

「コード000アクセス 五〇パーセント限定解除。コード

005アクセス ウィング 起動」

アリスの背中に突如翼のようなものが生えた。翼と言ってもそれは羽根などがなく、骨組みだけの翼である。

魔導がアリスの翼に宿り黄金色に輝かせる。それはまるで天より光臨した神聖な存在であるかのようにだった。

「コード アクセス メルキドの炎 一パーセント限定起動」

アリスは上空から地上を走る夏凜たちに両手を向けて叫んだ。

「昇華！」

紅蓮の炎が地上に降り注ぐ。それを見た夏凜は泣き叫ぶ。

「わお！ アリスちゃんって何者なのぉ〜！？」 メルキドの

炎 って!？」

メルキドの炎 を躲した夏凜はそのまま道路を走行するトラックの屋根に飛び乗った。後ろを見るとアスファルトの地面が赤く溶けていた。

夏凜は車の屋根の上にマナを降ろして優しく微笑んだ。

「ガンバ、マナちゃん！」

それは別れの挨拶であった。

夏凜は時速六〇キロメートルほどで走っているトラックの上から軽やかにジャンプした。

トラックの屋根の上に取り残されたマナは唾然とした。逃げられた!?

上空からはメイド服を着た飛行物体が追いかけて来る。

トラックの上に乗ってマナ逃げているようにも思えるが、実は逃げ場を失っている。その証拠に。

「昇華！」

再びアリスより降り注ぐメルキドの炎。

時速六〇キロメートルで走行するトラックの上から飛び降りたら大怪我をするだろう。しかし、このままではトラックと共に心中だろう。

マナは鳥になることを決意した。

トラックからジャンプするマナ。トラックを破壊、炎上させるメルキドの炎。

巻き起こる爆風にマナの身体は軽々と吹き飛ばされてしまった。

日が沈み、夜が舞い降りた。

マナはトラックの炎上に紛れて姿を眩ませて、今の今まで都市の裏路地を徘徊して身を潜めていた。かれこれ、半日以上街を徘徊し、すでに零時を回っている。

幸いアリスにはリーダーなどの機能が付いていなかったの、どうにか今までアリスに見つからずに済んだ。

アリスの製作者はセーフィエルであり、マナはアリスの性能を把握し切れていない。それ故にアリスの戦闘能力は未だに未知数なのである。

帝都の街は眠らない。街は輝き活気に満ち溢れている。しかし、光の当たらない場所には陰ができる。

帝都の裏路地に住むホームレスたちはグルーブを形成し、自分たちの住むテリトリーのことを“ホーム”と呼んでいる。

マナは小規模なホームのひとつに身を隠し、そこでファリスという名の一〇歳ほどの少女に拾われた。

ファリスはマナの顔を覗き込んだ。

「うーん、捨てられたにしては毛並みも綺麗だし、お金持ちの家の猫かなあ？」

お金持ちというのは間違いではないが、捨てられたわけではない。そもそも本当は猫ではないのだから。

マナの抱える問題は二つ。アリスに追われていることと猫であること。現状ではどちらも解決する術はない。

マナを抱きかかえるファリスの元ヘリヴェオが現れた。リヴェオはファリスの三歳年上の兄だ。

「また、そんなもの拾って」

「だつてえ……」

ファリスはマナをぎゅっと抱きしめた。マナはファリスにいたく気に入られたらしい。だが、マナはここで一生暮らすつもりは毛頭ない。

ホームに住む人々の視線がこの場に相応しくない格好をした

モノに向けられた。

メイド服を着たモノとファリスの視線が合った。

「その猫をお渡し願います」

「にゃ!? (ヤバイ!?)」

この場に現れたのはアリスだった。ついに見つかってしまったのだ。

ファリスは何の躊躇もなくマナをアリスに差し出そうとした。「メイドさんが探しに来るなんて、やっぱりお金持ちの家の猫さんだったんだね」

マナをアリスに手渡そうとしたファリスをリヴェオが腕を出して止め、リヴェオはアリスの顔を見据えた。

「猫を見つけてやったんだから、お礼くらい貰えてもいいと思うけどなあ？」

ホームで生き抜いて来た者としてはこうでなければならなかった。

アリスはほんの一瞬だけ相手を小莫迦にしたような表情をした。

「仕方ありませんね。コード000アクセス 六〇パーセント限定解除。コード006アクセス ブリリアント

コール
召喚」

マナはファリスの腕の中から飛び出して逃げた。アリスはこの地区をふっ飛ばしても構わないと思っっていることを悟ったのだ。

アリスの身体の周りに四つの球体がダイヤのようにきらきら

と輝きを放っている。

煌々たる光が世界を白くした。アリスが ブリリアント を放ったのだ。

アリスの周りに浮く四つの球体から次々とレーザービームが発射される。

マナは決して後ろを振り返らない。過去に引きずられて生きるような女じゃない。というか、後ろはきつと大惨事。

爆音と爆風を感じながらマナはとんずらした。

迷路のように入り組んだ路地を疾走するマナの目にある人物が映った。

「にゃー！！（時雨ちゃん！！）」

マナの前方には“敵”と対峙する時雨がいた。その敵の手には“爪”が装着されていたが、今のマナにはそんなことなどどうでもよかった。

閃光と爆発音に時雨も気がつき、その方向を振り向くと ブリリアント を発射するアリスがまず目に映り、次に自分に抱きついて来た黒猫が目に入った。

「マナ!？」

「にゃーん！（あたり!）」

マナを抱きかかえた時雨であったが、実はそんなことをしている状況ではなかった。

狂人者からシザーハンズが繰り出される。

時雨は輝く妖刀村雨でシザーハンズを受け止めた。しかし、シザーハンズは二対でひとつ。二撃目の爪が時雨を襲い、そこ

にアリスの ブリリアント は発射される。

「はあ!？」

時雨に不幸がやって来た。腕の中には人災マナ、襲い掛かるシザーハンズ、連続発射される ブリリアント レーザー。

シザーハンズによって時雨の肉が抉られ血が吹き出る。が、そんなものは些細な傷である。すぐそこに迫っている ブリリアントこそが脅威だ。

時雨はマナを抱きかかえながら路上に飛んだ。手は村雨とマナで塞がれ時雨は腕から地面に転がった。

「……痛い」

時雨はすぐに立ち上がり村雨を構える。状況としてはよろしくない。シザーハンズ と戦っているというのに、なぜかアリスにも攻撃された。

「あのさあ、なんでアリスに命狙われてるの？ 日頃の恨みとか？」

「にやーっ!! (後ろ!)」

立ち上がる煙の中からシザーハンズが煌いた。そして、前方には コメット を構えたアリスが！

シザーハンズを紙一重で躲した時雨はヤケクソになった。

「逃げるが勝ち！」

背を向けた時雨に コメット が発射される。

轟々と鳴り響く輝きが時雨の真横を掠め飛ぶ。だが、このコメット には追尾機能がついている。

急に進路を変えた コメット が時雨 ではなく、マナに

襲い掛かる。

「にやーっ！（早く避けてえん！）」

「何あれ!？」

逆走をはじめると時雨であるが、その先にはシザーハンズ、そのもつと先にはアリスがいる。

二対のシザーハンズを構える狂人者。

時雨が振るう妖刀の切っ先から輝く光が進る。妖刀村雨の妖術のひとつである。

妖刀から勢いよく飛び出した光の粒は狂人者の目を眩ませた。だが、シザーハンズが本体あるので目暗ましは効果がない。

二対のシザーハンズが時雨に振り下ろされる刹那、狂人者の身体を強烈な光が貫き、時雨をも貫こうとした。

時雨は光を辛うじて避けた。

狂人者の身体を貫いた光は槍であった。それをしっかりと握り締めているのはアリスだ。アリスはレイピアを召喚して、マナを狙ったのだ。そこにたまたま障害物となる狂人者がいたに過ぎない。

レイピアを引き抜かれた狂人者の身体は地面に倒れた。

機械人形アリスは無表情のままレイピアを構える。

「時雨様、マナ様をお渡してください。わたくしの使命はマナ様の抹殺であり、他のお方に危害を与えるつもりはありません」

『ウソつけ!』とマナ&時雨は思ったが、それは口に出してはいけないような気がした。

一触即発な感じに追い込まれそうな状況に巻き込まれた時雨

はアリスとマナを交互に見た。

「つまり、マナを渡せば問題解決って」

「にやぎゃ〜！（莫迦っ！）」

猫爪攻撃を時雨は頬に受けた。ヒリヒリと沁みる痛さだ。

交渉は決裂した。それも時雨の意思はなしにだ。

レイピアを還したアリスが再びコードを唱えようとした時だった。地面に転がる狂人者の手が動いた。正確には、動いているのは シザーハンズ だった。

機械人形と シザーハンズ が共鳴する。どちらもそれはソーフィエルのつくり出した魔導具であった。

アリスの初期コードは010までである。だが、アリスは拡張パックを取り付けることが可能に造られていた。

「コード013 シザーハンズ 認証開始 エラー、エラー、エラー、エラー、エラー!？」

アリスの腕に装着された シザーハンズ。だが、様子が可笑しい。

交互性に問題が生じた。それは、暴走の序曲。

「コード000アクセス 七〇パーセント限定解除。コード007アクセス メール 装着。コード005アクセス ウィング 起動」

アリスの身体を白いボディーツツが包み込む。その背中に黄金の翼が生え、腕には シザーハンズ が装着されている。

この事態に焦るマナ。そして、時雨がぼそつと呟く。

「逃げるの忘れてた……」

魔導と科学の融合により発展を続けて来た帝都エデン。その繁栄のひとつの象徴は、都市が決して眠らないということ。

魔導炉から二十四時間供給されるエネルギーは都市の生活を彩り、街を輝かせる。

昼にも似ているが、その賑わいは夜特有のものだ。漆黒の空には満月が浮かんでいる。夜はあくまで夜なのだ。

時雨は宇宙^{ソラ}を見上げ、星の瞬きに耳を傾けている。

「同じ感覚がする……」

目を瞑りあることを思い出し、そう呟いた。

ある事件が帝都の街を賑わしている。

報道各社はその事件の大々的な特集を組み、昼のワイドショーの時間帯には主婦たちが家事を一休みして、こぞってTV画面にまるで吸い込まれるように顔を近づけ、その報道に釘付けとなっていた。

狂信者シザーハンズ　五ヶ月前にこの帝都の街を賑わした狂気殺人者の名前だ。そいつがまたこの街に現れたらしい。

シザーハンズに殺された被害者は既に一五名を数えた。

殺害されたのは皆若く髪の長い女性で、深夜の時間帯に街を独り歩いている時に襲われた。そして、身体を八つ裂きにされ、身包みを剥がされ路上に放置される。それがシザーハンズの手口であった。

犯人の特定はできていない　いや、できない。

なぜならば、シザーハンズは人間ではない。むしろ生物でも

ない。シザーハンズの正体は女性を八つ裂きにした“爪”その物だということが分かっている。

時雨は未だに宇宙^{ソラ}を見上げている。だが、その目は閉じられている。

時雨は以前シザーハンズと戦ったことがある。しかし、彼はシザーハンズに逃げられた。それ以降シザーハンズの話はすぐに過去の記憶と化した。

今回、シザーハンズが帝都に舞い戻って来たとのニュースを時雨は聞いた時、自ら今回の仕事に名乗りをあげた。別に汚名返上だとか名誉挽回、プライドがどうこうという問題ではない。ただ、時雨は嫌な予感に苛まれた。

仕事の依頼がなくとも時雨はシザーハンズを自ら探し出す気であった。だが、幸運にも今回も帝都役所からシザーハンズ駆除の依頼が舞い込んで来てくれた。

時雨は空に浮かぶ蒼白い光を放つ丸い物体を見上げこう呟いた。

「はあ、また満月かあ」

満月の晩のこの街は危険だ。

満月が不思議な魔力のようなものを持っているという話はある名話である。この街ではその魔力が最大限に発揮されると言っても過言ではないだろう。

普段は身を潜めている妖物たちが街に繰り出し暴れまわる。今晩もどこかで帝都警察と妖物が戦争さながらの攻防戦を繰り広げているに違いない。

時雨が立っている場所は中型ビルの屋上であった。この場所で時雨はダウジングをしていた。

肌身離さず時雨が持っているタリスマンと呼ばれる石のついたネックレスがダウジングの道具となる。

紐にぶら下げられたひし形の石が揺ら揺らと動く。それは周りの空気を無視した動きで、石が意思を持っているのかのようである。

前回シザーハンズを探し出した時もダウジングを利用した。今回もそれで探せると思ったが、なぜかうまくいかない。

ため息をつく時雨に誰かが声をかけた。

「こんばんは」

「誰？」

そこには見知らぬ女性が立っていた。

闇に溶ける喪服のような服を着た黒髪の女性。風が服とその髪から夜の匂いが香る。

謎の女性に時雨はどことなく知り合いのマナと同じものを感じた。見た目の雰囲気も違うが纏っている特有の気が似ているのだ。

「シザーハンズをお探しでしょ？」

「そうだけど……」

明らかかな不信感を時雨は顔で示した。この女性から危険の匂いがする。

女性はビルの下を指差した。

「ほら、そこにいるじゃない」

「えっ!？」

驚きであった。女性が指差した道路の上に鉤爪を装着した男が歩いていてではないか!？」

時雨は驚いた顔をしながら女性の方を振り向いたが、すでに女性の姿はなく、そこには芳しい香りが残っているのみだった。すぐさま時雨は不審な男がいた路上に出たが、すでに男の姿はなかった。だが、しかし、突如どこからか女性の悲鳴が聞こえた。

悲鳴の聞こえた場所は近い。

時雨はビルとビルとの間にできた裏路地に入った。すると女性が時雨の横を擦り抜け、すぐに鉤爪を装着した狂信者がそれを追うように姿を現したではないか。

時雨は確信した。狂信者の装着している鉤爪は間違いなくシザーハンズだ。

シザーハンズも時雨のことを覚えていた。だからこそ、「セーフィエル」は時雨に手を貸した。

コートのポケットに手を入れた時雨はあるものを取り出した。辺りが時雨を中心として眩い光に包まれた。

閃光を放つ物体を握り締める時雨。その物体は妖刀村雨という名前の魔導と科学の融合が創り上げた剣であった。

時雨に狂信者からシザーハンズが繰り出される。

ビュウンと風を切り、村雨が片一方の鉤爪を撥ね退け、コート裾を舞い上げながら円舞する時雨の二撃目がもう片方の鉤爪の攻撃を受け止める。

すぐさま時雨は後ろに飛び退いてシザーハンズと間合いを取る。だが、シザーハンズと間合いを取った瞬間、辺りが眩い光に包まれ、時雨は細い目をしながら爆発音がした方向を振り向いた。

ダイヤの輝きを思わせる美しい光を放つ四つの球体を従える人形のような美少女。それは人形のようなではなく、人形であった。

「アリス！」

遠くにいる機械人形アリスを確認した時雨の胸に黒い物体が飛び込んで来た。その黒い物体は黒猫であり、その黒猫は時雨の知り合いであった。

「マナ！」

「にゃ〜ん！（あたり！）」

状況がイマイチ掴めない時雨であったが、こっちの状況よりも今まで自分が直面していた状況の方が急を要した。

意識を乗っ取られた狂信者からシザーハンズが繰り出された。風を切る鉤爪を輝く妖刀村雨が力強く受け止める。だが、シザーハンズは両腕に装着されている。

残ったシザーハンズが時雨を襲う、それと同時に不幸なことアリスのブリリアントレーザーが発射された。

「はあ!？」

あまりの危機的状況に素っ頓狂な声を上げる。

時雨の腕の中には人災マナが抱えられ、襲い掛かって来るシザーハンズに、連続発射されるブリリアントレーザー。

戸惑いの表情を浮かべている時雨の肩が鉤爪によって挟られる。肩から大量の血を流す時雨であるが、そんなことはまだ些細な傷でしかない。今の目の前に迫っているブリリアントは死だ。

幾本もの光の帯を時雨はマナを抱きかかえながら路上に飛んで避けた。

路上に転がる時雨の手はマナと村雨によって塞がれており、時雨は腕から地面に転がった。

「……痛い」

きつと、腕や肘に青痣ができたに違いなかった。

瞬時に時雨は立ち上がり、妖しく輝く妖刀を構える。だが、状況としてはよろしくない。

シザーハンズ とアリスに命を狙われるなんて、ありえない展開だった。

「あのさあ、なんでアリスに命狙われてるの？ 日頃の恨みとか？」

「にやーっ！！（後ろ！）」

立ち昇る煙の中からシザーハンズが煌いた。そして、前方には コメット を構えたアリスが！

鉤爪を軽やかに躲した時雨は村雨の電源を切った。輝く光が時雨の握る柄の中に消える。

すでに時雨はヤケクソであった。こんな状況で二人も相手にできない。

「逃げるが勝ち！」

背を向けた時雨に コメット が発射された。轟々という凄まじい音で後ろから コメット が迫っているのがわかる。

時雨はタイミングを見計らって地面に伏せて コメット をやり過ごした。だが、コメット には追尾機能がついていた。空中で円を描き方向転換をした コメット が時雨に襲い掛かる。正確にはマナに襲い掛かる。

「にやーっ！（早く避けてえん！）」
「何あれ!？」

声を荒げながら反則だと時雨は内心で思った。

コメット から逃げるために逆走をはじめると時雨であるが、その先にはシザーハンズ、そのもつと先にはアリスがいる。もしかしたら コメット に向かつて走った方が、助かる可能性が高いかもしれない。

時雨の眼前に迫った狂信者がシザーハンズを構えた。

妖刀村雨が光の粒子を進せる。

妖刀から勢いよく飛び出した光の粒は狂人者の目を眩ませた。だが、狂信者の目を眩ませても意味がなかった。本体は シザーハンズ なので目暗ましは効果がない。

二対のシザーハンズが時雨に振り下ろされる刹那、狂人者の身体を強烈な光が貫き、時雨をも貫こうとした。

時雨は光を辛うじて避けた。

狂信者の身体を貫いたものは光の槍であった。それをしっかりと握り締めているのはアリスだ。アリスは レイピア を

コール
召喚して、マナを狙ったのだ。そこにたまたま障害物となる狂人者がいたに過ぎない。

レイピア を引き抜かれた狂人者の身体は地面に倒れた。その後ろにいた機械人形アリスは無表情のまま レイピア を構え直す。

「時雨様、マナ様をお渡しください。わたくしの使命はマナ様の抹殺であり、他のお方に危害を与えるつもりはありません」
『ウソつけ！』とマナ&時雨は思ったが、それは口に出してはいけないような気がした。

レイピア は明らかに時雨に向けられていた。マナを渡さなければ容赦しないということだ。

時雨はアリスとマナを交互に見た。

「つまり、マナを渡せば問題解決って」

「にやぎゃ〜！（莫迦っ！）」

猫爪攻撃を時雨は頬に受けた。ヒリヒリと沁みる痛さだ。

やはりマナをアリスに渡すべきだと固く決意した時雨であったが、交渉はすでに決裂していた。以外にアリスの気は短かった。

レイピア を還したアリスが再びコードを唱えようとする。だが、その時、地面に転がる狂人者の手が動いた。否、動いているのは シザーハンズ であつた。

狂信者が死のうとも シザーハンズ は死なない。当たり前前のことを忘れていた。

機械人形と シザーハンズ が共鳴する。二つのモノをこの

世につくり出したのは者の名はセーフィエル。全ては夜魔の魔女セーフィエルの策略であった。

アリスの腕に シザーハンズ が装着される。だが、様子が可笑しい。

「コード013 シザーハンズ 認証開始 エラー、エラー、エラー、エラー、エラー、エラー!?!」

本来は問題なく シザーハンズ はアリスの追加機能になるはずであった。

「にゃ……!?! (もじゃ!?!)」

マナはアリスの身体を勝手にカスタマイズしていたことを思い出した。それが原因だった。

交互性に問題が生じた。それは、暴走の序曲となった。もちろん元凶はマナである。

「コード000アクセス 70パーセント限定解除。コード007アクセス メール 装着。コード005アクセス

ウイング 起動」

身体のコートを強調する白いボディースーツがアリスを包み込む。背中に鳥の骨組みのような黄金の翼が生え、腕には シザーハンズ が身体の一部として左手だけに装着されている。

この事態に焦るマナ。そして、時雨がぼそつと呟く。

「逃げるの忘れてた……」

アリスと融合した シザーハンズ は鳥の嘴くちばしのように形が変形しており、その口が急に開かれた。

時雨は開かれた嘴型の鉤爪の奥にある闇が輝いたのを見た。

「マズイっばい！」

鉤爪にエネルギーが集中していき、それは放たれた。

シザーハンズ はただの鉤爪から魔導砲の役割を担うようになつていた。

発射された魔導砲を辛うじて避けた時雨はそのまま後ろを振り向いた。そこには直径三メートルほどの穴がビルの壁にぽっかりと空いていた。アリスの放った魔導砲はビルの壁を溶かし、遙か数百メートル先まで見渡せる穴を作っていた。

シャレにならない破壊力だった。今の攻撃が身体に掠りでもした時点で人間は即死だろう。時雨のロングコートをよく見ると、焦げているのがわかる。

マナを抱える時雨はアリスの目を見据えながら、ゆっくりと後退していった。後ろを振り向いた瞬間に絶対に殺される。

それにまともに戦うのも賢明な選択ではない。無事では済まないのは明白だった。

冷や汗を流す時雨の腕の中でマナが鳴いている。

「にゃん、にゃん（アリスの様子が可笑しいわよおん）」

マナが必死にアリスの方を見ると言っているのが時雨に伝わった。

アリスは魔導砲を放ってから身動き一つしていなかった。

突然、とても濃い夜の香りが辺りを満たした。

冷たい風と共に闇の奥から時雨が先ほど出会った女性 セ

ーフィエルが姿を現した。

セーフィエルはアリスの身体を調べはじめた。

「どうやらオーバーヒートをしてしまったうようね。残念だわ、これからおもしろいところだったのに」

セーフィエルはアリスの背中を開けて内部をいじくると、妖艶とした笑みでマナを見つめた。

「結構楽しかったでしょ？ アリスのこと、またよろしくね。精々こき使ってやって頂戴」

この言葉に時雨とマナの頭に『？』マークがいくつも飛び回った。

呆然と立ち尽くす二人を尻目にセーフィエルは背中越しに手を振った。

「じゃあね、またお会いしましょう」

闇の中にセーフィエルは消えた。

「何あの人？ マナの知り合い？」

時雨は不思議な顔をしてマナを見つめるが、マナにも状況が把握できていない。

再び、夜の香りがした。だが、今度は声のみだった。

「あ、そうそう。あの術は試作段階だから、明日になったら人間に戻れるわ」

そう言つてセーフィエルの気配は完全に消えた。

結局、何がなんだかわからない。セーフィエルは何がしたかったのだろうか？

マナは首を傾げながら、思いを巡らせたが、出た答えはこれだった。『昔から意味のわからない行動する女だった』。

止まっていた筈のアリスがぎこちない様子で柔軟体操をはじめ

め、しばらくしてからマナを抱きかかえる時雨の前まで来た。

「マスター、帰りましょう」

アリスは時雨からマナを取り上げて去って行った。

残された時雨は首を傾げて宇宙を見上げた。

「世の中ってわかんないなあ」

ブラック・キャット 完

幕間

帝都大学での午前の授業が終わり、紅葉は自室で昼食のコーヒーを飲んでいた。

この部屋は大学が教授である紅葉のために用意してくれた部屋であり、紅葉はもう何年もの間この部屋を使用していた。そのためか、この部屋は紅葉によって改装され、彼の城と化していた。

部屋を埋め尽くすように置いてある本棚は上から見ると格子のようであり、その本棚には隙間のないほど本がびっしりと入れられている。本の並びは紅葉以外の者が見ても一目でわかるように整理整頓されていた。

窓の外から雨音が聞こえた。それは次第に強くなり、ついにはバケツをひっくり返したような雨が降りはじめた。

それは急な雨だった。

紅葉は自分の座っているデスクの引き出しを開け、中に入っているはずのあるものを探した。

「……ないな」

小さく呟いた紅葉はゆっくりと引き出しを閉めた。

常備しているはずの折り畳み傘がなかったのだ。

どうして傘がないのかと紅葉は考え、すぐに答えを導き出す。傘は人に貸したまま返って来ていない。そう、それは確か二

ヶ月ほど前のことだった。

窓の外を見つめた紅葉はどうとでもなるだろうと思い、雨のことはしばし忘れることにした。そして、資料に目を通す。

帝都地下で発見された遺跡の資料に目を通しながら、紅葉はコーヒーカーに手を伸ばす。しかし、コーヒーカーには紅葉の指先だけが当たり、コーヒーカーはデスクの上から滑り落ちてしまった。

コーヒーカーは床に落ちると同時に音を立てて割れ、中身の黒い液体がフローリングの床を侵食していく。

床には今溢したコーヒーカー以外の黒い染みがいくつもあった。不注意でコーヒーカーを落としてしまった当の本人は、後で掃除をすれば済むことだと思い、デスクに広げた資料に目を通し続けている。

集中して紅葉が資料に目を通していると、ドアをノックする音が聞こえ、紅葉が返事を返す前に女子学生が部屋に駆け込んで来た。

「紅葉教授、大変です！」

紅葉は返事もせず、資料に目を通し続けている。

「紅葉教授！ 学生が魔導の実験に失

「すぐに行こう」

学生の話最後まで聞かず立ち上がった紅葉はすでに学生の横を通り抜けるところだった。

「案内したまえ」

紅葉にそう言われた学生は首を縦に振って、事故現場に小走

りで向かった。

小走りで廊下を進んで行く学生の後には紅葉がぴったりとくっ付いて、歩いている。”紅葉の足取りは優雅でゆったりとしていたが、それでも女子学生が小走りするスピードと変わらなかった。

女子学生が連れて来た場所は、大学の地下に設けられた魔導実験施設だった。

窓がなく薄暗い室内は部屋の奥まで見通せない。

その部屋は石で造られた箱といった感じで、ひんやりとした空気が漂い、それとは別に殺伐とした空気も漂っていた。

部屋の中央では憑かれた男子学生が狂乱している。その顔はすでにヒトのものではなく、鬼や悪魔といった類の顔をしているた。

この場に集まっている学生たちは憑かれた学生から少し離れたところで、疲れた学生を囲うように立っていた。

疲れた学生は腹の底から唸り声をあげ、周りにいる学生に襲い掛かった。しかし、目に見えない何かに衝突して一定の範囲から出られないらしい。

紅葉は床に描かれたサークルに目をやり、ここに集まった学生たちに問うた。

「あのサークルは誰が引いたのかね？」

すぐに先ほど紅葉をこの場に案内した女子学生が手を上げた。

「はい、わたくしです」

この女子学生をまじまじと見つめた紅葉は軽く微笑んだ。

「なるほど、良い出来だ。私の授業を受講しているのならば良い成績を差し上げたいところだが、君はこの学生ではないな？」

問われた女子生徒はすぐに小さく頷き、妖艶とした笑みで紅葉を見つめた。見つめられた紅葉は無表情のままである。

「君が誰であろうと私には興味ないこと、しかしながら君の魔導には興味を惹かれた」

静寂に包まれた部屋の中を夜の冷たく澄んだ空気が漂いはじめた。

紅葉が見つめる女子学生に異変が起きはじめた。身体が霞み、輪郭がおぼろげになり、再びシャープな輪郭に戻った時にはすでに別人に成り変わっていた。

その場にいた学生たちは目を剥いて驚いたが、紅葉は最初からあの学生の姿が仮の姿であり、今目の前に立っている妖々とした女性の姿こそが、真の姿なのだろうと理解した。

驚いている学生たちを冷たい目で見た紅葉は、視線よりも冷たい声でしゃべった。

「このようなことで驚いていては、私の授業を受ける資格がないと心得ておきたまえ」

紅葉の言葉を聞いた学生たちは息を呑んで姿勢を正した。

学生たちの噂ではプロフェッサー紅葉は依怙鼻屑をするらしい。こんなところで嫌われては堪らないと思った学生たちは、点数稼ぎのためにこのような事態の時は、どのような対処をすればよいのかを考え、結局その場に立ち尽くしてしまった。

学生たちは事態を見守るしかなかった。しかし、その中でただひとりの学生だけが動きを見せた。

突然唸り声をあげる学生。動いたのは憑かれている男子学生であった。

サークルは力を失っていた。

憑かれた学生が獣のように四つ足で飛び上がり、近くにいた女子学生に襲い掛かりそのまま押し倒してしまった。

男子学生に羽交い絞めされそうになった女子学生は相手の股間に蹴りをかまし、相手が怯んだ隙に急いで紅葉の後ろに逃げ隠れた。

気がつけば学生たちは全員紅葉の後ろに避難している。

ここにいる生徒たちは魔導学の講義を受けているが、魔導そのものを使うものはいない。魔導を使用するには素質が必要であり、努力だけでは昇れない壁がそこにはあるのだ。

魔導を学んでいても戦う術を知らなければ、学生たちは紅葉の後ろの隠れるしかないのだった。

紅葉の前にいるのは、ひとりの女性と憑かれた学生。この間には徒ならぬ空気が流れている。

部屋を包む夜の空気が次第に強くなっている。それに比例して目の前にいる女性が纏う「夜」が強くなっていることは、この場では紅葉だけが理解していた。理解と言ってもそれは頭で知るものではなく、感覚で理解するものである。

紅葉は出口を指差して、学生たちに指示をした。

「君たちは外に出ていたまえ。それから、このことで人を呼ん

で来るのは止めてもらいたい。私は彼女と少し話をしてみたい」

学生たちはすぐさま出口の階段を上って姿を消した。

部外者を排除した紅葉は女性との距離を詰めた。すると四つ足の男子生徒が威嚇するように喉を鳴らすが紅葉は気にしない。

「君は魔導師の類か？」

「そうよ、わたくしの名はセーフィエル。ファウストの元で魔導を学んだ時期もあったわ」

「あのインチキ魔導師ファウストの弟子か」

「不肖の弟子と呼ばれているけれどね」

「それで用件は何だ？」

「そうね、この子を元に戻したらお話ししましょう」

「いいだろう」

これはセーフィエルによる紅葉への挑戦だった。つまり、男子学生に取り憑いたモノを抜えない者には用がないということだ。

飢えた獣の目をした学生は四つ足で紅葉の周りをジリジリと足を滑らすように動き回る。

紅葉は長髪をかき上げ、もう一方の手を着ている白衣の内へと伸ばした。

獣と化した学生が紅葉に飛び掛かる。それよりも紅葉の方が早い。

白衣の内から外に出された手には蓋の閉まった試験管が握られていた。

紅葉が試験管の蓋を親指で弾き開けると、中から煙が立ち込めて、その煙は生き物ように学生に襲い掛かった。

煙であるはずの物質が学生の四肢を掴み、動きを完全に封じた。

瞬時に床の上でもがく学生の顎を掴んだ紅葉は、白衣の内から新たな試験を取り出し、その中に入っていた液体を学生の口の中に無理やり流し込んだ。すると、学生は気を失い、身動きを止めた。

「それで。用件は何だね？」

立ち上がった紅葉は白衣を乱れた直しながらそう聞いた。セーフィエルは嬉しそうに微笑った。

「さすがね、その力を貸して欲しいのよ」

「その力とは何だ？」

「あなたが生み出した魔導具のことよ」

「なるほどな」

魔導は素質を持った者にしか使えない。紅葉には魔導の素質はなかった。しかし、魔導具は魔導の素質がなくとも使用することが出来る物が数多くある。そして、魔導具は素質がなくともつくる事ができた。

魔導師がつくった魔導具の方が、素質のない者がつくった魔導具よりも優れている。しかし、紅葉の生み出した魔導具は違ったのだ。その実力は帝都大学にいる魔導師に疎まれるほどだった。

セーフィエルの掌の上に蒼白い輝きを放つバレーボールほど

の大きさの玉が出された。

「これは人工満月なの、でも不完全」

「それで私に何をしろと？」

「もう察しはついていると思うけれど、この人工満月を完全にしてもらいたいの」

「それはおもしろいような研究だな。しかし、私にはあまりメリツトがあるとは思えない」

「もちろん報酬はお支払いするわ」

異空間からセーフィエルは一冊の分厚い本を取り出し、紅葉に手渡した。手渡された本は魔導書であり、その本のページに目を通した紅葉の目つきが変わった。

「これはおもしろい。三日ほどくれれば人工満月を完全なものしてみせよう」

「それは心強いお言葉ね。では、これがわたくしのつくった人工満月に関しての記述よ」

セーフィエルは紅葉に数枚のメモを手渡した。そこには人工満月の作り方が事細かに書き記してあった。

「これならば明日にはできるだろう。明日に私の元に来たまえ」

「あら、そんなに早くできてしまうの。魔導師の面目が丸つぶれね。それから、シザーハンズを探しているのだけれど、どこにいるか知らないかしら？」

「シザーハンズ だと？」

シザーハンズとは魔導具の名前であり、その魔導力の強

大さからある程度の意思を持っている。その シザーハンズは帝都で人々に取り憑き数多くの殺人事件を起こした。一時期姿を消した シザーハン だったが、この頃また現れたというニュースは紅葉の耳にも届いていた。

「そう シザーハンズ よ。殺人者シザーハンズ しかし、その正体は魔導具である シザーハンズ。見つけたら捕まえて保管してもらえると嬉しいわ。では、また明日、お会いしましょう」

そう言つて微笑んだセーフィエルは闇に溶けて消えた。

紅葉は階段を登り部屋を出た。すると、そこには数人の学生たちが紅葉のことを待っていた。

「下にいる学生を医務室に連れて行きたまえ。もう取り憑いたものは消滅した」

紅葉はそれだけを言つて自室に足を運んだ。

自室に戻る紅葉の足取りは速い。魔導書を持つ手には少し力が入っている。

部屋に戻つてきた紅葉はすぐさまデスクに座り、魔導書の表紙を開いた。

紅葉が微笑みを浮かべた。

セーフィエルから譲り受けた魔導書は帝都地下で発見された遺跡に関するものだった。

紅葉が帝都地下遺跡の調査を任されるようになってから一ヶ月以上の時が経った。つい先日起こった事件にも遺跡が関係していた。そして、その事件には帝都政府が絡んでおり、遺跡

の調査を命じたのも帝都政府だった。

帝都地下で発見された遺跡は殺葵と呼ばれる存在を封じるための装置であった。それを守っていたのが 名も無き守護者という 大狼 と 大鷹。しかし、大狼 と 大鷹 は再び殺葵を封じることができなかった。殺葵を再び封じたのは別の存在であった。

再び殺葵が封じられた時、紅葉はその現場に居合わせた。そして、殺葵を異空間へと引きずり込んだ存在を見てしまった。そう、あれは確かに紅葉のよく知る人物であった。だが、なぜ？

紅葉は苦笑を浮かべた。

「誰もが隠し事をしていうことだな……」

自分の周りにいる者たちが、ある事件で繋がっていることに紅葉は気がついていてた。だが、その話について話し合ったことはない。そのため、本当に自分の周りにいる者があの事件の関係者なのかはわからない。

出逢いは偶然ではない。ひとつの事件で繋がっていたからこそ、出逢ってしまった。

紅葉が目を通してある魔導書には遺跡に関しての記述とともに、帝都エデンを治める女帝に関する記述もあった。

魔導書にはこう記載されている。殺葵を帝都地下に封じるように命じたのは女帝であると。

人間の寿命では到底成しえない長い統治。年に一度、公の場で姿を見せる女帝の姿は若く、二〇代後半にしか見えない。不

老不死か何かなのかもしれないが、女帝の素性は一般には知られてない。ヒトではないという噂もあるが、その真意を確かめる術はなかった。

魔導書を閉じた紅葉は床に放置してあった割れたカップとコ―ヒーに目をやった。

黒い液体の表面上の浸食は止まっている。しかし、床の中への浸食はまだ続いているだろう。

紅葉はまだ掃除をする気がなかった。

「さて……」

立ち上がった紅葉は人工満月をつくるべく、魔導研究室へ足を運んだ。

紅葉のいなくなった部屋の窓から見える景色。外では雨がまだ降り続けている。だが、雨は先ほどよりも弱まり、もうすぐ止むことだろう。雨はいつか晴れるものだ。

そう、いつかは全て終わる……。

幕間 完

機械仕掛けのメイド

機械人形アリスはとある洋館の前に立っていた。帝都の街に突如として現れたセーフィエルの屋敷である。

アリスがこの屋敷に出向いたことの発端は、ある日の夜、マナ邸に珍客が訪れたところからはじまる。

特殊な呼び鈴の音を聴きつけたアリスは、すぐさま玄関に向かいドアを開けた。

最初は悪戯かと思った。何せ、アリスの視線の先には誰もいなかったからだ。しかし、アリスが視線を降ろすと、確かにそこには客がいた。客と言ってもヒトではない。梟だ。

梟は軽くお辞儀をして見せると、若々しい男性の声を発した。「セーフィエル様の使いの者です」

それを聞いたアリスは嫌な顔ひとつせず、ニツコリと笑って、「こちらへどうぞ」

と梟を屋敷の中へ案内した。

応接間へ通された梟はソファアの上にとちよこんと座り、一度どこかに姿を消したアリスが運んできた紅茶を飲み、クッキークッキーと食べた。

「美味しいクッキーですね。どこでお買い求めになられたのですか？ ぜひともわたくしの主人にもお勧めしたい」

「お褒めのお言葉光栄で御座います。それは私の手作りなので

「ございます。宜しければ、お土産に少しお持ちになられますか？」

「それはありがたい。主人もさぞお喜びになられるでしょう。アリスはテーブルを挟んで梟の手前にあるソファアに座り、一息ついてから話しはじめた。

「マスターマナは出かけておりますので、私が代わりにご用件をお伺いいたしますが、それでも宜しいでしょうか？」

「ええ、マナ様をご在宅でない時間を狙って訪問させていただきましたから」

「そうだろうと思っております。それで、ご用件は何でございますか？」

「これからわたくしとセーフィエル様のお屋敷にお出でになられていただきたいのです」

アリスの今の主人はマナであるが、以前の主人はセーフィエルだ。しかしながら、今の主人がマナである以上は、セーフィエルは敵と言える存在であった。だが。

「宜しいでしょう。今すぐセーフィエル様のお屋敷に参りましょう」

「本当ですか？ まだ詳しいお話もしていないのに……？」

梟は目を白黒させて驚いているが、そんな梟を見てアリスはニツコリと微笑んだ。

「私に危害を加えるつもりなら、セーフィエル様はもつと別の方法を探るでしょう。もし、何かあったとしても、きっと困るのは私ではなくマスターでございますよう？」

悪戯な仔悪魔的の笑み浮かべたアリスはさっとソファから立ち上がった。

「早く参りましょう。セーフィエル様の屋敷で何が待っているか楽しみ……」

こうして一機と一匹はセーフィエルの屋敷に向かうことになった。

夜の闇は深まり、マナ邸の前には闇に溶けるリムジンが止まっていた。

アリスと梟を乗せたリムジンには運転手が乗っていない。乗っているのはアリスと梟だけだった。

コンピュータ制御による自動運転を行える車は一般的だが、アリスの乗ったリムジンは魔導によりリムジン自体が生きていた。

セーフィエルの屋敷はマナ邸から遠からず近からずの距離に建っていた。

マナの屋敷は平面および立面に楕円のカーブや複雑な反転曲線で構成され、過剰な装飾がいかにマナの見た目を表しているバロック建築で建てられている。それに比べ、セーフィエルの屋敷はバロック建築よりも時代の古い、石造建築の極致と呼ばれるゴシック建築で建てられ、建築の構成が視覚的に明瞭であった。

大きな鉄門を抜け、セーフィエルの洋館が建つ敷地内に入ると、梟の姿が紳士服を着た若々しい男性に転じた。

「改めまして、わたくしの名前はセバスチャン　セーフィエ

ル様の執事です」

「こちらこそ、はじめまして」

以前の執事とは面識のあったアリスだが、このセバスチャンという人物とは初対面であった。

アリスはセバスチャンにエスコートされながら洋館の中に入った。

屋敷の中も外観同様に落ち着いており、華美な装飾をされた家具はいつさいなかった。

アリス通された部屋は真つ暗であった。人間の目ではどこに何があるか全くわからない。しかしながら、その闇では人間でないアリスの目を持ってしても、セーフィエルがそこにいたことを確認できなかった。

暗闇の中に淡い蠟燭の火が灯り、セーフィエルの白い顔が浮き上がってきた。

「こんばんは、愛しいアリス。来てはくれないと思っていたわ」

「無駄な話はいりません。マスターマナを空けて来てしまいましたので早く戻らねばなりません」

アリスは澄んだ蒼い双眸でセーフィエルを見据えていた。だが、アリスにはセーフィエルの存在を確認できずにいた。セーフィエルは目の前にいるが、それだけがセーフィエルではないのだ。この部屋を満たす闇全体からセーフィエルが感じられる。まるでセーフィエルの体内に閉じ込められてしまったようで、アリスは警戒心を強めた。

そう言えば、一緒にこの部屋に入ったはずのセバスチャンの姿がない。アリスは闇の中で孤立してしまった。

アリスの身体を覆う闇からセーフィエルの言葉が響き、それはアリスの内まで響き渡った。

「シザーハンズ の整備をするために来てもらったのだけだ、少し遊んで行くかしら？」

「とんでもございません。心の底からお断りいたします」

「あら、心などつくったかしら？ まあいいわ、マナの帰りは明後日でしょ、わたくしと遊びましょう」

「宜しいでしょう。遊んで、帰ります」

部屋の明かりが点けられ、セーフィエルはもういない。そこで代わりにセバスチャンが立っていた。

「シザーハンズの修整パッチをご用意しております」

ノートパソコンに繋がられた出力プラグを持っているセバスチャンを確認したアリスは、セバスチャンに背を向けて後ろの髪の毛をかき上げてうなじを出した。首の後ろには入力端子があった。そこにプラグを差し込んで情報をアリスの ブレイン 脳に書き込むのだ。

先が尖った太い針のようなプラグをセバスチャンはアリスの首に突き刺した。その瞬間、アリスの瞳は大きく見開かれ、次々とアリスの内へと情報が流れ込んできた。

ノートパソコンを見ながら、情報が全てアリスの書き込まれたことを確認し、セバスチャンは力いっぱいプラグを引き抜いた。

アリスが床に膝をついて倒れ、セバスチャンはすぐに手を差し出した。

「立てますか？」

「大丈夫でございます。思った以上に情報量が多かったもので、少々処理に手間取ってしまいました」

ゆっくりと立ち上がったアリスは柔軟体操をしながら身体を鳴らし、魔導力のこもった蒼い瞳でセバスチャンを見つめ、微笑みを浮かべながら玲瓏たる声を発した。

「これから私は何をすれば宜しいのでしょうか？」

「この屋敷を出るだけで結構です。わたくしは出口まで案内して差し上げられませんが、どうぞお気をつけて」

「お心遣い有り難う御座いますでは、失礼いたします」

部屋を後にしたアリスは廊下を見回した。来た時と何かが変わったようすはない。しかし、セーフィエルが遊びだと言った以上、何かがあるのだろう。ただで帰してくれるはずがない。

突如足場が揺れた。アリスはバランスを崩して床に手をついたが、手は床に沈んでしまい余計にバランスを崩させた。

床がゼリーのようになってしまっている。

アリスは無理に立とうとはせず、赤ちゃんのようにハイハイをして歩きはじめた。それでも前に進むのは困難で、嵐に遭ってしまった船のように身体が揺れてしまう。そこでアリスはしかたなく空を飛行することにした。

「コード000アクセス 五〇パーセント限定解除。コード005アクセス ウィング 起動」

アリスの背中に骨組みだけの翼が生え、それは魔導を帯びて黄金色に輝く。

微かに重低音を鳴らしながらアリスの身体が宙に浮いた。

一本道の廊下はどこまでも続いている。こんな道を来た時に通った覚えはなかったが、道を間違えたつもりもない。アリスは後ろを振り向くが、そこにも一本道の廊下が続いている。

外から見た屋敷の外観と廊下の長さが合っていない。明らかに廊下の方が長いのだ。空間が捻じ曲がっていることは明白だった。

たとえ空間が捻じ曲がっていようと、今ある道は二つだ。一方に進むしかない。

アリスは一方の道を選び高速移動を開始した。

同じような景色が後ろに流れていく。どこまでもどこまでも同じような景色が続き、最初の地点に戻ってくる。

アリスは道がループしていることを知りながら、ただひたすらにまっすぐ進み、しばらくして逆方向に進んで止まった。

「やはりドアの数が変化しているみたい」

A地点を起点にしてアリスが一方に進んでいると、いつの間にかA地点に戻ってくる。しかし、変わったことが一つだけある。起点となったA地点には『セーフィエルとアリスが会った部屋のドアがあり、そのドアには『一』と書かれていた。一方に進み何度モループを繰り返していくうちにドアの数が増えていて、一つ増えるごとにドアに書かれている数字も増えていた。

アリスが逆戻りしたのはドアの数が減ることを確認するため

だ。そして、ドアが増える上限は『九』であった。

廊下に並ぶ九つのドア。アタリハズレがありそうだが、アリスは『一』のドアから順番に入ることにした。

ドアノブに手を掛け、ゆっくりと手を引いたアリスが顔をしかめる。それでもアリスはドアを潜ったが、アリスの予想は当たっていた。『一』のドアから入ったら『一』のドアから出てしまったのだ。

アリスはこの後、九つ全てのドアを潜ってみたが、結果は同じだった。

もしかしたら、ドアに入る順番が決められているのかもしれない。しかし、先ほど潜ったドアは全て同じ感じがした。正解のドアを潜った時に何らかのヒントがあってもよさそうなものだが、それはなかったとアリスは判断した。

ヒントはなく、通る順番というものがあるなら、それは勘と根気で突破しなくてはいけない難関だ。けれども通る順番があるという考えは、すぐさまアリスの中で消去デリートされた。

セーフィエルの性格を考えたらアリスは、セーフィエルが何らかのヒントを残していると考えたのだ。

九つ全てのドアを通ったが、ヒントはなかったとアリスは判断している。となると、この九つのドア全てがフェイクなのではないかと考えた。そして、アリスは急いで道を引き返した。

流れる景色の中で、ドアが一つずつ減っていく。それはまるでカウントダウンをするように九から順番に数が減っていく。

そして、『一』を超えてドアが全てなくなり、壁に『零』とい

う数字が現れた。

壁に描かれた『零』という数字を見たアリスは腕組みをして考え込んだ。

『零』という数字は実際には描かれているわけではなかった。そこには楕円の穴が空いていたのだ。

鍵穴が何かなのかもれないという考えが浮かんだ時、アリスはニツコリとした表情を浮かべた。

「コード001アクセス　　ビームセーバー　　召喚^{コール}」

アリスの手に光り輝くソードが握られ、アリスはそのソードを穴の中に差し込んだ。すると、カチツという音が聞こえ、壁の裏から歯車の回る音が聞こえはじめた。

壁が左右に開けていく。その奥に広がる光景を見てアリスが顔をしかめる。

ピンクの猿の群れが飛び跳ねたり奇声を発したりしている。しかも、なぜか手にはトマトを持っている。

呆然と立ち尽くすアリスの顔にトマトが当たって弾けた。次々とトマトが投げられ、アリスの服が鮮やかに染まっていく。

思わずアリスの本音が出してしまった。

「莫迦らしい」

冷めた表情をしたアリスは手前に向けた。その間もアリスにはトマトが投げつけられ続けている。

「コード002アクセス　　シールド　　召喚^{コール}」

シールドを召喚したアリスはトマトを防いだ。それを見たピンクの猿はトマトを投げるのを止めてどこかに行ってしまった。

アリスの頭に嫌な予感が過ぎる。まさか、全てのアクセスコードを使わせる気なのでは？

ピンクの猿がいなくなった部屋の奥にはドアがひとつある。しかし、アリスはドアに背を向けた。

「……さすがに付き合っていない。コード003アクセス

コメント 召喚^{コール}」

天^{ソラ}より召喚されしロケットランチャーを構えたアリスは照準を定めた。

コメント は壁を狙っていた。

「ターゲット確認 ショット！」

轟音と爆風に小柄なアリスの身体が後方へ吹き飛ばされた。

コメント を担ぎながら、片手を床について着地したアリスは、硝煙の先にあるものを見定めた。

崩れた壁のその先 アリスは外だと思っていたが違った。

壁一面が鏡でできた部屋。中に入ったアリスが無限に映し出される。無限世界がそこには広がっていた。

鏡に映るアリスが コメント を本当のアリスに向ける。

すぐさまアリスは早口でアクセスコードを唱えた。

「コード000アクセス 八〇パーセント限定解除。コード008アクセス ショックウェーブ 発動！」

アリスを中心として電波が水面に落ちた雫のように広がり、鏡が大きな音を立てながら弾け飛んだ。

弾け飛ぶガラス片が七色に輝き、やがてそれはひとまとまりに集まり、もう一人のアリスを造り上げた。

もう一人のアリスを見た本物のアリスは嫌な顔をした。

「私はもつと可愛らしい」

しかし、今のアリスはトマトでぐちよぐちよだった。目の前にいるアリスは綺麗なゴスロリドレスを着ている。

もう一人の偽アリスとも言うべき者がアクセスコードを唱えた。

「コード000アクセス　一〇〇パーセント解除。コード0

02アクセス　シールド　召喚^{コール}。コード004アクセス

レイピア　召喚^{コール}。コード005アクセス　ウイング

起動。コード006アクセス　ブリリアント　召喚^{コール}。コー

ド007アクセス　メール　装着。コード009アクセス

イリユージョン　起動」

白いボディースーツに包まれた偽アリスは　シールド　とレイピア　を構え、背中には黄金の翼、身体の周りには四つの球体がダイヤのようにきらきらと輝きを放っている。

フル装備をした偽アリスを見て、本物のアリスが失笑する。

「コードはやたらと唱えればいいってものじゃない……。コー

ド007アクセス　メール　装着。コード　アクセス

メルキドの炎　一〇パーセント限定起動、昇華！」

それはあまりにも一瞬の出来事であった。

天高く上げたアリスの手から渦巻く紅蓮の炎が天に昇り、天から降り注ぐ炎の塊は辺り一面を一瞬にして火の海に変えてしまった。

全てが炎に吞まれていく。

巨大な炎の中から白い影が歩いてくる。それはまさにアリスであった。

アリスは微笑んでいた。その微笑みは全てを物語っている。「火遊びって楽しいけど、よい子はしちやだめ」

崩れ落ちる屋敷を後にして、アリスは鉄の門を潜り抜けた。

深夜遅く、帝都某所で大火災が起きた。もともとその場所には突如として建った屋敷があり、帝都政府は住人の立ち退きと屋敷の取り壊しをしようとしていた。その矢先に起きた火事であった。

火事によって住人の立ち退きと取り壊しの手間は省けたが、それ以上に深刻な問題が起きてしまった。

何十台もの消防車で行われた消火も虚しく、炎は普通の水では消すことができなかったのだ。その炎が魔導であることがわかり、魔導師が現場に駆けつけた時にはすでに、屋敷だけでなく辺り一帯の建物が全焼するという大惨事になってしまった。

この事件は翌日のニュースでもトップで扱われたが、未だ犯人は見つかっていない。

機械仕掛けのメイド 完

魔女の屋敷

時雨の前に聳える建物はゴシック建築の洋館だった。そのシンプルな石造りの屋敷の玄関に立った時雨は、呼び鈴を鳴らすうとしたのだが、玄関の扉が開く方が早かった。

手前に開いてくるドアを時雨は素早く避け、屋敷の中から出て来た者と目が合った。それはヒトではなく、梟であった。

梟は軽く頭を下げると、流暢な人間の言葉を話し出したではないか。

「わたくしはこの屋敷の主セーフィエル様に仕えるセバスチャンと申します。それで、ご用件は？」

「えつと、都役所に仕事を委託されて来たんだけど」

「そうですか、詳しい話は中で伺うと主人が申しておりますので、どうぞ中へ」

「おじゃまします」

玄関を通りながら時雨はセバスチャンの言った言葉が気になつたが、さほど気にすることはないだろうと思いつぐに忘れた。

時雨の通された部屋は真つ暗だった。

「あのお……」

少し不安を覚えた時雨は振り返つたが、そこにはすでにセバスチャンの姿はなく、あるのは闇だけだった。

何も見えない闇の中、時雨は何者かの気配を感じ取っていた。

気配は闇全体から感じられるが、複数ではなくひとつであった。ここにある闇がひとつの存在のようだ。

闇の中で時雨がぼーっとしていると、やがて暗闇の中に蒼白い顔がにじみ出てきた。

「わおっ！」

幽霊か何かだと思つて声を出した時雨に、蒼白い顔が微笑んだ。その微笑みは暗闇の中ではとても不気味に見えた。

蒼白い顔から発せられた声は、澄んだ夜風のようにである。

「あら、驚かせてしまつてごめんなさい。そんなつもりはなかつたの、ただ明るいのが嫌いなだけなもので」

突然部屋の明かりが点けられ、時雨の目の前にはテーブルに着いて紅茶を飲んでゐる女性がいた。

女性は時雨の後ろに声をかけた。

「セバスチャン、時雨様に緑茶と和菓子を持つて来て差し上げて」

「畏まりました」

時雨は驚いた表情をして後ろを振り返ると、そこには鼻のセバスチャンがいた。闇の中には気配がなかったと時雨は断言できる。

セバスチャンが部屋を出て行くのを見て、女性は微笑みながら自己紹介をはじめた。

「わたくしの名はセーフィエル。この屋敷の主にして、夜魔の魔女つてところかしら」

妖艶とした微笑むセーフィエルを見て、時雨は背中に冷たい

ものを感じた。知り合いの魔導師が持つモノとは違う恐ろしさを感じたのだ。

セーフィエルは自分の前の席を客に勧め、時雨は勧められるままに椅子に腰掛けた。

「ボクと前に会ったことありますよねえ？ たしかマナがアリスちゃんに襲われていた時」

「あら、わたくしのことを覚えてくださったの、嬉しいわ」

「マナとは知り合いなんですか？」

「ええ、姉妹弟子なのよ」

「じゃあ、やつぱり魔導師か……」

相手が普通の人間ではないからこそ時雨は呼ばれのだ。

一息ついたところで時雨はここに来た理由を話し出そうとしたが、部屋の中に若い男性が入って来たことよって妨害されてしまった。

「緑茶とようかんをお持ちしました」

男性は執事のような紳士服を着こなし、手にはお茶と和菓子の乗ったトレイを持っていた。

お茶と和菓子を時雨の前に置いた男性にセーフィエルが声をかける。

「セバスチャンは下がっていいわ。時雨さんと二人つきりでお話をするわ」

セバスチャンと呼ばれた男性は頭を下げて部屋を後にした。それを見た時雨は、この屋敷の使用人はみんなセバスチャンという名前なのかなと思いつつ、出されたようかんをパクリと口

の中に放り込んだ。

「おいしいですね」

「あら、それはうれしいわ。そのようかんはわたくしのお手製のよ」

「ようかんを手作り？」

「ええ、はじめて作ったのだけれど、上手にできてよかったわ」

セーフィエルは時雨に向けて微笑みを投げかけ、時雨は目を伏せるようにしてお茶をひと口飲んで息を吐いた。

「あのお、それでボクは帝都役所に頼まれて」

「ええ、察しはついているわ。この屋敷を立ち退いて、この場所を元通りにしろというのでしょうか？ 役所も融通が利かないところだこと」

「ですけれど、無許可は困ります」

この土地には元々数軒の家が建っていた。そこに一夜にして突如セーフィエルの屋敷が建ったのだ。元々あつた住宅はどこに消えたのか、そこに住んでいた人々はどこに行ってしまったのか。

そこで帝都政府はセーフィエルの屋敷を調査しようとしたのだが、強力なセーフィエルの魔導に惑わされて調査は難航した。そこで時雨が呼ばれたわけだ。

セーフィエルは微笑み、時雨にある条件を提示してきた。

「わたくしとかくれんぼをしましょう」

「かくれんぼ？」

「そう、かくれんぼ。時雨さんが鬼で、わたくしがこの屋敷のどこかに隠れる。わたくしを見つけ出すことができれば、わたくしはここを立ち退き、元の姿に戻して差し上げます。そうね、タイムリミットは明日の日の出までにしましょう。それでよろしいかしら？」

「ええ、まあ……」

このような問題をかくれんぼという“ゲーム”で解決しているのか、と時雨は思ったが、相手がそのような条件を出してきたのだからしかたない。力づくという選択肢よりはマシかもしれない。

「時雨さんは目を瞑って十数えてくださる？ その間に隠れますわ」

「わかりました」

時雨が目を閉じると三秒もしないうちにセーフィエルの気配が消えた。歩いたようすも、扉を開けたようすも感じられなかった。セーフィエルの気配は忽然とこの部屋から消えてしまったのだ。

十を数えて時雨が目を開けると、やはりセーフィエルの姿はなかった。

置時計の針は昼の三時過ぎを指している。夜明けまでは一二時間以上はある。

日の出までの半日という時間をセーフィエルは隠れきるからこそ、その条件を提示したに違いない。だとすると、この勝負は長期戦になりそうだ。

時雨が廊下に出ると、そこは最初に通った廊下とは違うものになっていた。

一方通行の廊下は左右にどこまでも続き、終わりなどないように思える。

床が激しく揺れ、時雨は思わぬことに足をすくわれてしまつて転倒した。時雨の倒れた床はぶよぶよとしていてとてもやわらかい。そう、床が揺れたというより、床がやわらかくなり、時雨の足が沈んでしまつたのだ。

時雨はやわらかいウオーターベッドのようになってしまつた床に寝転んで天井を仰いだ。その天井には扉があつた。

どこまでも続いていそうな廊下の途中にあるかもしれない扉を探すか、天井にある扉にどうにかして入るか、それとも今さつき出てきた扉に。

「ないじゃん！」

時雨は思わず声を荒げてしまつた。先ほど出てきた扉がなくなつていたので。となると、選択肢は絞られてくる。

寝転んだまま時雨は手を天井に向けるが、扉に届くはずがない。立ち上がってジャンプしても届きそうもなく、そもそもぶよぶよした廊下は立つことさえ困難だつた。

仕方なく時雨は床の上でごろ寝をしながら、いいアイデアを考え出そうとした。

心地よい床の感触に時雨は次第に眠たくなつてきてしまつた。瞼が次第に重くなり、急激な眠気が襲ってくる。

眠気のせいか幻覚が見えてきたらしい。時雨を挟み込むよう

にして、廊下の両端からピンクの猿が群れを成して襲ってくる。ピンク猿の動きは軽やかで、やわらかい床などものともせず、奇声をあげながら飛び跳ねてくる。

時雨は逃げることも考えたが、足が床に掬われるのがオチだろうと思ひ、逃げずに床の上をゴロゴロしながらピンク猿が来るのを見守った。

ピンク猿たちは時雨の周りに群がり、奇声を合図に時雨の身体を持ち上げた。

まるで荷物扱いの時雨は何どもその場で胴上げされ、まるでそれは勢いを付けるためにやっているようだった。

時雨がもしやと思つた時にはすでに、彼の身体は天井高く投げ飛ばされ、天井にあつた扉にぶち破つて別の部屋に移動していた。

大きな大きな部屋の中に時雨がぼかんと立っている。大きいと言つても広さだけのことを言っているのではない。家具も柱も電灯も、全てが巨人サイズなのだ。

大木のようなテーブルの足にもたれかかつた時雨はため息を吐き出した。

「ボクが小さくなつたか、それとも部屋がデカイのかなあ」

どちらにしても時雨がこの部屋に比べて小さいということは変わりなく、遠くに見えるドアノブには手が届きそうもない。

時雨が重い足取りで部屋を散策していると、壁に時雨がちょうど通れるくらいの穴を見つけた。穴はアーチ型の門の形をしている。しかし、なぜ、こんなところに穴が？

穴の奥で何かが光った　それも二つ。

「ネズミかつ！」

穴から飛び出して来たネズミが鋭い前歯で時雨に襲い掛かる。ロングコートの裾を大きく振り上げ時雨が華麗に飛ぶ。その手には光り輝く妖刀村雨が握られている。

魔鳥のごとく時雨は獲物に向かって降下する。

迸る紅。

悲鳴をあげるネズミ。

妖刀をネズミから抜き、一息ついた時雨の耳に鳴き声が聞こえた。チュウチュウという鳴き声は、まさにネズミだった。それも一匹や二匹といった鳴き声には聴こえない。

壁に空いた穴からネズミが滝のように流れ出てくる。蒼ざめた顔をした時雨は逃げた。

止まることなく出てくるネズミから、時雨は全速力で逃げた。これほどまでに必死に逃げたのはどこかの女魔導師に追いかけられた寒い冬の日以来だ。

走る時雨の背中では、灰色の波が今にも時雨を呑み込もうとしている。

部屋は広いといえど、全てが大きいために隠れる場所もなく、少しずつ部屋が灰色に侵食されていく。

時雨はテーブルの足をよじ登り、テーブルの上から下を見回した。床はすでに灰色で埋め尽くされ、波打ち蠢いている。

「ここまで来れないみたい」

ネズミが上がって来るようすはない。どうやら一難を逃れた

ようだ。しかし、一難去つてまた一難。チエス盤の上にあった駒が動き出したではないか!?

チエスの駒はヒト型をしており、動いた駒の数は全部で五体。騎士が地面を跳躍し、レイピアによる一撃を時雨に仕掛ける。時雨は素早くそれを躲すが、背後からの打撃を受けて地面に転がった。

床に転がった時雨に兵士が拳を振り上げ襲い掛かる。妖刀が光を吐き出し兵士の身体を貫いた。

砕け散る兵士の欠片の先から騎士が襲い掛かつて来る。時雨は床を転がりながら一撃を避けると、すぐさま騎士に妖刀を振り下ろした。だが、その前に壁が立ち塞がる。妖刀が弾かれた。時雨の前に現れたのは城兵であった。

雷光が横に走る。僧正から放たれた雷光をし、時雨は辛うじてそれを避けると妖刀を横に振った。それは城兵に塞がれてしまい、その先には妖艶に笑う女王がいた。

相手の数が多い。時雨にとつてこの戦いは明らかに不利だった。

騎士の疾風のような攻撃を避け、僧正の呪文を避け、不可思議にいつの間にか真後ろに立っている女王に攻撃をしようとする。と城兵にブロックされる。

跳躍する騎士。時雨は賭けに出た。

騎士の握るレイピアが時雨に突き刺さる瞬間、時雨は紙一重で避けて騎士の腕を掴むと、そのまま後ろに投げ飛ばした。騎士がテーブルから落ちて灰色の海へと飛び込んだ。もう騎士が

どうなったかはわからない。

時雨は戦略を立てる。今戦っている駒は白だ。だとすると……。

辺りを見回した時雨は目当てのモノを見つけ出した。物陰に隠れている王^{キング}。あれを討ち取ればチェクメイトだ。

地面を蹴り上げ時雨が宙を舞う。

妖刀を振り下ろそうとした時雨の前に城兵が立ち塞がる。辺りに硬い音が鳴り響き、時雨の身体が後方に吹き飛ばされる。

「やつぱり無理か……」

舌打ちをした時雨は狙いを替えて僧正に刃を向けた。

雷光を紙一重で避けつつ、時雨は僧正に一刀を喰らわす。しかし、また城兵によつて塞がれると思いきや、時雨は妖刀を王に向かつて槍のように投げつけた。地面を高速で飛ぶ槍が駒を貫く。だが、貫かれたのは王の前に突如として現れた女王だった。

女王の身体が砕け散り妖刀が地面に落ちる。

時雨は全速力で走った。後ろからは僧正による雷光が襲い掛かって来るが、時雨は見事なまでにそれを躲し、地面に落ちている妖刀を拾い上げると王に向かって振り下ろした。

砕け散る王。それとともに滅びる僧正と城兵。

王が砕け散ったその場には、赤いキノコが落ちていた。

時雨はキノコを手にとってまじまじと見つめる。

「この部屋を出るためのアイテムかもしれないけど……」
あまりの毒々しさに食欲はわかなかった。だが、食べる以外

のキノコの使い道とはなんだろうか？

大分長い時間考えた挙げ句、結局時雨はキノコを食べることにした。

恐る恐るパクリとかぶり付くと、以外なことにはつべたが落ちてしまいそうなくらい美味しいではないか。時雨はすぐに全てをたえらげてしまった。

キノコを食べても何も起こらない。しばらく待ったが何も起こらない。

「そんな莫迦なあ」

食べる以外にどんな使い道があったというのか？

「もしかして、ネズミに食べさせるとか……」

その選択肢もあつたかもしれない。しかし、時雨の選択は間違つていなかった。

徐々に時雨の身体が膨れ上がっていく。二倍、三倍、四倍……。そして、身体のサイズは部屋ぴつたりになつた。これでもやくドアノブに手が届く。

ネズミたちは時雨に恐れを成して巢に戻り、ドアノブに手を掛けた時雨の手が強張る。

「鍵閉まつてんじゃん！」

声を荒げながら時雨はドアノブを乱暴に回したり、押したり引いたりしたが、びくともしない。

「そつちがその気なら、こつちはこの気だ！」

びしつと剣先をドアに突き付けた時雨は、大きく腕を振り上げてドアに一刀両断しようとした。が、しかし、ドアは妖刀を

取り巻く光の粒子を吸い込んでしまった。村雨敗れたり。

時雨は柄に付いたボタンを何度も押すが、柄から光の刃が出ることはなかった。妖刀村雨のエネルギーを全てドアに吸収されてしまったのだ。こんなことは前代未聞だった。

「反則だよ。ボクから村雨を取ったら、ただの人なんだぞコンチキショー！」

時雨は怒りに任せてドアを蹴飛ばした。すると 足が痛いだけだった。

ここは大人しくドアの鍵を見つけるしかなさそうだ。

部屋中を隈なく探したが鍵は見つからない。最悪のケースを想定すると、この部屋に鍵がないというケースがある。

椅子にもたれかかった時雨は部屋を見回す。

四方は壁に囲まれ、窓はない。あるのは開かずの扉のみ。

「じゃあ、どうやって出ればいいんだよ」

椅子に座ってだいぶ時間が経っただろうか、壁に取り付けてある鳩時計が七回鳴った。時刻は夜の七時。おそらくタイムリミットまで半日を切った。

焦りを覚えてきた時雨は、もう一度部屋中を隈なく探したが、鍵は見つからなかった。

時間だけが過ぎていく。

時雨はあきらめた。自分の力ではここを出ることはできない。椅子に座って何かが起こるのを待つことにした。

待った。だいぶ待った。嫌になるほど待った。何も起きない。

時雨がテーブルに突っ伏していると、ドアをノックする音が聞こえた。すぐさま時雨がドアの方を振り向くと、開かずの扉が開こうとしているではないか!?

ドアは引くでも押すでもなく、横に開けるでもなく、下から上にシャッターのように開いた。

「うっそ〜！」

口を空けっぱなしになって、時雨の魂は飛んだ。

ドアを開けて入って来たのジャケットを着た、人間ほどの大きさのウサギだった。ウサギはトレイに飲み物を乗せてやって来た。

時雨の前に置かれる飲み物。時雨はその中身を覗き込んだ。

湯気が立つ、透き通った緑色の液体。お茶の芳しい香が時雨の鼻を衝く。

「飲んでいいの？」

そう時雨が尋ねると、ウサギは大きく頷いてみせた。

「じゃあ、いただきます」

お茶好きの時雨は何度も入念に息で冷ましてから一気に飲み干した。

「このお茶美味しい。でも、少し……なんだか……うっつ」

時雨は瞼が重くなるのを感じ、次の瞬間には辺りが真っ暗になり椅子から転げ落ちた。

時雨が気がついたのはベッドの上だった。

「お気づきですか？ 何か飲み物でもお持ちしましょうか？」

時雨に声をかけて来たのは梟であるセバスチャンだった。

ふらふらする頭を抱えながら時雨は首を横に振った。

時雨は置時計に表示されている時刻を見て、再びベッドの上に倒れ込んだ。朝の一〇時前　　だいぶ長い時間気を失っていたらしい。見事にやられた。

勝負は時雨の負けだった。

よろよると立ち上がった時雨はセバスチャンに頭を下げた。

「帰ります。セーフィエルさんにはよろしく言っておいてください」

「正門までお送りいたします」

「いいです別に。じゃあ」

軽く手を上げた時雨は部屋を後にした。

時雨の立ち去った部屋の中からは女性の笑い声が聴こえて来た。

「また、遊びましょうね」

命

神威神社が倒壊してから早三週間が経った。

帝都政府が神社の再建にあたっていている間、命はホテル暮らしを強いられることになった。

政府が命のために用意してくれた部屋は純和風であったが、命に言わせると機械仕掛けの部屋でしかない。鍵は電子ロック、リモコン操作での窓の開閉から照明操作　イマドキの人間ならば当たり前を感じるかもしれないが、命には落ち着かない。

三週間以上もの間、命は部屋を一步も出ずに、コンピュータのネットワークを介して情報収集をしていた。いくら近代文化が苦手と言えど、パソコンを使わなければ普段の生活が不利になってしまう。

命は液晶画面に映る事件の報告書に目を通していた。

神威神社と帝都タワーの倒壊事件。女帝に反発する過激派のテロ行為だというのが公式の発表だった。

「戯けたことを抜かしおって」

命はこの報告書が嘘偽りであると確信している。　魔剣士と出遭ってしまったその時から。

神威神社を守ることが、命の使命であったはずなのに、彼女は魔剣士を前にして動くことができなかった。身体が芯から振るえ、その場に立っているのがやっとだった。そして、神威神

社は命の目の前で脆くも崩れ去った。

それからのことはよく覚えていない。あまりのショックにその場に立ち尽くしてしまい、頭が真っ白になってしまった。そして、気が付いた時にはホテルの部屋にいた。

エデン公園が政府によって完全封鎖された時に命は部屋にいながら、この世界に一瞬だけ現れたある人物の気配を一瞬だけ感知した。

「……兄上」

命は目を瞑って天を仰いだ。

兄がいなくなってから命は神主を引き継ぎ、ひとりで神威神社を守ってきた。それなのに……。兄に合わせる顔がない。

ある日、忽然と姿を消した命の兄。彼は今どこにいるのか？命は瞼の上に光を感じなくなったことに気が付き、すぐに目を開けた。部屋は暗闇に包まれ、冷たい風が吹いている。自分の身体さえ見ることのできない闇。

闇全体から女性の声が響いた。

「こんばんは、そして初めまして。わたくしの名は」

闇だったモノが集約してヒト型をつくり、それはひとりの女性となった。

「セーフィエル。夜魔の魔女と呼ばれることもあるわ」

そう言ってセーフィエルは濡れた唇で妖々と微笑んだ。それを見た命は警戒心を強めた。

「してセーフィエルとやら、妾に何用じゃ？」

「わたくしの役目は選ばれし者を運命の輪で繋ぐこと。簡単に

言うど、いろいろな人と出逢つてお友達になつておきたいだけかしら？」

「真意が見えぬな」

「いつか見えて来るわ。そうね、貴女の兄のこともね」

「なぜ兄を知つておるのじゃ!？」

「つい先日お会いしたわ」

命にとつてそれは信じがたい事柄であつた。だが、兄に関する情報は今の今まで砂一欠けらとてなかつた。セーフィエルの言動に命が喰いつくには十分であつた。

「妾の兄上はどこに居られるのじゃ、知つておるなら妾をその場所へ案内してくれぬか？」

「もとよりそのつもりよ。貴女の兄も貴女に会うことを承諾しているしね。でも、条件があるわ」

セーフィエルは微笑つた。その笑みは命の心臓を握り締め放さない。このプレッシャーは、あの魔剣士に近い。

金縛りにあつてしまつた命は辛うじて唇だけは動かせた。

「条件とはなんぞや？」

「ふふ、逢魔オウマガトキ刻キに神威神社の再建現場でお待ちしているわ。では、さよなら」

セーフィエルの身体が霞と化して空気に溶けた。部屋からセーフィエルの気配は完全に消えた。

「夜魔の魔女、危険な女じゃな……」

命はこの日、久しぶりにホテルの部屋から出ることにした。

空は黄昏色の染まり、黒い翼を羽ばたかせる鴉たちが鳴き叫び、風が木の葉を揺らす音が微かに聞こえる。

神威神社境内　そこに黒い影は佇んでいた。

神社の再建には少なくとも半年の歳月を有するだろうと言われ、本殿があつた場所は未だに“封印”が終わっていない。

「素敵な夜闇が幕を下ろす。わたくしの時間へようこそ、命さん」

「ここに妾を呼び出したのはなぜじゃ？」

巫女装束に身を包んだ巫女と身体からは、見る人によつては凄まじい気が見えるだろう。命にはわかつていた。ここには悪しき者ども　が巢食っている。神社は代々それを封じてきたのだ。

本殿が壊されてしまったことにより、封印の力が激減し、今は辛うじて相手の力を封じられているに過ぎない、とても不安定な状況であつた。それゆえにこの場所は嚴重な結界が敷かれ、セーフィエルのような部外者は入ることができないはずであつたのだ。

夕暮れに照らされ出来たセーフィエルの影が動いた。セーフイエルは動いていない。影だけが動いたのだ。

「わたくしは貴女を導く者となりますわ。しかし、貴女がそれに相応しい者なのか、まだわからない。そこで、貴女には悪しき者ども　と戦つてもらいます」

「其奴を成敗すればよいのじゃな？」

「いいえ、勝ち負けは関係ないわ。わたくしを認めさせれば、

それでいいわ。では、はじめましょう」

セーフィエルの影の奥から呻き声が聞こえた。

命は身構えるようすも見せない。凄然と立ち尽くし、何かを見つめていた。それはセーフィエルの影の向こうの世界。セーフィエルの影の中は別の世界に繋がっていた。

雷が轟いた。

セーフィエルの影から雷を纏う獣が現れたではないか。

痩せこけた牛のような身体から伸びる前足の爪は鋭く、後ろ足は一本しかなく、長い尾のようにも見える。その眼光は命をしっかりと見据えていた。

「雷獣かえ？」

命はその獣を雷獣と判断した。

雷獣は雷のような声を上げ、稲光のように天を行き交う。

命の指先が軽やかに空を切る。切られた線は淡く輝き、それは印を結んだ。

「“封”！」

飛び掛かって来た雷獣は命の目の前に敷かれた印にぶつかり、網のようになつた印はそのまま雷獣を捕まえた。

逃げようともがく雷獣の傍らで、命は新たな印を結んだ。

「“還”！」

命が雷獣を元の世界に還そうとしたその時だった。

雷獣は靈気の網を破り、命に向かって鋭い爪を向けたのだ。

白い装束が破られ、腕から紅い血が滲み出す。

苦痛の表情を浮かべながらも命は後退して、雷獣との間合い

を大きくあげた。

封の印は完璧であった。その印が破られたということは、雷獣の霊力が命の霊力を上回っていたということになる。しかし、命は雷獣から自分を上回る霊力を感知していない。だと、すると要因は別にある。

稲妻のごとき速さで襲い来る雷獣。

目で追うことはできても、身体がそれを避けられるとは限らない。命はその場を動かさず素早く印を結んだ。その印は先ほどと同じものだった。

「封！」

再び捕らえられる雷獣であったが、破られるのは時間の問題だ。

懐に入れた命の手が外に出されると同時にそれは投げられた。御札だ、御札が投げられた。

御札はセーフィエルに向かって投げられていた。しかし、それはセーフィエルを狙ったのではなく、セーフィエルから放たれたモノに向かって投げられたのだ。

風を切る御札がそこにいたモノを捕らえた。御札が張り付くまでそれは常人の目では捉えることはできなかった。だが、今ならわかる。石畳の上に落ちたのは紛れもなく鴉だった。

揺らめくように歩くセーフィエルは地面に落ちた鴉を拾い上げ、愛でるように御札を取って風に流した。

「二度目でバレてしまったのね」

「一度目に黒い影が飛ぶのを微かに見たからの」

命の印を切ったのはセーフィエルの放った鴉の鋭い嘴であったのだ。命はそれを瞬時に見破っていた。

印に捕らえられている雷獣に命が近づく。

「“還”！」

雷獣が空に爪を立てて抵抗しながら、セーフィエルの影の中に還っていった。

黒い双眸がセーフィエルを見据えた。

「まだやるのかえ？」

「いいえ、結構よ」

セーフィエルは静かに微笑った。全ては彼女の思惑通りに進んでいる。それは命にもわかっていたが、今はセーフィエルの話に乗らねば成らなかつた。

「では兄上のところに案内してくれるのかえ？」

「わたくしの影の中へお入りくだされば、貴女の兄がいる場所に辿り着けるかもしれませんわ」

「その言い草は、辿り着けぬかもしれぬということかえ？」

「その通りよ。わたくしの影はチャンネルを合わせさえすれば異界に通じるゲートと化すわ。そして、今は貴女の兄がいる場所に繋がる“道”に繋がっている。けれど、その“道”は気まぐれだから、入ったら一生彷徨い続けることもあるでしょうね。それでも行くと言うのなら、どうぞお入りになって」

命の足はすでにセーフィエルの影に向かって歩き出されていた。

「危険は承知のうえじゃ」

命のつま先が影に触れると、それは水面のように波紋を描いた。そして、そのまま命は影の中に勢いよく飛び込んだ。

世界が闇の呑まれた。

飛び込んだのは闇であつたが、そこは白一色であつた。

白装束は世界に溶け、紅い模様が色鮮やかに浮き上がる。

地面もなく空もない。浮遊感はあるが、地面があるように歩くことができる。だが、方向感覚は失われているので、左右前後、はたまた上下のどの方向に歩いているのわからなかつた。

時間の感覚は奪われている。どのくらいここにいるのかもわからない。一秒か一時間か一日か。

白が命を侵食し、彼女はすでに自分が何者であるかを忘れていた。

五感が失われていく。

命という存在が失われていく。

着ている装束から色が奪われ白と化し。命の肌も白くなっていく。

このままで呑まれてしまう。

無意識の内に命は何かに手を伸ばした。

世界が突然闇に転じた。

ここではもう命の姿も見ることができない。

意識を失えば、本当に何もなくなってしまう。

意識が闇の呑まれようとしたその時、ないはず命の手が握られて引きずられた。

開かれる世界。闇が裂けて光が差し込む。

命の手を誰がの手が握っている。その手は雪のように白くか細いが、命の手を握り締める力は強い。決して命の手を放さない。

命はゆつくりと目を開けた。

辺りは一面満開の花畑だった。

「久しぶりですね、命」

命は優しい声の持ち主に顔を見た。それは紛れもない、親愛なる兄の顔であった。

「兄上……なのじゃな？」

「兄の顔を見忘れですか？」

「いや、お変わりない。何も変わっていないようじゃ」

「確かに、ここに来てから僕の間は止まりましたからね。命の方が僕よりも年上ではないかな？」

姿を消したあの日から、兄の姿は変わっていなかった。

命は自分の兄の身に何が起きたのか知らない。兄がなぜここにいるのか知らない。命は何も知らなかった。

「兄上はなぜこのような場所にいるのかえ？」

「人柱のようなものだよ。僕はあるモノを押さえ込む代わりに、ここに封じられた」

「そのあるモノとは？」

「それは残念ながら言えない」

兄が言えないというのなら、命にはそれ以上聞くことができなかつた。

長年探し求めていた兄に会うことができた。しかし、それだけだった。命は兄が元の世界に還れぬことを知った。

「兄上はずっとここに一人で居つたのかえ？」

「ああ、たまに来客があるけど、それ以外は独りだった。つい先日まではね」

彼の視線が遙か遠くに向けられた。その視線を追った命の目が見開かれる。そこにいたのは、なんとあの魔剣士だったのだ。魔剣士は空をただ眺めているだけだった。その身体からはいつかの鬼気は消えている。場に完全に溶けてしまっている。

「あの者は……？」

命は言葉に詰まった。なぜ、あの魔剣士がここにいるのか皆目見当もつかなかった。神威神社を壊した張本人が兄といるのがわからなかった。

「あの者の名は殺葵というのだよ」

「名前などはよい、あの者は神威神社を壊したのじゃぞ！」

「そのことは風の噂で聞いたよ。でも、過ぎたことさ」

春風駘蕩とした面持ちで彼は笑った。それが命には解せない。「兄上の考えが妾にはわかりかねる」

「殺葵くんは無口でここに来てから僕に何も言ってくれないけど、それでも彼が悪人ではないことはわかる。悪人でないから善人であるということではないけれど、彼には彼の事情があったのだと思うよ」

「その事情とやらで神威神社を壊されては困る」

「自分の事情と他人の事情が噛み合わないことなんてさらにあ

ることだよ。だから、あちらは争いが絶えない。疲れていた僕に、ここはちょうどいい場所だった。でも、暇だね」

「ならば、妾と共に元の世界に」

「それはできない。僕はここで永遠を過ごす運命なんだよ。命とは住む世界が違う、だから、早くお帰り、命の住むべき世界へ」

「兄上!？」

命のおでこに白い手がそつと触れた。次の瞬間に命は意識を失い、花畑の上に倒れてしまった。

「会いたいと言ったのは僕だった。けれど、会わない方がよかつたな」

命が目を覚ましたのはホテルのベッドの上だった。

神威神社が壊されてから、命はこのホテルで暮らしている。

日付を確認した命は苦笑した。

「全ては夢であつたか……」

三月二一日　その日は神威神社が壊されてからちょうど三週間目であつた。

命 完

夢幻郷の楔

何処までも果てしなく続く花畑。

死人花が揺ら揺らと風に弄ばれる。

花畑の中心で雪兎ユキトは蒼々たる空を見上げていた。何を想うでもない。ただ、見つめているだけ。

永い刻の中を雪兎は独りで過ごした。しかし最近、この場所にある人物がやって来た。妖艶たる美貌の魔剣士 殺葵サッキ。

雪兎は殺葵と一言も言葉を交わしていない。殺葵から話しかけられるまで雪兎は殺葵と話をしようと思わなかった。だが、殺葵が雪兎に話しかけることなど一生ないだろう。

ここにいる人は二人だけだ。雪兎と殺葵。二人ともここから自らの意思で出ることはできない。しかし、外部からはここに来ることができなのだ。

殺葵は殺羅サッラという神刀を持っていた。今はない。その神刀が在ったならば、彼はこの空間を切り裂き、外に出ることが可能だった。しかしながら、その刀が手元に在ったとしても、彼はここから出ようと考えるか？

風が激しく舞い上がり、永遠の朝が続くこの世界が闇に染まった。あり得ないことだった。この世界に夜が訪れるなどあり得ないことだったのだ。

殺葵がここに来て初めて鋭い目つきをした。そして、雪兎は

春風駘蕩な表情をしていた。

最近はこの場所も来客が多くなった。

「こんばんは、わたくしの名はセーフィエル」

ロングドレスにも似た喪服を着た黒髪の女性 夜魔の魔女

セーフィエル。

少しの怪訝の表情をしない雪兎は春風のような声でセーフィエルを迎えた。

「こんにちはセーフィエルさん。わざわざここに来るといことは僕の名前もご存知かな？」

「ええ、存じておりますわ。あちらの世界では神隠しに遭ったのだと、ニュースにもなつたわね 神威雪兎さん」

「それで、僕に何の用でしょうか？」

雪兎は表情一つ変えることなかったが、遠くにいた殺葵の全身からは鬼気が発せられていた。

ちらりと殺葵を一瞥したセーフィエルは、静かな笑みを浮かべながら雪兎に視線を戻した。

「お二人とも外に出たくないかしら？」

このセーフィエルの提案に先に答えたのは雪兎ではなかった。「断る」

そう、ここに来て一言も発していなかった殺葵が言葉を発したのだ。これには雪兎も驚いた。

「おや、殺葵くんがしゃべりましたね。思っていた以上に素敵な声でしたね。ああ、セーフィエルさん、僕も答えは否です。

僕はここから出る気はありませんよ」

セーフィエルは静かに笑って見せた。

「代わりの楔を用意して、あなたに自由が与えられるとしてもかしら？」

「僕は向こうの世界に疲れているのですよ。人と関わることに疲れた。だから、僕はここから出ない」

「あら、でも本当はここを出たいのでしょうか？ いいえ、違ってたわ。あちらの世界に逢いたい人がいるのではなくって？」

一瞬だけ雪兎の表情が崩れたような気がした。それを察したのは雪兎本人しかいない。そして、雪兎は頷いて見せた。

「ええ、いますね……ひと目逢いたい者が……」

「では、わたくしが連れて参りましょう、妹御を」

セーフィエルは全てを承知していた。雪兎が逢いたい人物は他にはいない。彼の妹ただひとりだ。

もはや雪兎は驚きもしない。

「僕の妹を連れて来ると言うのですか？」

「ええ、それが創られる運命ですわ」

セーフィエルがこの言葉を発した直後、彼女の背後に人の感覚では感知できぬほどの業で殺葵が立った。

「貴様は何を知ってるのだ？」

静かな問いだった。いや、脅迫であった。殺葵はセーフィエルが不穏な動きをすれば殺す気でいた。しかし、なぜ殺葵がセーフィエルを殺す？

静かに微笑んだセーフィエルは殺葵に背を向けながら話をした。

「抽象的な質問をされても困るわ。具体的にわたくしが何を知っているとお思いで？」

殺葵は口をつぐんだ。迂闊なことは口にしない。もし、殺葵が口にしたことをセーフィエルが知らなかったら？

沈黙が流れる。セーフィエルはこの沈黙を楽しんでいるようだった。

セーフィエルは何を知る？

殺葵は何を知る？

そして、雪兎も多くを胸に秘めていた。

誰もが語らない。それを壊す者は誰か？

「わたくしが知ることは多い。雪兎さんがここにいる理由も、殺葵さんが封印を解かれた理由も……時雨さんのことでもすわ」

セーフィエルの言葉に殺葵の表情が明らかに変わり、鬼気を纏った殺葵がセーフィエルに襲い掛かった。雪兎はそれを止めようとした。しかし、セーフィエルの方が早い。殺葵は動けなかった。

殺葵の眼前に突きつけられる切っ先。その刃を握っているのはセーフィエル。そして、この刃を殺葵はよく知っていたいや、違うものであった。

「私の刀に似ているが、違う……それはなんだ？」

「わたくしが修復した神刀 月詠ツクヨミ。これを修復するのに村雨と殺羅のデータを取らせてもらったわ」

静かに輝く光の刃は柄の中に消え、セーフィエルは雪兎を殺

葵に差し向けた。雪兎はなにも訊かずに月詠を受け取ると、柄を握り直し刃を出した。

「神刀月詠は僕の家家宝だったはずだけど？」

雪兎は神刀月詠をまじまじと眺めながらそう言った。

神威神社に伝わる三種の神器のひとつ　神刀月詠。鏡、勾玉、そして刀が神威神社には安置されていた。そのうち二つは神威神社倒壊後に神主である命ミコトによって保護された。しかし、刀だけは見つからなかったのだ。その刀をセーフィエルが持っていたのだ。

「雪兎さんは神威神社がこの殺葵さんによって破壊されたのはご存知かしら？」

「ええ、知っていますよ。ですが、神刀月詠が紛失していたとは……。他の二つもお持ちですか？」

雪兎の問いにセーフィエルは首を横に振った。

「いいえ、残る二つは妹御の命さんが手元に持っているわ。その神刀については貴方が持っているべきだと思ってお持ちしたわ」

「僕が持つべき……なぜ？」

「いつの日か、自らの意思でここを出たくなった時のためですわ」

「僕には必要ないものです」

そう言いながら雪兎が神刀月詠をセーフィエルに手渡そうとしたのだが、セーフィエルの身体が漆黒の闇に溶け、静かな笑い声と共に夜が明けた。この世界に朝が戻ってきたのだ。

死人花が風に揺られ、花びらが天に舞がる。

雪兎は神刀月詠の刃を消して懐にしまうと、依然、鬼気纏う殺葵に顔を向けた。

「殺葵くん、僕になぜ質問をしない？ 君が望むことを答えることはできなかもしれないが、僕は聞かれれば話すつもりだよ」

「訊くことはない」

「そうですか、じゃあ僕も話してあげません」

殺葵は雪兎を見つめていた。何も言わずじっと見つめているのだった。雪兎も殺葵から目を離さない。

「僕に言いたいことがあるなら、言えればいいですよ。殺葵くんは素直じゃないですね」

「訊きたいことがある」

「最初からそう言えればいいのに」

春風駘蕩の笑みを雪兎は浮かべた。

「ここはいつたいなんだ？」

「ここはある御方が見ていらつしやる夢の中ですよ。そして、僕はこここの番人というわけですね。僕がここを放れば、彼女

”は夢から醒めます」

「……ここが我が君」

殺葵はここが何処なのか理解すると共に、ある人物を思い浮かべた。

「殺葵くんは察しが早い。あの御方は“あれ”を封じるために眠りに堕ちた。けれど、“あれ”の力が徐々に外に影響を及ぼ

しはじめた」

「やはり、私は奴の掌の上で踊らされているのだな」

「どうしますか、あの御方を眠りから醒ましますか？　そうすれば殺葵くんの我が君も目覚めますよ」

「私は疲れた……」

それ以上何も言わず、殺葵は雪兎のもとを離れて空を見続けるだけだった。

雪兎は独り言を呟いた。しかし、それは明らかに殺葵に聞こえる声だった。

「ひとりの女性に仕えていた二人の騎士はある事情によって敵同士となりました。戦いはあの御方が『あれ』を封じることによって終結し、あの御方によって二人の騎士は封印されました。しかし、『あれ』は封印されている敵の騎士を抹殺しようとしたのですよ。その時に一人目の騎士の封印は不本意な形によって破られてしまいました。その後、『あれ』はもう一人の騎士の封印を解き、先に復活した騎士を殺させようとなりました。殺葵くん、君の我が君は、今でも君にとって我が君なのですか？」

殺葵は答えなかった。雪兎の声が聞こえてないように、何も反応を示さない。そこで雪兎は言葉を続けた。

「君は封印されたままの方がよかったのではないかい？　復活したばかりの君は明らかに『あれ』に精神を支配されていたからね。でも、今は違うのだろうか？」

やはり殺葵は何も答ええない。

息を吐いた雪兎は殺葵と同じく空を仰いだ。

この場所は平和だ。不変が続く。二人を除いては……。

「殺葵くん、さっきのセーフィエルという女性はどちらの味方だと思ukai？ 僕が思うにどちらでもないね。それだけに目的が不明だよ。ああ、ところで時雨くんの話だけ……」

殺葵の顔つきが変わる。雪兎はそのまま話を続けた。

「時雨くんは記憶喪失らしいけど、どこまで記憶は戻ってるんだろうね。あと、どこまでが偶然で、どこまでが必然なんだろうね？」

「私を感じるに、時雨は完全に記憶を取り戻している」

「あと、時雨くんが再び封印されない理由はわかるかい？」

「……………」

「あの御方は“あれ”の復活が近いと考えていてね。“あれ”の影響が外に出ているんだよ。それを無意識のうちに時雨くんは解決または排除しているわけだよ」

「ひとつ訊きたいことがある」

「なんだい？」

「貴様はどこから情報を仕入れている？」

「外の情報はあの御方から聴いているんだよ。あの御方は眠りながらも外と通じているからね。あの御方はたまに僕の前に姿を現してくれるんだよ。殺葵くんが来てからは一回も姿を現していないけどね」

殺葵が素早い動きで後ろを振り返った。そこに人の気配を感じたのだ。

煌びやかな法衣を纏った童女はニッコリと笑いながら両手を元氣よく振った。

「お久しぶりいっつサツちゃん」

童女を見て怪訝な顔をする殺葵。

「……女帝」

童女は女帝と呼ばれた。そう、彼女こそが帝都エデンの女帝。しかし、その姿は一般に知られているものではなかった。人々の前に姿を現す女帝は二〇代と思わし女性だった。

殺葵とは対照的に、雪兎はニコニコしながら童女に手を振り返した。

「こんにちは女帝様。ちょうど女帝様の話をしたところなんですよ」

「わざわざ説明することもないよ。ここはアタシの世界なんだから全部知ってるよ。セーフィエルの進入を許したのはアタシだし。あの子が何をしようとしているのか見定めようとしたんだけどね、わかんない」

姿も物腰も口調も、誰も思い描いていた女帝とは違う存在だった。しかし、これが本物女帝なのだ。人前に姿を現してした女帝は魔導でつくられた幻であったのだ。

女帝はその場に立ち尽くしていた殺葵の正面に立ち、顔を上げてニッコリと笑った。

「アタシの側に付く気ない？」

「私はもうどちらの味方にもならないと決めた」

「ふん、アタシの敵になんないだけマシか」

考え深げに頷いた女帝は二人に向かって手を振って背を向けた。その小さな背中に雪兎が声をかける。

「もう行くんですか？」

「ちよつとサツちゃん顔見に来ただけだし。現実世界はいろいろと忙しいんだよね。うんじゃ、ヒマができたらまた来るよ」

女帝は姿を消し、殺葵が呟いた。

「何もお変わりないな……」

「僕らもここに在る限りは変わらないよ。でも、もしかしたら……」

雪兎は言葉半ばに口をつぐんで、殺葵もそれに対して何も言わなかった。

二人は沈黙する。また、誰かがここに在るまでどちらも口を開かないだろう。

ここは刻の狭間の夢幻郷。

夢が醒めるまでは不変と永遠が続く。二人が刻むところ以外は何もかもが不変だった。

夢幻郷の楔 完

ゴッドハンド

いつもと変わらぬ、いつもの光景。

ここは帝都の“白い砦”と称される帝都病院。

搬入口から患者が担ぎこまれて来た。患者は見た目からもわかる意識不明の重体で、顔には大きな穴が空いていた。顔が抉られたのだ。都市に蔓延る怪物どもの餌食にでもなったのだろう。

この重体患者のオベに執刀したのは、この病院の院長。 蜿マユだった。

白衣を着ているのは医師として当然だろう。しかし、蜿の全身は白だった。白衣だけでなく、頭を覆う白い頭巾、顔を隠す白い仮面。不気味としかいいようのないでたちであった。

手術台の上に寝かされている患者を蜿は仮面の奥から見つめた。

「脈拍は正常だ」

顔を抉られ、血を噴出している患者を診て、蜿はそう断言した。

意識不明であったはずの患者が、顔に唯一残った下顎を動かし、そこから玲瓏たる声を響かせた。

「あら、わたくしに触れませずに、 視た だけでわかってしまったのね」

喪失していた間に白い顔が浮かび上がる。それは女性の顔だった。その名は夜魔の魔女セーフィエル。

「はじめまして、わたくしの名はセーフィエル」

手術台から上半身を起こしたセーフィエルは、白い織手を伸ばして腕に握手を求めた。だが、腕が握手をすることはなかった。

「キサマ何者だ？」

「人は夜魔の魔女と呼ぶわ」

「目的はなんだ？」

「おしゃべり……うふふ」

月のようにセーフィエルは静かに笑った。静かの中に腕は底知れぬ狂気を感じた。

「おしゃべりだと？」

「そう、あなたとふたりつきりでおしゃべり。あなたが執刀するときは、必ずあなたひとりしか手術室に入らないと聞いたから、ここならふたりつきりになれると思ったのよ」

そう、この部屋にはふたりしかいなかった。他は誰もいない。人外の存在もだ。

セーフィエルの両手が、腕の白い手袋の嵌められた両手をふわりと包み込んだ。腕は不思議と抵抗しなかった。普段ならば絶対に他人に触らせぬ手なものにも関わらずだ。

「これが噂の“ゴッドハンド”ね？」

黒瞳が仮面の奥を覗き込んだ。

“ゴッドハンド”　それが腕の能力。

左手による“スキャン”により病巣を発見し、右手の“奇跡”により完治させる。だが、それは呪われし能力だった。

帝都の呪を内に秘める蛭は、その皮膚が変形して醜い鱗に包まれ、仮面の奥に光る瞳は蛇のように黄色く輝いていた。その醜い身体と引き換えに蛭は“ゴッドハンド”を手に入れたのだ。ふと我に返った蛭はセーフィエルの手を振り払った。

「本当の目的を言え！ 俺に何の用があつて来た？」

「“ゴットハンド”の力を見るために。それと、“呪”についてのお話を少ししようかしら？」

“呪”という単語を聞いた瞬間、仮面の奥で蛭の顔つきが変わった。

「“呪”だと？」

「ええ、帝都の呪。帝都を取り巻く大蛇の呪」

「キサマ……なぜそれを？」

蛭の“呪”を知る者は、この世に三人　いや、一人はこの世ならぬところにいるので、二人。蛭自身とその兄　紅葉だけのはずであった。

「あなたの“呪”のことなら、数多くの者が知っているわよ。

この都市の中樞が無関係のほしくないじゃない？」

「キサマは政府の者か？」

「いいえ、違うわ。わたくしは、わたくし個人で動いているの。封印されているもののことを詳しくしりたくてね」

「……どこまで知っている？」

「蛇は第二の封印。都市に配置された結界が第三の封印。帝都

に異変が起こるとき、あなたの身体に変化が起こるのは、第二の封印とあなたがリンクしているからね」

蛇は度々激しい発作に襲われることがある。そして、今まで一番激しい発作を起こしたのが、あの出来事が起こる少し前。帝都に魔剣士が現れたときであった。

蒼白い仮面の奥にある瞳は、セーフィエルから決して逸らされることなくあった。

「封印されているのが、なんであるのかも知ってるのか？」

「ええ、勉強させていただいたわ」

「封印を解く気か？」

「いいえ、とんでもない。わたくしは封印されているものが、なんであるか知っていますわ。封印されているものは、魔性の軍勢と御方の片割れである指導者。ひとたび封印が解かれれば、この世界は死の海と化すでしょう」

「だったら、俺様のところになしに来たんだ？」

「おしゃべりと言ったでしょう」

しかし、セーフィエルは蛇と話さずとも、全てを知っているように思えた。蛇から得る情報はない。だとしたら、セーフィエルは……？

セーフィエルが静かに微笑んだ。

「封印が解かれる日は近いでしょうね」

「なんだと!？」

「封印が解かれてしまうのと、“呪”を背負ったまま生きるのと、どちらがいいのかしらね。少なくとも、過去であれば、あ

「あなたは呪を解くことを望んでいた。あなたのお兄様もそれを望み、いろいろと手を尽くしたわ」

「過去は過去だ。今は“呪”の担う意味を知った」

それは灼熱の太陽がアスファルトを焦がし、車の上で目玉焼きが焼けるくらい暑い日だった。

全開にした窓から吹き込む風が風鈴を鳴らし、青い畳の香りが鼻をくすぐる。

この部屋にはエアコンがない。あるのは首を左右に振る扇風機のみ。しかし、彼は汗ひとつ掻いていなかった。

「蛇ですね」

白いベールに身を包み、青白い仮面を付けた人物を見て、雪兎はそう言った。

「人目で憑き物を見抜かれましたか」

こう言ったのは仮面の人物ではなく、その横で正座をしながらお茶をすする男だった。この男は帝都でも有名な大学に勤める助教授である。名を紅葉と言う。

風鈴がちりん　と音を立て、仮面の奥からくぐもった男の声が出た。

「あなた、被えるか？」

挑発的な口調であった。しかし、雪兎は相手の態度を気にすることもなく、春風駘蕩な表情をしている。

「無理ですね」

はつきりと雪兎は断言した。それは笑顔の医師が治療不可能

だと言いつつたようなものだ。相手の態度が気に入らず、仮面の男は逆上して立ち上がり、雪兎に殴りかかろうとした。だが、それを紅葉の静かな一言が止めた。

「やめる蛇」

すぐに仮面の男　蛇が動きを止め、紅葉は話を続けた。

「お前がその方に飛び掛かったところで問題の解決にはならんましてや、私は怪我を負って動けなくなったお前を運ぶなど、ご免被るぞ」

それはつまり、雪兎に飛び掛かった蛇が返り討ちに遭うことを意味した発言だった。

雪兎がお茶をテーブルに置いた刹那、春風駘蕩だった彼の身に氷の膜が宿ったようだった。

「ですが、やるだけのことはやらねばなりませんね」

誰もその変化に気づかないかもしれない。それほどまでに外面的な変化はないに等しい。しかし、彼は確実に変わっていた。春風駘蕩な若旦那のような雪兎は、別のモノへと変じていたのだ。

ゆっくりと席を立った雪兎は縁側を見た。

「ここでは狭い。庭で被いましょう。僕は少し準備がありますので、先に行っていてください」

雪兎がどこかに姿をあと、二人の男はなにも言わずに庭へと足を運んだ。

庭で雪兎を待つ間、蛇は悪態ひとつ吐かなかった。先ほど雪兎に殴りかかろうとしたときは別人だ。蛇の心情を変えたも

のはなんであろうか？

しばらくして、悠長な足取りで現れた。その手には一振り
の刀が握られている。この神社に代々伝わる神刀 ツクヨミ 月詠だ。

「お待たせいたしました」

一礼した雪兎は鞘から刀を抜いた。

その磨き上げられた刀身が陽光を反射して輝く。しかし、その輝きは燦然としたものではなく、どこか静かな海のようであった。

抜かれた刀の切っ先は蛇に向けられていた。

「俺様を斬るのか？」

「いいえ、あなたさえ動かなければ、肉体を傷つけることはありません」

「わかった」

蛇は相手の要求をすんなりと呑んだ。

弟の横に立っていた紅葉が距離を置いて離れる。

照りつける太陽。

沈黙がしばらく続く。

刀を構えなおす雪兎。

その額から一粒の汗が流れ落ち、地面の上で四散した。

刹那。

疾走した雪兎の突きが蛇の心の臓を貫いた。

たしかに神刀月詠は蛇の身体を貫き、切っ先が後ろに抜けている。それでも蛇は悶え苦しむこともなく、一滴の血すら地面に零れ落ちることはなかった。

まさに神業。

だがしかし、急に蛇は膝を地面につき、苦しそうな荒い呼吸をはじめたではないか!?

暴れているのだ。蛇の身体の中で“何か”が暴れているのだ。蛇の身体から刀を抜き取った雪兎はすぐさま後ろに飛び退き間合いを取った。

身体が蠢いている。白い装束を着た蛇の身体が波打つようにうねっている。そして蛇の口が、中から大きくこじ開けられた。口のサイズからは到底想像もできない巨大なモノが外へ出ようとしている。

汚らしい音とともに蛇の口から“何か”の頭部が出た。

金色に輝く眼を輝かせ、長い舌をしゅうしゅうと音を立てながら出し入れしている。

雪兎は蛇の口から吐き出されたモノと対峙した。対峙したと言っても、雪兎は首を大きく曲げて上を見上げている。そうしなくては、“大蛇”の顔を見ることができないのだ。

「神格を兼ね備えているようですが、纏う気はとても邪悪なものですね。この邪気を取り払えば……」

こう独り言を呟く間も、雪兎は大蛇と睨み合いをしていた。蛇に睨まれた蛙とはよく言うが、雪兎は決して蛇に引けをとっていない。だが、雪兎が少しでも気を抜けばその瞬間に襲ってくるに違いない。

先に仕掛けたのは氷の眼をした雪兎であった。

刀を振り上げ飛翔する雪兎に、巨大な大蛇の頭部が襲い来る。

雪兎の眼前まで迫る大蛇の頭部。そこで彼は 視て しまつた。

現実の時間にすれば、それは刹那であつた。しかし、雪兎にとっては永遠にも等しかったかもしれない。

空中で大蛇と対峙した雪兎は、大蛇の 内なる世界 を 視た。

この瞬間、雪兎は“この街”の真理を知つた。

時間が動き出す。

雪兎の一刀は大蛇の眉間に突き刺さつた。

怒り狂う大蛇は大きく首を振つたが、それでも雪兎は柄から手を離すことはなかつた。

首を振る大きく振る大蛇に、雪兎の身体は弄ばれる。

そして、神刀月詠は折れた 切っ先を大蛇の頭部に残したまま。

地面に大きく放り出された雪兎は、受け身を取ることなく激しく地面に叩きつけられた。

このときすでに、雪兎とには正常な意識がなつたのだ。内なる世界 を 視た ことにより、雪兎の意識は大蛇に一刀食

らわす前に途絶えていた。刀を握り続けていたのは本能だ。

地面に叩きつけられた衝撃で、雪兎は正常な意識を取り戻した。そして、彼は呻くように言葉を零した。

「あれは……この街を……取り巻く存在だ……」

大蛇が蛇の口に吞まれて行く。いや、自分の住処へ帰って行く。

このとき、大蛇を取り巻く邪気は消えていた。そして、眉間に刺さっていた折れた刀もだ。刀は大蛇の身体へと吸収され、神聖なる刀は大蛇の内から邪気を抜ったのだった。

地面に膝をつき立ち上がるうとする雪兎に、紅葉は手を貸しながら尋ねた。

「あれはなんだね？」

「この街の一部ですよ。この街が穢れば、あの大蛇も穢れます」

「私も先ほど、そう解釈した」

「あなたも 見た のですか？」

「君が 見た とき、横から少し覗き見できた程度だ」

二人の男は思い表情をして、同時に地面で倒れている蛇に眼を落とした。

「運命を背負ってしまった」

と呟いたのは誰だったのだろうか？

手術台に腰をかけるセーフィエルは、その夜闇よりも黒い瞳で、目の前の蛇を覗き込んだ。

「うふふ、あなたの内には、まだ月詠の波動が残っているわ。

実はそれが欲しいの」

「なんだと!？」

蛇は声を荒げた。

大蛇に吸収された神刀の一部は、今もなお邪気を抜う力を維持していた。もし、その力が失われれば、たちまち大蛇は邪気

に覆われることになる。そして、その宿主である蛇もまた邪気に呑み込まれるだろう。

セーフィエルは夜風のようなため息を吐いた。

「やっぱり無理な申し出かしら？」

「ああ、無理だ」

「神刀月詠を修復したのに、残念だわ」

「修復だと？ なんのためにだ!？」

また蛇は声を荒げた。

相手の意図が見えない。まるで闇と会話しているようだ。

「なにのためかは秘密よ。けれど、月詠は我が一族をつくり上げ、神威神社に奉納した品。本来の正当な所有者の手になければ困るのよ。つまり、月詠は神威家の当主である雪兎が持つこそ真の力を発揮する」

「真の力だと？」

「月詠はこの世ならぬモノをも斬る力があるの。それと同時に
視る 力も持っているわ。 視る 力については、あなたも
理解していると思うけれど、どうかしら？」

「ああ、その力が“スキャン”だ」

蛇の有する特殊能力のひとつ、それが“スキャン”だ。“スキャン”は手のひらによって、モノを 視る ことのできる能力だ。この能力は月詠が大蛇の内に吸収されたあとに、開花した能力だったのだ。

セーフィエルの織手が、そつと蛇の左胸に触れた。

「無理には言わないわ。断られるのはわかっていて頼んだの。」

ただ、真物の月詠がどのようなものか知りたかっただけ」
輪郭が溶けはじめた。セーフィエルが空間に溶け込むように消えていく。

「月の満ち欠けが、月詠を創るのに良いと告げているわ」

そして、セーフィエルは声だけを残して姿を消したのだった。

ゴッドハンド 完

月を詠むもの

夜は暗い。

人は炎によって夜を照らし、文明を築き上げてきた。

しかし、この場所は、文明の手が及んでいない自然が広がっていた。

深い森の奥に開けた湖。

暗い水面が静かに笑っている。

それは月だった。

水面に映る月が満ち欠けにより、まるで不気味に笑っているように見えるのだ。

静かな湖に文明の火が灯る。しかしそれは、紅い炎ではなく、青白い人魂のような炎だった。それが幾つも幾つも水面の上に灯っていくのだ。

最初はひとつ、次は二つ、円を描くように炎は全部で八箇所
に灯った。

湖に描かれた炎の円の中心には、ひとりの女性が闇に溶け合
うように佇んでいた。

黒いドレスを着た女性は、素足を水の中に踝まで浸けている
だが、それ以上沈むことはない。つまり、彼女は浮かんでいる
のだ。

人を水に浮かす術など、この女にすれば意図も簡単なことだ

ろう。

夜魔の魔女セーフィエル。

果たして彼女はこの場所だなにしようとしているのだろうか？

暗示は水面に映し出されていた。

ゆっくりと膝を曲げ、セーフィエルは水の中に両手を浸けた。波紋はまったく立たなかった。それ故に、そこに映る月もまた揺らぐことなく笑っている。そして、セーフィエルはゆっくりと映る月を救い上げ ようとしたときだった。

「誰かしら？」

玲瓏たるセーフィエルの声音が、静寂を破った。

湖畔にはひとつの人影が佇んでいた。音もなく、本当に影だけがそこに佇んでいるようだった。しかしそれは、ただの影ではない証拠に言葉を発した。幼い少女の声で。

「はじめまして、でいいかな？」

その声は確かに少女の声なのに、どこか大人びた雰囲気を持つていた。

「はじめまして、かしらね？」

とセーフィエルも曖昧な答えをして、静かに含み笑いをした。そして、少女の影もまたクスクスと笑っている。

「あはは、相変わらずだねキミは」

「あなたは変わらないけど、あたしは別人よ」

「アタシだって変わったよ。今じゃ“影”だもん」

「それは元からでしょう」

「それは皮肉？」

「真実よ」

「ヒドイなあ」

もしかしたら、顔を膨らませて頬を真っ赤にしているかもしれない。そんな言い草だった。

「そうかしら、わたくしの表現は的を射ていると思うけれど？」

「光と闇の関係に表も裏もないでしょ？ それと同じだよ」

「あなたは闇ではないわ、“影”よ。でも、あなたは影でいることを望まない」

少女の影が波打つように揺れた。

「うるさい！ それ以上言うて怒るよ」

「怒鳴ることは怒りではないのかしら？ うふふ」

言葉も挑発的であったが、含み笑いを加えたことが、よりいっそう挑発に拍車をかけた。

しかし、少女の影はすぐに熱を冷まし、話題を変えた。

「ところでさ、こんなところだなにしてるの？」

「神刀月詠の刃を作っているところよ」

「わお、それは大変だ」

「うふ、知っていたクセに、よく言うわね」

真夜中の湖でセーフィエルは、神刀月詠の折れた刃を修復しようとしていたのだ。

「もちろん知っていたよ。だからこうしてわざわざ邪魔しに来たんだもん」

「邪魔なさるの？」

「アタシにとって不利益だかね」

「でも邪魔はできないわ。それが運命」

「運命は変えられるよ」

「だから、わたくしが存在するのよ」

「にしては、今回はあちらに肩入れし過ぎだよねえ」

少女の影から失笑が漏れた。

対話をする二人の距離は離れず近づかず、一定の距離を保ち続けている。その距離はおよそ二〇メートル。それにもかかわらず、声を張り上げずとも言葉がよく通る。夜の静寂が成せる業か、それとも二人の成す業か。

セーフィエルを取り巻く八つの青い炎が、天に向かって伸びた。その中でセーフィエルは月のような笑みを浮かべた。

「大事なものは、最終的な調和よ。その過程では、どちらかに傾くこともあるでしょう」

「じゃあ、こつちに傾かせないと」

少女の影が動いた。いや、それは少女の形をしていなかった。蛇のように長く伸びた影が、セーフィエルに襲い掛かったのだ。

巨大な口を“空けた”影が、セーフィエルを丸呑みにする。

「わたくしを誰とお思いかしら？」

静かな宣告だった。

セーフィエルの漆黒のドレスから触手が伸びた。それは闇だった。闇が影を喰らう。

まるで飢えた獣のように、闇が影を喰らう喰らう喰らう。

口を空けていた影はその先端を闇に喰われ、ゴムが元の位置に戻るように引き下がって行った。

すでに少女の形に戻った影はクスクスと身体を震わせていた。

「あはは、やっぱ無理かも。今のアタシじゃ手も足も出ない」

「もともと実体がないのだから、手も足も出ないわね……ふふ」

「しかもね、これはアタシじゃない。ただの思念だもん」

「では、今回はおとなしく引き下がらなさい」

「そうする」

と少女は間を空けて言葉を続けた。

「運命では、アタシは外に出ることになってるの？」

「ええ」

セーフィエルは短く断言した。

少女の影が激しく震えた。それは歓喜に打ち震えているのだ。つた。

「ありがとう」

言葉を残して消えた。

影は完全にその気配を消してしまった。

この場に静寂が返る。

人が口を噤もうとそれは沈黙であって、静寂ではない。しかし、ここにあるのは静寂であった。

セーフィエルは夜空を見上げた。月には雲がかかっている。

星の輝きだけでは夜は心もとない。

流れる雲の隙間から唾う月が顔を出した。

再び始まる儀式。

風が止み、森もざわめくことをやめ、獣たちの咆哮も聞こえることはない。

まるで青白い炎だけが、この場ではただひとつの生き物のようであった。

水面に映る月に白い手が伸ばされる。やはり波紋は立たなかった。そして、セーフィエルはすくい上げたのだ。

両手の隙間から零れる雫たちが、“月”の光を浴びて真珠のように煌く。

セーフィエルのすく上げたものは“月”だった。彼女は水面に映る“月”をすくい出したのだ。そう、これが神刀月詠の刃となるのだ。

「以前のものよりは上手にできたかしら？」

『以前のものよりは』と言うことは、まだ完璧とは言えないのだろう。それでもセーフィエルの笑みは満月のようであった。「彼女の“邪魔”は見事成功したわけね」

完璧なタイミングで取り出されるはずだった刃は、謎の“影”の登場により機を逃してしまったのだ。

セーフィエルの耳元で過去が鮮明に再現される。

運命は変えられるよ。

「だから、わたくしが存在するのよ」

と呟いてから、彼女は思索した。

セーフィエルの関心は、この事象が後の運命にどう絡み合うかであった。そう、完璧な刃ができなかったことが、後にどの

ような事象を起こすか。それを考えると彼女は、口に軽く手を当てて静かに含み笑いをした。

「……うふふ」

夜空では白い月が嗤っていた。

そして、セーフィエルの復元した神刀月詠は今ここにある。

紅い花が咲き誇るこの場所で、喪服に身を包んだ雪兎は佇んでいた。その腰には神刀月詠が差してある。

一面に咲き誇る花はヒガンバナ 別名シビトバナとも言う。ここは死者の国なのだろうか？

それはわからない。ただ、ひとつ言えることは、この世ではない場所ということだ。

そよ風が吹き、小川がせせらぐ。

「女帝様、お聞きですか？」

雪兎は眼を閉じながら囁きながた問うた。

煌びやかな法衣に身を包む童女 女帝が雪兎の前に姿を現した。まるで風と共に現れたように。

「アタシになんか用？」

軽い口を叩く女帝に対して、雪兎は深く沈痛な表情で頷いた。「ええ、お話があります。殺葵くんにも聴いてもらいたい話です」

雪兎は考えていた。運命の刻トキが来たのではないかと、彼はこの手に月詠が戻ったときから考えていた。そして、決意したのだ。

「ここを出ようと思いません」

それが雪兔の出した答えだった。

微動だにしない殺葵は雪兔の声を通り過ぎる風のように受け、女帝は深い息を吐いて応じた。

「近々キミがそんなことを言い出すんじゃないかなって思ってたよ」

「ですが、運命はそのように動いてしまいましたから」

「月詠が復元されて、雪ちゃんの手元に戻ったから？」

「それもありません」

「妹に逢ってしまったから？」

「それもないとはいえませんが」

「キミは正直者だねえ」

いたいけに笑う童女を前にして、雪兔は少し居た堪れなかった。

月詠を手渡されたときは、まだ外に出ようとは思わなかった。けれど、月詠を渡されてから、決断を出すまでに、雪兔の心は揺れ動いてしまったのだ。妹との再会によって……。

小さな童女は雪兔を上目遣いで見つめ、朱唇を人差し指でトントンと叩きながらしゃべった。

「妹を想うことは悪いことじゃないよ。それに確かに運命の刻は満ちたね」

少し真剣な顔つきを童女から、雪兔の視線は滑るようにして殺葵を見つめていた。

すぐに殺葵から女帝に視線を戻した雪兔の表情は、少し冬色

が差していた。

「このような事態が起こることを予見し、あなたは手を打たれていたのですね」

「まあね」

女帝は短く応じた。

かつてここを訪れた女は言った。

代わりの楔を用意して、あなたに自由が与えられるとしてもかしら？

そのとき、雪兎はその申し出を断った。

それは雪兎が“番人”としての役目を担ってしたからである。しかし。

「それが勅命ならば、私は賜らなくてはならない」

この発言の主を、雪兎と女帝は見た。それは沈黙を続けていた殺葵であった。

「私がまだ我が君の僕であるならばの話だが」

と殺葵は付け加えた。

クスクスとどこからか笑いが漏れた。笑いの主は一目瞭然だった。口に手を当てているのは幼き女帝だ。

「アタシはサツちゃんを解任した覚えはないよ。君はしーくんに比べて硬いよ」

「私は我が君を裏切りました」

「変えられない過去の罪は、変えられる未来で贖って欲しいな」

幼き童女の足元に、長身の殺葵が跪いた。

「御意のままに」

風が吹き、紅い花が咲き誇る花畑がざわめく。

その中で、春風駘蕩の雪兎は鞘から刀をゆるりと抜いた。

「姫を守るのは騎士と決まっています。僕がここを守るより、殺葵くんが守ったほうが相応しいでしょう。だから、ここは殺葵くん任せます」

殺葵が深く頷いたのを見て、雪兎は空を突いた。

「だから、僕は行かせていただきます」

空を突いた神刀月詠の切っ先は消失していた。

柄を持つ手に力がこもる。

突き刺さられた刀は一文字を描き、空間に一筋の傷をつくった。

「向こうに行ったら、“影の眠り姫”を探します」

やがて傷は楕円状に広がり、人ひとりが通れるほどの大きさになった。その中に入っていこうといていた雪兎の脚がふいに止まる。

「そうだ、あちらに行ったら永遠の若さは保てないね。それはやだなあ」

愚痴る雪兎の背中を誰かが蹴飛ばした。

「さっさと行ってらっしゃい！」

叱咤を背中で受けた雪兎は、裂け目の中に頭から突っ込んだ。そして、彼の上げたあられもない声が遠ざかっていく。

数年ぶりに踏む大地。

帝都エデンは雪兎を受け入れるのだろうか？

静かな夜。

静かな森。

静かな湖。

辺りは闇であつた。

今宵は新月。この魔女がもつとも好む朔夜であつた。

「うふふ……来たわね」

夢幻郷から使者が訪れたことを多くの者が感知した。だが、この街でいち早く気づいたのは、セーフィエルであつた。彼女は全身で神刀月詠の気配を感じたのだ。

あの刀がこの夜に現れ出たということは、あの男も世界に出でたに違いない。

「やはり、妹が決めてかしらね」

神刀月詠をつくり上げたセーフィエルは、その足で雪兎の元へ向かつた。そこで月詠を渡すことはできたが、雪兎は外に出ることを拒んだ。だが、それはセーフィエルの思慮の範囲内であつたのだ。そこでセーフィエルは運命のカードを切つた。

効果は靦面であつた。なにせ、命と雪兎が再会を果たしてから、一日しか経っていないのだから。

全ては急速に動いている。運命の齒車が激しく回っているのだ。

舞台はこの帝都エデン。

果たしてセーフィエルはどのような劇を演出しようとしているのだろうか？

それはまだ誰にもわからない。
。

月を詠むもの
完

曇る空の色

濠ほりに囲まれた丸い土地に聳え立つ、天突く豪華絢爛ごうかけんらんな巨大建築物。バロック建築の宮殿を思わせる宗教がかったデザイン。それが帝都政府の中枢　夢殿ゆめどの。

その敷地内に女帝の住まいであるヴァルハラ宮殿があった。夢殿及び、その建物が建つ敷地内は帝都一の警護が敷かれ、帝都でもっとも安全な場所と称されていた。

女帝の警護にはワルクューレと呼ばれる者たちがあたり、最高責任者のアイン以下九名がワルクューレに名を連ねる。ワルクューレは全員女性であり、番号で名を呼ばれ、欠員が出た場合は補充されることになっている。

ワルクューレのひとり、ズイーペンはある人物の着替えの手伝いをしていた。

「お着替えを済ませたら、すぐにイスラフィールの塔へ向かいます」

法衣の袖を通し、この世ならぬ美貌を持つ女性は玲瓏たる声でズイーペンに応じた。

「毎年毎年、よく人が集まるもんだね」

その声は顔にふさわしい美しい声ではあったが、口調はまるで少年のようであった。

「ヌル様をひと目見ようと、みな集まってくるのです」

「それが莫迦らしいんだよ」

「そのようなこと口にするものではありませんよ」

「本物アタシは今もお寝んねしてるってゆーのにさ。人間なんてものはやっぱり見た目に騙されるんだよ」

一〇月十八日 聖祭。女帝の誕生日を祝う祭典である。

街中がお祭りムードに包まれ、道路は全て歩行者天国となり、煌びやかに飾られた街には屋台が軒を並べ、絢爛豪華なパレードが催される。

このパレードには女帝が国民の前に姿を見せるとあって、全国から熱狂な信者たちが帝都の街に集まってくる。

女帝の名はヌル。世界三大美女にその名を記録する絶世の美女である。

彼女には過去に関する記述が一つもない。それが彼女のミスティアスな魅力に拍車をかけていた。しかし、彼女には謎めいている事が多い分、それに比例して常に悪い噂が付きまとうてしまう。

煌びやかな法衣に着替えを済ませた女帝ヌルは、溜め息を吐きながらズイーペンの顔を覗き込んだ。

「ところでさ、アタシの何回目の誕生日だか覚えてる？」

「 回目の誕生日ということになっていきます」

眼鏡を直しながらズイーペンは正確な数字を答えた。

「そんなくだらないことなんてよく覚えてるね。永久に縛られたアタシたちに、歳なんて概念はくだらないよ」

「それはごもっともです。しかし、歳の概念は必要なくとも、

時間の概念は必要です」

「まったくだね。時間が流れること、それは……」

「あの方の復活を意味します」

言葉の途中で口を噤んだヌルに変わって、ズイーベンが言葉を紡ぐ。常にヌルの傍に仕え、着替えからスジュール管理、ヌルの一切を引き受ける側近のズイーベンには、ヌルの些細な仕草や言動に表れる心中を察することは造作ない。

そして、あの理由があるからこそ、ズイーベンとヌルは常に共にしなければならぬ。

「そのとおり。ところでキミの精神状態はどう？」

「ダークの面が強くなっているように思えます」

「境界師としての実力は、このアタシが身に沁みて一番知っている。けどさ、力を取り戻したアイツなら、簡単に境界なんて破るよ」

「それは命に代えて死守いたします」

ズイーベンの瞳は神々しいまでの光を湛えていた。女帝のためなら喜んで命を燃やす。

「命なんて代えなくていいよ。どーせ、君が死守してもアイツは復活する。それなら、無理なんかしないで、キミには生きを欲しい」

「わかっております。再びあの方を封印するとき私の力が必要になりますから」

「そーゆー意味ないってば」

それもズイーベンにはわかっていたが、あえて彼女はそれに

ついでには触れなかった。わかっているとさえ、ヌルは頬を膨らませて恥ずかしそうに怒り出すだろう。

懐中時計を確認したズイーベンは部屋の扉を開けヌルに向かつていった。

「予定が詰まっております」

「今日は無駄に忙しい日だよ。明日はゆっくりできるんだよね？」

「明日の予定はヌル様の偽体を取り替えるだけです」

「アタシの偽体の調子が悪いつて、よくわかつたじゃん」

「いつも傍におりますから」

「ホントだよねえ、キミとはいっても一緒だけど、明日会うゼクスとは前に偽体の整備をもらって以来だよ。あいつが一番ワルキューレの中で顔を合わせない」

ゼクスとはワルキューレの科学顧問で、研究バカでいつも研究室にこもりっぱなしなのである。

話がひと段落したヌル、ズイーベンの開けたドアをくぐった。

光の子 と 闇の子 の戦いを記した書物は世界にいくつもあるが、その戦いのことを克明に記した書物は、世界にひとつしかないとされる。その書物があると噂されているのが、夢殿の施設のひとつである 夢幻図書館 である。

夢幻図書館 はこの世界とは違う次元の存在し、図書館内部の空間も迷路のように入り組んでいる。そこにある書物は門外不出のものばかりで、禁断の魔導書から国家機密文書まであ

るとされる。

この図書館の中でも、女帝ヌルにしかた観覧できない場所にステラの黙示録はある。この書物こそが光の子と闇の子の戦いの真実だけを綴った書物である。

ステラの黙示録は単なる歴史書ではない。そもそも、この書物は自動筆記により書かれた物であり、早い話が超能力によって書かれた書物なのだ。そのことにより、ここに記されているのは過去だけではなく、未来も記されているのだ。

女帝ヌルは年に一度だけステラの黙示録を観覧する。

「何度読んでも内容は変わらないもんなア」

イスラフェールの塔に出かける数時間前、少女の姿をしたヌルは夢幻図書館の奥部屋にいた。

何千回と読んだステラの黙示録。

過去の内容は完璧に記されている。しかし、未来のこととなると、断片的で矛盾も多い。

未来はすでに決まっているものなのか、そうでないのか、説はいろいろとある。

世界は 大いなる意思 と呼ばれる天秤のようなモノの謀であるとも云われている。その 大いなる意思 に本当に意思があるかは不明であり、この世の法則のようなものだとも云われている。この 大いなる意思 が望むのは、最終的な調和である。

ヌルは知っている 大いなる意思 の代行者が、歴史に介入していることを。

最終的な調和に向かうシナリオがあるとしても、アドリブもあることをヌルは気づいている。

いくつもある過去と未来。時間とは円ではなく、球である。一点を起点とし、そこから無限ルートの一つを選び、進み、起点に戻ってくる。ヌルはそう解釈している。

いくつも過去と未来があり、時間軸が球の上に存在していたとしても、すでに過去というルールを進んできてしまった以上ある程度未来へのルールは限られてくるのだろう。

そう考えると、ステラの黙示録 に書かれた未来が断片で矛盾が多いことが理解できる。

起きてしまった過去から、高確率で導き出される未来。

闇の子 の復活。

二人のメシアの激突。

メシアによる真のエデンの樹立。

そして、裁きの門 が開かれるところで ステラの黙示録 を終わってしまっている。ここで未来が尽きたわけではない。この書を記していた途中で、魔導師ステラの命が尽きたのだ。

「どっちが勝つのがわからないんだよね」

果たして勝つのはどちらのメシアなのか。

伝承によると、光の子 と 闇の子 は二度に亘って戦いを繰り広げたとされている。

一度目は人類が文明を気づく遙か以前。

二度目は一万年ほど昔だった。

金色に輝く六枚の翼を持つ天使と、闇色を湛える六枚の翼を持つ悪魔の戦い。軍勢とワルキューレを率いた天使軍が勝利を治めたが、悪の王を倒すことはできず、封印するに留まった。

「あの頃はアタシも若かった」
そう呟いたヌルは 夢幻図書館 を後にした。

「あのおくテンチョ、ちゃんと聞いてました？」

「ふわあゝん」

大口を開けて時雨はハルナに答えた。

「もお、テンチョつたら！！」

「ごめんごめん」

「テンチョが聞きたいって言うから話してあげたのにい」

「話はちゃんと聞いてたからだいじよぶ」

相手の顔を覗き込むハルナの瞳には、眠そうな表情をしている時雨の姿が映っていた。

「ホントですかあゝ」

「ホントだつて」

誤魔化すように笑った時雨を見て、ハルナは怒る気もせずため息をひとつ吐いた。

時雨がハルナに聞いていた話は、天使と悪魔が戦う神話だった。

その神話では、光の子 と呼ばれる天子軍と、闇の子 と呼ばれる悪魔軍が天上界ソエルで戦いを繰り広げる話であった。この話の結末は、天使軍がかろうじて勝利を治めるものの、

光の子 と 闇の子 は互いの配下の一部と、決して墮ちては上がれないとされるリンボウと呼ばれる空間に閉じ込められるというものであった。

リンボウに墮ちた天界人たちは、そのリンボウに存在した文明に溶け込み、時には権力者を影で操って歴史を操作しているのだと云う。

今もなお、密やかではあるが、光の子 と 闇の子 の戦いは続いているのだ。

時雨は何か考え深げな表情をしながらお茶をすすった。

「どうしたんですか、テンチヨ？」

「ああうん、何でもないよ」

記憶喪失のままハルナに拾われた時雨。未だに記憶は戻らない。しかし、今聞いた神話にはなにか感じるものがあつた。

まだ冬本番でもないのに、こたつの中に入っていた時雨はお茶を一気に飲み干すと、急に立ち上がった。

「ところでさあ、今日って聖祭なんですよ？」

「はい、そうですけど？」

「女帝を生で見れるらしいんだけど、どこで見れるか知ってる？」

「イスラーフィルの塔ですけど？」

「じゃあ、今から入って来るね」

「え!？」

「店番よろしく」

「ええっ!？」

驚くハルナをよそに、時雨はさつさと家の外を出た。

空は薄暗いグレー。けれども街全体は祭りということもあり、活気付いているように思える。

イスラールフィールの塔のそびえ立つのは、帝都の中心部にあるエデン公園。夢殿やヴァルハラ宮殿も近くにある。

公園は自然公園で、釣り堀としても開放されている湖や、野鳥の多くすむ森があり、ほとんどの場所は立ち入り禁止区域で、イスラールフィールの塔も普段は立ち入り禁止区域に指定されている。

広大な大地が広がる場所に、ぼつんとイスラールフィールの塔が立ち、その周りには女帝を一目見ようと多くの人たちが集まっていた。

「すごい人だなあ」

見渡す限り人、人、人、人しか見えない。

「はあ、ここじゃあ、見えないよね」

愚痴をこぼした時雨は人ごみの中に割り込んでいった。

「ちよつと。道を空けてくれませんか」

時雨のずうずうしい行動に人々は不満の顔を浮かべたのだが、時雨の顔を見たときとたん人々はすつと左右に分かれ時雨に道を空けてくれた。美人の特権である。

時雨が最前列に出たとき、ちよつとトランペットの音が高鳴った。女帝ヌルの御目見えである。人々は歓声を上げ歓喜した。女帝ヌルが塔のテラスに姿を現した。煌びやかな装飾の施された衣服を身に纏い、手にはユリの装飾の施された杖を持ち。

彼女の両脇にはワルキューレが二人護衛についでいた。

「一年に一度、こうして皆様の前に顔を出すことを心より楽しみにしております」

美しい鈴の音が、ハーブかフルートか、澄んだ女性の声が響き渡ると、集まった人々は静まり返った。

容姿端麗な女帝ヌルにふさわしい声音。

ヌルの声は超小型マイクによって集まった全ての人々の耳に届くことができる。

そして、女帝の姿はカメラを通し、公園に設けられた巨大スクリーン映し出され、なおかつ衛星を使ってテレビで生放送され、全国民が見ることができるようになっている。

話を続ける女帝ヌルは集まった人たちを見回した。

微かであるが、ヌルの瞳に動揺が走った。その動揺に気づく者はまずおるまい。しかし、真横に使っていたズイーベンだけが、ヌルの動揺に気づいた。

動揺を隠したまま、女帝ヌルは説教を説き、一〇分という短い時間を話した。

「では、また皆に会えることを楽しみしております」

女帝ヌルはそう話を締めて、塔の中へと姿を消した。

考え深げな表情をするヌルにたいして、ヌルの動揺を唯一察したズイーベンが声をかけた。

「どうしたのですか？」

「いや、ちょっとね、キミは感じなかった？」

「なにをですか？」

「ノインの気配が微かにしたんだ」

このヌルの言葉を聴いて、ズイーベンと近くにいたフィアアの顔に衝撃が走った。

ワルキューレに名を連ねるノイン。彼女が近くにいるはずなどない。それはありえないことだ。

言葉を詰まらせる二人のワルキューレの顔を見て、ヌルの考え深げにうなずいた。

「キミたち二人が気配を感じなかったことは、ボクの気のせいかもしれないね。ノインの身体も魂もタルタロスの最下層で眠っているのだから……」

永久欠番とされるノインは、裁きの門をくぐったその先の世界。タルタロスの最下層で眠りについている。意識が戻ったとしても、この世界に出てくることは不可能なはずだ。だから、ヌルは自分の感じたノインの気配を否定した。

「祝賀会とか、とにかくこの後の予定は全部キャンセルして、出張中のワルキューレ全員を夢殿に招集して」

ヌルはこうズイーベンとフィアアに命じ、ズイーベンはワルキューレの連絡、フィアアは祝賀会などの行事が中止になったことなどをどうマスコミに言い訳をするか頭を悩ませた。

時雨が家に帰るとハルナがやさしく彼を出迎えてくれた。

「おかえりなさいテンチョ」

「ただいま」

帰ってきた時雨は浮かない顔をしていた。

「どうしたんですう、浮かない顔なんてしちゃって」

「……なんかねえ」

そう言い残し、時雨は自分の部屋にこもってしまった。

ハルナはすぐに時雨の後を追いかけて部屋の中に入る。

「どうしたんですかテンチョ、あたしでよかつたらなんでも相談乗りますよ」

「ああ、うん」

元気のない返事をひとつ返した。すると、ハルナは時雨に向かって飛び込んでいった。

「ハルナパンチ！！」

必殺ハルナパンチが時雨を襲う！

元気なさ気で、避けそうもなかった時雨だが、ハルナが飛び込んでくるのを見て、ちよつと横にずれた。

ドスン！ ハルナはお腹から地面に落ちてしまった。

「いたあゝい。どうして受け止めてくれないんですか」

「いや、普通避けるでしょ」

「もしかして、テンチョあたしのこと嫌いなんですかあゝ。あたしの愛を受け止めてくれないなんてヒドイです」

ハルナの目は少し潤んでいる。本気の泣きだ。

「あのだから、何でそういうことになるの」

時雨はハルナにやさしく手を差し伸べた。

「ほら、立って」

手を借して立ち上がったハルナに時雨がいつもどおり言う。

「あのさあ、渋いお茶入れてきてくれないかな」

「お茶を飲んだら元気になつてくれますか？」

「まあね」

「じゃあ、急いで入れてきますね」

元気よくハルナは台所に駆け出していった。

「あ、あのさあ、おせんべえもお願い」

「はい」

台所の奥からハルナの声が聞こえてきた。

ハルナがお茶を入れ戻つてくると、時雨はこたつに入って、静かな寝息を立てていた。

「人にお茶を頼んでおいて寝ちゃうなんてヒドイですよ、もお」

ハルナはお茶とせんべえを置くと、時雨のほつぺたを軽くつかんだ。

「寝顔もカワイイですね」

ふと窓の外を見たハルナの目に、大粒の強い雨が飛び込んできた。

「にわか雨かな……洗濯物取り込まなくちゃ」

ハルナが急いで洗濯物を取り込みに向かった。

「……ありがとう」

急ぎ足のハルナの耳にそんな声が微かに聞こえたような気がした。

凍えは消えず

こたつに入って丸くなる時雨はスヤスヤと寢息を立てていた。三月も半ば、春うららかな陽気だというのに、時雨は一日中こたつの中で過ごす。

「テンチョ、お茶入りました」

湯気の立つお茶がこたつの上に置かれた。そのお茶を持ってきたのはハルナだ。

「ふわあゝっ」

あくびをしながら、時雨が伸びをした。頭をかく時雨の表情は寝起きそのもので、口元から涎が垂れていた。

「テンチョ、口拭いてください」

「う、うん」

袖で口元を拭く時雨。その袖は厚手の布地だった。春にこたつで、厚手の長袖を着用し、汗ひとつ掻いていない。寒がりという次元を超えていた。

お茶をすする時雨の目が徐々に開かれてきた。どうやら目が覚めてきたらしい。

「ところでハルナ」

「なんですか？」

「いい加減さ、そのテンチョって呼ぶのやめてくれないかな」

「えゝっ、でもお、テンチョはテンチョですし」

「ボクここの居候なんだけど……」

にしては、ハルナは家事一切をし、時雨の世話をし、まるでこの家のメイドのようだ。ハルナがここの主で、時雨が居候なのに。

「テンチョはこれからもテンチョですし、居候なんかじゃないですよ」

「だからさあ、テンチョじゃなくて時雨って呼んでくれないかな。別にボクはハルナの雇い主じゃないし」

「でもでも、恥ずかしいじゃないですかあ」

「恥ずかしい？」

「時雨さん……なんて呼ばませんよ!!」

顔を真っ赤にするハルナを見て、時雨の頭の中は『?』マークでいっぱいになった。

「なんでいきなり怒鳴るの？」

「だって、だって、三年以上も一緒に過ごしてて、今更……呼ばませんよ!」

「わけわかんないよ」

「テンチョのばかあ! もう出て行ってください! もう一緒に暮らせません!」

涙をいっばいに浮かべながら、ハルナは怒っていた。

「うん、出て行くよ。今までありがとう」

お茶を飲み終えた時雨がこたつから出て立ち上がる。その格好を見た者は、やはり時雨の身体の温度調節機能を疑うだろう。時雨はロングコートを着ていた。

「寒い」

そして、まだ寒いと呟くのだ。

部屋を、家を出て行くハルナはなにも言えなかった。出て行けと言ったのは自分だが、まさか本当に出ていくなんて思わなかった。

追いかけることもできず、声もかけられず、時雨は家を出て行った。

裁きの門　の内側の番人は身体の底から震え上がった。

漆黒の底なし沼が広がり、紅蓮の炎でできた雷雲の中を稲妻が奔る黒い空。

泣き叫ぶ悲痛な叫びは呪いと腐食を運び、黒い蟲どもが腐食を糧とし、その蟲を喰らう大地の裂け目から伸びる黒い触手。

かと思えば、触手はどこから現れた赤黒い手に引き裂かれ、その直後にネチネチとした咀嚼音が聞こえてくる。

ここは異世界　裁きの門　の中。

上半身が女体であり、下半身が醜い蛇の化け物である、この世界に棲む異形の番人ですら、身体を振るわせる風が吹き荒れたのだ。

風は無邪気な狂気を孕んでいた。

呻き声のような音が地響きと共に大地を震え上がらせ亀裂が走る。

怨念を孕んだ風が泣き嗤いながら嵐を引き起こして黒い蟲どもを呑み込む。

この世界に棲む異形の者どもですら、決して近づこうとしない最下層の地　タルタロス。

今のこの世界を包み込む風は、そのタルタロスから吹いて来たものであった。

極寒の地タルタロスで凍ることは、死を迎えることではなく、永久の狂気を死ぬことも許されずに見せられることに他ならぬい。

このタルタロスには一つの櫃がある。悪夢を封じ込めた櫃。その中には一人の悪夢と、一人の戦士が封じ込められていた。

闇の子　を封じ込めた　邪櫃　に囚われてしまった不運な戦士。その名はノイン。ワルキューレにその名を連ねる剣の使い手であった。

前回の　光の子　と　闇の子　が戦った際、ノインの犠牲を持って　闇の子　を　邪櫃　の中に封じ、このタルタロスに叩き墮としたのだった。

だが、時は過ぎ。闇の子　は長い年月に闇の力を増幅させ、思念体を外の世界飛ばそうと目論んでいたのだった。そのとき、共に櫃の中で眠っていたノインの精神は　闇の子　に反発し、最後まで抵抗をしたが、その抵抗も虚しく　闇の子　の思念体は外の世界に出てしまったのだ。

そして、ノインは　？

雨の降るあの日、時雨はハルナに拾われた。あのときのことを時雨はあまり覚えてない。朦朧とする中、ハルナに拾われた

のだった。

ハルナと出会う前の記憶はなにもない。新しい記憶はハルナの優しさで温かき。彼女に拾われたのは時雨にとって幸運だったといえる。

気温は温かく、花々が彩る中、時雨は呟く。

「寒い、今日は特に冷える」

それは身体か心か？

アーケード街を出て時雨はバス停の椅子に座って空を眺めた。空は青い、雲はない、爽やかな風が吹く。

鳥が飛んでいた。

「どこ行こう」

新しい住まいを探す間、どこかで雨風を凌がねばならない。知り合いの家？

時雨にどれだけの知り合いがいるのか。三年間でできた知り合いがどれだけいるのか。

「困ったなあ」

頭を悩ませつつも、時雨はバスに乗り込み、行く当てもなく座席で身体を揺られていた。

いくつもの停留所を過ぎ、質素なドレスを着た蒼眼の少女がバスに乗り込んできた。その少女は金髪のを揺らしながら、時雨の横に立った。

「こんにちは時雨様」

「こんにちはアリスちゃん」

時雨の前に姿を現したのは、魔導士マナの家に仕える機械人

形アリスであつた。

「時雨様、どうかしましたか？」

「うん、ううん」

「鼓動や顔色が優れないようです」

「まあね」

「わたくしのような者が不躰ですが、わたくしにできることがればなんなりとお申し付けください」

「実はさ、住む場所を探してるんだよね」

「えっ？」

機械人形が眼を丸くした。それは感情ではなく、反射的な機能であるのかもしれないが、アリスは目を丸くしたのだ。

「ハルナ様と一緒にどこかのお引っ越しになられるのですか？」

「違うよ、あの家を出たんだよ」

「えっ？ 夫婦喧嘩ですか？」

「はあ!？」

今度は時雨が眼を丸くする番だつた。

「ボクと誰が夫婦!？」

「時雨様とハルナ様はご結婚なされていと聞いておりましたが、もしかして籍はまだ入れてなかつたのですか？」

「はあ!？」

「どうやら変な噂が流れていたらしい。そのことに時雨ははじめて気が付いた。」

時雨は沈黙を続け、アリスも時雨に合わせて口を開くのをや

めた。次にアリスが口を開いたのは魔導街がある停留所前だった。

「それでは時雨様、御機嫌よう」
「うん」

小さな機械少女の背中を見送り、時雨はまたひとりになった。いや、もともとひとりだったかもしれない。

ハルナと過ごした日々も、夢だったのかもしれない。

今も自分は夢を見ているのかもしれない。

時雨は意識も虚ろのままバスを降りた。

日はまだ高い。けれど、遠く西空に見える大きな雲。雨がやってくるかもしれない。

傘はない。

持って出たのは財布くらいだ。

「おなかすいた」

辺りを見回す時雨。家が立ち並んでいるが、飲食店はなさそうだ。これでは財布も意味がない。

公園が見えた。中規模な公園で遊具が充実しており、小さな池もある。

なぜか時雨は公園に誘われるように入ってしまった。
気配が無い。

まだこの時間ならば小さな子供たちが元気に遊んでいてもおかしくない時間だ。それなのに、子供の声がない。いや、声はした。

「きゃーっ！」

小さな子供の泣き叫ぶ声。

時雨は声のした方向へ全速力で走った。

中年の女が顔を覆っている。その先には何もいない。あるのは波紋を立てる池のみ。

「なにがあつたんですか？」

時雨が尋ねると女は金切り声を出した。

「子供が、私の子供が池の中に！」

先ほどの子供の叫び声がそれだろう。きっとその子供が池の中に何らかの理由で落ちたに違いない。

真後ろの池から気配がした。しかし、時雨が気づいたときには遅かった。池の中から伸ばされた触手は時雨の足首を的確に捉え、バランスを崩された時雨はそのまま池の中に引きずり込まれてしまった。

突然のことに時雨は口を開いたまま池に落とされ、口の中、肺の中に水が浸入し咳き込み、余計に口の中に水が浸入してくる。

水の中はとても寒く、凍てつく水が身体を刺す。

ロングコートが水を含み、身体を自由に動かすこともできず、コートを脱ぐこともままならない。

この池の底はどこまで続いているのだろうか？

時雨の身体は抵抗することをやめて、どこまでもどこまでも落ちていく。

奈落に落とされる気分だ。

聴覚は深いな水音で塞がれ、濁った水の中では視界も塞がれ、

寒さの中で触覚も失われつつあった。

寒い、寒い、とても寒い。

いつもと変わらない寒さ。

どんなに身体を温めようと、その寒さは消えない。

しかし、魂は？

時雨の意識は事切れた。

このようなところで死んでもらっては困る。

公園には子供の母親の通報で駆けつけた帝都警察が二人待機していた。

現場に変わった様子はない。

すでに妖物は別の場所に逃げたのか？

いや、なにかいる。

池のそこで何かが輝いた。

泥水の中で光は拡散して煌いている。

次の瞬間、火山が噴火したように水飛沫を上げながら、謎の発光体が池の底から宙に浮かび上がった。

それは天使のようだった。

背中に輝く羽根を持ち、気品漂うユニセックスな顔立ちは人間のものとは思えない。

翼は動物の物と言うより、骨組みだけの機械チックなもので、その翼からは小さな光の玉　フレアがいくつも発生していた。

二人の帝都警察は、すぐにその顔が誰のものか気づいて、顔を見合わせた。そして、目を見開いたのだった。

池の底から幾本もの触手が槍のように飛び出した。

輝く者が静かに呟いた。

「やはり触手が本体ではないのか」

それは時雨の顔と声で、呟いたのだ。しかし、何かが違う。

自分に向かって来た触手を束にしてつかみ、時雨はそれを綱引きでもするかのように引つ張った。

触手はぴんと張り詰められ、池の底で何かが蠢き、水面が激しく波立つ。

池の中に巨大な生物がいる。

新たな触手が空に浮く時雨に襲い掛かる！

瞬時に時雨は触手を手放し、妖刀村雨を始動させた。

柄から放たれた虹色が噴水のように飛び出した。それは“時雨”が扱う時とは比べ物にならない力を発していた。

時雨が村雨を振るうと触手は爆砕し跡形も無く分解してしまった。

先端を爆砕された触手が池の中に引き返していく。

「逃がすか！」

池に向け滑空する時雨の姿はまるで獲物を狙う鷹であった。

だが、触手は池の中に没し、底で蠢いていた黒い影も消えてしまった。

逃げられてしまった。

時雨は水面の上に立ち、持っていた村雨を深く水面に突き刺

した。その瞬間、突き刺された刃を中心に池が一瞬にして凍りつき、厚い氷の壁を形成した。

嘩然と光景を眺めていた帝都警察二人の前に宙から降り立った時雨は、村雨を仕舞い戦いがひとまず終わったことを告げた。「あの池はどこか別の池か湖か海か……あるいは異界に繋がっているらしい。A級危険区域として政府の管轄で封鎖をしたほうがいいだろう」

二人の帝都警察は声を出さずにうなずくだけだった。

声を出たのは時雨が背を向けて立ち去る寸前。

「あなた時雨さんですよね？」

「違う」

短く返され、沈黙が降りた。

夕方になり、曇り空から雨が降ってきた。

買い物袋を片手に傘を差すハルナは黄色い長靴で雨水を躍らせながら歩道を歩いていた。

雨の日の買い物は、ハルナにとって特別な思い出を思い起こさせる。

時雨との出逢い。

自宅の外付け階段を上る途中で、ハルナの視界に玄関前でうずくまる男の姿が見えてきた。

全身びしょ濡れで、玄関に寄りかかりながら座っているのは、間違うわけも無いまさしく時雨の姿だった。

「なにやってるんですかっ、風邪引いちゃいますよ！」

時雨の姿を確認したハルナは階段を駆け上がり、時雨に駆け寄ってしゃがみ込んだ。

「時雨さん、意識ありますか!？」

返事はなかった。

けれど、意識はあるようだ。

唇を紫にし、身体を震わせ、時雨は小声で呟いていた。

「とても寒いんだ」

「だつたら早く中に入りましょ」

「どんなに身体を温めても寒いんだ……寒いんだ……寒いんだ

……」

「早く中に」

「寒い……寒い……寒い……」

「時雨さん」

ハルナは買い物袋と傘を投げ出し、時雨を身体をそつと抱きしめた。

今ここで抱きしめているのに、ハルナは自分の知らないどこか遠くに時雨がいるような気がした。こんなに悲しくて寂しい気分になったのは、時雨に出逢う前以来だ。自分はなにもしてあげられないのだろうか。

怒って時雨を追い出してしまったことを後悔しながら時間を過ごした。そして、買い物から帰ると時雨が玄関先にいた。歓喜でいっぱいだった。

それなのに。

「……時雨さん」

「……寒い……寒い……」

寒さに凍えるだけだった時雨の身体が少しだけ動く。腕をゆつくりと動かして、ハルナの背中に回る。

「寒い……寒さはいつまで経っても変わらない。身体は寒いけど、心は少し温かくなっただけかな」

ハルナを抱きかかえながら時雨が立ち上がった。

寒さに凍えずに済む日は訪れるのだろうか。

二人は寄り添いながら家の中に入って行ったのだった。

凍えは消えず 完

其の名は夏凜

その日の帝都は例年になく猛暑だった。

木に止まっているセミがジリジリと身を焦がすように鳴いている。

向かい側のベンチには営業マンが一休みをしていた。

ビル街が程近い公園には、子供なんて一人もない。サラリーマンばかり目に付く。

ワイシャツに汗を滲ませる者が多い中、ひとりだけ浮いた格好をしている者がいた。

真夏の視線を遮る真つ黒なロングコート 冬物。

飲み物をストローでチュウチュウ吸う時雨は、その視線を前方に向けていた。

時雨に負けず劣らずの暑そうな格好をした人物が近づいてくる。

いわゆる黒いゴスロリ姿の女の子が、スカートの裾を巻き上げながら時雨に近づいて 突進してきた。

突然のことに時雨は避けることもできず、手の持っていた紙カップが中を舞った。

「だ、だれ!？」

「お兄様!」

「はっ?」

時雨は女の子に抱きつかれ、目を白黒させて驚いた。抱きつかれただけならまだしも『お兄様』とはいつたい？

大きな瞳を輝かる女の子は時雨を上目遣いで見ている。その口元は押さえきれない笑みを浮かべていた。

「お兄様、ついに見つけた！」

「はあ？」

「いっぱい搜したんだから」

「はあ？」

「会いたかった、会いたかったんだから」

「はあ？」

「お兄様、大丈夫う？」

「はあ」

状況把握に努めようとした時雨だったが、相手の顔すらも思い出せない。なぜならば、時雨は記憶喪失だったからだ。

「すまないけど、君だれだっけ？」

「ええーっ！ アタシのこと覚えてないの？」

「去年の秋以降の記憶がまったくくないんだ」

「嘘だよ、悪い冗談やめてよ」

「本当に君のこと覚えてなんだ」

「妹の顔を忘れるなんて酷い！」

「はっ!？」

驚きすぎて地面に落ちたままの紙カップを拾う気も起きなかった。

もちろん妹の記憶はない。この女の子が嘘を付いている可能

性だつてある。記憶喪失の時雨には判断がつかなかった。

女の子は目をクリクリさせながら自分の顔を指差した。

「アタシの顔も名前も覚えてないの？」

「ぜんぜん」

「夏凜だよ、夏凜」

「はじめまして、ボクの名前は時雨です」

「……本当に覚えてないのね。行方不明になっちゃっただけじゃなくて、記憶まで失っちゃったんだ。いったいお兄様になにがあつたの？」

「それはボクが聞きたいよ」

去年の秋、時雨はハルナという雑貨屋の娘に拾われた。それ以来、行く当てもない時雨はハルナと暮らし、とても安息できる日々を送っていた。昔の記憶など戻らなくてもいいと時雨は考えていた。

両親を亡くしたハルナは雑貨屋を引き継いだが経営がうまくいかず、店を畳もうとしていたところに時雨が舞い込んできたため、店の経営を時雨に任せることにした。それでも店の経営は芳しくなく、時雨は今年の春先からある副業をはじめたのだ。それがトラブルシューターだ。

その頃から、時雨の名が社会に出るようになってきた。社会と言つても裏社会での話だ。

果たして夏凜は本当に時雨の過去を知るものなのか？

「お兄様が行方不明になつたのは去年の夏。アタシがそれを知つたのは今年になつてからだけだ。お兄様って一度出かけると、

長い間、連絡できないこともしょっちゅうだったし」

「出かけると？」

「お兄様は考古学者だったの。それで調査の旅行に行くよね、なかなか帰ってこなかったの。だから、いつものことだと思っ
てただけど、お兄様はいつまでたつても帰ってこなかった」

「ボクが考古学者なんて嘘でしょ？」

「本当だつてば、特に神話や魔導に関してかな、アタシに教えてくれなかったけど、そんなことを調べてみたい」

時雨は難しい顔をしていた。自分の過去がわからない記憶喪失とはいえ、考古学者だったなんて話は信じられないことだつた。

いつの間にか夏凜はベンチに座り、時雨の腕に自分の腕を回して寄り添っていた。これは兄妹というより、恋人同士のようにだ。

二人がベンチ座っていると、若いOL風の女性が駆け寄ってきた。視線は夏凜に向けられている。

「夏凜さんですよね、握手してもらえませんか？」

「いいですよ」

満面の笑みで夏凜は握手に答えた。

どうやら夏凜は有名人らしい。

女性も満面の笑みを浮かべていたが、その視線が時雨に向けられると少し曇った表情をした。

「夏凜さんって……やっぱり男性に興味が……やっぱりなんでもないです！」

「この人アタシのお兄様、血縁関係の」

「そうなんですか、夏凜さんは見た目は女性ですけど、やっぱり中身はノーマルだったんですね」

安堵の表情を浮かべて女性が去って行ったあと、時雨は夏凜を不審の眼差しで見つめた。

「君さ、オカマなの？」

「ちがーう！」

「さっきの女の人の話から推測するとそうなるんだけど」

「違うつてば。身体は男なの認めるけど、中身は真正正銘の女の子だつてば」

「それをオカマって言うんじゃないの？」

「だーかーらー」

夏凜は疲れたようにため息を地面に吐き捨てた。

「お兄様、早く記憶を取り戻して。そうしたらアタシのことも思い出すし」

「君がオカマだつてこと？」

「だから、オカマじゃないつて言ってるでしょ。もともと女の子だったの、説明すると長くなるしめんどくさいけど」

だから夏凜は普段は“男”で性別を通しているのだ。そのほうが一部の女性にウケがいいというのもあるらしい。

夏凜と話している最中、時雨が夏凜を見たのは最初だけで、今はずっと遠くの景色を見つけている。決して夏凜の話を目に聞いてないわけじゃない。

自分の過去を本当に知っているのであればと、時雨も質問を

投げかける。

「ボクが君の捜してる人物だつて証拠は？」

「お兄様が住んでるマンションに行くとか、昔近所だったマナちゃんのこと覚えてない？」

「マナつてだれ？」

「魔導士のマナちゃん。魔導具販売の帝都でのシェアが二三パーセントくらい握つてる人」

「その人のことなら知ってるよ。でもさ、知り合いだった記憶はないよ」

「じゃあ、お兄様のマンションに行こうよ」

「今は駄目、仕事」

夏凜と視線を合わせない理由はこれだった。仕事なのだ。

「仕事つて、なんの仕事？」

「トラブルシューターをやつてるんだ」

「お兄様がトラブルシューター!？」

「そんなに驚かなくてもいいと思うけど」

見張っていた場所になにか動きがあったのか、時雨がベンチから立ち上がった。その腕を夏凜が掴む。

「アタシも手伝う」

「仕事の邪魔」

「アタシの実力なら知ってるじゃん」

「記憶にない」

「そっか。とにかくアタシもお兄様の役に立ちたいの」

「じゃあベンチに座つて大人しくしてて」

「もあ！」

時雨は夏凜を置いて走った。その手には輝くビームソード
妖刀村雨が握られている。穏やかでないことが起きるのは一
目瞭然だ。

村雨を構えて走り寄って来る時雨に気づいたスーツ姿の男に
変異が起きる。筋肉が膨れ上がり服が破け、頭に二本の角が生
え揃った。その姿はまるで鬼のようだ。

公園にいたサラリーマンたちが声を上げて逃げ出す中、平然
としている者もいた。それに時雨は気づくべきであった。

時雨が鬼に斬りかかるうとしたとき、後ろから別の鬼が襲い
掛かってきたのだ。

目の前にいた鬼の首を刎ね、すぐさま時雨は振り返ったが間
に合わない。鬼の鋭い爪が時雨の肉を抉ろうとした。

爪が早いか、それとも時雨の一刀が早いか。

鬼の肩から腰に一筋の光が走った。

時雨の剣技が煌いたのか？

いや、違った。

斬られた鬼の上半身が下半身からずり落ちたとき、その先に
立っていたのは大鎌を構えた夏凜の姿であった

「お兄様大丈夫？」

「う、うん」

「よかつたあ。お兄様にもしものがあつたら、アタシ食事
も喉に通らなくなっちゃう」

内股でモジモジする夏凜と眼前の鬼の死骸がミスマッチだ。

明らかにぶりっ子していることは時雨にもわかった。

「猫被ってるでしょ、君」

「そ、なんなことないよお。お兄様ヒドイ」

「あっそ」

時雨の心になにかが引つかかった。感覚的に覚えている記憶。夏凜のことを昔から知ってような気がした。

「夏凜伏せろ！」

お兄様の言いつけを守り夏凜がしゃがみ、その頭上を時雨が飛び越えたのと同時に、雄たけびにも似た悲鳴があがった

時雨の一刀で仕留められた鬼が地面に沈む。三匹目が潜んでいたのだ。

「お兄様……アタシのこと助けてくれたの？」

「助けたとか助けないとかじゃなくてさ」

「お兄様ステキ。やっぱり大好き！」

時雨に飛びつき抱きついて押し倒す夏凜。

続けざまに時雨はほつぺたにキスをされていた。

このときの現場写真が雑誌に載り、夏凜オカマ疑惑が強くなるのは数日後の話。

自分の太ももに当たる夏凜のモノを感じ、時雨は慌てて夏凜を突っぱねた。

「男にキスされたくない」

「だから女だってば。お兄様の妹」

「股間についてるのに女？」

「だから身体は男だけど、もともと女だったんだってば」

「あつそ」

「兄様が記憶を戻せばいいんだってば。だからお兄様が住んだマンションに行こうよ」

「ヤダ」

なぜか嫌だった。夏凜の言っていることが信用できないわけじゃない。心のどこかで夏凜を避けているのだ。

「ボクさ、なんでかわかんないけどキミのこと苦手なんだ」

「お兄様ヒドイ。記憶ないって言ったのに……なんでアタシのこと避けるの？」

「はあ？」

「記憶ないって嘘なんでしょ！」

「はあ！」

「だって、だってアタシのこと避けようとするなんて。嘘までついてアタシのこと避けようとするの？」

「はあ。君の言っていることが理解できないよ」

「お兄様のばかあ！」

突然、夏凜は手に持っていた大鎌を振り回して時雨に掛かってきた。恋愛のもつれの末に起きる殺意に似ている。

泣きながら襲い掛かってくる夏凜に命の危険を感じ、時雨は背を向けて一目散に逃げ出した。仕事の事後処理なんて今はやっつけられなかった。今は命が掛かっている。

公園を出て、人通りの多いオフィス街についても夏凜は後ろから追って来ていた。大鎌を振り回す危険人物に誰もが道を開けている。警察を呼ばれるのも時間の問題だった。

いや、警察ならすぐ目の前にいた。

道路の脇に止まっている帝都警察のロゴの入ったパトカー。すぐに時雨は助けを求めた。

が、覗いたパトカーの中に人がいない。

あきらめようと顔を上げて道路を見たとき、パトカーが何台も通り過ぎるのが目に入った。サイレンを鳴らして現場に向かう途中らしい。あちらの方向は公園のある方向だ。

道路を駆け抜けるパトカーに助けを求めようとしたが、もうすでにパトカーは過ぎ去り、代わりに夏凜が時雨に追いついてきた。「お兄様ったらヒドイ。なんでいつもいつも逃げるの。なんでアタシの愛を振り払おうとするの！」

「あのさー、君の話だとボクたち兄妹なんですよ。愛って可笑しいじゃないか」

「だってアタシお兄様のこと大好きなんだもん」

なぜ深層心理で自分が夏凜を嫌っているのか、時雨はなんとなく理由がわかったような気がした。

すぐそこまで迫っている夏凜。その距離は二メートルほどしかない。

まだ追い詰められたわけじゃない。

時雨が走ろうとしたときだった。

「武器を捨てて手をあげる、さもないと撃つぞ！」

その声は夏凜の後ろからした。時雨の位置からはその姿が確認できた。その制服姿は紛れもなく帝都警察の物だった。

手から大鎌が消失させ、夏凜は苦笑いを浮かべながら振り返

った。

「武器つてなんですかあ？ アタシぜんぜんわかんない」
武器は確かにもうない。跡形もなく消えてしまったのだ。

銃を向けたまま二人組みの警官が夏凜にゆつくりと近づいてくる。

「今もつていた武器をどこに隠した！」

「だーかーらー、武器つてなんのことですかあ？」

「とぼけるのもいい加減しろ、署まで来てもらうぞ」

「アタシなにも悪いことしてないのに」

が、それを否定するように時雨は夏凜を指さし、

「その人、ボクを殺そうとしたんです。早く捕まえてください」

「お兄様なんてこと言うの!？」

すぐに夏凜が時雨のほうを振り向いたときには、そこには誰の姿もなかった。時雨はさっさと逃げてしまったのだ。

「お兄様のば……うわっ!？」

夏凜は警察官に取り押さえられ、地面に押さえつけられてしまった。

手錠を掛けられ、夏凜は近くに止まっていたパトカーに押し込められた。

「アタシ無実だってば!」

「うるさい、署で全部聞いてやるから黙ってる」

「お兄様助けてーっ!」

叫び声が木霊し、パトカーは夏凜を乗せて走り去って行った。

それを野次馬の影から時雨は小さく手を振って見送った。

「悩みの種がまた増えた。本当にボクの妹なのかな？」

深くため息をついた時雨はこの場をあとにした。

自分の過去が気にならないはずはない。しかし、時雨は今の生活にも満足していた。家に帰れば笑顔で迎えてくれる人がいる。

それだけで今の時雨には充分だった。

其の名は夏凜 完

二人の魔女

偶然にも、その日に二人も弟子の志願者がきた。二人とも幼い女兒だった。

ひとりとは名門

ホシガミ
星神家の息女。

ひとりとは駆け込みのどこの馬の骨とも知れない女兒。

一八世紀のフランスで流行した、室内装飾や家具類に囲まれたロココ様式の部屋。込み入った曲線模様と、華やかな色彩で部屋は飾られていた。

足を組み、優雅に椅子に腰掛けているのは、この屋敷の主であるヨハン・ファウストだ。

「弟子はここ数十年とつていない」

ファウストは目の前に座らせた二人の女兒を見比べた。

星神家の息女は日本とヨーロッパの混血らしく、金色の巻き毛が似合う女兒だった。絢爛なドレスに見えるのは魔導衣だ。地位も財力もある息女だとひと目でわかる。

一方の女兒は黒い質素ワンピース姿だった。黒髪と黒瞳からは東洋系ともラテン系とも取れる。目に見える才能を持っているのは星神家の息女だが、磨けば光るのはこちらの女兒だろうとファウストは考えた。

「名前は？」

とファウストが聞くと、相手を差し置いて勢いよく答えたの

は神星家の息女だった。

「はあい、私の名前は神星マナ。おとー様に言われてしまうのがなく来ました」

快活で自己主張の強いとファウストは瞬時に判断した。

次にファウストが視線だけでもうひとりを促した。

「わたくしの名はセーフィエル」

「それは姓かね、名かね、それともミドルネームかね？」

「セーフィエルだけです。それが姓か名か、わたくし自身も知りません。セーフィエル　それがわたくしを表す記号」

横にいるマナが不思議そうな顔つきでセーフィエルを見つめている。それを感じ取ったのか、セーフィエルはマナに顔を向け、月のように静かな微笑みを湛えた。

金系の法衣をはためかせてファウストが立ち上がった。

「よかろう、二人とも弟子として迎えようけよう」

「ええーっ、私、弟子なんかやりたくない」

騒ぐマナの横で、すつと立ち上がったセーフィエルが深々と頭を下げる。

「ありがとうございます」

こうしてこの日、二人の女兒がファウストの弟子となった。

両親の言いつけで無理やりここに預けられたマナは怠惰そうな顔をしている。

一方のセーフィエルは静かながらも、積極的な顔つきで真摯にファウストを見ている。

真面目な者よりも、不真面目な者に目が向いてしまうのは必定。

ファウストの視線はマナに向けられた。

「修行にペーパーテストはない、常実践だ。血反吐を吐くまで扱いてやるから、そのつもりで覚悟しろ」

他の部屋とは違い素っ気のない石壁の部屋。

床には焼け焦げた黒ずみや変色した部分が見受けられる。

「さて、それでは二人の実力を見せてもらおうか」

ここは魔導の室内訓練場であった。

ファウストに促され、マナは待つてましたと胸を張る。

「私の実力を見て驚くんじゃないわよ」

マナの周りにオレンジのフレアが現れた。それは螢火のように、ゆらりゆらりと宙に浮く。

目を瞑りマナがゆっくりと掌を胸の前に突き出した。

「ファイア！」

紅蓮の炎が掌から放たれ、それはファウストを飲み込まんよと飛んだ。マナはファウストを殺す気で炎を放ったのだ。

鼻で嘲笑するファウストが法衣のマントを翻した。

すると炎はあっさりとマントに呑み込まれてしまった。

「くだらん手品だ。私のマントに焦げ跡すら残ってらんぞ？」

悔しそうにマナは口をへの字に曲げ、石畳をヒールで蹴っ飛ばした。

「あなたのこと殺せば家に帰れると思ったのに！」

「私を殺せるのなら、殺せばよからう。いつ何時、命を狙おう

と構わんぞ」

声をかみ殺すようにくつくつとファウストは笑った。

マナのファウストへの殺意が、お遊びから憎悪に変わる瞬間だった。

再びマントを翻したファウストは身体をセーフィエルに向けた。

「さて、おまえはなにができる？」

「わたくしは魔導力があまりありませんので、魔導具を使うことをお許しください」

「魔導具使うなんてずつるーい！」

口を挟むマナにファウストが一括する。

「おまえは黙っている。魔導具の使用を許そう、さあはじめろ」

セーフィエルが出したのは杖だった。

本人の身の丈ほど杖の先には、木を刳り貫いて掘った翼が模つてある。その左右の翼の中心には蒼玉が埋め込まれている。

おそらくこの杖は魔導力を増幅する装置なのだろう。

セーフィエルの唇が三日月の笑みを浮かべた。

「……ファイア」

杖を通して紅蓮の炎が放たれた。その規模はマナとほぼ互角。微かにマナが上か？

紅蓮の炎はファウストの横を掠めたが、彼は微動だにせず。炎を間近で見定めた。

炎が後ろの壁に煤を付け消えたの同時に、ファウストが静か

に口を開いた。

「ふむ、その魔導具はどうした？」

「わたくしが自分で作りました」

「おもしろい、少し見せてはくれないか？」

「はい」

献上するように杖はセーフィエルからファウストに手渡された。

手彫りで丁重に作られた細工は、目を凝らすほどに繊細だ。

宝玉は人工のようで、魔導の力を結晶化したもののようなだった。

「この結晶も自分で加工したのかね？」

ファウストが尋ねると、控えめにセーフィエルは微笑んだ。

「ええ、四季の森にある泉の水を蒸留して使いました」

四季の森は別名 迷いの森。二ーハマ区にある自然公園だが、今は一般の立ち入りが禁止されている。

あの森で迷わず、目的を果たして外に出る。それを成し遂げたセーフィエルは賞賛に値する。

杖をセーフィエルの返し、ファウストは言った。

「おまえは魔導を直接使う才能より、魔導具を作る才能に恵まれているらしいな。他にどのような物が作れる？」

「アミュレットやタリスマンも作れます。けれど、今は魔導人形に興味があります」

二人の会話をマナは不機嫌顔で聞いていた。自分が以外が人から賞賛されたり、脚光を浴びるのが許せないのだ。

「私なんかセーフィエルちゃんより、もあつとスゴイ魔導具作

れるわよ！」

威勢の良いマナが負けじと出任せを吐いたことをファウストはすくに見破った。

「よかるう、では今より二四時間後に二人の作った魔導具を見せてもらう」

「う、っ……」

威勢の良かったマナが一步後ずさりをした。身から出た錆び。負けず嫌いな正確と快闊な気質が災いした。

マナにたいして、セーフィエルは事を受け止め淡々としている。

「条件はおありでしょうか？」

「二人には同じ材料で同じ物を作ってもらう　アミュレットだ。材料は四季の森にある冬の泉の水。早く作った者が勝ちではない。制限時間内に一つ、良品を作った者を勝ちとする。では、初め！」

突然のスタート合図にも慌てず、セーフィエルは静かに部屋を出て行った。

しかし、マナは目をパチパチしてファウストの顔を覗きこんでいる。

「ちよつと待ちなさいよ。四季の森って行ったことのあるセーフィエルが有利じゃないのよ」

「実践において有利なものもない、結果が全て。御託を並べるのは敗者のすることだ、見苦しいぞ」

これ以上ファウストに食い下がるのはプライドが許さない。

マナは自分の力に絶対の自信を持っている。たとえ自分が不利でも勝ってみせなくてはならないのだ。

マナはセーフィエルを追って屋敷を出た。

大きな鉄の門を潜り、道路に出たがすでにセーフィエルの姿はない。姿が見なくとも行き先はわかっている。すぐに追いかける必要はない。

これは競争ではない。時間内により相手よりも良質の魔導具を作ればいい。しかし、それではマナの気は治まらないのだ。

セーフィエルに全てにおいて勝つことが大前提。次にファウストの鼻をはかしてやりたい。それが一番の目的かもしれない。

現在、マナがいる位置は魔導街の一角。ここは帝都の中央部から少し横にずれたマドウ区で、魔導産業によって繁栄した街だ。魔導工場も多く点在するが、その一角には中世の屋敷を思わせる魔導師たちの家が立ち並んでいる。

四季の森 通称 迷いの森 があるのは、ここから北東に進んだ二ーハマ区だ。二ーハマ区は帝都の端にある区で、この場所からはだいぶ距離がある。

マナは辺りを見回した。こんなに早くセーフィエルの姿が消えるなんて、運良くタクシーでも拾えたのだろうか。

この場所から駅までは遠い。

バス停は少し行った所にあるが、四季の森への交通手段はステーションで電車を乗り継ぎ、またバスに乗って四季の森の近くのバス停から徒歩だ。とてもじゃないがお嬢様育ちのマナは、それを実行するほど悠長ではない。

しかし、近くに交通手段がないのだ。あるのは自分の足が二本。

タクシーや人を呼ぼうにも、ケータイ電話はファウストの元に預けられる前に没収された。クレジットカードも没収され、残されたのはわずかな現金。

「おとー様は私に甘いのに、どーしてお祖父様は厳しいのかしらあん」

ファウストのもとに修行に行けと命じたのもマナの祖父だ。魔導に関しては尊敬できる人物であることは認めるが、マナは祖父があまり好きではなかった。

ファウスト邸を出てすぐの道路でマナが突っ立っていると、すぐ後ろで齒軋りのような音を立てながら鉄の門が開かれた。振り向くとそこにいたのは、先を越されたと思っていたセイフィエルだった。

「あらあん、まだいたの？」

不思議そうにマナが尋ねると、セイフィエルは微笑んだ。

「準備をしていたの」

「準備？」

「マナはしていないのかしら……うふふ」

静かに笑われ、マナは小ばかにされている思いだった。

マナは手ぶらだった。それにたいしてセイフィエルは箒と皮の袋を持つてる。皮の袋は膨らみや凹凸を見せ、中にいろいろと物が入っていることを伺わせる。

四季の森に行くにはなにか準備が必要のだ。それがなんであ

るかわからぬマナは悔しかった。

それを見透かしたようにセーフィエルは言う。

「冬の泉で水を掬うには特別な道具が必要なのよ」

「知ってるわよ！」

思わず口をついて出てしまった。本当はどんな道具が必要なのかさっぱりわからない。

マナの強がりもセーフィエルも黒瞳で見透かした。

「教えてあげるわ。あなたがわたくしに頭を下げれば」

「そんなこと」

「できないわよね、知っているわ。あなたはそんなことはできない。うふふ、少しからかっただけ」

ガキのクセになんて性格が悪くて、子供っぽくないんだろ。とマナは内心思った。それを言うのならば、マナもませていて子供なのに変な色香を醸し出している。

セーフィエルは皮袋から二つの道具を取り出した。小船のような三日月状の形をした器と、白銀に煌く髪飾り。

「これは三日月の器と銀の髪飾り。三日月の器で水を掬い、銀の髪飾りで水を梳いて清めるの。この二つ、マナにあげるわ」
「えっ？」

勝負の相手に手を貸すなど、マナの常識にはないことだった。セーフィエルを勧めるが、二つの道具を今から入手する余裕はマナにない。ここはひとまず受け取って置いたほうがいいかもしれない。

小さな子袋に二つの道具を入れ、それをマナはいちようスマ

イルで受け取った。

「ありがとお、感謝するわぁん」

と口で言いつつも、これは畏かもしれないと脳内で考え続けている。

もしこれが本物の道具だとしても、それはつまり泉の水を二人が取ってきてても、良質の物を作るのは自分だと、セーフィエルには絶対の自信があるのかもしれない。だから、わざわざ人を上から見る態度で、魔導具をくれたのかもしれない。そう思うとマナは腹立たしくなったが、そこはレディとして腹の奥にぐつと怒りを抑えた。

要するにこの勝負に勝てばいいのだ。マナはそう考え心を鎮めた。

セーフィエルはどこだろう？

マナは辺りを見回したが、すでにセーフィエルの姿はない。上に気配を感じた。

セーフィエルは箒に跨って宙に浮いていた。空飛ぶ箒までセーフィエルは作っていたのだ。

空飛ぶ箒は作る工程も難しいが、材料を集めるのも容易ではない。その上、操作性も悪く、乗りこなすのは熟練した腕が入るのだ。

それをセーフィエルは易々と乗りこなし、遠くの空に消えていった。

取り残されたマナは地面にしゃがみ込み頭を両手で抱えた。「もぉーヤダヤダ。絶対に負けたくないわぁん！」

だが、手短な交通手段は近くにはなかった。

もう歩くしかないとなれば決意し、とりあえずサーフィエルが消えた空に向かって歩き出す。

四季の森までの道のりは遠い。

歩き出して一〇歩も満たない。マナは足を止めてしまった。辺りを見回して乗り物を探す。

ちょうど角を曲がって現れたリムジンが見えた。

マナはやるしかないと思つた。

「止まりなさい！」

マナは道路に飛び出し両手を羽ばたくように大きく広げた。

甲高いブレーキ音とタイヤの摩擦で焼ける臭いが鼻を突いた。リムジンはマナと数センチのところで止まっていた。マナは冷や汗一つ流していない。絶対に相手が止まるという自信を持つていたのだ。確認もないのに。

すぐに運転席からタキシードを着た初老の老人が降りてきた。「お怪我はありませんか？」

車の前に飛び出してきた者を気遣うなど、この街では大変珍しいことだ。使用人の教育が行き届いていることを考えると、雇い主は大そうな人格者かもしれない。

マナは初老の老人に詰め寄り、真下からかなりの上目遣いで見つめた。

「私の人生の一大事なの。四季の森に連れて行ってくださるか
しらす？」

困惑する使用人の後ろで車の窓が開く音がした。

「とりあえず乗せてやれ」

子供の声だった。にも関わらず妙に大人びている。

「畏まりました、お坊ちゃま」

使用人は後部差席のドアを開き、その中に手を向けた。

「どうぞ、お乗りください」

「ありがとう」

マナは上機嫌でリムジンの中に入り込んだ。

そこで出会った一人の少年。

年のころはマナよりも断然に上だが、それでも一二、三といったところだろうか？

短パンに白いシャツをコーディネートし、赤い蝶ネクタイまでしている。いまだき、こんなお坊ちゃんがいるなんて思いもしなかった。

お坊ちゃんは読んでいた分厚い本を座席に置き、自分と向かい側になる席を指差した。

「そっちに座るといい」

「はあい」

マナが向かいの席に座ると、お坊ちゃんが尋ねてきた。

「お嬢さんはどちらまで？」

自分みたいな女兒に『お嬢さん』なんてと思いつつも、マナは悪い気はしなかった。小さくてもレディなのだから。

「四季の森に行つて欲しいのだけれど？」

「爺、聞いていただろう？ 向かってあげたまえ」

《四季の森まで行っておりますと、開演の時間に間に合いません》

その声は備え付けのスピーカーから響いていた。

《お母上は紅葉様とオペラを観るのを楽しみにしておいでです》

お坊ちゃん　紅葉はため息をついた。

「くだらない。次のもすぐに交代になるのは目に見えてる。今回の母上が父上と一年以上持つなら仲良くすることも考えるけど、父上はすでに他の女に気が向いているよ」

複雑な家族事情があるらしい。

車はすでに走り出していた。使用人が無言になったことから、四季の森に向かっている違いない。

紅葉はマナの瞳を射るように見つめた。

「まだお嬢さんの名前を聞いていなかった」

「私の名前はマナ」

「そうかマナか。僕の名前は秋影紅葉あきかげくれはと言つ」

この街で秋影と言ったら、マナはこれしか知らなかった。

「もしかして秋影コーポレーション!？」

「父は父、僕は僕」

「すつごいお金持ちの御曹司なのねえん」

このときマナは幼いながらも色目を使っていた。

秋影コーポレーションは帝都で八〇パーセント以上のシユアを誇る医療メーカーだ。手術器具から、福祉などもやっているが、その売り上げの大半は薬品関係である。

帝都特有の妖物やウィルスを研究して作られた薬品が主で、それが生み出す経済効果は計り知れない。そのため、帝都政府の取り締まりは厳しく、妖物の肉片一つでも外に持ち出すのは大変困難である。

リムジンは順調に区を跨ぎ二ーハマ区に向かっていた。

四季の森が近づいてきたところで、紅葉がマナに質問した。

「ところで四季の森になにをしに行くんだい？」

「冬の泉で魔導具の材料を手に入れるのよおん」

「四季の森に入る気なのか、そこが迷いの森だと知って？」

「こう見えても私は魔導士なのよおん」

それは魔導法衣着ているので一目瞭然だ。

やがてリムジンは四季の森の近くに停車した。

リムジンを降りるマナに紅葉が身を乗り出して声をかける。

「無事に帰ってきたら成果を教えて欲しい」

「無事に帰ってくるに決まってるじゃない」

「僕の名刺を渡しておくよ」

電子名刺を受け取ったマナは軽く手を振って、走り去るリム

ジンの背中を見つめた。

視線を落とし、手に持った名刺を眺める。

電子情報として表示される紅葉の経歴に、博士号取得の文字が羅列していた。

四季の森に入って五分。

すでにマナは迷っていた。

舗装されたまっすぐの一本道。左右には木々が先が見えないほどに生い茂っている。

後ろを振り返ると、地平線の先まで道が続き、その先に建物などの影はない。

前を再び向いても同じ。

道の先になにも見えないのだ。

まるで永遠ループの道を通ってる気分だ。というより、おそらく永遠ループにはまってしまったのだろう。

左右の森に足を踏み入れるという選択肢も残っている。

足を止めたマナは後ろに気配を感じ、そつと振り返った。

思わずマナは目を丸くした。

「何時の間に私の後ろに？」

「それは難しい問題だわ」

そこに立っていたのはセーフィエルだった。

突然、セーフィエルは手を振り上げ、マナの頬を叩こうとした。

驚いたマナは避けるヒマもなく、そのピンタを喰らうはずだったのだが、どうしたことが、セーフィエルの手はマナの頬を通り抜けてしまったのだ。

「叩こうとしてごめんなさい。でも、百聞は一見にしかずというでしょう」

「どうということなのあん？」

「同じ場所にいるように見えるけれど、時間軸と空間軸が違うのよ。わたくしはマナよりも、ずいぶん先を歩いているの。わ

たくしはもうすぐこの一本道を出れるもの」

「前も後ろも同じ道なのに、どうやって出るの？」

セーフィエルは振り返って後ろを指差した。

「まずは後ろに進むといいわ。マナのために印を残してあげたから」

「印？」

「そう、印。道しるべ。まずは後ろに進むの、するとやがて五芒星の印が地面にあるわ。それを一步通り越し、次は前に進むの。するとまた五芒星があるから通り越して、また後ろに進むのよ。それを繰り返せば道の先に出ることが出来るわ」

「本当に？」

マナはセーフィエルを疑った。どうして、ここまで親切にしてくれるのかわからない。先ほども道具を分けてもらったが、すべて罨かもしれない。

セーフィエルはマナに答えを返せず消えた。数歩を歩いたセーフィエルが忽然として消えたのだ。別の時間軸、別の空間に移動してしまったに違いない。

少し考えたマナはセーフィエルの言ったことを実行することにした。信じたわけではないが、このままヒントもなしで歩いていても意味がないと判断したのだ。

後ろに進みはじめて一〇〇メートルほど、そこでマナは地面に描かれた五芒星を見つけた。砂の上に指で描いたような五芒星。これがきつとセーフィエルの言っていた印だろう。

その印を一步通り越すと、あつたはずの五芒星が消えた。

つまり空間軸が変わったのだ。

次にマナは来た道だったはずの道を進んだ。するとしばらくして、また五芒星の印を見つけ、同じことを繰り返した。

だいたい五回くらい同じことしただろうか？

今度はなかなか五芒星が見つからない。

もしかしたら、罫にはめられたのかもしれない。

後ろを振り向き引き返そうか考えたが、もしかしたらあと少し前に進むだけで脱出できるかもしれない。

マナは引き返さず進み続けた。

すると地平線しか見えなかった道の先に、なにか別の光景が見えてきたのだ。

「やったわぁん！」

マナはまっすぐの一本道を抜け、泉のすぐ近くまで来ることができたのだ。

すぐ先にある泉にマナは走って向かった。しかし、驚いたこととに、泉の水がからっぽなのだ。

地肌を見せる泉。

ただの巨大な穴がそこにはあった。

もしかしたら、泉はまだ先なのかもしれない。

マナは辺りを見回したが、今来た道以外に道はない。周りは森に囲まれてしまっている。

「あらぁん？」

マナの目に映るセーフィエルの姿。

木の根元にもたれて目を瞑るセーフィエルの姿。

近づいてみると、セーフィエルは静かな寝息を立てて眠っているようだった。

セーフィエルの近くには皮袋がある。

その皮袋を見たマナはそっつとセーフィエルに近づき、その袋の中から三日月の器と銀の髪飾りを取り出し、自分の持っていた物と取り替えてしまった。

自分が渡された物が偽者でも、相手の持つている物と取り替えてしまえば、大丈夫だろうとマナは考えたのだろう。

そつとセーフィエルの近くを離れたマナは背筋に悪寒を感じた。

罪悪感やセーフィエルが放ったものではない。

森の気温が下がったのだ。

赤く色づいていた森が葉を落とし、どこかで水のせせらぎが聞こえた。

急いでマナが泉に近づくと、そこには先ほどまでなかった水があった。

マナは急いで手に持っていた三日月の器で泉の水を掬おうとした。だが、いくら器の中に水を入れようとしても、蒸発して消えてしまうのだ。

「駄目よマナ」

後ろで声が聞こえ、マナは驚いて振り向いた。

「セーフィエルちゃん!？」

「わたくしが持っていた道具と取り替えたでしょう。全て知っているわ」

「うっ……」

「それは偽物なの。あなたを試したのよ」

なんとセーフィエルは、マナが自分の道具と取り替えることを見越していたのだ。

セーフィエルは自分が持っている三日月の器で、冬の泉の水を汲み取り、それを銀の髪飾りで梳いて清めると、持っていた子瓶に移し変えてマナに渡した。

「これはマナの分」

「えっ？」

「差し上げるわ」

「どうして？」

セーフィエルは答えなかった。

換わりに道を指差し、

「帰り道は楽よ。トラップはなにもないから、道を進めばすぐに出口に出れるわ」

「どうして私に親切にしてくれるの？」

やはりセーフィエルは答えず、先に道に行ってしまった。

残されたマナはセーフィエルから受け取った子瓶を眺め、これが本物なのか疑った。

マナは無事に冬の泉で材料を調達し、手こずったが加工してアミュレットを作ることに成功した。

出来立てをすぐにファウストの元に届けると、その部屋にはすでにセーフィエルがいた。セーフィエルに遅れを取ってしまった

った。しかし、肝心なのはアミュレットの出来具合だ。

マナとセーフィエルのアミュレットは、ネックレスなどの装飾品に加工されていないため、楕円の宝石に見える。

蒼い光を放つ塊。二人の作ったものは、見た目ではまったく同じに見える。

ファウストは二人からアミュレットを受け取り、両手に分けて握り締めた。

「さて、今から私が二つのアミュレットに、同じ力を同時に加える。先に壊れた物を負けとする。いいな？」

問われた二人は頷いて見せた。すると、ファウストを取り巻いていた気が変わった。

物理的な力ではなく、魔導をファウストの両手に集中される。魔導による負荷を徐々に加えていき、先に耐えられなくなっ

たアミュレットが壊れる。

ピキッとひび割れる音がした。

どちらのアミュレットか？

マナの物は右手、セーフィエルの物は左手。

再びひび割れる音がした。

「勝者が決まった」

ニヤリと嗤い、ファウストが両手を開いて見せた。割れて砕けていたのは、左手に握られていた物。

「やったわあん、私の勝ちよ！」

喜ぶマナはファウストから自分のアミュレットを奪い取り、ペットを愛できるように頬擦りする。

「おほほほ、やっぱり私には魔導具を作る才能もあるのね！」
上機嫌のマナはスキップをしながら部屋を出て行ってしまっ
た。ファウスト見返すことも忘れ、そのファウストがしゃべる
前にだ。

長い前髪を掻き上げたファウスは横目でセーフィエルの瞳を
見つめた。

「イカサマにも気づかぬとは、マナの修行は基礎からだな」

「さすがはお師匠様。お気づきになられていたのですか？」

意味深なことを言うセーフィエルにファウスは頷いた。

「マナが持ってきた物は、おまえが作った物だな？」

「はい、その通りです」

「魔導具には多少なりとも、製作者の気が混じる。おまえが持
ってきた物がマナの作ったものだな？」

「マナが目を離した隙に取り替えました」

実は、マナが自分は作ったと思いついでいるものが、セーフ
ィエルの作ったアミュレットだったのだ。

「どうしてそんな真似をした？」

「彼女は虚栄を實力に、傲慢さが彼女のエネルギーソースです。
自身さえあれば、彼女の魔導は磨きがかかります」

「ふむ、だがが私はマナの祖父から傲慢さを治して欲しいと言
われたのだがな」

「今はまだ早いと思います。落ち込んだり、愚かさを知り、そ
れを力に変える精神はまだマナに培われていません。今、彼女
は挫折したら、立ち直れなくなりますわ」

ファウストはしばらく黙ってしまった。

なんて恐ろしい娘を弟子にしてしまったのだろうと思った。

本当に見た目の年齢だけを、この娘は重ねているのだろうか？

幼い女兒の思考とは到底思えない。

しばらく黙っていたファウストが重い口を開いた。

「どうして私の弟子になった？」

「学ぶことがあるからですわ」

本当にそうなのだろうか？

教えられずとも、セーフィエルは学ぶ力を持っているように
思える。

セーフィエルは三日月の口で微笑んだ。

「まだお師匠様は、わたくしよりも格が上ですもの」

「おまえは私を越えるか？」

「いつか必ず」

ニッコリと微笑んだセーフィエルは一礼して、この部屋を静かに出て行った。

氷の中のアリス

学校をサボった金髪の少女は自宅に帰って姉を呼んだ。

「姉貴！」

部屋の内から出てくる若い女性。顔立ちは少し幼さが残るが、どこか大人の色気を纏っている。着ているナイトドレスのせいかもしれない。当時一六歳のセーフィエルだった。

セーラー服を着た金髪の少女とセーフィエルの黒髪は似ても似つかない。その雰囲気もセーフィエルが落ち着いているのにたいして、金髪の少女からは血気が出ていた。

金髪少女の蒼眼がセーフィエルの黒瞳を威嚇するように睨んだ。

「姉貴、金貸して」

「駄目よ」

「三万くらいでいいから」

「なにに使うの？」

「一万でいいから」

「なにに使うか言いなさい」

「もういい」

背を向ける少女の腕をセーフィエルが掴んだ。

「待ちなさいアリス！」

「なァーにー？」

真摯な瞳でセーフィエルはアリスを見つめていた。

「学校を行きなさいとはもう言い飽きてしまったわ。けれど、危ないことはよしてね。あなたはたったひとりの妹なのだから」

「妹なんて馬鹿らしい。どーせ姉貴とアタシ血が繋がってないんだから！」

「なんてこと言うの！」

セーフィエルの平手が上げられ、バシンとアリスの頬に紅潮をつくった。

「なんでアタシが叩かれなきゃいけないわけ！」

「血が繋がっていないなんて二度といわないで頂戴」

「本当のこと言っただけにがイケナイわけ？」

二人の髪色はあまりにも違いすぎた。方や金髪、方や黒髪、それが二人の地毛だった。

そして、瞳の色も違う。

光を全て吸い込むセーフィエルの闇色よりも濃い黒瞳。

どこか光を帯びた神聖なまでに美しく蒼く深みのある蒼瞳。

姉妹としては、似ても似つかない存在だった。

死んだ両親も黒髪、黒瞳だった。だから、常々アリスは自分はこの家の子供じゃないと幼い頃から思っていたのだ。

「アタシの本当のパパとママはどこにいるんだろ」

「何度言わせたら気が済むの。今は亡きお父様もお母様も……わたくしも、あなたと本当に血が繋がっているのよ」

アリスが怒りを滲ませながら反発する。

「……騙されない。あの話からして胡散臭い。あの人はアタシを妊娠中に魔導被爆したから、アタシみたいな子が生まれたって」

「そうよ、それが原因でお母様はあなたを生んですぐに亡くなったのよ」

「その話がホントだとしても、アタシはどっちにしたって出来損ないジャン」

「あなたは生まれながらにしてわたくしよりも魔導の才能があったわ。そのまま魔導の鍛錬を積みめば、一族最高の魔導士になったのに……」

「そんなの○○億詰まれたってなりたくない！」

魔導実験によって魔導被爆したアリスの母は、当時アリスを身ごもっていたために、それが胎児に大きな影響を及ぼしてしまった。生まれたアリスは体内に大量の魔導力を秘め、魔導と同化している身体は魔導を全てすんなりと受け入れる体質になっていた。アリスの瞳の蒼は魔導の蒼なのだ。

セーフィエルは悲しそうにアリスを見つめていた。

「どうして信じてくれないの？」

「そんな顔でアタシのこと見ないで……だって嘘は嘘だから信じられない」

「だったらDNA検査をすればわかることだわ」

「偽造するつもりでしょ、信じないんだから」

本当は怖かったのだ。

本当に血が繋がっていないことを証明されてしまうのが怖か

った。目の前のいるのが本当の姉でないことがわかるのが怖かった。そしたら本当に独りになってしまう。

アリスはセーフィエルに背を向けた。

「金貸してくれないならいーよ！」

アリスは走って玄関を飛び出して言ってしまった。

こうしていつも物別れになってしまう。

物心つく前のアリスを思い出し、セーフィエルはとても悲しくなる。

あんなに無邪気で笑顔の可愛い子供だったのに。

窃盗、殴り合いの喧嘩、酒、煙草、ドラッグ。

アリスの悪い噂や、警察署にアリスを向かいに行くたびに、セーフィエルの心は闇に蝕まれた。

今のアリスに怒りを覚えることはない。

ただ悲しさが雪のように積もるだけだった。

どこまでも退廃していく妹を見ていられなかった。

しかし、アリスはいつも逃げてしまうのだ。

もっとアリスにきつく接することもできたが、セーフィエルはアリスに嫌われなくなかった。もう十分嫌われているが、どこか遠い場所に姿を隠してしまうのが怖かった。

セーフィエルにはアリスしかいなかったのだ。

家を飛び出したアリスはケータイでオトコ友達を呼び出した。すぐにやってきた友達はバイクに乗ってアリスの前に姿を見せた。アリスと同年の一三歳で無免許だ。

バイクの後ろに跨ったアリスは指で前を差し命令する。

「どっか遊びに連れてって」

「ゲーセン行こうと思ってたんだよ」

「じゃ、ゲーセンにしゅっぱーっ！」

走り出したバイクは風を切り、すぐに道路の制限速度を越えた。道路標識なんて知らないガキが乗っているのだ。速度表示の標識など、記号としか見ていない。

グングンとスピード上げ、二人を乗せたバイクは次々と車を抜かしていく。前を走る車を抜くことがゲーム感覚なのだ。

だが、そんなゲームもすぐに飽きる。

最初に飽きたのはアリスだ。

「ゲーセンまだあ？」

「ほら、すぐそこだよ」

バイクは急ブレーキをかけて停車した。思わずアリスは前に乗っている友達に力いっぱい抱きついてしまった。

「もお、後ろにアタシ乗ってたから氣イつけてよ」

「俺はおまえの胸の感触感じて得したけどな」

「もしかしてわざとやったの？」

「知らねえーよ」

「ユースケのヘンタイ！」

笑いながら二人はバイクを降りると、さっそく目の前のゲーセンに入った。

店内を見回してアリスは客を見た。

クレインゲームで遊んでる若者、歩きながらしゃべっている

カップル、背広を着たオジサンもいる。

アリスはクレインゲームに熱中している若者に目を付けた。理由はアリスの財布が知っている。

アリスの財布はゲーセンでは使えない小銭しか入ってなかったのだ。ほぼすっからかんに近い状態だった。

クレインゲームの台を見ているフリをして、アリスはクレインゲームに神経を注いでいる若者の後ろを通った。そのときだった、歩きを止めないままアリスの手が動き、ズボンの後ろポケットに入っていた財布を抜き取ったのだ。

アリスは何気ない顔をして歩き、後ろで財布がないと叫ぶ男の声を聞いて足を速めた。

格ゲーをするユースケの首根っこをアリスは掴み、無理やりユースケを立てさせて歩かせた。

「財布すつたんだけど、すぐに気づかれちゃった」

「もつとうまくやれよな」

「顔は見られてないし、すぐにクレインゲームの影に隠れたから後姿も見られてないはハズ。でもさっそと別の場所移動しよーよ」

「オツケー。さっさと出ようぜ」

二人は何気ない顔でゲーセンの外に出て、すぐにバイクに跨った。

エンジンを掛けて走り出す前、ユースケが言う。

「俺がやってたゲーム一回分、途中だったんだからおまえに料金貸しだぞ」

「すぐにこれで何倍にして返すから」

アリスはすったばかりの財布を叩いて笑顔を浮かべた。それを合図にバイクは走り出したのだった。

ゲーセンの中ではやっと店員が呼ばれたころだったが、アリスたちにはもう無関係の人間だ。街で偶然会っても顔すら見ず知らずの関係だ。

盗んだ金の最初の使い道は腹ごしらえだった。

アリスの指示でバイクはファーストフード店に向かっていた。ついたファーストフード店はバーガーショップだった。

「俺てりやきセットな」

ユースケに頼まれ、アリスはレジの列に並んだ。

自分はポテトのLとオレンジジュースを頼み、ユースケのてりやきセットを持って店内を見渡した。

奥の席でユースケが軽く手を振っている。

席についたアリスはポテトを摘み、飲み物を口に運んだ。

「てりやきとかよく食えるね」

アリスがてりやきに視線を落として言うと、ユースケがそれを口いっぱい頬張った。

「てりやきが一番ウマイんだよ」

「アタシ、マヨネーズだめー」

「そうだけっけ？」

「ポテトが一番美味しいよ」

「でもそれって冷凍だろ？」

「美味しければなんでもいいの」

何気ない会話をしながら食事を進めていると、アリスたちの横を他校の制服を着た男子生徒が通りかかった。

上目遣いをするアリスと男子生徒の視線が合った。

「ヤバイ、あまり遣いたくなかった相手だった。」

以前から因縁のある他校の生徒　しかも高校生だ。名前を武山といつて、こいつの上には暴力団がいると噂されている。

武山の手が伸び、アリスの飲んでいたカップをわざと倒した。

「悪いな、手が滑った」

倒れたカップはふたがしまっていたために、中身がこぼれることはなく、それを見たアリスは武山を小ばかにして笑った。

「ダッサー、中身こぼれてないし」

「なんだと！」

メンツを切る武山に対抗して、席を立ったアリスも相手の眼を睨む。

その間に割って入ったのがユースケだった。

「オイオイ、やるなら外でやろう　ゼツ！」

語尾と同時にユースケのフックパンチが武山の頬を抉り、倒れた武山が後ろの席に激突して乗っていた食べ物やジュースをぶちまけた。

恥をかかされた武山の眼は完全にイっていた。ドラッグでもヤツてるんじゃないかと思うほどだ。

「テメエツ！」

勢いをつけて飛び起きた武山の拳がユースケの顔面に入った。鼻を押さえてよろめくユースケ。鼻から手を離すと、大量の

血が手に付着していた。

仲間が殴られたのを見て激怒したアリスは、近くにあった食べ物の乗ったままのトレイを手にとって、思いつきり武山の後頭部に叩き付けた。

前のめりになる武山にアリスは続けさまに踏みつけるような蹴りを喰らわせた。

気を失ったらしい武山を尻目に、アリスは紙ナプキンでユースケの鼻血をふき取る。

「大ジョウブ？」

「わかんね、鼻曲がったかも」

騒ぎを聞きつけて店員がやって来た。

「手を上げて大人しくしなさい！」

その手には拳銃が握られていた。店員の拳銃所持はこの街では基本だ。

「アタシたちなにもやってないし、そいつが最初に吹っ掛けてきたんだよ」

アリスがそいつと指さす先には、床に倒れてわなわなと震える武山の姿があった。ゆっくりと立ち上がるうとしている。すぐさま店員が制止させる。

「動くな、動くと撃つぞ！」

それでも武山は起き上がり、突然、ユースケに抱きつくように押ししかかってきたのだ。

ユースケが眼を剥いた。

アリスはなにが起きたのかわからなかった。

いきなりユースケが笑い出した。

「ははは、やっべー、刺されちゃった」

ユースケの腹に突き刺さるナイフ。血が滲み出し、腹を押さえるユースケの手にはべつとりと血液が付着していた。

まだナイフを握っている武山が、決るようにナイフをねじ回して深く突き入れた。

ユースケは眼を開けたまま動かなくなつた。

出血性ショック死だつた。

人が目の前で刺された。

それはアリスがはじめて眼にする死の瞬間だつた。

恐怖なんて今まで感じたことがなかった。それが今、死を目の当たりにしてアリスは恐怖という感情を覚えたのだ。

怖くなつてアリスは逃げ出した。

制止する声もアリスには届かない。

自分がどこを走っているのかわからない。

自分と現実が切り離されたような気分だつた。

追ってくる奴らからアリスは必死で逃げた。本当になにかが追ってきているかはわからない。ただ、見えない追跡者から逃げた。

前々の道路でバイクに乗ろうとしている人を発見した。そのバイクを自分でも気づかないうちにアリスは盗んでいた。背後から殴りつけて引きずり落としたような気がする。

アリスはバイクなんて運転したことなかったが、友人の見よう見まねで運転した。

はじめてだったが、意外にちよろいもんだと思った。

でも、奴らがまだ追ってきているような気がする。

恐ろしかった。

だから逃げたかった。

姉の顔を見たかった。

アクセルを回し、スピードをあげた矢先。バイクのバランスが崩され、ハンドルが持つていかれそうになった。

必死でアリスはバイクを止めようとしたが、目の前には巨大な影が迫っていたのだ。

悲鳴があがった。

次の瞬間、アリスは宙に大きく飛ばされ、バイクはトラックの荷台の下に巻き込まれていた。

トラックの荷台に激突したのだ。

アリスは冷静に思った。

奴らに捕まってしまったのだと。

逃げ切れなかった。

鈍い音とともに、頭蓋骨は地面に叩きつけられた。

金色の流れる髪から血が海のように広がっていく。

蒼い瞳は涙を流していた。

アリスは死んだ。

すぐにアリスは救急車で運ばれたが、搬送される時にはすでに心肺停止状態だった。

奇跡的に蘇生しても、頭を激しく打ち付けているために、脳

が損傷を受けていないとは言いつれぬ。

そして、やはりアリスは再び目を覚ますことはなかった。

悲しみに暮れたセーフィエルはアリスの遺体を引き取った。

アリスを火葬することも埋葬することも拒み、セーフィエルは自宅の実験室でアリスを液体に沈めた。安らかにアリスが眠れるように。

世界でただ二人の姉妹。

両親はとうの昔に死んだ。

残されたたったひとりの肉親だった。

ひとりになったことをセーフィエルは決して認めない。

セーフィエルはすでに決意していたのだ。

今はできなくとも、いつか必ず再び妹をこの手で抱くことを。

アリスを液体に沈め、セーフィエルは装置のスイッチを押した。

「いつかわたしがアリスを蘇らせてあげるから」

アリスの入られた装置に静かに静かに霜が降りはじめた。

蒼く冷たい氷の中に眠らされるアリス。

その眠りは表情はとて安らかだった。

さあ、眼を覚醒して、アリス。

優しい声に導かれ、アリスは蒼い眼を開いた。

「はじめまして主人セーフィエル」

氷の中のアリス 完

ダーク・ファントム

ベレー帽を被り軍服で身を絞めた凜々しい女が、腰から抜いた大剣を白い女の首元に突きつけた。

「なぜ貴様がここにいるのだ！」

剣を突きつけたのはワルキューレの最高責任者アイン。

そして、剣を突きつけられたのは夜魔の魔女セーフィエル。

「昔話をしようと思つて……かしら？」

含み笑いを浮かべながらセーフィエルは静かに言った。

ここは帝都政府の中枢である夢殿の敷地内。ワルキューレたちが異変を感じたときには遅く、すでにセーフィエルはヴァルハラ宮殿の中まで侵入していた。

部屋の奥からズーベンを引き連れて、小柄な少女が姿を見せた。

「剣を納めていいよアイン」

それは女帝又ルの言葉だった。

「ですが！」

アインは猛烈に反対する。

しかし、女帝は首を横に振った。

「彼女は昔話をしに来たと言つてるんだ、そこに剣は必要ないよ」

二度まで言わせては剣を引くしかあるまい。

円卓の席に女帝ヌルが着いた。

「セーフィエルも好きなどころに座つてよ」

「お言葉に甘えて」

セーフィエルが座つた席は、科学顧問であるゼクスゼクスの席。

それを見た女帝は楽しそうに笑つた。

「やっぱりそこなんだ。だってもともとそこつてキミの席だしね」

「今のワルキューレが組織される遙か以前のお話ですわ」

「ついこないだの話だけどね」

「人間のわたくしに取つては想像もできないほど遙か昔のお話ですわ」

「人間ねえ」

納得しかねる言いようだつた。

円卓にはアインとズイーベンの席もあるが、彼女たちは座ろつともせず警戒を強めている。

セーフィエルの目的が未だ不明。

女帝は身を乗り出した。

「いろんなところにちよくちよく顔出してるらしいよね。目的もハッキリしないし、キミがどのセーフィエルかもハッキリしてない。キミはだれ？」

「今目の前にいるわたくしは八割ほどが貴女方の知るセーフィエル。残り二割が人間としてのセーフィエルかしら」

「らしいよね。調べさてビックリしたよ。転生したつてこといいわけ？」

「それでよろしいわ」

「生まれ変わってまでアタシらに復讐したいってこと？」

「それはどうかしら」

セーフィエルは静かに笑った。

復讐される心当たり。

なぜセーフィエルは転生したのか？

転生すなわち、その前に訪れた死の原因は？

女帝が語る。

「はぐらかさなくてもいいよ。アタシのこと恨んでるんでしょ、キミのことを殺したのはアタシなんだし」

セーフィエルを殺したのは女帝又ル。

かつで円卓を共にした仲間ともいっべき存在をなぜ殺した？
月のような笑みをセーフィエルは浮かべた。

「殺されたことなど些細な問題ですわ」

己が殺されたことを些細と言い切る。

女帝はすでに察していた。

「だろうね。自分の命をかけてまでキミは守ろうとした。もしかして救いだそうなんて考えてるんじゃないだろうね？」

「ええ、何があるうと娘は救い出しますわ」

これを聞いていたアインとズイーベンにも動揺が走った。

あの日、なにがあつたのは二人は知っている。

蘇る光景。

裁きの門の完全発動と道連れにされた仲間の姿。それはやむを得ない犠牲だった。しかし、セーフィエルはそれを認め

なかった。

そして殺された。

アインが眺める円卓の席は 永久欠番ノイン。

女帝は椅子に深く腰掛け、天井を仰ぎ見た。

「いくつかの予想はしていたさ。アタシたちを殺そうとする可能性。ノインを救い出そうとする可能性。でもね、絶対にやらせないよ！」

女帝から霸気が放たれた。

嗤うセーフィエル。

「うふふふ、例え御君が我らの祖でろうとも、義体で妾に勝てると思いかえ？」

口調が違う。

それよりも『我らの祖』とは？

アインが大剣を抜いた。

「この場所では貴様に勝ち目がないことを貴様自身がよく知っている筈だ！」

薙ぎ払われた大剣を躲したセーフィエル。

「たしかに 夢殿 で魔力が封じられるように設計したのはこの妾。肉弾戦を得意とするうぬが有利な場所であることもたしか。しかし設計者である妾が抜かるとお思いかえ？」

急に明かりが落ちた。

夢殿 のシステムがダウンしたのだ。このタイミングと言うことは、セーフィエルの仕業と言うことは明らか。

女帝が叫ぶ。

「奴がいる！」

ズイーベンも叫ぶ。

「まさか ゆらめき が!? そんな筈が…… ヨムルンガルド

結界 は何の反応も！」

セーフィエルの気配が消えている。

代わりにこの場を満たした気配は暗きもの。

「元気にしてた姉上？」

それは女帝又ルとまったく同じ声だった。

ゆらめく影。そこに本体の姿はない。あるのは少女の“影”

のみ。

妹の“影”と対面した女帝は笑った。

「まあ睡眠時間はたっぷり取ってるよ」

それは皮肉だった。

“影”はうんざりしたように両手を軽く上げて、手のひらを上に向けた。

「困るんだよね。姉上が起きてくれなきゃ、アタシも起きられないんだから。この敷地のどこで寝てるんでしょ本体が？」

この場から移動しようとする“影”。狙いは女帝の本体を発見することだ。

騒ぎを駆けつけワルキューレのほかのメンバーも集まってきていた。

アイン、ファイア、フィンフ、ズイーベン。欠番を含む九人中、四人もの戦乙女がこの場に集結した。

素早く動いたアインが出入り口の一つを塞いだ。

「案ずるな、相手はダーク・ファントム。ただの幻影でしかない。しかし、抜かるな。幻影と言えぬル様の片割れだ！」

ほかのメンバーも道を塞いだ。

防御はワルキューレに任せ、女帝自らダーク・ファントムに攻撃を仕掛ける。

「アタシが添い寝してあげてるんだから、アンタも大人しく寝ててよね！」

女帝はホーリーロッドを振り下げた。

影であるダーク・ファントムは、捕らえどころがないようにゆらめきながら躲した。

「いつしよに寝てくれなんて頼んでないけど！」

逃げに徹するダーク・ファントムは女帝の横を擦り抜け、フイーアの元へと向かっていた。

帝都政府のスポークスマンであるフイーアは重い溜め息を吐いた。

「やはり狙うなら戦闘力のないわたくしですわよね」

フイーアの武器はホーリーチェーン。自由自在に動く鎖だ。

縦横無尽に動き回る鎖を縫うようにダーク・ファントムはいつも簡単に躲す。

フイーアの援護にワルキューレ最速のフუნフがホーリースピアを構えて翔る。

さらにズイーベンは持ち場を守りながら、ホーリースタッフから光の攻撃魔法を放った。

光の玉がダーク・ファントムの腹を打ち抜いた。

影に空いた風穴が元に戻らない。

「やっぱり影じゃ分が悪いなア。光の武器の攻撃をちよつと喰らっただけでこれだもんね」

その場に立ち尽くすダーク・ファントムに女帝が飛び掛かる。「なら大人しく消えちゃいな。光よ！」

ホーリーロッドが激しい閃光を放ち、ダーク・ファントムに直撃した。

ダーク・ファントムが呟く。

「闇は光に弱い。けど闇はいくら消したってなくならないよ。だって世界はもともと闇に包

まれてるんだから」

光によって消えゆく影。

そして、影は完全に消失した。

だが、微かに残った声の幻影が響き渡る。

「輝き続けなきやいけない光に比べて闇は楽なもんさ。光が力尽きるのをじつと待っていればいいんだから」

言い残して気配は完全に消えた。

戦いを終えた女帝は円卓に腰掛けた。

「あの子も譲らないよね。アタシも譲る気なんてないけどさ。だからずつと戦い続けてるんだけど」

そこにアインが言う。

「しかし、最後は必ず我々が勝利すると私は信じております」
揺るぎない信念だったが、すぐにそれは女帝によって否定された。

「昔はアタシもそれに躍起だったけど、今じゃどうなんだろーって思うよね。だって未だに勝負はドローのまま。今はかろうじてアタシが優位になってるけどさ。そもそもさ、勝負なんてつくはずないんだよ。だって双子で片方が消滅したら、もう片方も消滅するんだし。だったらなにをもつて勝利とするの？」

だれもその問いには答えなかった。

女帝は溜め息をついた。

「今度妹に会ったら聞いてみよ」

けれど、すぐに首を横に振って、

「やめた。きつと妹もアタシと同じ考えだから」

この姉妹は表裏一体。

答えは初めからわかっていた。

陽が落ちた。

湖の畔で月を詠むセーフィエルが佇んでいた。

女帝との対面を果たし終えたセーフィエルは結果として何を残したのか？

彼女は何のためにあの場所に赴いたのか？

一つ断言したことがある。

何があろうと娘は救い出しますわ。

そのためにセーフィエルは何をして、何をこれからする？

森が不気味なほど静まり返った。

風もない。

だがゆらめいている。

現れた少女の影　　ダーク・ファントム。

「失敗しちゃったよ」

「それは残念なことですわね」

「せっかくキミに道を切り開いてもらったのにな。きつと防衛が強化されるよ」

帝都政府の中樞　夢殿　に侵入を果たしたダーク・ファントム。その手引きをしたのはほかならぬセーフィエルだった。

ダーク・ファントムは無警戒でセーフィエルの目の前までやって来た。

「それにしても、まさかキミがアタシの味方をするとはね。前にここでキミに会ったとき、あれは明らかにアタシを倒そうと画策してるように思えたんだけどね」

神刀月詠の件だ。

「はじめからわたくしは誰の味方でもありませんわ」

「それにしても向う側に肩入れしていたけど。だってキミは元々アタシの眷属の筈なのに。しかも　裁きの門　なんて厄介な物まで創ってアタシを封じ込めたんだから」

「わたくしを怨んでいらっしやる？」

「そーゆーのには興味ないよ。それにさ、アタシを封じ込めた罰をキミはすでに十分受けているでしょ？」

揺れる影が笑った。

セーフィエルの目つきが変わる。凍てつく瞳。その瞳で見つめられた世界はダーク・ファントムを残して戦慄した。

ダーク・ファントムはわざわざセーフィエルに近づき、その

瞳を眼前から覗き込んだ。

「キミとアタシは目的こそ違えど、課程という点では一致してる。キミの目的は娘のノイン　いやシオンを取り戻すことだよね。彼女は今アタシを縛る枷となりいつしよに幽閉されてる。つまりアタシが脱獄すれば、彼女もこの世界に舞い戻るって寸法だよね？」

「それが半分の目的」

「半分？」

「元々のセーフィエルの目的ですわ」

「転生後のキミの目的もあるってことかな？」

「そうね」

「それはどんな？」

「どんなかしら、うふふ」

はぐらかすセーフィエル。

おそらく人間であるセーフィエルの目的は、アリスに関わることだろう。

「ま、いつか」

あっさりとダーク・ファントムは追求せずに引いた。

ダーク・ファントムは一度背を向けてセーフィエルから離れ、かかとで体を反転させて再び顔を向けた。

「ところでさ、どうやってアタシを復活させてくれるのかな？」

「まずは　裁きの門　を開かないことにはどうにもならないですわね。さらに　裁きの門　を開く前にもいくつかの結界をど

うにかしなればならないわ」

「最大の結界は ヨムルンガルド結界 だよな？ あれを考案したのもキミだ。実際に形にしたのはズイーベンだろうけど」

「すでに ヨムルンガルド結界 の問題は大方片付いていますわ。あなたもいくつか片付けてくれていたから、わたくしは最後の仕上げをしただけですもの」

ヨムルンガルド結界 に大きな変動をもたらした事件は、帝都タワーの破壊と神威神社の全壊だろう。

「最後の仕上げっていうのはなに？」

「蛇に毒を盛りましたの。外から飲ませたのではなく、体の中から毒を飲んでもらったの」

「どうやったの？」

「どうやったのかしら？」

静かにセーフィエルは笑った。

ここでもダーク・ファントムは特に追求しない。

「ふん。じゃあ次はどうするの？」

「裁きの門 を召喚いたしますわ」

「あれを召喚できるのはあつち側の奴らだよな？」

「今は女帝ヌル以下、ワルキューレに名を連ねる者のみ」

「そして本当の意味で開くことができるのは、アタシの眷属の一部。今じゃキミだけでしょ？」

「いいえ、わたくし以下の血を引く者ですわ」

「いつの間にかそういう仕様にしたんだね。それにしても元々あれはアタシと姉上で考案して使っていた物なのに、まさか自

分が閉じ込められるハメになるなんて、酷い皮肉だよまったく。しかもアタシを閉じ込めるために、わざわざ深い階層まで新たに創ったりなんかしてね。嫌がらせにもほどがあるよ」

裁きの門 の奥深く、さらに深い階層にある タルタロスに 闇の子 は幽閉されている。

「あなた方双子は自分たちが墮とされた時の再現を自分たちに刃向かう者にした。でもあなたにも罰が回ってきたようですね」

人間の歴史など及ばないほど昔、まだ 光の子 と 闇の子 の戦いがはじまる前、裁きの門 はセーフィエルによって設計され創られた。

「だからって二度も墮とされることはないと思うけど。だったらさ、いつかアレも墮とされることになるのかい？」

「いいえ、子は親を超えることがあっても、創造物は創造主を超えられないというのがたくしの持論ですわ」

「そーゆーのは納得できないからアタシらは叛逆したんだけどね。たしかに結果として今のところ、キミの言うとおりになっ
てしまってるけどさ。でもアタシは 裁きの門 を出て、姉上との決着をつけたら、絶対に樂園に戻って見せるよ」

「決着がつけばいいけれど」

「……………」

なぜかダーク・ファントムは押し黙った。決着をつけると言
ったばかりなのに。

何事もなかったようにダーク・ファントムは口を開く。

「まあいいさ、今は 裁きの門 から出るのが先決だからね。姉上とワルキューレだけしか開けない門をどうやって開かせるつもりなの？」

「どうやるのかしらね？」

またはぐらかした。

「またそれか。でもちゃんと開くならいいさ、気楽に待ってるから」

「開く手はずは整えていますわ。問題は最後の結界をどう解くかよ？」

「アタシを閉じ込めてる 枢 かあ。中からはまったく壊せないし、扉を開いた後、悠長に外から壊してるヒマもなさそうだよねえ。まずは 枢 を別の場所に運んで隠すのが先決かな」

「あなたがそうしたいのならどうぞ。わたくしの目的はそこまですらないですもの」

「そうだね、キミの目的は タルタロスの門 を開いた時点で達成されるだろうから。あとはアタシが自分でどうにかするさ」

「わたくしはあなたの都合には合わせませんわよ。準備があるならお早めに、 裁きの門 はもうすぐ開きますから」

「じゃあ忠告どおりに急ぐことにするよ」

ダーク・ファントムは瞬く間に消えた。

静かな夜。

水面の月を詠んだセーフィエルは静かに微笑んだ。

解呪

「依頼に来た」

短く紅葉はハルナに告げた。

並々ならぬ気配を感じたハルナは、慌てて紅葉を家の中に通した。

「時雨さんなら二階のいつも部屋にいます」

「お邪魔する」

おじぎをして紅葉は二階へ上がった。

三月も下旬だというのに時雨はこたつの中に潜っていた。

「依頼に来た」

再び短く紅葉は告げた。

時雨はこたつに潜り直した。

「別の人に頼んでよ。夏が来るまで仕事はしたくないんだ」

「弟が仮死状態になった」

その言葉を聞いて慌てて時雨はこたつから飛び出した。

「なんだって!？」

驚きを隠せない。

紅葉の弟は仮面の医師 蛭ムシ。

“大蛇”の呪いを背負ってしまった者。

すなわち ヨムルンガルド結界 と繋がる者。

紅葉は立ったまま話をする。

「すでに原因究明には多くの人間が動いていた」

「いた？」

「帝都病院の威信にかけても、院長である蛭を直そうと躍りになっていた。我が秋影コーポレーションも全勢力をかけて動いていた。医師、科学者、魔導師、そしてTSにも依頼済みだった。だが、帝都政府が乗り出してきたことにより、すべての情報は隠蔽され、我々の介入はすべて規制されることになったのだ」

「ボクはなにをすればいい？」

「原因そのものについては予測はついていますが、それを多くの者に口外するわけにはいかない。君には神威神社の神主であるカマイコキト神威雪兎という人物を捜し出して欲しい」

「あの神社の神主は命ミコトじゃないの？」

「命には行方不明の兄がいるのだ」

記憶を失った時雨がこの場所に辿り着いたときには、すでに雪兎はいなくなっていた。

雪兎がこの街からいなくなったあと、紅葉は彼に会っている。その時点でまでは対外的には行方不明になっていたが、紅葉は雪兎の居場所を知っていたことになる。それを今になって捜索依頼をするということは事情が変わったということだ。

「手がかりは？」

時雨が尋ねると紅葉は首を横に振った。

「なにもない。なぜ行方不明になったのか私は知らない」

「明らかな嘘だった。つまり時雨に開示できる情報はないとい

うことだ。

人捜しをするには情報量が少なすぎる。

わかっている情報は雪兎が神威神社の神主であることと、その妹が命であること。そこから新たな情報が見つからなくては、行き詰まることになるだろう。

「ほかにはなにかある？」

さらに時雨は尋ねたが、やはり同じように紅葉は首を横に振った。

「今のところはない。新たな情報があれば君に伝える。では、よろしく頼んだ」

有無を言わせぬまま紅葉は急いでこの場から立ち去ってしまった。無礼とも取れるが、切迫した状況とも取れる。

時雨はすぐに冬物のコートを羽織り出掛けた。

目的地は神威神社。

ハルナに店を任せて、そのまま商店街を抜ける。

神威神社はその先にある。あると言ってもまだそこは跡地だ。長らく命はホテル住まいを強いられていたが、このほど仮設住宅を神社の建設現場近くに建て、そこで暮らしていた。

ホテルよりも明らかに不自由な暮らしたが、それでも命はこの場所で暮らしている。

命は無事だった境内の掃除をしていた。竹箒を掃く手を休め、時雨に顔を向ける。

「久しぶりじゃの」

「やあ、元気にしてた？」

「今はもうすっかり元気じゃ」

「うん、それはよかった」

言い終えた時雨の足下が揺れた。

世界が回転する。

突然、時雨は意識が途切れそうになり倒れてしまったのだ。

命は倒れそうになった時雨を抱きかかえた。

「大丈夫かえ？」

「……ちよつと、最近調子が悪くて」

「おぬしの躰……はじめて触るが、異様に冷たいな……まるで死びとのようにじゃ」

そう言った命の瞳も凍り付いていた。

時雨は微笑んで見せた。

「冷え性なんだよ」

「粗末な仮住まいじゃが、休んで行くかえ？ 美味しい茶を淹れてやるう」

「また今度にするよ。それよりも用事があるんだけど？」

「なんじゃ？」

「お兄さんのことなんだけど？」

その言葉は命の表情を変えた。真剣な表情というか、どこか切迫したような怖い表情だ。

「わらわの兄のことかえ？」

「そうだよ。人に頼まれて探してるんだ」

「どのような用件で？」

「言っただいのか。政府が規制に乗り出してるとみて、ボ

クが動いてるのも本当はよくないんじゃないかなあ。でも人の命がかかっているんだ」

少し命は考えているようだった、口を閉じて数秒、動かずに石畳を見つめている。

そして、顔を上げて時雨を見定めた。

「兄上はこの世にはおらん」

「え!？」

驚いた時雨は雪兔が死んでいると思ったのだ。それを察して命は言い直す。

「死んではおらんぞ。ただ別の世界におる……らしい。わらわにも正確なことまではわからぬのだ」

時雨は安堵した。もしも死んでいたら、ここで依頼は終わってしまふ。

「どうやったら会えるの?」

「それもわからぬ。しかし、セーフィエルという女なら知っておるだろう」

「セーフィエル!？」

時雨も驚いたが、それを見た命も少し驚いた。

「知っておるのか?」

「別に知ってるってほどじゃないんだけど、マナと姉妹弟子らしいよ」

「そうか、ならばあとはマナを当たってくれ。わらわが力になれることは、もうないじゃろう」

「ありがとう。じゃあ、行くね」

「力になれんですまんの。またな時雨」

別れを告げ、時雨の背中が遠ざかっていく。

「待ってくれぬか！」

命は思わず呼び止めてしまった。

振り返った時雨。

「なに？」

「いや……なんでもない」

「ホントに？」

「……兄上に会えたら、わらわのことは言わないでいい。ただ、

兄上の様子がどうだったか教えてくれぬか？」

「わかった、伝えに来るよ。じゃあね」

「うむ」

今度こそ時雨は去って行った。

残された命が呟く。

「兄上……」

高級住宅街の一角にある屋敷。

魔導産業界では知らぬ者はいない魔導士マナ。

屋敷の中に通された時雨は客間の猫脚のチェアに座り、しばらくするとアリスが紅茶を運んでやって来た。

「マスターはあと三分ほどで参ります」

「急用で呼び出しちゃってごめんね」

「いえ、マスターはいつもヒマをしておりますから」

二人が話していると、洗い立ての髪の毛の匂いを振りまきな

がらマナが現れた。

「ア〜リ〜ス〜、あたしがヒマですってえん？」

「いえ、間違えました。マスターは遊ぶことで忙しいようで」

「ちゃんと仕事をしてるから、遊ぶ時間が多いのよ」

「先月の労働時間は一〇時間にも満たないようですが？」

「天才だから仕事の効率がいいのよおん！」

マナの全身からみなぎっている自信。本気で言っている。

髪をふわりと両手で掻き上げたマナは時雨の前に腰掛けた。

「さて、なんの用かしらあん？」

「セーフィエルの居場所を知りたいんだけど？」

「そんなの知らないわよ」

「え？」

にべもなく言われ、時雨は驚いてしまった。

時雨は食い下がる。

「ほら、えつと、姉妹弟子だったんだよね？」

「そうだけど？」

「なのに連絡先も知らないの？」

「そんなの知らないわよ」

またも同じセリフを吐かれてしまったが、まだまだ時雨は

あきらめない。

「なにか手がかりとかは？」

「さあ、情報屋に訊いたほうが早いんじゃない？」

「……ホントになにもない？」

「ええ」

短く断言された。

とんだ無駄足でセーフィエルを辿る情報も途絶えてしまった。マナの意見を借りるなら、情報屋を頼る手立てもあるが、見つかるとは確証はない。

紅茶を一気に飲み干し時雨は席を立った。

「ありがとう。じゃあ、行くね」

「まだいいじゃない。ゆっくりしていつてちよūdai」

引き止めようとするマナの顔からアリスへ時雨は視線を移動させた。

「ホントにヒマなんだね」

アリスの言葉に確信を得た時雨だった。

歩き出す時雨。その背中にマナが言葉を浴びせる。

「べ、べつにヒマなんかじゃないわよあん！」

ムシして時雨は屋敷の外に急いだ。

最後の頼りの綱は情報屋だ。運がいいことに時雨は帝都一と謳われる情報屋と知り合いだ。ツインタワーにオフィスを構える情報屋の真は、彼のオフィスでしか依頼を受けない。彼自身、いとも簡単に情報が漏洩すること知っており、万全の場所であるオフィスしか信用していないからだ。

さつそく時雨は予約の電話を入れることにした。

屋敷の庭を抜けながら、ケータイを取り出し電話帳を開いていたときだった。いや、門を出たときだったというのが正しいだろう。

まだ陽が高いはずなのに、まるで夜のような静けさがした。

ゆらめく空間。

闇色の影。

夜魔の魔女セーフィエル。

「わたくしをお探しいたのでしょ？」

「わおっ！」

時雨は腰を抜かしそうに驚いた。

まさか、ここでセーフィエルに会えようとは思いませんでした。

しかもセーフィエルの口ぶりは、事情を知っているようだ。

落ち着きを取り戻して時雨が口を開く。

「よくボクが探してたってわかったね？」

「つい先ほど知ったわ。けれど捜す理由までは知らないわ。教えてくださる？」

「神威雪兎という人物を捜してて、どうやらこの世界じゃないところにいるらしくって、会う方法を知ってるのがあなただって話なんだけど？」

「あの場所は閉ざされたわ　前よりも強い結界において」

時雨は落胆した。

「もう行けないってこと？」

「おそらく行けるのは女帝のみ」

「女帝ってこの街の女帝!？」

「そうよ」

この帝都エデンを造り上げた人物。そして、世界に魔導を浸透させた人物。その偉大さはほかの誰の比でもない。時雨にと

っても天と地以上の存在だった。

政府の介入ですら厄介なのに、この地球上でもっとも偉大であり、もっとも恐られる人物が相手では手の出しようがない。

だが、ここでセーフィエルは、

「あの場所に行く必用はないわ」

「え!？」

「もう雪兎はこの街に帰って来ているのですもの」

「それを早く言つてよ」

この情報はかなりの進展だ。搜索の範囲が狭まってきた。さらに時雨は絞るために尋ねる。

「もしかして居場所知ってる？」

「それはわからないわ」

「だよね」

そこまで虫のいい話もないだろう。

しかし。

「会える可能性はあるわ」

「どうやって……それよりも、どうしてあなたは雪兎のことを詳しく知ってるの？」

「それはあなたに関わる運命の駒だからよ」

「はあ？」

不思議な顔をする時雨に向かってセーフィエルは微笑んでいた。

「月を詠むには今宵はちょうどいいわ」

「はあ？」

セーフィエルがなにを言っているのか時雨には理解できなかった。

「まだ訊いていなかったわ。なぜ雪兎に捜しているのかしら？」

「それは守秘義務ってことで」

「教えてくれなくてはわたくしも力を貸すことはできないわ」

「それは……うーん、ちょっと待ってね、依頼主と相談するかしら」

時雨はすぐにケータイで紅葉に通話をかけた。

コールしても出ない。

しばらくコールしたがやはり出なかった。

通話をやめてケータイをしまおうとしたとき、紅葉からの着信があった。

「あ、もしもし」

「すまない、手が離せなかったのだ。それでなにか進展はあったのかね？」

「それが神威雪兎に会う方法を知ってる人に会ったんだけど、事情を詳しく教えてくれないと力を貸せないって言うんだ」

《素性の知れない者には事情は話せない》

「ええっと、ボクの知ってる限りでは、マナと姉妹弟子の魔導師で名前はセーフィエルって言うんだけど」

《セーフィエル……まさか。『人工満月はどうかね？』と尋ねてみれくれないかね？》

「うん、わかったけど……」

時雨にはなんのことかわからなかったが、セーフィエルに顔を向けて、

「『人工満月はどうですかー』だって?」

それを訊いてセーフィエルは月のように微笑んだ。

「『わたくしが差し上げた魔導書はお役に立ちました?』とその依頼主に伝えてくださる?」

「……うん」

やはりなんのことかわからなかったが、時雨はケータイに話を戻して、

「『わたくしがあげた魔導書が役に立ったか?』だってさ」

《電話を代わってくれないかね?》

「いいの?」

《すでに互いの素性は知れている》

「そう」

時雨からセーフィエルはケータイを受け取った。

「もしもしプロフェッサー紅葉。お久しぶりですわね」

《君が何者であるかずっと気になっていたのだ。どこであんな魔導書を手に入れたのか、この街を……いや、世界を支配し続けてきた者たちとどのような関係を持っているのか、君がなにを知っているのか?》

《あの魔導書はわたくしが書いた物ですわ》

「なに!？」

驚く紅葉の声はケータイの周囲まで漏れるほどだった。

セーフィエルは淡々と冷静だった。

「今はそのことよりも、あなたの弟のことが大事ではなくて？」

《なぜ……いや、君が知っていても不思議ではないのかもしれない。私の弟がどのような病に冒されているか知っているのかね？》

セーフィエルは微笑んだ。

「ヨムルンガルド結界 とリンクしてしまった不幸な人間」
《どこまで知っているのか……その通りだ。おそらくそれが原因だろう、弟が謎の昏睡状態に陥っている。それを救う手立てを知る者が神威雪兎と私が考えた》

「それは正しいでしょう。わたくしも彼の力を使う……正確には彼の持つ刀があなたの弟を救うことになるでしょう」

《あの刀が必用なのか？》

紅葉の声は重い。

「ええ、神刀月詠」

《あの刀は折れてしまった》

「新たな月詠を雪兎はこの街に持ち帰ったわ」

《雪兎がこの街に……さらに月詠まで……君は雪兎の居場所がわかるのかね？》

「いいえ、うふふ居場所はまでは知らないわ。ただ現れる場所なら知っているとも言うのかしらね」

なぜセーフィエルは笑ったのか？

「今宵の深夜、雪兎に会うことができるわ。夜明け頃には帝都病院まで雪兎を連れて行きましょう」

《なにか必要な準備はあるかね?》

「できる限りの魔防対策と広い場所を用意してくださいさるかして」

《承知した》

「では、さようなら」

《よろしく頼む》

セーフィエルは通話を切り時雨にケータイを返した。

「零時過ぎにお迎えに行くわ。あなたのお店の前で待っていてくださる?」

「別にあの店はボクのじゃ……」

すでにセーフィエルは消失していた。

丑三つ時の少し前から、その男はそこにいた。

さらにその前から二人の男女がいた。

後からやって来たのは雪兎。

先にいたのは時雨とセーフィエル。

静かな森の中。

湖に浮かぶ丸い月。

雪兎がこの場に現れたとき、姿を現そうとした時雨はセーフィエルによって止められた。

ここでわたくしたちが先に出たら、ここに雪兎が現れなかったことになってしまいわ。

そうセーフィエルは言った。

意味がわからなかったが、時雨はそれに従った。

雪兎はその物腰から手練れであることは用意にわかる。時雨たちの居場所が探られないのは、セーフィエルが講じた魔術によるもの。つまりそれはセーフィエルの術の高さを意味する。

水面が揺れた。

風はない。

揺れたのは影。

人影が水面を歩く。

この場に現れた“影”はダーク・ファントム。

「……セーフィエルは？」

不思議そうに尋ねながら、ダーク・ファントムは雪兎と間合いを詰めた。

雪兎が月詠を抜いた。

その刀を目にしたダーク・ファントムは笑う。

「おもしろい刀を持つてるね。まさかそれでアタシを切るっていうんじゃないよね？」

「因果を切る」

いきなり雪兎はダーク・ファントムに斬りかかった。

素早くそれを躲したダーク・ファントムは水面に逃げる。

「なるほどね、因果を切るか。言い得て妙だね」

水面で踊るダーク・ファントム。

雪兎は腰まで水に浸かりながら、そこまでしか追うことができない。

「目と鼻の先にいるというのに……」

「それは残念だね。月詠はキミになにを教えてくれた？ アタ

シをここで斬ると出ていたのかな？」

「月詠の予言はここにお前が現れるということのみです」

「そうさ、月詠と言えどその程度しかわからないのさ。ただアタシによつて厄介なのは、その刀が持つ別の能力。キミはそれを使つてアタシを切ると言つたんだろ？」

「月詠は運命を詠む。そして刃は詠んだ運命の因果を断ち切る
ことができます」

「もしもここでアタシが切られたら思念が消えちゃう。そして
らアタシはこつちの世界に干渉できなくなっちゃうね。それは
困る困る」

ダーク・ファントムは辺りを見回して気配を探った。

動物はいない。

感じられるのは雪兔の殺気のみ。

だが、ダーク・ファントムは探し続けた。

「いるよね、きつと。セーフィエル、アタシになにをさせたい
のかなセーフィエル。まさかアタシをハメる気じゃないよね？」

それは違うね、こんな小僧じゃアタシを倒せないことはお見
通しだよね。キミの目的は何なのかなセーフィエル？」

ダーク・ファントムの視線の先で空間が揺れた。

現れた。

それはものすごいスピードで地を翔かけ、煌めく刃を薙ぎ払
った。

紙一重で躲したダーク・ファントムが笑う。

「やっと会えたね、ノイン」

ダーク・ファントムの視線の先で、水面に立つ金色の人影。骨組みだけの翼から零れるフレア。

時雨の顔を持ちながら、それは時雨ではない存在。

「影は影らしく、自由な真似は謹んでもらおう」

ムラサメの切っ先がダーク・ファントムに向けられた。

「アタシの思念が外に出れたとき、キミもいつしよに着いて来ちゃったからね。いつかは出会

うとは思ってたよ。それでどうする気かな、そんな物でアタシを切っても意味がないことくらいはわかってるよね？」

「ゆらめき を断ち切らねば、いくらでも貴様はこちら側に思念を送り込んでくる」

「だからここでアタシを消してもムダムダ」

無駄に終わらぬ方法がすぐ近くにある。

神刀月詠。

雪兎が叫ぶ。

「僕の刀なら ゆらめき を断ち切ることができます！」

すぐにノインは雪兎に顔を向けた。

「ならばその刀を貸せ！」

「我が一族の当主である僕にしか使えないのです！」

雪兎は湖に腰まで使った位置から動けない。泳いで戦うなどが悪い。

一方のダーク・ファントムは水面を優雅に動き回る。

「残念だねえ。やっぱリアタシを倒すのは無理そうだね。そんなじゃサヨウナラ、思念とは言え消されると復活するのが大変だ

からね」

「影」が揺れる。

このままダーク・ファントムは逃げる気だ。

ムラサメが輝く。

「逃がすかッ！」

「逃げるさ」

笑ったダーク・ファントムの影が脳天から真つ二つに割られた。

その攻撃も悪あがきに過ぎない。

闇に溶けていく「影」。

しかし、ダーク・ファントムが予想しなかった事態が起きた。水面で輝く月が燦然たる光を天に向かって放った。

「謀ったな、セ」

言葉ごと光の柱がダーク・ファントムを呑み込んだ。

いや、呑み込まれたのはダーク・ファントムのみならずノンもだ。

光は消えた。

何事もなかったかのごとく静まり返る水面。

雪兎は啞然としていた。

「いつたいなにが？」

わからなかった。

一瞬の出来事であった。

夜空に浮かぶ月は微笑み。

水面で揺れる月は唾っていた。

静かな森。

そこへ現れた夜魔の魔女。

「こんばんは、神威雪兎さん」

「あなたは!？」

雪兎は驚きを隠せない。まさかまたセーフィエルに会おうとは、しかもこんな場所では、

「わたくしのことを覚えていてくださるなんて光栄だわ」

「忘れるはずがないでしょう。この刀を修復したのはあなたなのです。今ここで起きたことを説明していただけませんか？」

「さあ、わたくしもよくわからないわ。わたくしがしたことは、あの“影”をここに誘き出し、あなたに会わせようとしたことのみ」

「それは本当ですか？」

疑う根拠があった。

雪兎はダーク・ファントムの言葉を忘れてはいない。

こんな小僧じゃアタシを倒せないことはお見通しだよ。キミの目的は何なのか。セーフィエル？

それはあくまでダーク・ファントムの意見だが、もしもそれが当たっていたら……？

セーフィエルは水面に映る月のように微笑んで見せた。

「ええ、本当ですわ。あなたにあの“影”を伐たせようと画策してみたのだけれど失敗でしたわ」

「では、今起きた現象については知らないか？」

「ええ」

短く答えた。

状況を考えればセーフィエルは疑わしい。だが、それを攻めるだけの材料を雪兎は持ち合わせていない。

ダーク・ファントム、そしてノインの身になにが起きたのか？

それは誰にとつて有意義なことなのか？

雪兎にとつてはどのような意味を持つことなのか？

ダーク・ファントムを伐つことができなかった。その事実だけはつきりとしている。

これからなにをするべきか雪兎は迷った。

目的はダーク・ファントムを伐つこと。けれど、ダーク・ファントムは消え、今起きたこともわからない。

手がかりはやはり……

「本当に知りませんか？」

「何度訊かれても同じですわよ」

セーフィエルの答えは変わらなかった。

仕方がなく雪兎はこの辺りを調べはじめた。

光の柱は水面に浮かぶ月から発射されていた。ならばここに謎を紐解く鍵があるかもしれない。藁にも縋る気持ちで雪兎は手がかりを探した。

そんな雪兎にセーフィエルが声をかける。

「あなたを探している人がおりますわよ」

振り返った雪兎は、

「妹ですか？」

「いえ、秋影紅葉があなたの力を必用としているわ」

「僕の力を？」

「彼があなたの力を必用としてきたことは一つ」

「弟の蛭くんのことですね？」

「ええ、すぐに帝都病院に行つてあげなさい。そこで紅葉が待っているわ」

セーフィエルが消える。

闇に吞まれるように霞み消えてしまった。

まだ夜が明ける前、雪兎は帝都病院に赴いた。

「お待ちしていた」

頭を下げてから道を案内する紅葉。

病院の廊下を歩きながら紅葉は尋ねた。

「お一人でここまでおいでになったのか？」

「はい、セーフィエルという人物に言われて来ました」

「時雨という人物にはお会いにならなかつた？」

「あの躰の持ち主が……名前は存じ上げませんが、顔は知らないもので。ここに来るまでいろいろありまして、僕一人でここまで来ることになりました」

雪兎の言葉になにか引つかかったのか、紅葉は訝しむ表情をしたが、あえてなにも言わなかつた。

帝都病院は一般的な施設も世界最高水準であるが、魔導施設は帝都一、すなわち世界一を有している。

眠らない街にある病院らしく、二四時間態勢が整えられているが、やはり夜も明けないうちは静まり返っている。

薄暗い廊下を進む二人。

通常の手術などには、通常の施設を使う。

だが、魔導の関わる処置となれば、魔導的な施設を使う。さらにそれは多岐にわたる。

二人がやって来たのは、魔法陣が床に描かれた施設。

その中心に蛇は寝かされていた。

雪兎は蛇の様態を診た。

病院での魔導処置は魔導医以外の者が行うことも多い。それだけ通常の医学の範疇を超えていると言つことである。

蛇の様態は魔導医ではない雪兎が診る。それが方法として正しい診察となる。

「やはりあの蛇が原因ですね。ただ……今までと少し違うような。いつも僕が診るとき、蛇は荒ぶっていました。今は……弱っている」

「結界が弱くなつてると言うことか？」

「そうですね。政府はどう動いていますか？」

「弟は写し鏡に過ぎない。弟を調べてもあまり意味がないと考えているのか、情報規制を敷いて弟はほぼ放置だ」

「たしかに原因その物は ヨムルンガルド結界 でしょうし、そちらが解決すれば自ずとこちらも解決するでしょう。政府にとつては蛇くんを助ける気などはじめからないでしょうけど」

雪兎は蛇から離れ、深呼吸をして全身から力を抜いた。

「とりあえず喚びだしてみましよう。離れていてください」

床を蹴り上げて翔た雪兎が正拳突きを蜿の腹に喰らわせた。

蜿の躰が跳ねた。

すぐさま雪兎は後ろに大きく飛び退き、深呼吸して柄を握った。

「来ますよ！」

蜿の躰がうねる。まるで蛇のようにうねり狂う。

まるで蛇のように蜿の口が大きく開いた。

口からお産をするように、巨大なモノが頭を出した。

世にも恐ろしい汚い音とともに、大蛇が蜿の口から飛び出したのだ。

先の割れた舌で風を鳴らしながら、金色に輝く眼で威嚇を放つ。

蜷局とくろを巻いた大蛇は部屋いっぱいに広がり、その尾の先はま

だ蜿の口と繋がっている。

雪兎と大蛇が対峙する。

睨み合いが続く。

だが、急に大蛇が気力を失い躰を倒してしまった。

「やはり」

呟いた雪兎。

月詠が抜かれた。

はじめてこの大蛇と交えたとき、月詠は折られた。

それから月日が経った。

雪兎も成長した。

そして、月詠も生まれ変わった。

「今ならできるかもしれない」

雪兎は呟いてから紅葉に顔を向け、

「今ならこの呪いの因果を断ち切れるかもしれません」

「本当か!？」

「ですが問題があります」

「なんだね？」

「切り離れたあと、この大蛇は行き場を失うことになります。この部屋にずっと封印しておくわけにもいかないでしょう？」

考え込む二人。

目の前にいる大蛇は ヨムルンガルド結界 の化身。その一部分とでもいえるべき存在。消すわけにはいかない。

紅葉が静かに口を開く。

「ならば私が新たな依代よりしろとなろう」

「それではなんの解決にもならないではありませんか」

「だが、少なくとも弟は苦しみから解放される」

「政府の力を借りますよ」

「今までなんの対処もできなかった政府の力だと？」

「たしかに政府は今まで蜿くんと結界のリンクを解く方法すらなく、なにもできませんでした。しかし、今は月詠の力でリンクを切ることで済みます。そのあとの処理を政府にお任せしましょう」

「私は帝都政府など信用しておらんよ」

夜の風が部屋に吹いた。

静寂。

そして、気配。

「その通り、帝都政府は人間のことなど鼻にかけていないわ。彼らから見れば人間など労働力でしかないのだから」

現れたのはセーフィエル。

紅葉は驚きを隠せない。

「どこから？」

帝都病院のセキュリティは魔導対策にも余念がない。部屋に突然現れるなど、できるはずがないのだ。そもそも魔導など万能ではないのだから。

セーフィエルは質問には答えず、

「人間は強大な力の前に踊らされているだけ。いつまで経ってもこの世界は彼らのモノ。しかし、人間も進化している。道具を使いこなせる程度には」

ゆつくりとセーフィエルは雪兎に近付いた。

「その月詠が以前の刀とは違っていることはわかっていて、しよう？」

「はい」

「もうそれは詠むだけではなく、喰らうことができるわ。まるで月が太陽を喰らう日蝕のように、新たな月詠は相手を喰らう。この意味がわかるかしら？」

「喰らう？」

「その刀の力を持ってすれば、そこにいる化身などひと呑みに行けるわ。そして、刀の中で化身は生き続ける」

「それが解決の方法ですか？」

「まず、彼と化身との因果を断ち切る。その後、すぐに化身本体を完全に斬る」

「あなたを信じてよるしいのですか？」

「それはあなたが決めることよ」

セーフィエルは微笑んだ。

聞いていた紅葉が口を挟む。

「私は弟が救われればそれでいい」

雪兎は考え込む。

もしもセーフィエルの話が嘘で、化身を葬ってしまうことになつたら？

「わかりました」

雪兎は頷いた。

月詠を構えて呼吸を整える。

大蛇は弱つたまま動かず頭を下げている。

二人は雪兎を見守った。

「いざ！」

雪兎が翔けた。

薙ぎ払われた月詠から水しぶきのようなフレアが迸った。それは時雨の持つムラサメと同じ。

刃は蛇の鼻先を掠め、口から伸びていた尾の先を切断した。

今まで大人しくしていた大蛇が暴れ狂う。

眼は雪兎に敵意を向け、そのまま頭部から突進してきた。

雪兎は動じない。

月詠を振り上げ踏み込んで面を打つ。

大蛇の眉間に刃が食い込み、そのまま突進の勢いのまま、刀の中へ吸い込まれていく。

もの凄い圧力に押されまいと雪兎は踏ん張る。

爆風が巻き起こる。

「くっ……耐えられ……ない！」

雪兎の躰が大きく後方に飛ばされ、激しく壁に叩きつけられた。

床に落ちた雪兎　その手にはまだ刀がしっかりと握られていた。

あの大蛇の姿をした化身はどこにもいない。

すべて月詠に喰われてしまったのだ。

そして、セーフィエルの姿もなかった。

紅葉が雪兎の躰を抱きかかえた。

「大丈夫か？」

「大丈夫です……それよりも、蜿くんの様子を診てあげてください」

言われてすぐさま紅葉は艶に近付いた。

そして息を呑んだ。

呪いのよって蜿の全身を覆っていた蛇の鱗が、跡形もなく消えていた。

紅葉は弟の顔感慨深く見つめた。

「それが……お前の顔なのか……」

紅葉は蜿の躰を抱きしめた。人肌の温もりがそこにはあった。

そして、紅葉の頬を零れ落ちた一筋の光。
ついに蜿は帝都の呪いから解き放たれたのだ。

解呪
完

封印するもの

死都東京。

その地は二一年前、聖戦の舞台となった都市の名残。二三区を中心に魔気を浴び、今や人間の住む場所ではなくなつた。

そこは異様な植物が根を張り、魔物たちが蠢いている。特に人知を超えた異界と化してしまつた場所は、帝都政府によつて巨大な結界が張られ、何人も立ち入ることは出来ない
とされている。

その場所にセーフィエルはいた。

「さあ、本物の 裁きの門 を召喚しましょう」

セーフィエルの傍らにはダーク・ファントムがいた。

「一時はキミに謀られたのかと思つたよ」

ダーク・ファントムは雪兎との戦闘の際、シオンに覚醒した時雨と共に別空間に飛ばされた。それが再びここにこうしているのだ。

では、時雨はどこに？

彼もこの場所にいた。

「私は……ボクは……ここは……」

錯乱している様子だつた。

その場にうづくまっている時雨をダーク・ファントムは不審

に見ていた。

「だいぶまいってるみたいだけど、こんな精神状態で本当に大丈夫なのかい？」

「ええ、この状態だからこそできるのよ。シオンは絶対にわたくしに協力しないでしようから。あなたを見た途端に斬りかかったのが良い証拠よ」

「今は混乱してアタシを斬るうとも思っていないみたいだけど」

「シオンの意識が強すぎて駄目。かと言って弱すぎると裁きの門は召喚できない。絶妙なバランスが必要なのよ。それが今」

死都東京の中心。つまり結界の中心部には開けた円形の土地になっている。その場所には巨大な魔法陣が描かれており、この場所こそが本物の裁きの門が場所。その場所に三人はいた。

これまで裁きの門は帝都でも幾度か召喚されてきた。けれど、それは幻影ではない。言わば簡易版のような物だ。これから召喚しようとしている物は裁きの門の本体。

セーフィエルはダーク・ファントムに顔を向けた。

「そちらの準備は整っていらっしやる？」

「アタシの信者たちはすでに帝都で同時テロを起こしてるハズだよ。ワルキューレたちが出勤しなきゃいけないくらい激しいヤツをね」

闇の子 ダークネスクライ を神と崇める魔導結社D C。その者たちがダ

ーク・ファントムの言葉どおり、帝都各地でテロ活動を同時多発的に行っていた。

時刻は朝の八時ジャスト。その時間を狙ってD C の団員たちは、通勤ラッシュを主な標的として攻撃を行った。

のちにこの事件は世界最大のテロとして歴史に刻まれ、三・三一事件という通称で呼ばれることになる。俗称ではブラッディ・ウエンズデーや血桜の変とも呼ばれている。

それだけ大きな事件になりながら、D C は犯行声明もせずに自らの組織名も名乗らなかった。このことが人々の恐怖をより一層煽ることになった。得体の知れない者たちが凶悪事件を起こす恐怖。この事件で帝都の人口が一時的に現象したという統計が出ている。

先ほどまだ雲一つない快晴だったというのに、すでに辺りは暗闇に包まれていた。

空を覆う厚い雷雲。

積乱雲の中を稲光が奔った。

大地に轟いた雷鳴はまるで魔獣の咆吼。

その場でうずくまっっている時雨。セーフィエルはしゃがみ込んで、時雨肩を抱いて、耳元で囁く。

「なにも怖がらなくていいわ。『ノインの名において、裁きの門を召喚する』と言えば、全ては上手くいくわ。さあ、言っでご覧なさい」

時雨はセーフィエルの体を振り払って、激しく首を振って髪の毛を掻きまわった。

「言っちゃダメだ……ボクは……私は……お母様……どうして!?」

さらに時雨の混乱は激しさを増しているようだった。

ダーク・ファントムをそんな時雨を見て、

「やっぱり使えないんじゃないの？」

「そうね、では別の方法を考えましょう」

あっさりとしているセーフィエルにダーク・ファントは驚きを隠せない。

「バカなこと言っちゃイヤだね。もう計画は進んでるんだよ、アタシの信者も手駒として大勢使ってるんだ。これで失敗して手駒が減ったら、体勢を整え直すのにどれくらい時間が掛かると思ってるんだよ」

「時間が掛かるなんて人間みたいなことを言うのね」

セーフィエルは静かに笑った。

「たとえそれが今まで生きてきた時に比べれば一瞬に満たないとしても、閉じ込められてる身としては時が経つのが遅くて遅くてね、やになっちゃうよ」

「それは言えるわ。シオンがいなくなってから、時が遅くなつたような気がするもの。いえ、この感覚は人間になって身についてしまったものかしら？」

「キミも変わったねえ」

「進化に乗り遅れた生命の末路は滅びの道……動き出そうとしているわ」

「なにが？」

「あなたの片割れが」

その言葉にダーク・ファントムは驚きを露わにする。

「気づかれたの!？」

「でしようね」

「でしようねじゃないよ、そこらへんはキミの役割だろ」

「ズイーベンと ヨムルンガルド結界 には、先日会ったときに目眩ましをしておいたのだけれど」

先日とはセーフィエルが夢殿に侵入したときの話だ。実はあのとき、セーフィエルはダーク・ファントムを導いただけではなく、いくつもの仕掛けをしておいたのだ。

ズイーベンはワルキューレにおいて結界を司っている。ヨムルンガルド結界 や死都東京の結界、それらに異変が起きたときまずはじめに感知できるのがズイーベンだった。

夢殿にダーク・ファントムが現れたとき、ズイーベンは ゆらめき や ヨムルンガルド結界 の異常を感知できなかった。気づかれたのだとしたらあなたのせいでしょうね」

セーフィエルは笑みを浮かべながらダーク・ファントムを見つめた。

「なんであたしのせいなのさ？」

「異常に気づいたのはあなたの片割れでしょうから。あなた自信の異変は、すなわちあなたの片割れの異変でもあるもの」

「なるほどね、やり過ぎたってことか」

「そう、いくつかの要因でああなたの本体を取り巻く呪縛が弱まっているわ」

ヨムルンガルド結界の異常や、D Cの活動によって呪縛が弱まり、封印されている本体の力が漏れ出したのだ。

「ところでどうして姉上が動き出したってわかった？」

「夢殿の外に出たからよ。夢殿のシステムはすでに防御されてしまったけれど、帝都のシステムは未だにわたくしの監視下にあるわ」

「けど、まさか姉上が本体から離れるなんてね。切羽詰まっている証拠だね、あはは」

「対あなたであれば適任でしょうね。夢殿に残っているのはズイーベンとゼクスだけかしら。今なら夢殿も落とせるかもしれないわよ？」

「欲をかくとどうなるか身に染みてわかってるさ」

裁きの門　が開くまでもう少しなのだ。

だが、肝心の鍵である時雨は未だあの調子だった。

うずくまる時雨にセーフェルが囁く。

「裁きの門を召喚するのよ」

「できない……ボクには……できない……」

「できるわ。それがあなたの選択だと決まっているからよ……なぜならあなたは時雨だから」

そう言つてセーフェルはある者をここに召喚した。

なんと呼び出されたのは、十字架に磔にされたハルナだった。

時雨の瞳に光が戻った。

「ハルナ！」

「テンチヨ……わたし、なにがなんだか……」

ハルナは今にも泣きそうな顔をしていた。

ダーク・ファントムは楽しそうに笑ってハルナに近付く。

「あははは、つまりこういうことだろ。門を召喚しなきゃこの女を殺す」

その問いの答えなのかセーフィエルは妖しく微笑んだ。

悩む時雨。

「ボクにはわかってるんだ。意識が流れ込んでくる。彼女の……彼女は絶対にダメだと言ってるんだ。でも……ボクはハルナを……救いたい！」

時雨はハルナに向かって走った。

その前に立ちはだかるセーフィエル。

「それ以上進めて？」

「ッ!？」

驚く時雨。

足が動かない。前に進むうとしても足が地面に張り付いてしまったように動かないのだ。

セーフォエルは微笑んだ。

「影縫いよ。あなたの影と地面を固定したから、そこから動くことはできないわ。足を切断しない限り。足を切断する覚悟があっても、斬る物もなければ、そうしようとしても今度は全身を縫って差し上げるけれど」

「ハルナを解放しろ！」

「それはあなた次第よ」

この場でハルナを救えるのは時雨のみ。

しかし、時雨は口を噤んでしまった。

痺れを切らしたダーク・ファントムはハルナの腕にそっと触れた。

「キヤアツ！」

ハルナが漏らした短い悲鳴。

ほんの少しだけ、指先で一瞬触れられただけなのに、腕には小さな黒い痣が出来てきた。

ダーク・ファントムが素早く時雨に近づき、その顔を舐めるように下から見上げた。

「強い強い 闇 の中では人間は生きていけないんだよ。アタシは 闇 そのモノだから、アタシに触れられた人間の皮膚は腐食しちゃうんだ」

再びダーク・ファントムはハルナの近くまで戻り、

「人質が一人しかいないときは殺したら意味がないんだよね。殺しちゃったら相手が従う理由がなくなっちゃうし。だからこうやって痛めつけられる光景を見せつけてやるんだ」

闇色の手がハルナの脚に触れた。

「アアアアーーーーッ！！」

ハルナの悲痛な叫び。

思わず時雨は耳を塞いだ。

手の跡がくつきりとハルナの脛に残っていた。

それを見てしまった時雨は耐えることができなかった。

渦巻く意識の中でシオンが訴える。

しかし、その訴えは時雨には届かない。時雨にとっては目の

前で起きていることが現実だった。

裁きの門　が開かれたらどうなるか、それよりもハルナが傷つくという現実には耐えられなかった。

「もう……やめて……ハルナには……手を出さないで」

時雨は泣いていた。震えながら泣いていた。

シオンの意識が前へ出ようとする。仮初めの肉体。シオンはただの思念でしかなかった。それはダーク・ファントムと同じ。

今は時雨の意識が優っていた。この躰は彼の物なのだから。

感情の大きさが時雨の意識を増幅させていたのだ。

それに張り合おうとシオンも意識を強くするが、それでも時雨の意識を押し込めることができない。

セーフィエルが囁く。

「今よ、裁きの門　を召喚する刻が来たわ」

すべてはセーフィエルの思惑どおり。

時雨は泣きながら叫ぶ。

「ノインの名において、裁きの門　を召喚する！」

大地に描かれた魔法陣が燦然と輝く。

曇天の空から墜ちる稲妻たち。

空間の中から何かが墜ちてくるように現れる。

神々しい畏怖を放ちながら巨大な門が墜ちてくる。

裁きの門　光臨。

天に浮かぶ　裁きの門　を見てダーク・ファントムは笑った。
「やっとここまで来たね。さあセーフィエル、早く門を開くんだ！」

まだ門は開いていないというのに、その奥からは強烈な威圧感が漏れている。

呻き声、叫び声、風に乗って苦悶の声が聞こえるような気がする。

裁きの門 を召喚できる者は。ワルキューレに名を連ねる者。

裁きの門 を開くことができるの者は、セーフィエルの血を引く者のみ。

「妾の血において開門を命じる！」

悲鳴のような音を上げながら、重厚な左右に扉が開かれる。

死者たちの臭いが鼻を突く。

恐怖が風に乗って荒れ狂う。

暗黒。

開かれた門の先には漆黒の闇が広がっていた。

その中で蠢く何か。

何かが 向う側 の世界から手招きをしている。

久遠の監獄。

彼らが造り上げた煉獄の世界。

裁きの門 の本体が開かれたことにより、帝都各地で天変地異や異変が起きていた。

アスファルトの下から這い出してくる甲冑を纏った大蛇のような生き物たち。大海龍の子らだ。

東京湾や相模湾からも鯨のような生物が陸に上がってきた。

それはまるで河馬にも似ている。

虎や獅子よりも巨大な白銀の獣が、群れを成してどこからともなく現れた。

すでに都民たちには緊急警告が出されていたが、もう手に負える状況ではなかった。

帝都警察や機動警察が街中で戦闘を繰り広げ、ワルキューレたちが天を舞う。

ワルキューレたちはすでに帝都を捨てた。

二手に分かれ夢殿の護衛と死都に向かったのだ。

帝都を支配する者たちにとって、人間の生活が脅かされることなど取るに足らないことだった。

彼らは今までいくつもの文明都市を滅ぼしてきたことが。

幾度でも繰り返す。

どちらが勝っても負けるでもない双子の争い。

表裏一体の存在に決着などつくものか。

永遠の闘争。

それこそがリンボウに墮とされた彼らの定め。

帝都が未曾有の破滅への道を歩む中、セーフィエルたちはすでに 裁きの門 の中へと突入していた。ハルナは再び別の場所へと転送され、それを人質に時雨も同行させられた。

そこはまさに地獄と呼ぶにふさわしい光景。

赤く燃える天に渦巻く暗い雲。

荒れ果てた赤い大地。

強い酸が地面から噴き出し、化学反応を起こした岩肌は自然のものとは思えない鮮やかな青や黄色に染まっていた。

大量の蟲たちや、底なしの裂け目から伸びる触手たち、ここには数多くの肉を喰らう子どもが蠢いている。だが、その一つとて姿を現さなかった。

そこにいるのが誰の影だか知っているからだ。

硫酸の海を越え、溶岩が噴き出す群山を遠くに眺めながら、セーフィエルたちは新たな門の前に来ていた。

この世界の最深度へと続く、タルタロスの門。

裁きの門　を召喚できるのはワルキューレに名を連ねる者。
裁きの門　を開けることができるのはセーフィエルの血を引く者。

ならば　タルタロスの門　を開くのは誰か？

ダーク・ファントムは何十メートルにもなる巨大な門を見上げた。

「残る難関は二つだ。どうするんだいセーフィエル？」

「難関は三つよ」

「二つだろ？　この門と　邪枢　しかないけど？」

セーフィエルの目つきが変わった。

「あのときのことをお忘れになって？　なぜシオンは犠牲になったの？　あの子は人柱になって呪縛を強固なものとしたのよ」

「じゃあその三つの問題はとうするのさ？　タルタロスの門は誰にも開けないように設計してあるハズだけど？」

「誰にもというのは、あくまでソエルの中にはいないという意味よ」

「ラエルとは言わないんだね」

「この世界に墮とされた者たちだけではなく、今ものうのと遙かな世界で暮らしている彼らも開くことはできないわ。この門はリンボウのゲートを真似て創ってあるのだもの」

「じゃあ誰が開けるのさ？」

「もしも　天帝　と言ったら？」

「ふざけるな、そんな名前出すなよ！！」

ダーク・ファントムの怒号が響いた。影は震えていた。怒りのためか、それとも恐怖か、セーフィエルが口にした名前が衝撃を与えたことは確かだった。

気を取り直したダーク・ファントムは、

「君は恐ろしい奴だ。そこまで恐ろしい奴だとは思わなかった。アタシから生まれた者……いや、ラエルとも思えない」

「ええ、わたくしは人間ですもの。そして、タルタロスの門を開けるのも実は人間」

「なんだって!?　そんなことアタシは知らないよ！」

「今あなたが考えたことは否定させてもらいますわよ。本物のゲートをこちら側から開くためには、地球の全人口の半数以上の協力が必要ですから、到底無理ですわよ」

「そんな仕掛けがあつたなんて……」

「このリンボウに墮として、実験でもしているのか、それとも試しているのか……意地が悪い」

妖しく微笑むセーフィエルにダーク・ファントムは戦慄した。

「やはりキミは恐ろしい。でもアタシはそれを認めない。それは認められないことだからね、アタシたちはすでにその証明に失敗してる」

「だからここに墮とされた」

「もうこの話はたくさんさ。早くタルタロスの門を開くんだ。開くことができるんだろう？」

「模造品であるこの程度の門なら二人の承認で十分」

人間にしか開けられない扉。

二人の間。

セーフィエルともうひとりは。

「ボクはこれ以上協力できない！！」

時雨は強く拒否した。

だが、まだ人質は相手の手中にある。

ダーク・ファントムがセーフィエルに尋ねる。

「さっきの女をまた使おうよ？」

「やめる！！」

時雨が口を挟んで叫んだ。

セーフィエルが時雨の耳元に近付いた。

そして、ダーク・ファントムにも聞こえないほどの小声で何を囁いた。

次の瞬間、時雨は気を失ってセーフィエルに抱きかかえられ

た。

驚くダーク・ファントム。

「なにをした？」

「ちよつとした小細工よ。これで門は開くわ」

セーフィエルは妖しく微笑んだ。

訝しむダーク・ファントムだったが、セーフィエルの言葉のとおり、タルタロスの門 が静かに開きはじめたのだ。

吹き込んでくる極寒の風。

大地を瞬く間に凍らせ、空気すらも氷結させた。

セーフィエルは門が開く前に魔法によって防壁をつくっていた。それによってセーフィエルと時雨の肉体は極度の寒さから守られた。

だが、意識を失っているはずの時雨は、うわごとを呟いていた。

「寒い……寒いよ……寒くて凍えてしまっ」

セーフィエルの魔法は完璧であった。だからその小声は タルタロス から吹き込む風のせいではない。

時雨は普段から寒がっていた。

夏であろうと冬物のコートを着ているほど、異常なまでの寒がりであった。

それはなぜか？

セーフィエルは優しく時雨に囁いた。

「もうすぐその凍えからも解放されるわ、シオン」
凍えているのは時雨ではない。

シオンなのだ。

タルタロスの中は闇だった。

大地や空があるのかすらわからない。

中に踏み込んだセーフィエルは光を灯そうともない。光を灯しても闇に吞まれてしまうことを知っているからだ。

闇の中を進む。

方向感覚が麻痺させられる。

しかし、ダーク・ファントムは迷うことなく進んでいた。

「こつちだよ、アタシがこつちにいる、もうすぐだよ！」

その声を頼りにセーフィエルは時雨を背負いながら進んだ。

ダーク・ファントムが立ち止まった。

「ここだよ」

視覚では確認できなかったが、そこには柩が置かれていた。

そして、その柩の上には鎖に繋がれたひとりの女。片方の翼

をもがれたその女こそがセーフィエルが探し求めていた娘。

「シオン！」

セーフィエルは闇の中で娘の軀に触れた。

冷たい軀。

頬も胸も腕も脚も、死んだように硬く冷たくなっていた。

しかし、この極寒の地にいても凍り付いているわけではない。なぜならシオンは死んでいるわけではないからだ。

この地を守り、最後の封印として、邪柩を守り抜いていた。

すぐ目の前まで迫った己の復活にダーク・ファントムは焦っ

ていた。

「さあ、早く早く、柩を開けるんだ。まずはノインをどうにかするんだ！！」

セーフィエルの耳にその言葉は届いていなかった。

彼女は自らのすべきことをするだけ。

セーフィエルは時雨の手をつかみ、その手を横たわるシオンの胸に乗せた。

刹那、時雨とシオンの眼が見開かれた。

還る刻が来た。

それは時雨がハルナに拾われたあの日から、数日前のこと。

その青年　時雨と名付けられる前のその青年は死都東京にいた。

目的はある男を追って。

生い茂るジャングルの中で青年はトラップが張られているのを確認した。

傀儡士の妖系だ。

ムラサメを抜いた青年は妖系を断ち切った。

次の瞬間、巨大な丸太が青年に向かって飛んできた！

「二重トラップか！」

妖系に触れた時点で人間の肉はいとも簡単に切断させる。

だが、妖系を切れば丸太が飛んでくる仕掛けになっていたのだ。

ムラサメは水飛沫が上げながら丸太を真っ二つに割った。

紅い影が逃げていくのが青年の眼に映った。

すぐさま青年は影を追って、ある場所に出たのだった。

死都で広く開かれた土地。周りには異様な動植物が蠢いているといふのに、その魔法陣が描かれた大地にだけは、少したりとも動植物は侵入して来ようとしなかった。

紅い男は青年に尋ねる。

「あんたはここがなんだか知ってるか？」

「ボクはD C の末端だからね、あまりよく知らないんだ」

青年は魔導結社D C の団員だった。

そして、目の前の紅い男はD C に目下の敵とされている傀儡士。名は蘭魔と言った。

蘭魔は深くうなずいた。

「そうだろうな。あんたはオレが結界に穴を開けなきゃ、ここに入ってくることもできなかったんだ」

「死都東京のドーム結界に入れるなんてボクも驚いてるよ」

帝都にはD C を含め、闇の子の信者たちや、その復活を願う者も多い。だが、彼らは死都東京の結界を破ることにできないのだ。

それを蘭魔という男はやつてのけた。

だが、D C に狙われる男が、なぜ死都東京の結界を破って中に入った？

青年はムラサメの切っ先を地面に向けた。

「ちよつと質問していい？」

「ああ、いいさ。オレも気になったら知らないと気が済まない

夕チでね。答えられる質問ならなんでも答えてやるさ」

「キミの目的が知りたい。ボクはさつきも言ったけど末端の駒だからね。たまたま団に指名手配されてるキミを追いかけて、ここまで来ちゃっただけんだ」

「そこ答えを知るためにオレもここに来た」

「はあ？」

「知りたきゃそこでじつとしてるよ、今に見せてやる」

「そんなことできないよ。キミはボクの敵だからね、なにをするのかわかんないのに、やらせるわけないだろ」

「ならやるっきゃないだろ？」

蘭魔は構えた。

合わせて青年もムラサメを再び構え直した。

妖系が宙を翔る。

ムラサメが妖系を切断する。

さらに蘭魔は妖系を放とうとした。今度は両手から合わせて

一〇本もの妖系だ。

「喰らえ悪魔十字ッ！」

十字を描く一〇本もの妖系に青年は挑む。

目にも留まらぬ速さでムラサメが舞う。

煌めく水飛沫。

青年の腕から鮮血が迸った。

さらに脚からも血が流れていた。

だが、青年はしっかりと大地に立っている。

蘭魔は驚いたようだった。

「あんたさ、マジで末端かよ？」

「そうだけど？」

「オレがやり合ってたきたそこいらの団員より強いぞ？」

「入団したばかりだからね」

春うららかな青年の笑みは戦闘にはそぐわなかった。

相手をする蘭魔も余裕のようでも、まるで近所で世間話でもするような雰囲気でも、さらに話を続けようとしていた。

「あんたさ、なんでD C になんか入ったんだよ？」

「うゝん、お給金がいいし……」

「そんな理由かよ？」

蘭魔は呆気にとられた。

さらに青年は、

「あとは世界の謎や不思議が好きで、資金を貯めたらトレージャーハンターになろうと思ってて」

もう蘭魔は呆れっぱなしだ。

「D C って選択肢は間違っちゃいねえけど、もっとマシな組織とか研究所とかあるだろ？」

「D C 以上に隠された歴史や存在たちに迫れるところってある？」

青年が言う隠されたモノは、女帝たちの存在とその歴史のことだろう。

蘭魔は首を横に振った。

「ないな。人間のオレたちじゃ政府の中核で雇ってもらってこともできないだろうからな。政府がダメならその逆って

か？」

「そうなるでしょ？」

「だがオレはD C の団員じゃないけど、その辺りの事情がある程度は知ってるぜ？」

「だからボクもある程度取っ掛かりができたらやめるよ」

「だったら今止めるよ。あんたにだったらオレの知ってること教えてやるよ」

「ホントに!？」

青年は眼を丸くした。まるで少年のような表情だ。

「ああ、あんた変な奴だからな。D C の熱狂的な信者ってわけでもなさそうだし」

「ならやめるよ」

「あっさりしてるな、あんた」

「だってD C に固執してるわけじゃないもん」

その言葉に嘘偽りはないと蘭魔は確信していた。

「オレは傀儡士をやっている。多くのモノを使役してるせい
か、人を見る目はそれなりにあるんだ。だからあんたには話を
していいと思う」

「それはありがとう」

「ならそこでじっとしてな、今からオレは空間を斬る」

蘭魔はつい先ほどまで敵だった青年に背を向けた。

もしもすべてが青年の演技だったら、今頃背中からバツサリ
と斬られていたところだろう。

だが、蘭魔は斬られなかった。

蘭魔は空を見上げながらそこら辺をうるちよると歩いた。

「オレに斬れないモノはない。なぜならオレは天才だからな」

「そうだね、死都の結界を破つたくらいだもんね」

「あんた素直で良い奴だな。ひねくれた奴らはオレが天才だと
言うと、すぐに食ってかかってくるもんだからな」

蘭魔が立ち止まった。

「次元や空間を斬り場合はコツがいる。オレのような繊細な人
間にしかできない作業だ」

「それは同意しかねるね」

「あんたオレに会ったばかりだろ。オレの繊細さを知らないだ
けだ」

「そうかなあ？」

「とにかく黙って見てるよ」

蘭魔は話し続けながら一点を見つめていた。

そこに斬るべき何かがあるのだろう。

「オレも知りたいんだ。奴らがいつたい何者で、奴らが重要視
するこの場所になにがあるのか。斬ってみれば答えが出ると思
ってな」

「短絡的だね。何が起こるか分からないのに斬るの？」

「発見には驚きが付きもんだよ。そろそろ斬るぞ？」

何が起こるのかわからない。

それに備えて身構えた時雨。

刹那のうちに蘭魔の手が動いた。

煌めく妖糸。

風が絶叫した。

裂かれた空間から覗く夜よりも暗い闇。傷口を開く空間が唸り、周りの空気を吸い込みながら広がっていく。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

嗚呼、嗟い声が聞こえる。

それは老人か、はたまた子供か、それとも異形の存在か。

蘭魔が後退った。

「やっちまった」

何が起こったのかわからなかったが、それが鬼気迫る状況だというのはわかる。

裂けた空間から闇色の棘が降ってきた。まるでそれは矢の雨。

蘭魔は十の指から妖糸を放ちそれを防いだ。

しかし、青年は恐怖で身がすくんで動けなかった。

一本の棘が青年の胸を貫いた。

蘭魔が振り向く。

「だいじょぶかッ!!」

その蘭魔の躰を闇色の影が突き抜けた。

「うっ……今のはなんて……」

そのまま蘭魔は気を失って倒れてしまった。

蘭魔の躰を通り抜けた影はまさしくダーク・ファントム。

それを追うように空間の裂け目から輝く何か飛び出してきた。

だが、その輝きは今にも消え入りそうだった。
女の声があった。

「このままでは……もたない……」

輝く光は青年を見つけた。

数秒もすれば死に至る青年が血の海に沈んでいた。

「しばし……借りるぞ……」

光はそう言って青年の躰の中へ吸い込まれて行った。
それこそがシオンだった。

ついに眼を覚ましたシオン。

「お母様、なんてことをしてくれましたか！！」

鎖に繋がれていたシオンは叫んだ。

シオンが目覚めたと同時に、その鎖もすぐに取れる状態にな
っていた。

ダーク・ファントムは鎖を投げ捨て、シオンの躰を押し飛ば
した。

「あと一歩だ！ セーフィエル枢を開けるんだ！！」

「もうわたくしの利害とあなたの利害は一致しておりませ
んわ」

淡々と述べた。

ダーク・ファントムの焦りは募るばかりだ。

「セーフィエル！！」

「はじめから申し上げていた……ことじゃぞ？」

途中からセーフィエルの口調と雰囲気が変わった。

そこにいるのは人間セーフィエルではない。

あと一歩のところまで前に進めない。ダーク・ファントムは怒りを露わにする。

「アタシに勝てると思うな！」

ダーク・ファントムが狙おうとしたのは未だ弱っているシオン。

セーフィエルの最大の弱点こそがシオンだ。シオンを手中に収めてしまえば、セーフィエルはダーク・ファントムに従うしかない。

だが、セーフィエルは微笑んだ。まるで月に照らされたようなその表情。

なぜそこまで余裕なのか？

ありえないことが起きてダーク・ファントムは思わずその動きを止めてしまった。

光を呑む込む闇の中に光がある。

まるで月のように輝く淡い光がそこにある。

この世界に光が存在している。

セーフィエルは静かに囁く。

「タルタロスの門を開くには三人の人間が必要。三人の過半数の承認が得られたからこそ、あの扉は開いたのじゃ」

「謀ったなセーフィエル！！」

「その言葉は返させてもらおうぞよ。御主は妾を危険視しておつたようじゃからな、いつか排除するつもりだったのじゃろう？」

先手を打ったのはセーフィエル。

夜闇を照らす月のように輝くその場所にあったのは神刀月詠だつた。

それを持っているのは雪兎。

だが、そこにいたのは前までの雪兎ではなかった。

その皮膚を覆う蛇の鱗。

雪兎は蛇の呪いを断ち切った際、その呪いを受け継いでしまつたのだ。

月詠は月のように他者から光を得ていた。それこそが雪兎。刹那、月詠が薙がれた。

迸る光の玉。

ダーク・ファントムがついに斬られた。

「ギヤアアアアアツ!!」

因果を断ち切られたダーク・ファントムが消える。もう思念として蘇ることはない。また結界や 邪枢 に異変が起きない限り。

「クソオ……セーフィエル……セーフィエル……お前が最大の叛逆者だ!」

影は光によって消える運命なのか?

それともただ姿が見えなくなるだけなのか?

「これで……終わりはしない……そう決められている……預言書にも書かれた運命だ……セーフィエル……次に会ったときは……」

そして、ダーク・ファントムは跡形もなく消えた。

「次に会ったときはどうするっていうのじゃ？」

嘲笑を浮かべたセーフィエルは、次の瞬間には優しい笑みでシオンに顔を向けた。

「行くぞ、シオン」

「できません、私にはここでの役目があります！」

そこで口を挟んだのは雪兔だった。

「その役目は僕に移りました」

「なんですって!？」

シオンは驚きを隠せなかった。

すべてはセーフィエルの思惑どおり。

だからと言って雪兔は完全に乗せられたわけではない。望んでこの場にいる。

タルタロスの門が開いたとき、雪兔とセーフィエルが承認したからこそ、扉は開いたのだ。

雪兔がここでダーク・ファントムを斬ることも決まっていた。

そして、雪兔が新たな人柱になることも……。

「僕は ヨムルンガルド結界の一部となりました。そして、神刀月詠の力も持っています。あなたよりも僕のほうがより強力な呪縛となるでしょう」

「そんなことが許される筈がありません！」

シオンは認めなかった。

この場所に囚われていたシオンは、その意味を重々承知していた。

だが、セーフィエルは、

「許されないというのなら、シオンが生贄になった時点で言えることじゃ」

「私が生贄なんて……私はワルキューレの一員として……」

「捨て駒にされただけじゃ」

「そんなことは!!」

「そこにおける雪兎は自らの望みでここに残る」

雪兎はその言葉を承けてうなずいた。

「さあ、お行きなさい」

もうこの場はシオンのいる場所ではなかった。

それ以上の言葉はないまま、三人は タルタロス を去った。

残された雪兎がつぶやく。

「さよなら……命」

元の世界に残されることになるひとりの妹。

たとえそれが雪兎が望んだことであつたとしても、シオンを

囚われたセーフィエルと何が違うのか？

命にこの事が伝えられることはないだろう。

だが、万が一知ってしまったら？

静かに月詠が鞘に収められた。

月が沈んだ世界に陽は昇らない。

そこは闇に閉ざされた世界。

いつまでこの世界は闇に閉ざされたままなのだろうか？

もしかしたら久遠かもしれない。

しかし、ダーク・ファントムは終わらないと言った。

光が存在する限り、闇も存在するのだから……。

三・三一事件から数日が過ぎ去った。

帝都の街は復興に向かっている。

街に溢れていた強力な妖物たちはいつの間にか姿を消し、結界はさらに強力なものとなった。

戦いで傷ついた多く者たち。

ウルキューレたちの中にも重傷を負った者がいたが、彼らの驚異的な再生力ですでに完治していた。

だが、その裏で女帝だけは病に倒れ、床に伏せていた。

セーフィエルが最後に残した復讐。

ヨムルンガルド結界を弱らせたのは、シオンを救うためだけではなかった。

月詠は　ヨムルンガルド結界　の力を得た。その　ヨムルンガルド結界　はセーフィエルが盛った毒に犯されていた。

その月詠がダーク・ファントムを斬った。

今やダーク・ファントムの本体は枢の中で毒に犯されて藻掻き苦しんでいる。その片割れである女帝にも同じ事が起きていた。

すべてはセーフィエルの思惑どおり。

シオンは外の世界に戻り、女帝にも苦しみを与えた。

一方、シオンが躰から離れた時雨は　？

「はつくしゅん！」

もう桜も散ったというのに、こたつを引っ張り出して中に潜っていた。

そこへハルナが駆けてきた。

「テンチョヨったら、ちゃんと仕事してくださいよお」

「やだよお、寒いんだもん」

寒さの後遺症は未だ残っているようだった。

「寒いってもう四月ですよ、シーがーっー!!」

「じゃあ七月になったら活動するよ」

梅雨明けまでコタツに潜っているつもりだろうか？

「そんなこと言ったらお米買ってお金だってなくなっちゃいますよ！」

「それは困るね。じゃあちよつとバイト行ってくるね」

「ダメです、ダメ！ もう危ないことしちゃダメですかー！」

「今までしてたじゃん？」

「もうダメなんです。そう決めたからダメなんです！」

ハルナは自分が巻き込まれてみて、その危険を身に染みて実感したのだ。

そうと決まれば時雨はコタツに潜るだけ。

「あああつテンチョヨったら！」

叫んだハルナ。

時雨の身体がコタツの中から引っ張り出される。

「ちよつとやめて……よ？」

時雨は眼を丸くした。自分を引っ張り出した人物がハルナではなかったからだ。

「ひっさしぶりねえん、時雨っっ」

そこに仁王立ちしていたのはマナだった。

マナの出現に時雨はバツと起き上がって身構える。だいたいマナが現れるとロクなことがないからだ。

その予想は果たして当たるのか？

マナはある物を無造作にコタツテーブルの上に置いた。

それはシンブルな指環だった。しかも二個。

思わず時雨は、

「はあ？」

そんな時雨にマナは、

「とりあえず付けてみなさい！」

「はあ？」

「まあ、いいからいいから！」

「ちよつと！」

時雨は無理矢理指環をはめてこよつとするマナから身を守った。

なにがなんだか時雨にはわからなかった。

「意味わかんないから、説明しようよ！」

「簡単に言うと、ちよつと旅行先の古代遺跡でちよつと拝借してきたのよね」

「盗掘したんでしょ？」

「そーゆー言い方もできるわねえん」

「言い方の問題じゃないよね？」

「とにかくパクって来たのはいいのだけれど、どんな力を持つてるのかわからないのよね」

パクつたとハッキリ口にした。

そんな得体の知れない指環なんて付けたら最後だ。

これでもマナは魔導士としては一流。そのマナがわからないと言っている物を身につけるなんて、無謀というものもほどがある。

ここで時雨が取る行動はひとつ。

「ちよつと出掛けてくるねハルナ！」

逃げた。

家を飛び出した時雨は近所の商店街を駆け抜けた。振り返ればそこにはマナの姿が！

「こんなこと前にもあつたような」

しみじみと今年の初旬を思い出す時雨。

逃げ込む場所もあとのときと同じだった。

時雨が逃げ込んだのは神威神社の境内。

未だ復興作業が続けられていた。

巫女装束を着て境内を掃除している命の姿。

時雨は死にもぐるいで命に泣きついた。

「みこと〜っ、マナにまた殺されるう〜」

「……はあ、またか」

さすがに呆れているのか命は溜め息を落とした。

時雨は子犬のような瞳で命を見つめ、何度も何度も彼女の肩を揺さぶった。

「わあ〜ん、もうすぐそこまで来てるよお〜」

「わかつたら落ち着け！」

命は時雨を振り払って、その肩越しにマナが迫ってきているのを見た。

なぜか大鎌を持っているマナが凄いスピードで近付いてくる。なぜ指環をはめようとしているだけなのに、大鎌を装備しているのかまったくもって不明だ。

「し〜ぐ〜れ〜ちゃ〜ん」

ブンブン風を切って回される大鎌。

ここまで乗りかかってしまった船だ。命も諦めた。

「仕方がないのお」

身構えた命。

マナもそれに応じた。

「命ちゃんヤル気満々ってわけえ？」

「仕方ないじゃろう、それも定めじゃ」

「前回はちよつとしたトラブルで負けちゃったけど、今回はそうはいかないわよおん！」

「ならばこちらも初めから本気じゃ」

命は念を込めた御札をマナに向かって投げつけた。

「同じ手は食わないわよおん！」

前回、マナはこの御札を貼られて身動きを封じられている。マナは大鎌で札を切断した。

「ふふ〜ん、こうしてしまえば……っな!？」

斬られた御札はヒモとなってマナの身体を拘束したのだ。

「いやぁん」

イモムシのように地面でもがくマナを命は見下ろした。

「今回は呆気なかったのあ」

だが、往生際の悪いマナはこんなところではあきらめない。前回も黒猫になってしまつてやむなく敗北したのだ。

身体を拘束されたマナは念動力で大鎌を操つた。

大きな鎌で器用に身体に巻き付いた御札が切られていく。

そしてマナ復活！

「おほほほほっ、この程度でへこたれるアタクシではなくつてよ！」

「じゃろうな」

重々命も承知済みだった。

命が空クウに印を描く。

「汝は童の守護者なり、“招”！」

命は右手の中指と人差し指で空クウを突き刺した。

その空間から飛び出してきた謎の影。式神を呼び出したのだ。

呼び出された式神の姿を見て時雨は啞然とした。

「……どう見ても」

さらにマナも驚きを隠せない。

「ただのぬいぐるみじゃないのよおん！」

そこにいたのはクマのぬいぐるみだった。

命は至つて真面目に説明する。

「ポン太君じゃ」

思わず時雨がツッコミを入れる。

「名前とかじゃなくて……ただのぬいぐるみだよね？」

「捨てられておつたところを妾が保護した。それ以降、妾の式

神となつて家事手伝いなどをこなしてくれておる」

前回呼びだしたのは掃除機だったような気がする。今度は家事手伝いだそうだ。ずいぶんと主婦思いの式神たちだ。

命は輝く眼差しでマナを見つめた。

「お主にこの可愛らしいポン太君が倒れるというのか？」

戦闘力とかの問題ではなかった。そもそも普段は家事手伝いという時点で戦闘力には期待できなかった。

後退つたマナ。

「くっ……私が大のぬいぐるみ好きだと知つての所業ね。しかもクマのぬいぐるみを愛用してると知つて！」

「知らん」

命はバツサリ切り捨てた。

しょんぼりした様子を見せるマナ。

「私の負けだわ。お詫びの印として時雨ちゃん、これを受け取つて頂戴」

と言われて、思わず時雨は手を出してしまつたが最後。

マナはすばやくあの指環を時雨の左手薬指にはめた。

「おほほほほっ、引つかかつたわねえん！」

「ひどいよマナ！」

わめいたところで後の祭りだ。

時雨は指環を外そうとしたが、お約束どおり外れない。どうやら呪われていたらしい。

「外れないよこれ!!」

だが、これと言つて変化もなかった。

命は時雨の手を取りまじまじと指環を見つめる。

「妖気は感じるが、妾にもわからんな。物理的に外した方が早いのではないかえ？」

指環が外れなくなったときの最終手段は工具による指環切断だ。

時雨は溜め息を吐いた。

「はあ……もっと大変なことにならなくてよかったけどさ。とりえず家に帰って石けん試してみよう」

時雨はとぼとぼと家路に着いた。

家に帰ると、いきなりハルナは飛び出してきた。

「テンチョっ！」

半分涙目で焦っているのは見て明らかだった。

「どうしたの？」

時雨が尋ねるとハルナは、

「指環が外れなくなっちゃんだですう！」

見るとハルナの指にもあの指環が。しかもなぜか左手の薬指だった。

「はあ、ボクもだよ。でもさ、なんでハルナまで？」

「えっ……そ、それは……」

急にハルナは顔を真っ赤にしてしまった。

そんなところへゴスロリ少女……もとい、ゴスロリ男子の夏凜が飛び込んできた。

「お兄様あゝ、近所で仕事があったので遊びに来ちゃいました

あゝ

時雨はまた溜め息を吐いた。

「はあ、だからさ……お兄様ってやめてくれるかな。なんの血のつながりもない近所の子だったってだけなんだから」

「お兄様……記憶喪失は？」

時雨は過去の記憶を取り戻していたのだ。

それにはハルナも驚いた。

「テンチヨ、記憶が戻ったんですか!？」

「まあね」

「じゃあ、本当の名前も思い出したんですよね！」

「ボクの名前は時雨だよ。別に過去なんてどうでもいいんだよ」

時雨は優しい笑みを浮かべた。

ただならぬ雰囲気が時雨とハルナの間を漂っていることを夏凜は感知した。さらに二人の薬指の指環まで見てしまった。

「ぎゃくくくっ、お兄様いつその女と結婚なさったんですか!！」

「え？」

時雨はきよとんとした。

そこへまた新たな訪問者が現れた。

「仕事の依頼が会ってきたのだが、中が騒がしいもので気になつて無断で入ってきてしまった」

紅葉だった。

そして、紅葉もすぐに二人の指環に気づいた。

「いつに結婚したのか時雨。式を挙げるのであれば報酬の代わり

に私が準備してやってもいいぞ？」

「はあ？」

時雨はとんとん拍子で進む話についていけなかった。

ハルナは顔を赤らめながら時雨に寄り添った。

「わたしたちそう見えますう？」

まんざらでもなかった。

そこへ時雨を追ってやって来た命。

「ほう、それで日取りはいつにする？」

さらにマナまでが、

「おめでたい話ねえん。式当日には私からのプレゼントとして、

魔法火花をガンガンに上げちゃうわよおん！」

そして、夏凜は泣きながら走っていった。

「お兄様のばぁん！」

それを見た紅葉は、

「妹が出ていったぞ、追わなくていいのか？」

「だからボクの妹なんかじゃないから。あっちが勝手に自称し

てるだけなんだって……はあ」

どつと溜め息を吐いた時雨はコタツの中に潜った。

コタツの外ではあれやこれやと式の段取りが話し合われている。
る。

風に乗って窓から桜の花びらが舞い込んできた。

春麗らかな日々。

帝都で一つの物語が終わり、同時に新たな物語がはじまろう
としていた。

そして、聞こえてきたのは誰かの溜め息。
穏やかな世界に相応しい溜め息だった。

封印するもの
完